

フェアリーテイル 生命
の唄

ぽおくそてえ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

幼き頃に神に捧げられ、命を司る神チキの娘として育てられた一人の少女の冒険譚である。彼女はフェアリーテイルで果たしてどのような未来を見るのだろうか…

目次

プロローグ	1	第7の唄 呪いの歌、顕現	54
プロローグ その2 初の大仕事		第8の唄 新たなる旅路	59
5		第9の唄 生と死と	64
第1章 鉄の森 ドラマの幕開け		第10の唄 仕事の終わり、争乱の始	69
第1の唄 最強チーム結成	14	て	
第2の唄 遭遇	24	第2章 ファントムロード 迷いを払っ	
第3の唄 死神と妖精	31	76	
第4の唄 妖精の戦は森を駆ける	37	第11の唄 巨人の逆鱗に触れる時	
第5の唄 脱出口	44	第12の唄 不穏	81
第6の唄 死神の持つ笛	49	第13の唄 神の愛	87
		第14の唄 戦局の動く時	93
		第15の唄 正面衝突	99

第16の唄	終焉の鐘を鳴らして	106	第25の唄	別れと成長	170
第17の唄	本心	113	第26の唄	良き旅立ちの日	178
第18話	星の至る空	125	第4章	争う妖精 バトルオブフェアリーテイル編	
第3章	楽園の塔 幻の道標		第27の唄	輪廻廟	185
第19の唄	招かれざる来訪者	133	第28の唄	神の苦悩	195
第20の唄	回歸する因縁	138	第29の唄	雷鳴の唄	202
第21の唄	THE GAME OF DEATH	145	第30の唄	冥府の子の實力	211
第22の唄	墮天使参上	151	第31の唄	不気味なる静寂	219
第23の唄	祈りを捧げん	159	第32の唄	強者の強者たる所以	226
第24の唄	因縁	165	第33の唄	力とは	234
			第5章	命と光と魂と 六魔將軍編	

第34の唄	集う者	243
第35の唄	襲来	251
第36の唄	混沌	259
第37の唄	3人の墮天使と相見ゆ	267
第38の唄	魔獣変化	273
第39の唄	古代都市の上を目指して	279
第40の唄	善悪の狭間で戦え	284
第41の唄	ゼロと作戦	290
第42の唄	喪失の紅	297
第43の唄	涙の別れ	307

第44の唄	高く飛べ、高く唄え	316
第45の唄	邂逅	322
第46の唄	始動	331
第47の唄	作戦	338
第48の唄	激流	344
第49の唄	竜鎖砲	350
第50の唄	決戦	357
第51の唄	還る魔力	364
第52の唄	帰郷、そして哀しみ	374

第6章 world エドラス編
t
world
welcome
t
ol
os

第7章 復活への道 大魔闘演武編

第53の唄 唄は再び奏でられる

387

第54の唄 宴と時と

403

第55の唄 演武、開幕

417

第56の唄 奈落の初日、希望の二日

目 434

第57の唄 加速する妖精、そして大

612

第65の唄 生命と悪魔と墮天と

587

会の裏の闇 461

第58の唄 険悪なる空気

第66の唄 決戦前の進行

623

第59の唄 滅竜の戦

第9章 冥府の門編

第67の唄 悪魔、散る

634

第60の唄 エクリプス計画

第68の唄 太陽の村

644

第61の唄 最終戦、開幕

537

第69の唄 村を救う為に

659

第62の唄 戦の熱気と冷徹な影

556

第63の唄 過去と今と未来を、守る

569

第8章 悪魔との戦

第64話 流星、動く

第70の唄 冥府の門、開く | 669

第71の唄 攻めよ妖精たちよ

に
第78の唄 全ての終わり |

678

第72の唄 悪魔たちと魔を交える

690

第73の唄 フェイス発動、そして

⋮

| 702

第74の唄 終戦 | 716

第10章 アルバレス編

第75の唄 アルバレス侵攻 | 730

第76の唄 未来を変えるための闘い

| 751

第77の唄 進め、ギルドを守るため

プロローグ

x769年、魔法にあふれたフィオーレ王国のとある村に人や家畜を死に追いやる摩訶不思議な疫病が蔓延した。当時、ろくに医療が普及していなかったこの村では治療法も分からず、一人の幼子を生命を司る神の贄に生かしたまま捧げることで鎮めようとした。しかし、贄を好まぬその神に生かされ、神の子として、そして巫女として第2の生を歩むことになった。神の名をチキ、その子であり巫女をシリル・L・ゼウスティアと言ひ、神殿の中で二人静かに暮らしていく。

|| || ||

それから14年、その当時の巫女も成長し、美しい少女になっていた。そして彼女は今、フィオーレ王国随一の魔法都市、マグノリアまで人の生き方を学びに来ていた。

「ここが…マグノリア。すごい」

今までほとんど神殿から出たことのない彼女にとつて外の世界の殆どが新鮮なものに思えている。彼女の手にはつい先日まで共に過ごして来た義親チキが綴った手紙と地図が握られている。そこには彼女の道しるべとなる言葉が記されていた。

『シリル、カルディア大聖堂にいるであろうマカロフという小さな老人に会いなさい。

貴女のいるべき人間界での私の数少ない知り合いです。彼なら貴女の助けとなりましょう』

日の沈みかけたマグノリアの中央を元気よく駆け抜け、待ち人のいる町のシンボル、カルディア大聖堂までひた走る。するとそこには、一人の老人が静かに待っていた。

「お主がシリルでよろしいかの？ チキ殿から聞いてるかも知れんが、マカロフじゃ」

「は、はい」

「初めて会うから無理もないが、そう警戒しなさんな。チキ殿からお主のことを任されておつてのう」

「お母様が、ですか？」

ほとんどの時間を共に過ごした親といつの間にもそのような話をしていたのかと不思議に思っていると、マカロフは懐からお守りと手紙を出して渡して来た。

「ひと月前くらいから夢枕に立つようになってのう。このお守りと字を見れば信じてくれようと渡しておいてくださったのじゃ」

「お母様…じゃあ私は…」

「我がギルド、フェアリーテイルに来なさい。人の生き方を学ぶには最適であろう」

そう告げられ、新たな冒険の始まりへ向かいたいと笑顔で答え、100年近くの伝統があるギルド『フェアリーテイル』へと足を運んでいく。

「ところでシリルや、チキ殿と暮らす前は どうして おった のじゃ？ 親御さんは許して くれた のかの？」

「えっと、私のほんとお母さんやお父さんは どうして るか わからないんです。もっと小さい時には もう お母様と暮らして た ので…」

「…すまんのう、変なことを聞いた よう じゃ」

記憶にある限りは既にチキと暮らしていた時より後のものばかりで、実親のことはほとんど覚えていない。その事を知り、申し訳なきように謝ってきた。

「いいんです。元氣だと思えますよ？ だから謝らないで欲しいです」

「優しいのだな、お主は。さてと、ここがワシらのギルド、そしてお主の新しい家じゃ」
そうこう話しているうちに、たどり着いたのはマグノリア一のギルド、そして新しい家族が待つフェアリーテイルである。

「うわあ、大きい！」

「そうじゃろう？ ここには数多くの魔導師おるでな、自然と大きくなったのじゃ」
「これが…フェアリーテイル…」

『妖精に尻尾はあるのかないのか？ それは永遠の謎、故に永遠の冒険』。それがギルドの由来で、魔導師たちの心のあり方じゃ」

そう誇らしげに話し、二人は中へと入っていく。そこは数多くの魔導師たちが仕事を

終えて喧嘩をしたりお酒を飲んだりで大騒ぎになっていた。

「皆の者、帰ったぞい！」

「マスター、お疲れ様です。あら、新人さんってこの子ですか？」

「うむ。シリル、こやつはミラじゃ。この看板娘をしとるでな、色々世話になろう」

二人の来訪に気づいた看板娘で事務を担っているミラが声をかけ、そしてシリルと挨拶を交わしていく。

「紹介に預かったミラよ。私のことは好きに呼んでね」

「生命の祠から来ましたシリルです…えと、よろしくです、ミラお姉ちゃん」

「はい、よろしくね♪」

この日は一人の少女にとってかけがえのない冒険の始まりの日になった。

プロローグ その2 初の大仕事

シリルが『フェアリーテイル』に入ってから早くも一週間が経とうとしていた。仕事もまだ始めたばかりで、五日前と三日前に採取系の仕事を終えたくらいだ。そんな彼女はまた一仕事やろうとギルドまで足を運んだ。

「おはようなのです」

「お、シリルか。仕事か？」

「はい。あとグレイ兄さん、服きてください」

「うおっ!?!すまん」

彼女を出迎えたのは服を脱いでしまう癖のあるグレイだ。彼はこのギルドを代表するような優秀な魔導師なのだが、この癖が玉に瑕である。

「初めてで怖いですけど、魔物討伐に行こうかなって」

「そういえばまだお前の魔法、まだ一回も見たことねえな?どんなのなんだ?」

「血を固めたり生命に流れる気功を使ったりです。グレイ兄さんの魔法ほど綺麗じゃないのです」

「いやいや、十分凄えだろ」

掲示板の前であれこれ話していると横からやって来たのは鎧に身を包んだフェアリー・ティル女性魔導師最強と謳われる『妖精女王』のエルザである。

「仕事に行かないならそこ代わってもらっても良いか？」

「エルザ!？」

「エルザさん?この人が?」

「ん、そういえば君とは初めて話すか?私はエルザ・スカーレットだ、よろしく頼むよ」
「シリル・L・ゼウスティアです。初めまして:エルザ姉さん」

初めて会うエルザに少し緊張しながらも急いで一つの紙をボードから取っていく。
そこには『黒き魔獣討伐』とあった。

「魔物退治か?一人で大丈夫か?」

「多分:いけると思います」

「あまり自信がないなら私もついて行こうか?少しは力になれるだろう」

どうやら今回の仕事に興味を持っているようだ。彼女の言った言葉に隣にいるグレイは驚きの表情を見せ、周りにいた仲間たちも口をあぐりと開けている者もいればあれこれ口にする者もいた。

「おい、あのエルザが誰かと仕事だって?」

「かなり珍しいよな?」

「いくら新人とはいええなんのでそこまで…」

「何か文句でもあるのか？」

「「いえ、全く」」

エルザの小さな怒気を含んだ鶴の一声でその場は収まり、そそくさとそれぞれのやっていたことへと戻っていった。

「それでどうだ？ シリルさえ良ければ私も同行しよう」

「お願いしてもいいんですか？ 私、正直不安なので」

「分かった。それでは後でマグノリア駅で落ち合おう」

そう言い残し、エルザは先に準備に向かっていった。残された2人は少し呆然としながらその姿を見送るしかできなかつた。

「……頑張れよ、色々」

「はい！ もちろんです！」

そして1時間後、マグノリア駅で落ち合おうとシリルは少し緊張しながら一人、エルザの到着を待っていた。

「遅いなあ…もうそろそろ来るはずなのに」

「済まない、遅くなった。待ったか？」

「大丈夫です…よ？つてなんですか、その荷物量？」

「これか？全部服だ。まあこの量を使ったことは一度もないがな」

エルザの引いてきた台車には十数個のスーツケースがあり、二、三日もあれば終わるだろう仕事に相応しいとは言いいにくい量がそこにはあった。

「とりあえず急ぎましようか？（あんまりこの荷物について聞かないほうがいいかな？）」

「そうだな」

＝
＝
＝

それからというものの、目的地に着くまで数時間かかり、依頼者の元へと着いた頃には日が暮れかけていた。

「お待ちしてましたよ、お二方とも」

「遅くなつて申し訳ない」

「今回の黒い魔獣ってなんですか？」

「ええ、実はそれ、普通の魔物じゃないんですよ。詳しく説明すると…」

彼が語るには、その魔獣は黒い蒸気を身にまとい、木々を枯らす何かを撒き散らすそうだ。評議会に調査を依頼したら、『ゼレフ書の悪魔』というものと発覚し、その調査隊からの応援要請でもあるそうだ。

「ゼレフ書？昔の人だつて聞きますよ、ゼレフつて」

「まさかゼレフとは……これは捨て置けん状況になつたな」

「地図のここに評議会の部隊がいます。合流することを勧めますよ。気をつけて」

思つたより厳しい仕事になりそうだと2人は腹をくくり、評議会の部隊が壊滅してないことを信じ、森の中にある彼らのテントへと急いだ。

＝＝＝

「皆さん、無事ですか!？」

「おお、救援か！君たちが手伝つてくれるのか」

「例のゼレフ書はどうなっている？」

「ジリ貧だな。あつちも弱っているが、こつちも疲れがね」

後方支援も限られており、評議会からの追加の兵隊も時間がかかるからか、今回フェアリーテイルの魔導士に仕事回ってきたようだ。

「時間もありませんね。分かりました、案内してください」

「こつちだ。仕事次第で法律違反に少し目を瞑るとのことだ、気を引き締めてくれよ」

1人の評議員に連れられてやって来たのは魔物によつて木々がなぎ倒され、黒い蒸気によつて草が枯れはてている広場だ。何人かが既にやられていて、残りの数人も距離を詰めかねている。

「グルルル、ごああああ!!」

「でかい。これが…」

「怯んでる暇はない、換装『天輪の鎧』!」

「ガオアアアア!」

「行け、剣たちよ!」

先に動いたのはエルザだ。こちらに気づいて突っ込んできた魔物に先手を打って剣で四方八方から斬っていく。

「あれだけ血が出れば…『血縛鎖牢』!」

「グオオオ!」

「よくやった、これでそう易々と動けまい!」

魔獣から出た血を使い、そこから鎖を作って雁字搦めにしていく。

「こつちも封印の準備ができたぞ!そいつの何処かにある玉みたいなのを捕縛できればそれで良い!」

「二度倒したほうがいいな。シリル、追い討ちをかけてくれ!」

「は、はい!あまり傷つけることは好きじゃないけど…『気功掌』!」

「換装『黒羽の鎧』…『黒羽・一閃』!」

シリルの巨大な気の攻撃とエルザの鋭い一太刀により、魔物の纏っていた邪気が吹き

飛び、気を失ってその場に倒れ伏した。

「ウゴ、ガツ……ぐああああ……」

「ふう、疲れたです……」

「後は封印をすれば……なっ?!」

「うわあ!?!」

「きゃっ!」

数人の評議員が封印を施そうと近づいた瞬間、黒い光を強く発しながら一点に纏まり、そして数分に及ぶ発光の末に一つの小さな球となつて空中に浮き始めた。

「びつくりしました。えっと、これが例の?」

「間違いない、これを封印すれば終わりだ」

「助かったよ。正直このままじゃジリ貧だったしな。報酬はこれだ、後さっきの件、上に報告しておくよ」

無事に封印も施し、解散を言い渡された2人は依頼人にこの一件の顛末を伝えようとゆつくりとした足取りで戻っていく。

|| || ||

「……という訳で、仕事は終わりました」

「そうか、ご苦労様です」

「それにしても評議会関係の仕事を貴方が間接的に私たちに回してくるとは、普通ではないことですが？」

エルザの疑問もごもつともで、普段評議会から各ギルドに仕事が行く場合はマスターや評議会に所縁のあるメンバー、あるいは聖十大魔道に直接依頼することがほとんどだ。

「でしような。しかし今回は私の独断です」

「独断？ということは…」

「ええ、評議会に連絡しては時間がかかると思っています、各ギルドに直接依頼する形になりました」

「なんてリスクのある方法を…今回我々が受けなければどうなっていたか…」

「申し訳ない。ただ、こうするしかありませんでしたので」

「まあまあ、今回は仕方ないのです」

頭を下げる男をなだめ、お礼を言いつつエルザを連れて駅まで戻ってきたのだ。

「今回の仕事、一緒に来てくれて助かりました。ありがとうございます」

「気にしなくていい。ただ、今回みたいについで『ゼレフ書の悪魔』と戦うか分からん。気をつけてな」

「はい！ありがとうございます！」

シリルにとっての初の大仕事は少しの波乱を含みながらも無事に終えてみせた。

第1章 鉄の森 ドラマの幕開け

第1の唄 最強チーム結成

あの『ゼレフ書の悪魔』との一戦から一年が経ち、様々な仕事をこなして行くうちにシリルも15歳となっていた。x784年の夏のこの日も彼女は一仕事終えてギルドに顔を出していた。

「こんにちはです、ミラ姉さん。マスターは今日いませんですか？」

「おはよう、シリル。そうなのよ、評議会に朝から呼ばれててね」

「残念です。エルザ姉さんも仕事みたいだし、ナツ兄さんもないし、ちよつと寂しいなって」

「うふふ、私がいるじゃない」

「えへへ、そうでした」

一年も一緒にギルドにいと、自然ときようだいの様に仲良くなつていく。

「そういえばお母さんとかに手紙とか出さなくてもいいの？心配してると思うけど…」

「たまに書いてますよ？ちゃんと返事も来てるのです」

「大事にしなさいね」

「はい！あ、それとこれお土産です。お母様からの手紙についてました」

ミラに差し出したのは祠のある村の様々な特産品だ。チキを祀っている村では、時折上納品として様々なものが祠に納められる。嗜む程度にしか食さない彼女には余りある量が納められるため、こうして送ってくれる様になったのだ。

「これ、結構上物じゃない。折角だし、みんなで食べましょ？」

「そうしてもらえると助かります」

「あら、丁度ナツ達も帰って来たみたいね」

その言葉通り、玄関の方から騒がしく帰って来たのはナツと相棒のハッピー、そして見知らぬ女性だった。

「女の人を連れて帰ってくるなんて珍しいですね。ナツ兄さんに限ってないと思いますけど、彼女とか？」

「流石にないと思うわよ。ナツ、ハッピー、お帰りなさい」

「おっす」

「ただー」

自分の親である『サラマンダー』のイグニールを探していたのだが、その表情は晴れやかではなかった。

「お疲れなのです。サラマンダー、見つかりました？」

「いや、偽物だったよ」

「なんかキザな奴だったねー」

「残念でしたね。ところでそっちの人は誰です?」

後ろであたりを不思議そうに見つめている人が気になり、そして一体何のために来たのかを知ろうとナツに質問してみた。

「こいつルーシイって言うんだが、ここに入りてえらしいんだ」

「それだつたらミラ姉さんに頼んだ方が早そうですね。お願いできます?」

「もちろんよ。ほら、こつちおいで」

「あ、はい!うわあ、本物のミラジエーンさんだ…」

時々雑誌でグラビアに乗るため、方々で人気があるミラにとってはこういうファンも少ない訳じゃない。ルーシイもその一人なんだという。

「ギルドに入るならスタンプを押してもらうんです。私は右の太もも、ナツ兄さんなら肩です」

「へえ…:そういうえば君誰?」

「シリル・L・ゼウスティア、巫女です」

「巫女さんなんだ…:(まだ小さいのに…) えっと、ルーシイって呼んでね」

「よろしくです、ルーシイ姉さん」

軽く挨拶を済ませたところでミラに呼ばれたルーシイを見送り、残されたハッピーたちと話を続ける。

「何があつたんです？イグニールさんを探してたのでは？」

「それがさつきも言ったけど偽物のただの人間でよ、それで事件に巻き込まれそうになつてたあいつを助けたらいつの間にな……」

「あい、それに星霊魔法が使えるんだ。すごかつたよ」

「へエ、見たかつたです！」

初めて会うルーシイの事をあれこれ話しているうちに、手の甲にスタンプを押してもらつたルーシイが嬉しそうにそれを見せてきた。

「へへーん、これで私もみんなの仲間入りだね！」

「おお、良かつたじゃねえかルイージ」

「ルーシイよ！失礼ね」

「ナツ兄さん、流石に入つたばかりの人にそのギャグは無いですよ」

「良かつた、普通の人が多い……」

「このギルド変わった人が多いですから」

新しいメンバーが入つた事で、ギルドの雰囲気も少しずつ運命の歯車が噛み合ったように変わつていこうとしていた。

数日後、いつものように騒がしいギルドにやってきていたシリルとルーシイがいた。

「どうですか？このギルドには慣れましたか？」

「うん、お陰様でね。そういえばマスターは？」

「今日は地方ギルド連盟のお仕事行ってしばらく帰ってこないと思うわよ」

「ギルド連盟？」

聞き慣れない言葉に首をひねるルーシイにミラジエーンが光ペンを借りて図で説明していく。曰く、地方ギルド連盟に加盟するギルドは互いに連携して違法なギルド、所謂闇ギルドが起こす犯罪や地域で起こった重大な物事をマスターやその代理が集まって話し合う場所がギルド連盟であり、評議会の傘下にあるギルド同士の連携の賜物である。

「協力し合わないと『黒いギルド』、闇ギルドにやられちゃうからね」

「物騒ですね、ミラさん」

「変に首を突っ込まなければ普通は会いはしませんよ」

不安そうにするルーシイに優しく宥める2人。そんな彼女たちのところに仕事を終えて帰ってきたナツとハッピーがやってきた。

「ルーシイって結構ビビリだよな」

「ビビリルーシイ、略してビリーだね」

「そういうの良いから」

「でも、ギルド同士の協力は大事だし、闇ギルドも好き放題やってるのは確かなの」
「ナツとかスカウトされそうね」

殺人や犯罪に関わる仕事を重ね、解散命令やマスターの逮捕が行われたにもかかわらず、好き勝手やっている闇ギルドは依然として数多く存在している。そういった話をしているギルド内が急に騒がしくなりはじめた。

「エルザだー！エルザが帰ってきたぞー！」

「やべえ！俺仕事行ってくる！」

「諦めろ、道で会うだけだぞ」

明らかに動揺するギルド内に違和感を覚えたルーシィは隣にいるシリルに質問していく。そのシリルがあまりに冷静なことも質問したくなかった理由だ。

「どうしたの？なんか急に騒がしくなったけど」

「うちのギルドのエースが帰ってきたみたいです。エルザ姉さんって真面目で良い人なんですけど、ギルドがギルドですから、苦手な人が多くて」

「叱ると少しうるさいのよね。ナツとかグレイとか前に怒られてからトラウマ気味なのよ」

「あらま……」

そうこうしているうちに、大きな音と少しの地響きを立てながら帰ってきたのはフェアリーテイルの女性魔導師最強と謳われるエルザだ。その手には仕事先で得たのだろうか、大きな魔物の角を抱えて帰ってきたのだ。

「遅くなつたな。マスターは居られるか？」

「会議中よ。今はいないわ」

「そうか、残念だ。それよりも貴様ら、また問題ばかり起こしてきたようだな。マスターに迷惑かけるんじゃない」

帰ってくるなり問題行動を起こすギルドメンバーに一人ずつ説教していく。その姿にルーシイは少し引き気味だ。

「なんなのあの人？」

「あれがエルザなんだ」

「あれがエルザさんらしきですね」

「そ、そうなんだ」

一通り説教し終えたエルザはなぜか固まるナツとグレイの元へと向かった。普段は喧嘩ばかりする2人だが、エルザの前では大人しくしており、むしろ仲良く肩なんか組んでいる。

「よ、よおエルザ。俺たちは仲良くしてるぜ」

「あ、あい」

「それは良いことだ。さてと、早速だが2人には私と仕事をしてもらいたい」

「ナニイ!？」

エルザが他人と組む珍しさに加え、手伝うのではなく手伝わせるとなれば尚更珍しい。いつもとは違う騒がしさがギルドを包み込んでいく。

「そんなに珍しいの？」

「一年前に私を手伝ってくれた以外なら、誰かと行くなんてなかったと思います」

「たしかに珍しいわね。しかもあの3人が組むなんて、もしかしたらギルド最強チームになるんじゃないかしら…」

驚きを隠せない2人やルーシイが見守る中、エルザは用事を伝え終わると文句を垂れるナツや状況の飲み込めないグレイを放っておいて足早に去っていった。

「あの3人じゃちよつと不安ね。ルーシイ、シリル、付いて行って」

「は、はい」

「ミラさんの頼みとあらば!」

||
||
||

次の日、マグノリアの駅に集ったのはナツ、グレイ、ハッピー、ルーシイ、シリルの5人で、エルザを待っただけの状況になっていた。

「ったく、なんで俺がこんなクソ炎と…胃がいてえ」

「俺だってお前となんか組んでられるか。エルザの頼みじゃなかったら断つてたつてのに」

「二人とも喧嘩しないでください。エルザ姉さん、もうすぐ来るんですよ」

「そ、そうだった」

いつもは別々に仕事をすることが多いこのメンバーだが、エルザの招集とあつて珍しく集まっている。喧嘩をしそうになっていたナツとグレイを押さえるシリルを横目に見ていたルーシイはいち早くエルザの到着に気づいたが、彼女の持つ荷物量に驚きを隠せないでいた。

「すまない、遅くなったな」

「荷物多っ!?!」

「いつもこんなですよ。エルザ姉さん、お久しぶりです」

「うむ、シリルもナツもグレイも仲良くやっているようだな。ところで君は? この前見かけたが」

先日同じギルドにいながら、ようやく初対面を果たした2人はお互い挨拶しながら事情を話していく。

「ミラさんに頼まれてやってきましたルーシイです。よろしくお願いします!」

「そうか、色々聞いている。危険な仕事になりそうだが、君なら大丈夫だろう」
「危険!?!」

「ふん、そんなことよりよ、エルザ。帰ったら一つだけ約束してくれ」
「約束?」

グレイとシリルが止めようとするが、それでも構わずに言葉を続けた。

「帰ったら俺と勝負しろ!」

「何いってんだお前は!?!」

「ふふ、お前も成長しているようだしな。分かった、受けるとしよう」

「姉さん!?!」

「さて、話はここまでにしよう。詳しい話は車内でしょう」

新しいメンバー、ルーシイを加えた最強チームは新たな闇に立ち向かうべく列車に乗った。

第2の唄 遭遇

全員列車へと乗り、早くも乗り物酔いを起こしたナツをダウンさせたエルザは早速今回のことの顛末を語り始めた。

「今回皆に来てもらったのはあるギルドがある物の封印を解こうとしてるからだ」

「ある物？何だよそれ、少しアバウトだな」

「具体的に言ってもらえますか？」

「ああ。あれはつい先日のことだ、仕事帰りに酒場に寄った時にな……」

「帰りの酒場でゆっくりしようと思っただけで、騒がしくしている一行が近くにいたという。」

「そういう輩は酒場には居るだろ？」

「これだけならな」

「つてことは……」

「ああ。問題はそいつらの話してたことの中身だ」

その連中が話していたことには『ララバイ』なるものの封印を解除しようとしていたこと、そしてその連中のリーダーが『エリゴール』なる男であるということだという。

「その時は気づかなかったが、後で気づいた時には遅かった。其奴らのリーダーがあのだ、死神エリゴールだと」

「死神!?!」

「数々の殺しの仕事をやってきたギルドなんです、その中でも一二を争うほど人を殺してるんです。私の…『敵』です」

「私が気づいていれば奴らを血祭りにしたものを…」

「そうこうしているうちに駅に降り立ち、宿を探そうと動き始めたが、ここでルーシイが違和感を覚えた。」

「あれ?やばい!」

「どうしたルーシイ? 敵か?」

「違うのよ! ナツがいないだけ!」

「まさか列車に乗ってるのでしょうか?」

「いかん、奴は乗り物酔いが…! 急ぐぞ!」

なぜ残したのかと考える暇もなく皆で急いで駅まで向かった。

「くっ、遅かったか。まさか乗り物酔いの激しいナツを残してしまうとは…」

「間に合わなかったね」

駅に着いた時にはすでに遅く、ナツを乗せた列車は結構先まで行ってしまっていた。そんな中でもエルザは駅員に無理言つて電車の緊急警報を鳴らすように掛け合つていた。

「エルザさん！魔導四輪持つて来ましたよ！」

「分かった。ハッピー、あれを降ろせ」

「あいさー！」

「あつ、待て！」

シリルとグレイが移動の足を持つて来たと同時に駅員の制止を振り切つて、ハッピーが警報器を降ろした。

「よし、これでしばらく止まるだろう。私たちも急ぐぞー！」

「全員掴まって！飛ばしますよ！」

その言葉と同時に流せる魔力を全てこめ、フルスロットルで飛ばしていく。その一方で電車に残っていたナツは一人乗り物酔いに悩まされながら電車に揺られていた。

「お兄さん、なかなかきつそうだね？」

「お、おお……」

「乗り物酔いかあ。こりやダメかな？」

車内で吐き気と戦っていたナツに話しかけてきたのは髪を結った不思議な男だ。ナ

ツがまともに答えられないのを気にしないように目の前に座って話しかけて来た。

「へエ、妖精フェアリーテイルの尻尾の魔導師なんだ。良いよね、正規ギルドのメンバーは」

「おお…」

「羨ましいね、僕のような日陰者には」

返事を求めているようにツラツラと言葉を続けていく。

「知ってるかい？フェアリーテイルは闇僕ギルドの間でなんて呼ばれてるか」

「な、なんだってんだ」

「ハエだよハエ」

「あ？」

＝ ＝ ＝ ＝

「シリル、もつと早く行けんのか!？」

「これでも全力でやってます！事故ったら元も子もないでしょう!」

「無茶言うなよエルザ！これ以上魔力入れたらSEプラグがパンクしかねないだろ!」

ナツを乗せている列車を追う一行は焦りを感じながら、シリルの運転の元、全速力でひた走っている。

「3人とも喧嘩しないで!」

「ほら、見えてきたよ!あの列車だ!」

「追いついたみたいですね」

「止まってよかったですね」

非常停止レバーを下げていたことで止まっていたことが幸いし、どうにか追い上げることができたことに安堵した。しかしその安堵も長くは続かない。止めていた理由が判明したからか、再び動き出そうとしていた。

「くっ、もう動くのか!?!」

「もう少しの時に…」

あと二、三両行けば乗っているはずの場所に着くというタイミングに焦り始めるが、その瞬間、窓ガラスを割って飛び出してきたのは、探していたナツだった。

「ナツ兄さん!?!」

「どうなってるんだよ!?!」

「なんでお前らんだよ!?!」

スピードを出していたことと、飛び出した高さが相まってナツと屋根に乗っていたグレイが頭をぶつけ、2人揃って魔道四輪の後ろへと投げ出されて行った。

「とりあえず2人のところに行こう!」

「そ、そうですね。ルーシー姉さん、少し肩を…」

「大丈夫? 結構疲れてるみたいだけど…」

「後はエルザ姉さんに任せようかと…」

魔力を急激に使ったシリルはルーシイに助けられながら喧嘩している2人の元へと歩くと、ナツが置いていったことに怒っていた。

「お前ら酷えじやねえか！俺を置いていくなよ！」

「すまなかつた」

「ごめんね」

「す、すいません」

「オイラもごめん」

「なんで俺にだけ喧嘩腰なんだよ」

少しトラブルもあつたが、全員無事に集まったことに安堵して魔道四輪に戻ろうと話しながら歩き始めた。

「だが、無事でよかつた」

「無事じゃねえって、途中で喧嘩ふっかけられたしよ。なんつってたかな、アイゼンヴァルドのカゲ？」

「何!？」

「まさか!？」

先程は酔いによって頭が回っていなかつたことと、途中でエルザの一撃で強制的に眠

らされていたナツは事情を知らずにいたのだ。ただ、偶然にせよ目的のギルド、アイゼンヴァルドと遭遇したことは奇跡的とも言える。

「でもこれってチャンスじゃないですか？」

「確かにな。あの列車を追ってりや目的の奴らに会えるしよ」

「そういえば笛を持ってたなあ。三つ目の髑髏一つーかなり変わった笛だったけど…」

「三つ目の髑髏…笛…子守唄…もしかして…」

「どうしたルーシイ？」

ナツによつてもたらされた情報と、今までに知り得た情報を繋ぎ合わせていくととても不吉な予感がしていくルーシイは、自然と体が震えていく。

「もしかしたら、そいつらの持つてる笛って私たちの追つてる『ララバイ』かも！」

「何!?!」

「ララバイ、子守唄って意味でしょ？曲を奏でる笛で三つ目で闇ギルドの連中が持つてるってなるとほぼ確実にそうなんじゃないかなって」

「なるほど、急ぐぞ！シリル、今回は後ろで休んでろ、私が運転する！」

ルーシイの的確な推測とエルザの迅速な判断を噛み合わせ、先ほどの列車が向かう方向へとひた走る。

第3の唄 死神と妖精

「くそつ、間に合ってくれ！」

「エルザ、魔力が持たなくなるぞ！ 飛ばしすぎだ！」

「それでもだ！ 何千、何万という命が失われるくらいなら！」

エルザが運転する魔道四輪は猛スピードを出して市街地を走り抜ける。先程ルーシイの推測をさらに聞いてみたら、ララバイが広範囲にわたって死をもたらす可能性があると分かったのだ。正義感の強いエルザは落ち着いてなどいられない。その頃、後ろの座席部分では外の2人とは違った雰囲気に含まれていた。

「そういえばナツとハッピー以外のみんなどんな魔法使うんだっけ？」

「私は血と気を、グレイ兄さんは氷の造形魔法を、エルザ姉さんは……」

「とにかく血のたくさん出る魔法だよ！」

「あながち間違つてませんが、それは幾ら何でも……」

「へエー、つてナツ！ ここで吐かないで！ 窓から！」

今回初めて組む人が多いルーシイにとつてそれぞれの使う魔法を見たことがない。そのことを一緒に戦う以上聞いておこうと考えている。

「そういえばルーシイに何か言おうと思ってただけど…なんだったっけ？」

「私を知るわけではないでしょ？」

「ナツ兄さん、魔法で少し楽にしますよ」

「お、おお、ありがてえ」

「色々使えるのね、その気の魔法」

「魔力使いすぎて少しバランスを少し整えるくらいしか今はできませんけどね」

「そうこう話しているうちに駅前へとたどり着き、人混みの中を掻き分けてホームへと突き進んでいく。」

「済まない、通してくれ」

「迷うなよ」

「すごい人混みね…」

「ナツ兄さん、しつかりしてください」

「おうぶ…」

その人混みを通る間に聞こえて来たのは闇ギルドが駅で暴れていること、駅にいた人々は避難を余儀なくされたこと、商売道具を取れずに逃げざるを得なかったことなど様々だ。

「済まない。中の状況を教えてもらえないか？ギルドのものだ」

「えっ？あんたは一体…ぐふおあ！」

「使えぬ奴だ。中の状況は？」

「ひっ!？」

中々要領が得られないなか、駅員を半ば脅しながら質問していくが、誰も答えられず、エルザの頭突き犠牲となっていく。

「あれがエルザの恐ろしさなのね」

「なんとなくわかってきたろ？」

「あとで謝っておかなきゃ…」

もはや聞いていてもしょうがないとホームに向かう階段へと進むと、そこには鎮圧に
来た軍の者たちが揃ってやられている風景が広がっていた。

「ギルド全員相手ではやはり無理があつたか」

「ヒエエ…」

「あ、アイゼンの連中ならこの先にいる…頼む、奴らを…」

「分かつた。皆進むぞ！急げ！」

エルザの号令のもと、潰れかけたナツをルーシイに任せて階段を駆け上がり、全員で
アイゼンワールド
鉄の森の待ち受けるホールへとたどり着いた。

「よう、待ってたぜ、妖精ども」

「貴様が死神エリゴールか！」

「そうとも。お前らが来るまで暇で暇で仕方なかったぜ」

「何が目的なんですか！答え次第では容赦しませんよ！」

小さな体から珍しく怒声をあげ、ギルドのメンバーも聞いたことないほどに声を荒げる。

「ふふふ、そう怒るなや。楽しみはこれからだ。この駅には何があると思う？」

「浮いた!?!」

「風の魔法を使ってるんだ！」

「時間切れだ。答えは……こいつだ」

そう言って叩いたのは駅にある構内用の放送スピーカーだ。それを見て何をせんとしているのか察したエルザは驚きを隠せない。

「まさか貴様ら、ララバイをここで流すつもりか！何人死者が出ると思ってる!?!」

「さあな。少なくともこの駅には数百、数千という野次馬どもがいる。音量次第ではもつと出るかもなあ」

「無差別大量殺人をするつもりなの!?!」

「それが俺たちが目指す粛清よ。闇を知らずにのうのと生きる愚民どもや我らを蔑ろにして権利を奪った評議会への罰だ。その為に死神が動くんだよ」

理不尽極まりないその演説を聞かされ、激昂の声を最初にあげたのはルーシイだった。

「そんなこととして権利が戻ると思うの!?! そんな馬鹿みたいな真似してどうにかなるとは思えないんだけど!」

「俺たちが欲するは最早権利だけでは不十分。その更に先、権力だ。権力を手に入れたいくらいでも権利は付いて回る!」

「あんたたちの自業自得でしょ! そんな事のために!」

「闇を知らん者が吠えるな! カゲ、やれ!」

「残念だったな妖精ども、闇を知らないまま死ぬことになるとはな!」

エリゴールの怒声を聞き、攻撃を仕掛けてきたのはナツと列車の中で一悶着起こしたカゲヤマだった。彼の足元から伸びた影が拳となり、ルーシイに向けて一直線に伸びていく。

「しまった!」

「姉さん!」

エルザやシリルの助ける手が届くより早く、彼女に理不尽なる暴力が振るわれようとしていた。しかし、その影の拳も一人の男の目覚めによって止められることとなる。

「この声は……やっぱりお前かあ!」

「ナツ！」

「こういう時は頼りになるぜ」

今まで酔いによつて潰れていたナツだ。

「ダメエ、さっきの！」

「貴様らの愚行は私たちが止めてみせる！」

「こつからは地上戦だ！やつてやらあ！」

意気の上がるナツたちをよそにそれを見ていたエリゴールは不気味な笑みを浮かべていた。そしてシリルは無用な殺しをしようとしている彼らを鋭く睨みつけていた。

「（そうだ、これでいい。こいつらがここに集まったことは逆に好都合。ならば俺は更に先に行くまでよ）」

「（あのララバイ、一年前の獣と同じ気を感じる。なら、お母様の代理として、ここで止めるまで！）」

妖精と死神の戦争がついに幕を開けた。

第4の唄 妖精の戦は森を駆ける

「これから死の旋律を奏でる。テメエら、妖精どもの相手を頼むぞ」

「ナツ、グレイ、奴を追うんだ。このままでは何が起こるか分かったものじゃない」

窓をかち割り、飛ぶように去っていった男を逃してはならないと喧嘩する2人に追跡を頼んだ。

「俺とこのクソ炎が？」

「テメエ、エルザ！仕切ってんじやねえぞ！」

「行ってください。私からも…お願いします（これ以上姉さんを怒らせないほうがいいですよ）」

「（そ、それもそうだな）」

「（シリルに頼まれたら仕方ねえか）」

強い眼差しで2人に訴えかけ、災厄の防止のために、そしてエルザの怒る前に動くように急かす。そして走り去っていった2人を見送り、それをさらに追うカゲヤマとレイユールという紐のような魔法を使う者が足止めせんと動き出した。

「シリル、魔力は持ちそうか？」

「この数なら大丈夫でしょう。それに姉さんたちもいますから、ね？」

「わ、私も頭数に入ってたのね」

「ええ。頼りにしてますよ、ルーシィ姉さん？」

有無を言わず、戸惑うルーシィを引つ張り、3人で並び立つ。それに対して鉄アイゼンウアルドの森の連中の中には喜ぶ者が多い。

「まさか女3人で俺たちに勝とうとはねえ」

「3人ともいい女だ、このまま殺すにはもつたいねえな」

「ひひひ、妖精の脱衣ショーとでも行こうか

ねえ」

「下衆どもが、どうなっても知らんぞ」

「死んでも文句は言わないでください」

その言葉とともにエルザは剣を虚空から呼び出し、シリルは両腕から血を垂れ流していく。

「あれは魔法剣か！」

「それにあつちの血はなんだ!？」

「細けえことは気にすんな! 数でおしつぶせ!」

「魔法剣士ならこつちにもいるんだ! 怯むな!」

彼らの言う通り数の上では3対数十人という物量差があり、一度に攻めかかっている。が、そんなものは関係ないと言わんばかりにエルザの剣が敵を切り裂き、シリルの血が弾丸となって次々になぎ倒していく。

「あれがああ2人の魔法…」

「まだまだよ、エルザにはまだ先があるんだ。シリルも本気を出してないと思うよ」

「あれ以上が!?! ってホントだ、剣以外にもハンマーとか槍とか出してる!」

エルザの出す剣や槍の交換の速さにルーシイだけでなく敵も目を見張るばかりである。そしてシリルの血が変幻自在に姿形を変え、時に弾丸、時に鞭のように敵を翻弄していく。

「なんなんだあいつは!」

「とんでもねえ換装速度だ!」

「それにあつちの小娘もエグいぞ!」

思っていた以上に強かったからか、はたまた甘く見すぎていたからか、2人の強さについていけずに倒れる仲間を前に顔を真っ青にしていた。

「このままではラチがあかないな。シリル、下がっている」

「了解。ルーシイ姉さん、エルザ姉さんの本気が垣間見れますよ」

「本気?」

「一気に片付けてやる、換装！」

その瞬間、エルザの着ていた鎧が取れ、光に包まれていく。

「おお！」

「な、なんかエロい！」

「ここからですよ」

そして光が弱まる頃、そこに居たのは全く別の羽のついた鎧を着たエルザの姿であった。背には剣が数本、円を描くように浮いている。

「あれがエルザの換装の真髄、鎧と一体となった魔法。その名も、『ザ・ナイト』！」

「あの天輪の鎧は手数に優れた攻め向きの鎧ですね」

「か、カツコいい！」

「え、エルザだと？」

敵のカラツカはエルザの名前に聞き覚えがあるのか、その名前についてあれこれ思い出そうと頭を捻る。

「舞え、剣たちよ。天輪・循環サークルツードの剣！」

「ぐえええ!!」「ぬおお!!」「ぎやあつ!!」

「わあ、すごい！一掃しちゃった！」

背に浮かんでいた剣が周りにいた魔導師たちを次々撃破していき、飛び交う剣が狙い

すましたように相手をのしていく。

「このアマがく！俺がぶっ飛ばしてヤラア！」

「ま、待て！そいつはやばい！こいつはフェアリーテイル最強の女魔導士……」

「目障りだ……ふん！」

「グホア！」

フェアリーテイル最強の女魔導士、妖精女王のエルザテイタリーニア。彼女の前では闇ギルドの一幹部程度倒すのも容易かった。

「ビアードが一撃かよ……や、やべえ」

「やったあ！勝ったあ！」

「ひ、ひいいい！」

「逃げるか。ルーシイ、シリル、ハッピー、奴を追え。頼む」

「ええ……」

シリルが先に向かう中、なんで私がと言わんばかりに抗議の声を上げるルーシイ。しかし……

「頼む！」

「は、はいいい！」

その抗議もエルザの威圧感を前に無に帰してしまった。ここに居ては何をされるか

わからないと感じたルーシイは全速力でシリルの後を追っかけた。

「ふう…さてと、エリゴールを探すか」

|| || ||

「それにしてもどこ行つたんだろ？」

「見つかりませんね」

「このままじゃエルザに怒られるかも…」

「う、怖いこと言わないで！」

残る最後の幹部、カラツカを追っている3人だったが、一向に見つけられていない。先に動いていたシリルだが、途中で見失ってしまったのだ。

「行き止まりに行つたはずなのに、気づいたらいなかつたんです。壁でもすり抜けたんでしようか？」

「もしかしたらそうかも。でも、エルザにどう説明しよう？」

「これ以上探してもラチがあかないね。エルザに怒られるの承知の上でこのことを話そ？」

その時、突如として大きな爆発音が鳴り響き、駅構内にいる全員にそれがはつきりと聞こえた。

「なんででしょうか、今の？」

「ナツじゃないかしら？」

「それしかなさそうだね。行こう！」

何度も何度も繰り返し起こる大きな音を頼りに走っていると、たどり着いたのは既に皆が集まった小さな通路だ。そこには先程までナツと戦っていたと思われるカゲヤマが背中から血を流している。

「何事ですか!？」

「事情は後で話す、とにかく止血と治療を！」

「わかりました。グレイ兄さん、ルーシイ姉さん、手伝ってください！」

「おうよー！」

「了解！」

死神が笛を吹くまでのタイムリミットが刻一刻と迫る中、果たして妖精たちは彼を止められることができるのだろうか…。

第5の唄 脱出口

「なるほど…死神が風の結界を作って私たちを閉じ込めた上にその結界を止められるカゲヤマさんも意識不明、ですか」

「ああ。その上目的がこの駅じゃなくて大渓谷を越えた先にある街にいるマスターたちらしい」

「どうすんの？これ一方通行なんだっけ？」

「通り抜けようとするとミンチになるぜ」

カゲヤマの治療もひと段落つき、全員で事情を飲み込もうとお互いに知ることを話していく。

「しかし、解せませんね。何故マスターたちを狙うんでしょうか？」

「おそらく手始めに、つてとこだろ？」

「評議会を狙う方が効果的な気がします…：とりあえずここを出る手段を考えましょうか？」

「この建物全体を空気の渦が巻いているし、上も飛んでどうにかなるレベルじゃねえな」
「そうなるカゲを無理やり起こしてこの風を解除させるか、下から行くしかないか」

「それだとかかなり時間食うぞ?」

このままでは抜け出している間に最悪の結果が訪れかねない。どうしたものかと頭を抱えていると、突然ハッピーが大声をあげて荷物をあさりはじめた。

「どうした?」

「ルーシイに渡そうと思つてて持つてきてたものがあつたんだ!」

「なんでこんな時に……つてその鍵は!」

「バルゴの鍵か!」

ハッピーの取り出した鍵を見てナツとルーシイは素つ頓狂な声を上げてしまう。それを見ていた他の3人はなんのことだかさっぱり分からない。

「これ、前の仕事の後にバルゴがうちに来てね、ルーシイに渡して欲しいって預けていたんだ」

「でもなんで今それを?ここから抜け出す方法考えてるのに……」

それを渡されてどうすると言わんばかりに頭を抱えるルーシイ。不満そうなハッピーは小さく呟いた。

「だって、バルゴなら簡単に地面掘れるんじゃないかなつて……」

「つ!?本当ですか!ルーシイさん、お願いします!」

「それなら早く言つてよ。ええと……」

早速その鍵を手にし、召喚するための口上を述べていく。

「我、星霊界との道を繋ぐ者。汝、その呼びかけに応え門をくぐれ！開け、処女宮の扉、バルゴ！」

「お呼びでしょうか、ご主人様？」

「「おおっ!!」」

現れたのはメイド姿の美女だった。ルーシイとナツ曰く前に戦った時はゴリラみたいな見た目だったという。なんだかんだあったものの時間を潰している暇はないとエルザが先に話を進める。

「早速で悪いが私たちはここから出たい。地面を掘って外側まで行ける穴を作ってくれないか？」

「かしこまりました。では、行きます！」

「おお、早えぞ！これならすぐ追いつけそうだぜ！」

「よくやった、ルーシイ！」

「痛い！」

思わぬ突破口を見出したことで先に行っているエリゴールに追いつくチャンスが生まれる。

「よし、全員出たな！魔道四輪を回収したらすぐに出るぞ！」

「すごい風ね！」

「す、スカートが…」

「姫、私が押さえておきます！」

「あなたの心配したら…？」

バルゴの力のおかげで思わぬ突破口を見出した一行は先に行っているはずのエリゴールを追うべく、傷ついたカゲヤマと共に魔道四輪に乗り込んだ。

「そういえばナツはどうした？あいつ居ねえぞ」

「そういえばハッピーも！」

「ここら辺には居ないみたいです。おそらく先に…」

「何!?無事で居てくれ…」

|| || ||

その頃、マスターたちのいるクローバーの町へ向かう唯一の線路の上ではエリゴールが小休止を終えて再び飛ばうとしていた。

「あんなデケエ魔風壁は久しぶりだったが、そろそろ魔力も戻ってくるな。そんじゃ…」

「飛ばか…」

「待てエエエエエ！」

「なっ…なんでハエがこんなところになっ!?カゲたちはどうしてんだ!?!」

「これが…ハッピーのマックススピードだあ！」

「ぐおお!!」

ハッピーの最高速度からのナツの蹴りをもろに食らったエリゴールは浮かび上がったところを叩き落とされてしまう。

「追いついたぜ! そよ風ヤロー!」

「このハエが…!」

死神対火竜の激突である。

第6の唄死神の持つ笛

「このハエが…」

「へっ、テメエをぶっ飛ばせば終わるんだ！燃えてきたぜ！」

「ぶっ殺してやる…！」

|| || ||

ナツとエリゴールの生と死を賭けた戦いが始まった頃、エルザたちは魔道四輪に乗って急いでいた。

「これ、私たちの借りたやつと違うじゃん！」

「あいつら、ご丁寧にぶっ壊して行きやがったからな」

「弁償待った無しね…」

そんな会話がなされている中で目を覚ましたカゲが躊躇いながら問いたです。

「なんで僕まで連れてきた？僕は敵だぞ？何故助ける？」

「生きているものに闇を抱えたままにさせるなんて私の信条に反しますから。前を向いて生きましょう？…ね？」

「お前は…一体…」

「生命の巫女、とだけ申しましようか」

生命の巫女。その単語は闇ギルドにいる人間で知らない者は少ないと言える程によく知られている。

「僕たちの天敵がこんな少女だとはね。驚いたよ」

「ふふふ、私も有名になったものですね」

「そんな有名人だったんだ」

「むしろ知らねえのかよ？こいつは闇潰しのエースだ。仕事するたびに闇ギルドとかあれこれ潰して回ってるくらいだぞ」

「ええ!？」

「私が表立って言ってないのもありますから。それに…半分宿命じみたところがあるんです」

少し悲しそうな目をし、空を見上げるシリルにルーシイは肩を寄せる。

「大丈夫よ。そんな時は私やグレイ、エルザにナツが居てくれるから、みんなで協力できるでしょ?」

「…そうでしたね。ありがとうございます」

「まあ、私はそこまで強くないけど」

「私は期待してますよ?」

|| || ||

「ふん、たかがハエの一兵隊だと思つてたが、どうやら俺も本気で行かねばならんようだな」

「テメエ！フワフワ浮いてんじゃねえよ！」

先行しているナツ、エリゴールの激突は風と火という相性の悪さの中、ナツが健闘を演じており、エリゴールは自身の技の中でも火に強い風の鎧を体に纏う。

「終わらせてやろう…これだな」

「っ、風が…」

「知つてるか？風は火に強い。この風の鎧はテメエの逆風となる」

全身に纏つた風はエリゴールからナツに向かって強く吹いている。事実ナツが拳に炎を纏つて殴りかかるが、逆風なのとその強力さにかき消されたり、ナツ自身が吹き飛ばされたりと全く歯が立たない。

「どうなつてんだこれ!？」

「テメエを地獄に送つてやろう。ふふふ、心配すんな、テメエの親たちもすぐにそつちに送つてやるからよ」

|| || ||

「けっ、あの炎ヤロー一人で勝とうなんざ無理があんだよ」

「何よ、ナツが負けるって言うの?」

「風の鎧を前にロクに攻撃できやしねえ。それにあの人にはエメラ・バラムがあんだ。行った頃にはバラバラだろーよ」

誰よりもあのエリゴールの側に居続けた男の言う言葉だ。信憑性がないとは言いがたい。ただ、エリゴールを信じる言葉に、この魔道四輪に乗る誰もが否定的だった。

「こう言うのもなんだが、あのクソ炎はそう簡単にはくたばらねえよ」

「ナツ兄さんが使うのはただの炎じゃありませんしね」

「ナツならやってくれるもん。それよりアンタの心配をしなさいよ」

これだから正規ギルドは、と舌打ちをしながらぼやくカゲを余所に魔道四輪が進んでいく。そして、この議論の答えはすぐに見えてきた。

「なっ、エリゴールさんがやられたってのかよ!?!」

「お、お前ら遅かったじゃねえか」

「ナツが早すぎんの」

そう、ナツの持つ特殊な力『炎の滅竜魔法』の前では風の鎧も意味を成さなかった。

「こう言うことですよ。さて、貴方はそこでいてください」

「くっ…」

悔しがるカゲを置いて車外のナツに近寄っていく。激しい戦闘による傷があちこち

に出来ている。

「薬塗りますから大人しくしてください」

「お、悪いな」

「流石だな。よく無事で居てくれた」

「俺にかかれば楽勝つてもんだぜ」

戦勝を飾り、残るは封印を施すべき呪歌ワラバイのみとなる。そう思われていた。

『ヒヒヒヒ…』

この場にいる者たちの大半はそう信じて疑わなかった。

第7の唄 呪いの歌、顕現

「さてと、後はこの変な笛をどうにかすりやあ終わりか？」

「評議会に渡すのが道理であろう。いささか面倒だが、封印するとなると彼らが適当だろう」

「そうだな」

アイゼンヴァルト

鉄の森の元締めであるエリゴールもナツの炎を前に散り、後は残されたララバイの笛を処理すればこの一件は片付くこととなる。だが、皆が目を離れた隙に、カゲヤマが魔道四輪を乗っ取り、その笛を奪い取って行った。

「ははは、油断したなハエども！ララバイは俺が頂いた！」

「ちよっ!？」

「くそ、あいつ無茶しやがって！」

「追うぞ！」

深傷を追いながらもなお、残った全ての魔力を振り絞ったカゲヤマの足掻きに驚きながらも追いかけてようと走り出す。

「グレイ兄さん、氷の魔道四輪を作ってください！私の魔力で動かします！」

「おうー！」

少し回復した魔力を頼りに先行く災厄を追わんと全速力で走っていく。

|| || ||

笛を奪つて線路を走ること数時間、怪我の痛みと魔力の少なさのせいで倒れこみそうになりながらもカゲはどうにかマスターたちの定例会が終わる前に会場へと辿り着いていた。

「くそつ、思ったより魔力を使つちまったか。こんなに疲れるとは……（だが、後はこれさえ吹いちまえばっ！）」

「おーい、その若いの。こんな所で何しとる？」

「えっ？うおおっ!？」

先程まで誰もいなかったボンネットの上にはフェアリーテイル三代目マスター、そしてカゲヤマの標的、マカロフの姿があった。

「（くつ、今日はつくづく妖精どもに縁のある日だな）」

「ん？お主怪我をしとるようだのう。病院に早く戻るとええぞ？」

「え、ああすいません。僕は楽器が趣味なんですけど病院じゃあ滅多に吹かせてもらえないものでして…折角ですから一曲だけでもどうです？」

少し顔をしかめていたが、この怪我ではと納得したのか、了承して一曲だけ聞かため

に座り直した。

「こつちも人を探さんといかんでな、早めに頼むぞ」

「ええ…（よし、勝った！あとは…あとはこいつさえ吹いてしまえば…い）」

「……（あの笛、ただの笛じゃないな。こやつ、何か隠しておるのう）」

カゲヤマには微塵も見せていないが流石は一大ギルドの総長を数十年勤めてるだけあつて人を見る目はある。隠し事、しかもそれがかなり大ごと、ということとは察した。それ故、笛を口につけたまま躊躇いから固まつている若き青年に重い口を開くことができた。

「名も知らぬ若人よ、お前さんにその笛は吹けまい。なにせ、それを吹いたところで何も変わらぬからな」

「つ!? な、なんでそれを…」

「ワシには見えた。お前さんの目にある光と迷いをな。お前さんはワシと違ってまだ若い、やり直すなら今のうちじや」

「くつ……参り、ました…」

マカロフから語られた厳しくも暖かい言葉、カゲヤマの心中にあつた違和感、そして今日出会った妖精たちの言葉が、戦うことや笛を吹く意義を奪い、ここにひれ伏せさせた。

「それで良い」

「くっ…」

「マスター！」

「じっちゃん！」

「ぬおっ?!?なんでお主らがここに!?!」

探し人、即ち自分のギルドの子供達がここにいることに驚きを隠せない。仕事で出かけているとはミラから聞いていたが、まさかこの笛と若人を追ってきていたとは知らなかったのだ。

「流石です！今の言葉、胸が熱くなりました！」

「痛っ！離さんか、エルザ！」

「ふう…心配は無用でしたね。ああ、疲れた…」

「お疲れ様、後は任せてゆっくり休んで」

今日1日で魔力を無理に引き出したせいでシリルは全身に疲れが出て動くことがままならず、ルーシイに背負ってもらったことになった。

「これで追いかけても終わりだな。つたく、手間取らせやがって」

「マスター、お手数ですが、この笛を評議会までお願いできますか？」

「ふむ、妥当な判断じゃな。任せい」

これにてようやく一件落着、そうなるはずだった。

『カカカツ、情けない奴らばかりよ』

「っ!？」

『こんな奴らに任せておくわけにはゆくまい。我が食ってやろうぞ…』

置かれた笛より邪悪な声がこだまする。そして…

『貴様らの魂をな』

フラバイ、真の姿を現した。

第8の唄 新たなる旅路

「こいつがララバイの本体か!？」

「でけえ……」

「ワシらも手伝うべきかの?」

「そこまでは無理であろう」

顕現した悪魔に集まっていたマスターたちが加勢しようかどうか迷っていたが、高齡な者が多いことと命が惜しい故になかなか出れないでいる。

その頃、建物の外側ではその脅威たるララバイと相對する者たちは、まだ諦めや絶望感を持ち合わせていなかった。エルザの換装からの足元への突貫を皮切りに総攻撃が始まった。その後ろではルーシーに背負われたシリルが指示を飛ばす。

「各マスターは下がってください! ナツ兄さんは上方へ、グレイさんはその場で待機を! エルザ姉さんは時間を稼いでください!」

「よっしやあー!」

『あの小娘め、邪魔臭い……まずはあいつから……』

「や、ら、せ、る、か!」

『ぬおっ!?!』

邪魔者を排除せんと動いたララバイだったが、ナツの炎の一撃がその巨体をふらつかせるほどに揺さぶった。周りのギルドマスター達は彼の珍しい魔法に驚嘆するばかりだ。

「あやつ炎を纏ったぞ!」

「暴力的じゃのう…」

『くっ、退かぬか小僧!』

「おっと、あぶねっ」

煩わしさを感じてか、ナツに向けて数発の魔法弾を放つが間一髪でかわしていく。その流れ弾が方向が悪く、ルーシイたちに当たりそうになる。

「ようやく出番か。アイスメイク…!」

「今度は造形師か!?!」

「しかし、間に合わんぞ!もつと下がるぞ!」

危険を感じたマスターたちであったが、その心配は杞憂に終わることとなる。

「…盾!」

グレイの造形術は神速と言っても過言ではないくらいに早く造れる。その甲斐あつ

てか一発も背後に流れずに防がれる。

「すごい、なにあの魔法」

「造形魔法だよ。名前の通り形を『造る』ものなんだけど、グレイのはそれ以上だよ」

「アイスメイク『槍』^{ランス}！」

グレイの両手から放たれた槍たちは巨悪を穿つまさしく牙となってララバイの腹を抉るほどの大穴を開ける。

「すごい！」

「流石ですね。ルーシイ姉さん、この紙に魔力をありったけ流し込んでください。私たちも最後の準備に入りますよ」

「う、うん！わかった！」

シリルがルーシイに手渡したのは見慣れない文字の書いてあるお札だ。言われた通りに魔力を流し込んでいるとそれに呼応するように赤く輝き始める。

「こ、これは……」

「私の術を組み込んだ特別製です。さあ、私に渡してください」

「今がチャンスみたいです」

「そうみたいです、行きます！」

三人の大きいなる一撃に崩れ去るのを見逃さず、魔力の籠った札を投げる。

「『六鎖封結《ろくささふうけつ》！」

シリルの声に呼応して札から6つの血でできた鎖が伸び、侵食し、遂には元の笛へと戻して無力化に成功した。辺りは歓喜の声で包まれる。

「今度こそ、じゃな」

「ええ。間違いないでしょう」

「あら、あんたいい男ねえ。ちゃんと治療してきなさいよ?」

「そうよ。捕まるのはその後でもいいんだから」

こうして（ミラ曰く）最強チームの仕事は平和裏に終焉を迎えた。

その後、様々なことが起こった。鉄アイゼンツァルトの森がエリゴール以外が逮捕されて解散、ナツとの約束で戦っていたエルザの形式的な逮捕、それを救わんと評議会に突入してナツも拘束されたことなどだ。そして、次の日、ギルドは騒がしきとともに平穏が訪れた。

「いやっはあー! やっぱり娑婆は良いもんだぜー!」

「うるせえ! 少し静かにしやがれ!」

「ちよつと、物壊さないでよね」

しかし、そんな中でも一つだけないものがあつた。シリルだ。

「そう言えばシリルは今日来てないの?」

「なんか評議会の方に頼まれたって」

「何かまずいことでもしたのかしら?」

「ああ、気にすんな。いつものことだよ」

「え？」

ルーシイはその言葉に驚きを隠せない。このギルドに来てから評議会に関わることなんて余程のことばかりだったからだ。先程のララバイの一件にしても然りだ。

「あいつ、言ってただろ？ 闇ギルドと黒魔道書に関わる運命だって。おそらくそれ関係だろうさ」

「そ、そうなの？」

|| || ||

その頃、シリルは青空のもとに立っていた。

「さてと、私の宿命の呪縛から解放されに行くとしましょう…一日も早く…」

彼女の顔は普段ギルドで見せるような優しいものではなかった。まるで修羅の如き、覇気を纏った仕事人のそれだった。

第9の唄 生と死と

マグノリア駅から数駅、とある駅前にはシリルを待つていた評議会の部隊がいた。彼らの緊張感がひしひしと伝わってくる。

「お待ちしておりましたシリルさん。今回の作戦を担当するラハールと申します」

「お疲れ様です、お待たせして申し訳ないです。今回はどんな御用で？」

「闇ギルド『豹の爪』バンサークロの殲滅と、彼らの所持していると思われる黒魔道関係物の回収です。

正直我々の技術程度では封印しきれるか不安がありましたので」

「なるほど、そういうことでしたか」

もちろん、評議会にも黒魔術関連の対策班があるはずだ。しかし、今回は彼らが別件で動いているのか、厄介払いのために、そしてギルドの問題に目を瞑る条件のために呼んで来たのだろうかと彼女は独りごちた。

「協力しましょう。ただし、危険な場合は即撤退を」

「承知しました」

「問題は魔道士よりも魔法の方ですね。性能が分からない以上どう対応すべきか……」

「密偵の話では本ではなく猫とのことですし、黒い光を放っていたとか……」

「…思い当たる節がありますが、何故あの方が？」

「ここで議論するのは止しましょう。全員準備を！」

＝＝＝

「マスター、評議員の連中どもがここに来るそうでごさる」

「左様か。分かった、戦闘準備をせい！ワシも出よう。『黒猫』お主には逆らう権利はない、来い」

『全く面倒な…（ただ、今日は運が良さそうじゃな、この感じ）』

評議会とシリルの共同戦線が押し寄せる中、闇ギルド『豹の爪』パンサークローではマスター、ド

ジャー・ブライアスが部下に下知し、その傍らで囚われている黒猫こと冥府神の使い、クローバー・アヌヴィーにも同行を強要していた。

「今日は強者に出会えると良いがな」

『ワシの感知が狂っておらねば良き武者に会えると思うがのう？』

「ふふふ、面白そうだな？さあ、開幕だ！」

＝＝＝

「もうあと100メートル程で彼らの本拠です。各自展開！暴れるようなら容赦はいりません！」

「この感じ…黒い猫がいたら攻撃はしないように！その方は危険です！」

「はっー」

身に覚えのある生体反応を捉えたシリルは注意喚起を行い、戦闘態勢に入った。その側で部隊長のラハールが耳打ちに近い形で確認の質問をする。

「先程の黒猫の件ですが、知っている方なんでしょうか？」

「ええ。何故ここにいるかは不明ですが、冥府神の使いです。闇の系譜と、毒、病気など死の恐怖を体現した方ですので、先程のような注意を……」

「なるほど、手を出せば厄介ですね」

しかし、そんな二人の会話も、敵拠点から上がる爆炎によって中断を余儀なくされる。このままでは被害が拡がりかねないと判断し、早急に対応すべく突入を決断した。そして建物内では既に数人の捕縛者と未だに抵抗を続ける魔道士たち相手に苦戦を強いられている評議員たちが小競り合いを続けていた。

「生命神の……『一喝』！」

「うおおっ!？」

「な、なんだあのクソアマは!？」

シリルがナツの技を参考に繰り出したのは血と気が織り交ぜられた神の一声に相應しい強力な咆哮だった。それは悪魔じみた力と違い、決して殺す魔法ではなかった。

「今です！彼らを捕縛なさい！」

一気に数を減らした闇ギルドの連中はなす術もなく次々に捕らえられ、残った者たちもシリルの魔法と評議会の数に押されて最終的には全員が同じ状態となった。

「ギルドマスターはどこにいるのです?」

「は、話せるかよ。俺たちの計画はまだ…」

ここに姿のないギルドマスターの所在を誰に尋ねてもやはりというべきか、口が堅い。そこで持ち込まれたのは魔力検知器である。こういった案件の時に人を手早く追うために作られたものだ。

「隊長!この階段の奥へ何者かが進んだ跡が見られます!」

「異様な魔力も検知されました!この奥で間違い無いと思われれます!」

「なるほど、ありがとうございます。確かこの先は祭壇があつたと聞いてますが…」

「冥府の使いと祭壇…死の厄災でも起こす気でしょうか?」

冥府の神の一使いと言えど、その者の力のコントロールと使用ができれば死の恐怖が訪れるのは目に見えている。止めねばならない。その場にいる全員がそう考えを揃えた。

|| || ||

「いよう、評議会と神の使い!ワシを待たせるとはいい度胸だ!」

『やはりお主だったか、シリルお嬢ちゃん。手間掛けさせるのう』

「まだ健在ということとは始まっていないみたいですね」

階段の先の祭壇ではマスターのドジャーが不敵な笑みを浮かべて全員を出迎えた。まるで勝利と目的を確約したような笑みで。

「ワシはお前たちを完膚なきまでに叩き潰さんといかんと考えててな、目的の為に死んで行けや」

「私は生きる者のためにいる。貴方をここで潰します」

生と死の激突がここで始まろうとしていた。

第10の唄 仕事の終わり、争乱の始まり

「デケエ魔力だと思えばなるほど、俺を楽しませるには十分だな」

「命がけで行かせてもらいますよ。私の背負うものは重いのでね」

『（ふふ、あやつ、成長しておるようだな。私の弟子とは違い、気負わず、ただひたすらに前を向く。ギルドの力の一端かね）』

睨み合いにより緊迫した空気をうち壊して動いたのはドジャーだ。鍊成した金の槌で押し潰さんと、真つ直ぐにシリルへ突貫していく。

「つえあああ！」

「くつ、きやあつ！」

『お嬢ちゃん！』

「援護しろ！今こそ我ら評議会の力を示す時！」

武器の重さと動きの速さ、無駄の少なさが相まって気を纏った腕の上からでも伝わる一撃に、ほぼ為すすべもなく吹き飛ばされる。勇敢な評議員が時間と体力を奪おうと果敢に挑むが、敵は闇ギルドの長、一発入れられれば御の字だ。

「テメエら雑魚には用はねえ。失せろ！」

地面から大量の金の槍を錬成し、一人も余すところなく貫こうとした。しかし、その槍は何かにごち当たり、衝撃を伝えて吹き飛ばすことしかできなかった。

「彼らを殺させません……私は『生命の巫女』、勇敢に生きる者の何よりの支えにならねばならぬ者……」

そう、シリルが即席で作り上げた防御壁と戦いに向いていない評議員たちの魔力壁のお陰で誰一人重傷を負わずに済んだのだ。

「ただで転びやしねえか。だがそれで良い、それでこそワシは楽しめよう！ワシの駒もようやく役目を果たしたと言えような！」

「貴方のような考えを持つ人間をこれ以上野放しには出来ません。医療班は負傷者を連れて撤退を！防御班は援護を！攻撃班は囲みなさい！」

『やれやれ、私も参加させてもらうよ？』

「クローバーさん？」

『若人たちの意気に当てられてね。手を出すなよ、評議会の者共よ、ここは私とシリルで片付ける』

囚われの身であった彼はここまでの戦いを静観していたが、今が脱出のチャンスと捉え、苦戦するシリルらに手を貸すことにした。

『奴の魔法は見ての通り金の造形魔法を応用したものだし、効果範囲はでかい』

「守りは私、攻めを…」

『良かろう、お嬢ちゃん、背中を頼む』

そう告げるや、流れ星のような滑らかな攻撃を繰り出していき、流石にこれには速攻派のドジャーも鬱陶しそうな顔をする。しかも後ろからくるシリルの気弾も狙いを定めにくい要因になっている。

「くそつ、しやらくせえ！」

「血縛鎖牢！」

「てめつ、邪魔クセエ！」

『冥府式・暗黒波！』

「ぐあっ!?!」

冥府神ペルスの一番弟子なだけあって、戦い方に慣れており、なぜ捕まったのかの疑問がシリルの中でさらに大きくなっていく。

「ぬう…喰らえい！」

「きやつ！」

『くつ、危なつかしいのう』

「まだだ、もつと楽しませろ！アツハハハハハ！」

怒りに飲まれたドジャーの意地の力を前に避け、かすり傷や打撲痕をあちこちに作り

「し、師匠!!」

「そういうことでしたか、クローバーさん。貴方ほどの方が捕まるのが謎だったんですよ」

『まあ、そういうことじゃ』

クローバーの一番弟子、ユリア。今回の件は彼女を捕らえることでクローバーの捕獲、利用をすんなり達成していたのだ。元はと言えば彼女がかのギルドに喧嘩をふつかけたのが原因らしい。

「ぎ、ごめんなさい」

『過ぎたることはもう良い。シリルのお嬢ちゃん、今回この子に会わせただけでも無い。ギルドに預けたいが故じゃ』

「いまいち話が見えないのですが…」

『何、そちらの活躍があつたのはギルドで人と交わつて信念を持つたからだろうか? この子にも何かをつかんでほしくてな。勝手な我儘なのは承知の上』

子の事が心配な親心とでも言うべきか、と愚痴っていた。シリルは別に構わなかったが、ギルドに入れるのはマスターやそれに代わる人間の許可が必要となる。

『ならば私も頼みに行こう。親として、師匠として最低限の礼儀と、厄介ごとを頼みに行くことへの説得はさせて貰わねばな』

「分かりました。そこまで言われては断れません」

|| || ||

評議会からの依頼は多くの怪我人を出しながらも、死者を出さなかった事が幸いし、なんとか終える事ができた。シリルは頼み事を抱えたクローバーと今回の頼み事の関係者たるユリアを連れてギルドに戻ってきていた。しかし、肝心のギルドが壊され、全員が地下で過ごす羽目になっているとは思ってもよらなかった。途中から案内をしてくれたミラ曰く、仲の悪い『幽鬼フアントムロイドの支配者』が喧嘩を仕掛けて来たらしい。

「マスター、こんな事態に申し訳ないですが、頼み事が…」

「なんじゃね?」

『ここからは私が。突然の来訪、失礼します。冥府の使い、クローバーと申す。今ギルドを見させてもらい、非常事態の中ですが、私の弟子を預かっていただきたい。ギルドの中で多くの人と触れ合ってもらいたいのです。ご迷惑なお願いなのは重々…』

「ふうむ……」

フィオーレの巨大ギルド同士の争いに発展しかねない中で、子供を預かることは危険なことは明白である。ギルドの長で、子供たちを預かる身としては責任が重い。

「今すぐに、というのは難しいという事はもうさせてもらいます。ただ、この一件が済み次第、ということでもよろしいですか?」

『有難い。それまでは微力ながらお力添え致しましょう』

ここに1つ、新たな風がギルドに吹き込まれる。だが、争乱の火種は燃え広がろうと
していたのだ。

第2章 ファントムロード 迷いを払って

第11の唄 巨人の逆鱗に触れる時

『この一件、最悪抗争に発展しそうじゃな』

「こちらがどう動くか、と申すか。だが、家族に危害を加えぬ限りは派手に動くつもりはないのう」

『死人や怪我人だけは勘弁願いますぞ。こちらも無用な仕事は避けたいのでな』

「無論じゃ」

日も暮れかけ、ギルドに残っていた者たちが続々と家路につく中、酒場で2人の年長者が対面して盃を酌み交わしていた。今回の襲撃がやはり話題に上がる。

「戦争となれば被害はいくばくか…想像するだけで寒気が走るわい」

『さて、こちらは失礼するぞ。あの子のことを宜しく頼み申す』

「ではまた…」

|| || ||

その頃、ユリアを連れられたシリルはナツたちに誘われ、家主が留守のルーシイの家に勝手に上がっていた。

「ねえシリルお姉ちゃん、これいいの？」

「ツツコンだら負けよ」

「ええ…。世の中知らない方だけどこれマズイよ」

まだギルドの空気にいい意味でも悪い意味でも慣れていないユリアは戸惑いを隠せない。いくら仲間の家とはいえ、勝手に上がっていいのかと玄関近くで立ち往生している。

「大丈夫、あとで説明すればルーシイは納得してくれるはずだ。なにせ、ファントムの連中に狙われてる可能性があるからな」

「そういうこつた。1人でいるより安全だろ？」

「ま、まあ確かに」

「そういうはまだ名前聞いてなかったな」

ナツの疑問は当然で、半ば押しかけのようによつてきた少女を知る者はごく僅かだ。

「えつと、ユリア・アマリリスです。冥府神の巫女代理です」

「神の巫女か。ウチにはシリルに続いて2人目だな」

「2人並んでるとなんか姉妹みたいに見えるな」

仕える神も見た目も似ていないのに、どこかシンパシーを感じさせたのだろう、ナツの意見にエルザたちが賛同するように首を縦にふる。

「それよりルーシイはどうした？少し遅い気がするが…」

「大丈夫ですよ、今帰ってきてるところです」

「そうか。ではルーシイには悪いが、戻ってくるまでに夕飯を済ませよう」

＝＝＝

「なんか不穏な空気になってきたね」

「奴らはこちらが仕掛けずともいわずれやつて来よう」

ルーシイの帰宅後は少し騒がしかったが、風呂に順番に入った後は落ち着きを取り戻し、今回の襲撃の件を話し合っていた。ファントムは表向き合法ギルドだが、闇ギルド並と批判する人もいる。その悪評に見合うだけの戦力とコネ、財力を持ち合わせているのは確かだ。

「あいつらなんか怖かねえよ！じつちゃんとかミラとかビビりすぎなんだよー」

「落ち着かんか。今全面戦争をしたところで痛み分け以上の結果になるのは目に見えている」

「それに…あつちにもS級に当たる魔道士が4人もいるし、お前と同じ滅竜魔道士ドラゴンスレイヤーが居るらしいじゃねえか？」

「えっ!?あつちにもナツみたいなのが居るの!？」

滅竜魔法は『失われた魔法』という希少な魔法で、それを使える魔道士がそう遠くな

い場所に2人も使い手がいるとなればルーシイの驚きも無理ないというもの。

「ここまで派手に仕掛けてきたということは勝算があるか、糸を引いている人間がいるってことですね」

「もはや時間の問題ね」

「あいつらの目的はなんなんだ？」

「さあな。喧嘩は今に始まったことではないからな」

これ以上の推論による問答は無用と判断したのか、エルザを筆頭に全員で仲良く眠ることになった。そして日が上がった次の日、街角に出て見れば、広場で人々の喧騒があった。だが、いつもの明るい喧騒とは違い、まるで事件現場である。

「済まないギルドのものだ、通してくれ」

「一体何が…」

「これって…っ!？」

群衆の中を潜り抜けて前に出たら、そこには信じたくない現実が待ち受けていた。木に縛り付けられ、散々に痛めつけられたチームシャドウ・ギアの三人の姿がそこにあった。

「なんでこんな事に…すぐに降ろします! ユリア、手伝って!」

「うん!」

「いったい誰がこんな…」

「フアントムの阿呆共か…」

そこに悠然と現れたのは彼女たちの親であり、マスターのマカロフだった。普段の優しげな雰囲気はまるでなく、その表情は怒りと悲しみに溢れていた。

「ギルドのボロい建物は我慢できたんだがな…ワシの大切なガキたちがこうも傷つけられたらもう我慢ならん」

その言葉には苦悶の色が滲み出していた。自分の大事な家族を傷つけられ、守れなかった事の現れでもある。

「問答無用じゃ。戦争じゃ！」

巨人の動く時だ。

第12の唄 不穩

大事な子供達の血が流れた事に怒りをおぼえ、その怒りに任せて全面戦争へと移った。もはや巨人マカロフのこの怒りに否定的な者はおらず、家族のために皆が立ち上がった。彼らがファントムへと向かう中、シリルとユリア、ルーシイはギルドでマスターの知り合い、ポリーリユシカが嫌々ながら手伝ってくれている中でレヴィ達の治療を終え、そのままギルドに残っていた。

「全く、これだから私は人間が嫌いなんだ。こんな戦争じみたことで呼び出されるのは御免だよ」

そうぶつくさ言いながらも無事に治療をしてポリーリユシカは帰路につき、残った3人は心配そうにレヴィ達のことを見ていた。

「なんでこんな酷いことができるんだろ…」

「お姉ちゃん、心配なのは分かるよ。でもね、ここで悔しがってるだけじゃ進まないよ。私たちも行くこう」

「うん…ありがとう」

「1人では危ないからみんなで行きましょう？それに、少しは気がまぎれるでしょうか

ら」

3人が外に出て皆を追っていると、なぜかにわか雨が降りだした。先程までの快晴が嘘のようだ。

「こんな時に雨なんて…ついてないわね」

「早めに動こ。なんか嫌な予感がする」

「待って、誰か来てる」

ルーシイの手を引こうとしたユリアを制したのはシリルだ。ギルドを出る時から違和感を覚えていたのだ。明らかな敵意のある波動が近寄っている感じがあったのだ。雨模様の中で歩いてくるのは傘をさした見るからに怪しい女性だった。

「しんしんと、振りゆく雨は涙色。晴れることなき心の雲かな…：ルーシイ・ハートフィリアを捕らえろってことだったけど護衛がいるなんてね」

「誰よあんな。まさかファントムじゃないわよね？」

「ご名答。流石はハートフィリア財閥のご令嬢、頭の方は冴えておいでですな」

何処からか声が聞こえたかと思えば地面から生えるように紳士然としたモノクルをかけた男が現れた。

「申し遅れましたね、私はファントムロードのエレメント4が1人、大地のソルでござい
ます」

「大雨のジュビアよ」

「自分から名乗るなんて随分と余裕があるようで…破ア！」

敵の方から現れた上に挑発に近い自己紹介に痺れを切らしたのはシリルだ。大事な仲間を守らんと、先手を取って空気砲を撃つ。

「ノンノンノン。そういつた攻撃は無効ですぞ？」

「ジュビアの体は水で出来てるから」

しかしながら、特殊な体をしているジュビアにはまるで効いておらず、ソルも地面に潜り込んで避けている。

「厄介な…」

「お姉ちゃん、後ろ！」

「なっ!?!」

『水流拘束』！
ウォーターロック

先程まで前にいたのは水で出来た分身で、まるで攻撃してくるのが分かっていたかのような手の込んだ策を練ってきた。後ろからの襲撃にいつも容易く捕われてしまう。

「さあ、彼女を離して欲しければ私たちに降りなさい、ルーシイ・ハートフィリア」

「誰が…誰があんた達に！」

「そう。なら終わらせる…」

「逃げるよ！『闇刹那』！」

とつきの暗闇に対処できなかったのか、簡単に逃げおおせることができた。水牢に捕らわれていたシリルも闇に乗じて姿をくらませることができた。

「逃げられてしまいましたか、Teille^残ment^念 mauvais^すな」

「次狙えばいいわ。戻りましょ」

|| || ||

次の日、ギルドは騒然としていた。ルーシイへの襲撃、ギルドマスターのまさかの戦鬪不能、屈辱の撤退などが主な理由だ。

「くそつたれ！」

「痛え…ちくしょう」

「俺たちが逃げるだなんてよお！」

そんな騒ぎの中、次第に事件の背景がぼんやりながら見えてきた。ルーシイの父親が彼女の身柄の確保と即時帰宅を目的にフアントムに依頼してきたこと、拙速の用なのかかなり強引な方法を取っていることなどだ。

「なんで今更私を…家を出て何ヶ月も経つていうのに」

「お姉ちゃんさ、お家やなの？」

「あんな人のところには行きたくないし、正直あそこが我が家って感じじゃないの」

自分のせいで今回の件が起きたと思っっている彼女の口調は普段の明るさが消え、暗い。そんなルーシーに声をかけたのはいつものメンバーたちだ。

「これはお前のせいじゃねえ。それに、どんな理由があれば、家族を守るのは当然だろう？」

「そうですよ。私たちはいつでもあなたの味方です」

「それにさつきグレイが言っただけだよ、ここがお前の家だと思いたいなら、それでいいじゃねえか？お前の心はこのギルドにあるんだろ？」

その温かい言葉に自然と涙が溢れる。今まで感じてこなかったような感情が溢れ、それに驚いたグレイたちが慌てふためいていた。

「ユリア、これがギルドの結束よ」

「うん」

張り詰めた空気が和らぎ始めようとしたその時、アルザツクの伝えた一報が再び緊張をもたらず。

「敵襲だ！あいつらギルドごと攻めて来やがった！」

「何!？」

全員で表に出てみると、そこには移動式ギルドが湖の真ん中を堂々と歩いていた。

『もはやここまでだ。貴様らをマカロフと同じような苦しみに陥れてやろう。魔導砲

ジュピターを受けよ！」

「じゅ、ジュピターだど!? まずい、全員下がれ!!」

怒りと焦りの声が飛んだ場所は、戦場へと変わっていく。

第13の唄 神の愛

「全員伏せろ！私が食い止める！」

「無茶すんじやねえ！命を落とすぞ！」

「構わん！皆を守るなら私一人の命など……！」

そう言つて最前線に出ようとしたエルザを止めたのはシリルだった。ここしばらく見なかつた憤怒の感情を前面に出した彼女の手には無意識に力が入る。

「ここは私がやります。あとは頼みますよ」

「待て！何をするつもりだ！」

「私は生命神の使い。誰一人死なせるつもりはありませんよ」

皆を守ることが己が使命と心得ているシリルを止めようとするが、その間にもジユピターの装填は刻一刻と進んでいく。

「時間がありません！離れててください！」

「くっ、無茶だけはするな！」

「私を誰だと思つてるんです？……『澄みたる心は天照す光。邪を破りて我が願いを叶えたまえ！』」

一寸の猶予もない。そんな緊迫した空気の中、詠唱とともに現れたのは普通の魔法陣よりはるかに巨大な魔法陣だった。

『我が愛は聖なる刃となり、遍く全てを救う糧とならん!』

『発射しろ!』

「お母様、我らに御加護を……『ディオ・アモーレ』!」

2つの砲弾が放たれたのはほぼ同時。天を震わせ、大地を揺るがす大魔法がそれぞれの迷惑を乗せて解き放たれた。丁度中間の位置でぶつかり合った両者の一撃は最初は均衡を保っていたが、威力の差が出始めたのか、次第にシリルが押され始める。

「くっ……(やっぱり、押されるのね……)」

『諦めろ、生命の巫女。お前の力と我々の武威の差は歴然だ。散れ!』

「私は……貴方のような人間が一番許せないのよ!!」

強い意志に神の力が呼応したのか、それとも無意識のうちにそうさせたのか、威力をあげるとともにジュピターの砲弾の下から軌道をそらしていく。

「はああああ!!」

『くっ、なんて奴だ。弾道を曲げるとは……』

力の衝突が大きかった分だけ、曲がった軌道は戻らず、フェアリーテイルの面々に当たったことはおろか、後ろで守っているギルドの天井をかすりもせずに通り返けるだけの

結果になってしまった。しかし、攻撃を間近で防いだ少女は反動と風圧に、細い体が軽々と吹き飛ばされる。

「ぐっ、ううっ…」

「シリル！大丈夫か?!しっかりしろ！」

「傷だらけじゃねえか！」

馬鹿力への代償なのか、彼女の体には莫大な負担がかかり、何箇所か血管が切れた上に皮膚も破れて見るも無残なほどに痛めつけられていた。

『これで貴様らのマスターも、生命の巫女もダウンということか。全員を楽にしてやれたというのに、なんと馬鹿らしい。今そこにいるルーシイ・ハートフィリアを差し出せば穏便に済ませてやろう』

拡声器から響く無情の交渉に戦う妖精たちは反論していく。仲間を差し出すことなどあつてはならない。どんなに傷つこうと、彼らにとつては仲間は何があつても守るべき大切な家族だからだ。

「あたし…」

それでもやはり、ルーシイはそんな彼らに傷ついて欲しくないと涙を堪えて震えていゝる。自分が捕まればみんな無事に帰れる、これ以上は傷つかずに済む。彼女の優しさからくる震えなのだろう。だが、それを打ち破るのはやはり仲間の怒号だった。

「私は…仲間と一緒に生きると決めている！誰がそんな言葉に従うか！」

「仲間を見捨てて生き延びるくらいなら死んだ方がマシだ！」

「俺たちは何が何でも仲間を守り切ってやらあ！テメエら全員ぶっ飛ばしてやらあ！」

「みんな……」

どんな絶望的な力量差があろうと、強い意志と団結力がルーシイの心を満たす。何も悩むことはない。このギルドはただの仲間ではなく、自分を信じてくれる大切な家族なのだ。

『そうか…それが貴様らの回答か。ならば今度こそそのクズ程しくない誇りごと打ち砕いてくれる！次の装填までの15分、恐怖に震えろ！』

通信を遮断するとともに第二砲を充填しはじめる。それと共にファントムのギルドから兵隊がワラワラと湧いて出た。

「あいつら、仲間ごと撃つつもりかよ」

「容赦ねえな」

「違うね。あれは幽兵^{シエイド}、命のない影のような存在だよ」

「なんだと!？」

カナが言う通り、幽兵が傷ついてもあつちのギルドにとっては大した損害にならない。混戦になったところでまとめて撃ち貫くつもりだろう。

「あのジュピターが装填される前に崩さなきゃね」

「だったら俺に任せておけ。シリルのあの気合いを見て何もしねえのなんてな」

「任せていいのかい、ナツ？」

「おう！壊すのは俺の得意分野だしな、いくぞハッピー！」

「あいさー！」

脅威の砲撃に終わりを告げるためにナツとハッピーは先に乗り込んで壊しにかかる。それを見たグレイとエルフマンは、彼の漢気に当てられたか、はたまたライバル心からか、それに続くように駆け出した。

「よし、あつちはあつちに任せよう。私たちは全力でギルドを守るよ！」

「「オオーツ!!!」」

「シリルは戦える状況じゃない。ギルドで休ませてあげな」

強がって叫んではいたが、やはり先程の消耗は大きい。そんな気を失ったシリルを見送ると、ユリアは毅然とした態度でカナとロキの間に立つ。年の差があれど、彼女には彼女なりの理由があつてそこに立っている。

「あんた昨日の子だね？どうしてあんたが？」

「私も……お姉ちゃんみたいに仲間つてのを守れるくらいに強くなりたいんだ！（見てね、師匠……）」

「これは将来有望だね。ロキ、あたしとあんたで指揮を取るよ」

「任せてくれ。レディを守るのが紳士の務めだ」

装填まで十数分。ギルドの意地と名誉を賭けて、勇敢なる妖精たちの戦いが始まる。

|| || ||

「シリル、こんなに頑固な子だなんて知らなかったわ」

ギルド内では過去のトラウマから、戦闘が出来なくなってしまったミラがせめてもの助力をしようと介抱を務めていた。

「大丈夫。貴女は私が治してあげる」

一緒にギルドに入った亡き妹とどこかかぶって見えていたように感じる。あんな思いはもう二度としたくない。ミラの腕に更に力が入る。

「みんなで笑顔で戻りましょう」

全員無事に帰ることを信じて。

戦争は激化する。血は流れ、多くの者が傷つく。様々な犠牲の上にある勝利の星はいずれの手に渡るのか…。

第14の唄 戦局の動く時

ギルド前のせめぎ合いが起こる中、ナツとハッピーは砲台に乗って壊そうと叩くが、ビクともしないそれに次第に苛立ちを覚え始めていた。

「チツクシヨ、硬いなあ」

「外側からじゃ無理だね。中から行こう！」

「それもそうだな。時間もねえし、ちやっちやと済ますぞ！」

外からダメなら内から。切り替えの早さが彼らの良いところである。魔法の砲撃である以上ラクリマを破壊すれば機能が止まったも同然になる。

「よっし、入れたな」

「外からじゃ分からなかったけど、かなりでかいね、ジュピターのラクリマ」

「でかさなんて関係ねえな。ぶっ壊すだけだからよ」

「そんな事を我々がさせるとでも？ここは作戦の重要地点なんだ」

物騒なことを口にするナツに、上から牽制するように男は口を開く。主力の砲台なのに、守りはこの男一人だ。

「お前のことは聞いているぞサラマンダーのナツ。俺は大火の兎々丸、お前を倒す男の

名前だ」

「どうでもいい。邪魔をするってんならぶっ飛ばすまでだ」

「その威勢、いつまで続くかな？」

猛火の燃え盛る砲台前の決戦が始まる。

＝＝＝

「う……ここは……」

「気づいたのね?!大丈夫、ギルドの中よ。みんな頑張って闘ってるわ」

「ミラ姉さん……ありがとうございます」

「ルーシイなら隠れ家に行ってもらってるわ。リーダスも一緒にね」

敵の狙いは彼女にある。それならば護衛をつけて離れてもらうのも1つの手だ。それでも自分が寝ているような暇がないのは承知の上だ。身体がいまだに痺れるが、戦場に出ようと立ち上がる。

「私も出なきゃ」

「ダメ!貴女は怪我人よ?ここでみんなを信じて待つてなさい」

「ごめんなさい」

「うんうん、良い子ね」

ミラの忠告を聞かなければ皆の足を引っ張りかねないと感じ、心苦しく思いながらも

この場にとどまる決意を決めた。

「ユリア、みんな……どうかご無事で……」

窓の外で続く乱闘を気かけながら、ただここで待つしかない。

＝
＝
＝

「くっ、しつこい！」

「流石に多いね。ナツ達はどうしたんだ？まだ砲台は崩せてないみたいだけど……」

「弱音はまだ聞かないよ。ナツ達を信じなさい！」

ナツが飛び立ってから10分ほど、未だに健在な砲台に皆心のどこかで怯えながら戦っている。弱気になりかけける者を鼓舞するようにカナが無理を押しして大声を上げる。

「カナお姉ちゃん、無理したらダメだよ！」

「せっかくシリルが託してくれたんだ！私たちが頑張らなきゃね！」

『若者たちよ、よくやっておるな。こやつらの相手は私がしよう』

「師匠!？」

立て続けに湧いてくるシエイドに消耗戦を強いられている妖精達の前線を押し戻すために、いつの間にか来ていたクローバーが前に出る。人間同士の争いにはなるべく干渉しないようにしていたが、見逃せる状況ではなくなつて来ているのも事実だ。

『このクローバーが遊んでやろう。神の啓示書、第八卷第六章アヌビスの項より参照

……『地獄の雷』!』

冥府から呼び出した魔法陣は敵の戦力を大いに削り、残った兵たちに恐れを植え付けるにはうってつけの効果を発揮した。敵の動きが鈍ったこの好機を逃すまいと士気の上がつた妖精たちは前へ前へと突き進んで行く。

『更なる馳走をくれてやる…神の啓示書第六卷第二章チエルノボグの項より参照…『怒りの獄炎』!』

『よし、道が出来たぞ! 私たちも攻めに転じるぞ!』

「オオーッ!!」

数の不利を覆した彼女たちはエルザを先頭にただひたすらにナツを信じて突き進む。そんな中でクローバーはユリアを呼び止めた。

『弟子や弟子、今少しだけ力を貸そう。こっちに來なさい』

「師匠、いいの?」

『今は躊躇している場合じゃないのじゃ。『神の啓示書』の基本の基、『第一卷第一章閻魔の項』を託す。よく学べよ』

託した力は冥府の神々が扱ってきた古エンシェントスベルの魔法の類だ。基礎中の基礎とはいえ神の力の一端、威力は推して知るべしだ。

『さあ行け、これから護るべきもののために……私の大事な娘よ、頑張れ』

「し、師匠はどうするんです?」

『これから向かうべきところがある。しばしの別れだ…さらばだ』

「師匠…うん!私、やってみるよ!」

期待をかけられ、それに応えてみせようと護るべき人たちのために前を向く。

|| || ||

「いい加減に渋といんだよ!」

「俺に炎は効かないと言ったはずだ!その巨炎も支配下に…」

ジュピターが魔力の装填の最終段階に移る中、ナツと兎々丸の一騎打ちは続く。最後の抵抗と言わんばかりに腕に魔力を溜め込んでいく。

「んぐぐぐぐつ!!」

「くつ、コントロールが効かない!どういうことだ!」

「この炎は俺のもんだ!勝手に操るんじゃないやねえ!」

暴力と意思の権化と化した爆炎は兎々丸の制御力を大きく上回り、一気呵成に攻め立てるように放たれる。それをギリギリでかわして笑いをあげる兎々丸だったが、その真意を理解するにはもう遅かった。

「ハナからお前なんか狙ってねえよ!ぶっ壊れるお!」

「なっ!?しまった!」

その先にあつたのはジュピターのラクリマ。炎竜王の炎を受けたラクリマは抵抗を許されず、破壊を受け入れる他なかった。

「さあ、今度はテメエの番だ、ファントム！」

「(や、ヤバイよ！こんな奴だなんて聞いてねえ！)」

ジュピター、完全停止！妖精達の歓喜の音が轟く中、戦局は大いに動こうとしていた。

第15の唄 正面衝突

完膚なきにまで壊されたラクリマの前に立つ二人の男の心境は全くもって逆のものだった。かたや目的の1つを達成して意気揚々としているナツ、そして彼の前にいて冷や汗を浮かべる大火の兎々丸だ。

「もうお前らに勝ち目はねえよ」

「くっ、役目を果たせないなど…っ！これは！」

「な、なんだ!?!急に動き…うぷっ」

だが、そんな情勢もあることを切っ掛けに立場が入れ替わる。砲台の破壊を受けたことによるのか、急にナツ達のいるギルドが姿を変えていく。

「お、おおっ……」

「まさか『超魔導巨人ファントムMkⅡ』に切り替えてるのか！くそ、足元が不安定すぎる」

「くそ、酔いが…」

「ナツー！」

ギルドが座った状態から立ち上がった姿に変えようとしているのだ、乗り物酔いを持

つナツは急激に弱っていく。

「まさかお前にそんな弱点があるとはな！今こそ俺の究極魔法を喰らえ！『七色の炎』」
レインボーファイア

「お、おとおお?」

「そんなことさせるかよ…『氷欠泉!』」
アイスクエーサー

「吹っ飛ばえ!」

切り札を前に手も足も出ないナツを助けたのはグレイとエルフマンだ。隙について凍らせて投げ飛ばしたのだ。

「つたくよ、くたばるにはまだ早えぜ」

「漢なら根性を見せろ!」

「おお、かつこいいいぜお前ら」

「情けねえな」

ようやく揺れが収まったところで外の状況をハッピーに確認させるとんでもない事態が発覚する。ギルドがまるで魔人のような姿になっており、その魔人がとてつもない威力を誇る『アビスブレイク』なる魔法を発動しようとしている。しかも場合によっては街が半壊するかも、と。

「こりゃあのおんびりしてらんねえな」

「あれ、元素魔法だつて聞いたよ！」

「結論が出たな。残りのエレメントどもをぶつ倒すぞ、漠らしくな！」

「やつてやんよ！急ぐぞ！」

それぞれ別々の人を倒すべくバラバラの道を進んでいく。

|| || ||

「やはりここで休んでいる暇はなさそうですね。アビスブレイク、あれが発動しそうつて言うなら乗り込むしかない！」

「無茶言わないで！死んじやうわよ！」

「……いいえ、行きます。『秘術・賢者の石』！」

膨大な魔力を消費し、己の傷を治癒していく。己に秘められた決戦用の能力フル・リカバリだ。完全再生能力だ。

「姉さん、魔力回復薬を……」

「どうしても行くのね。それじゃあ、お姉さんとの約束……生きて帰ってきて」

「ええ。みんなで笑って帰りましょう」

ミラの心配に笑って答え、勇ましく突き進んで行く。外では激戦が続いており、クローバーによって数は減らされたものの敵も踏ん張っている。

「戦況は？」

「巨人の動きが少しだけだが遅くなってる。中で頑張ってるんだろう」「わかりました。私も中に行きます!」

ロキから情報を得たシリルは単騎、敵城へと突貫した。血で作った翼を頼りに腕の方から潜り込むと、既にそこには倒された大地のソルとトラウマを克服して全身テイクオーバーのコントロールに成功したエルフマンが立っていた。

「シリル!?!お前大丈夫かよ!」

「ええ、お陰様で。エレメントたちは?」

「知ってる限りじゃもう既に2人は倒してる」

「それじゃあ後2人ですね」

「こっちはもう動けそうにねえ。グレイとナツは上に向かったはずだ」

「はい!」

魔力と体力を使い果たしたエルフマンに代わり、シリルが敵を討つべくさらに奥へと進む。広い部屋にたどり着いたところ、待ち受けていたのは大空のアリアだった。マスターに手をかけた張本人で、エレメント4のリーダー的存在でもある。

「ほう、思ったより早い復活だな、シリルとやら。あのジュピターを止めた相手となれば小娘だろうと毛ほども油断はしない。大空のアリア、巫女の命を頂戴しに参った」

「マスターに手をかけたのは貴方ですね。ならば、油断も手抜きもいたしません! いざ

南無三！」

自分の親といっても過言ではないマカロフを苦しませる元凶の男を倒すべく、全力を尽くして攻めかかる。

その頃、ポリーリユシカのいる森には一人の珍客が訪れていた。顔を隠し、正体を知る者を極力減らしている魔道士でありS級の実力を持つ男、『ミストガン』だ。治療を終えて一休み入っていたポリーリユシカは不審に思いながらも彼に声を掛けた。

「あんた、私のところに何の用だい？」

「役目を果たした、といったところか。もうまもなく巨人が動く時が来よう」

「巨人が動く？ま、まさか…マカロフ！」

「ポリーリユシカか。治療、済まなかったな」

フアントムを攻めた際、アリアの一撃で魔力欠乏症に陥っていたマカロフであったが、もう既に復活をしていた。

「あんた、なんで動けるんだい？」

「私がマスターの魔力をかき集めて来たからだ。それと、フアントム系列のギルドは潰してある」

「そうか。ガキどもが必死に戦ってくれてるのか。ならば、親の役目を果たさねば…」

「止めないよ。ただ、無茶だけはするんじゃないよ？」

「わかっておる。ミストガン、ご苦労じやった」

「ああ」

地に伏せたはずの巨人マカロフは己が本命を果たすため、再度立ち上がる時が来た。

|| || ||

「この私を捉えるとはなかなかやるな」

「空気の魔道士は私の得意な相手なんですよ。氣の力は貴方の実体を捉えられる」

実体と虚体を自由に行き来できるアリアを相手にシリルは血ではなく、氣の力を軸に果敢に攻めかかる。しかし、お互いに決定打をうてず、魔力と体力を削るだけの戦いとなっている。

「私を倒してもマスターがおられる。無益なことよ、ルーシィ・ハートフィリアを差し出せば良いものを」

「断る。私は仲間と生きるとさっきも言ったはずです」

「ならば貴女を全力で倒さねばなるまい。私の目を開かせた者は死あるのみ」

「外道の言葉、聞き捨てなりませんね」

アリアとシリルはお互いのあるべき道を示すため、全ての魔力を引き出そうとする。

『『死の空域・零』。この領域に入ったものには等しく死を…』

「神の名において貴方を倒す。『生命神の剛拳』！」

死せる力と生ける力の正面衝突。だが、その結果は火を見るよりも明らかなものとなった。神の法を表すシリルの力が感情を乗せて、アリアの空域にヒビを入れた。

「なっ!!?我が空域が!」

「砕けろお!」

「もしや、私が敗れるなど:!!?」

「おおおおおおお!」

戦意喪失。心まで折られたアリアに防ぐ術などなく、あっけなくその一撃に服し、気を失った。

「これで…:私達の借りは返させてもらいました。勝ちましたよ、みんな…:」

シリル対アリア。軍配は妖精達に上がった。

第16の唄 終焉の鐘を鳴らして

アリアを撃破する金星を挙げたシリルのところに来たのは復活したエルフマン、大海のジュビアを倒したグレイだった。

「派手にやったな」

「無事ということは、エレメント4は全員倒せたみてえだな。これでアビスブレイクは出せねえだろ」

「これで一安心ですね。あと残っているのは…」

「鉄くろがねのガジルとマスター、か。ガジルの方はナツが倒してくれんだろ」

いつも喧嘩ばかりしているグレイといえど、やはりナツのことは信頼している。そうとなればやることは一つとなった。

「マスター・ジョゼの撃破か。漢としてなんとしても倒さないとな」

「しかし、私たちは全員怪我人。無理もできません」

「心配はいらねえよ。俺たちの結束があれば負けやしないさ」

グレイとエルフマン、シリルは最終決戦へと心をひとつとし、残るジョゼのいるだろう音声室へと向かう。だが、あちらも主力のエレメント4を倒されたことでマスターが

直々に出向いて来た。

「これはこれは…よくもやってくれましたね」

「こいつがファントムの…」

「さて、消えてもらおうか、このクズども！」

圧倒的な威圧感と実力を前に瞬きすらさせてもらえず、前に出たグレイとエルフマンがいつも容易く倒されていく。その隙について攻めかかるシリルの攻撃も簡単に受け流す。

「無駄な足掻きは為にならんぞ。今降伏すれば無傷で帰すことも吝かやぶではない」

「お互いにもう引けないところまで来てるんですから、貴方を倒すまでです」

「ふふふ、気高く美しく強い。壊し甲斐がありますね」

「生命の巫女、参る！」

正直心が折れそうだった。これほどに悪意のある敵は見たことがない。だが、ここで下がれない理由がある。震える体に喝を入れ、拳を前に構える。自分しか立ち向かう者がこの場にはいない。

「いつまで立っていられるかな？ 『デッドウェイブ』！」

「死霊の塊!?! くっ…」

「流石ですね。ならばこれでどうです！」

開いた左手を振り払うと、その軌道上で地面が連続で爆破する。ギルドマスターの名に恥じぬ猛攻を前にシリルも先ほどまでの戦いによる傷も相まって、防戦になりがちだ。

「ちよこまかと煩い虫ですね。破ア！」

「きやあつ！」

「すぐにマカロフのところへと送ってやりましょう」

「流石に頭にきました。打ち抜け、神器『アウラの弓』！」

「ぐっ!? 即座の反撃とは…伊達に神の巫女を名乗ってはいませんね」

しかし、ただやられるだけではギルドの意地が許さない。倒せるとは思えないが、一矢報いることはあり得る。そう信じて強敵に挑む。

「ルーシィ姉さんは渡しません。何があるうと」

「ルーシィ・ハートフィリアは我々の手中にあり。ここで彼女の大切なもの、叩き潰してやる」

「…(奪われてたか。でも、今ならまだ取り戻せる。信じてますよ、ナツ兄さん!)」

＝＝＝

「ギヒヒ! 暇つぶしにはもってこいだな!」

「テメエ、叩き潰してやる」

「この空に二頭のドラゴンは必要ねえ。墮としてやる」

ルーシイの囚われている広間では助けに来たナツと、ファントムのエースで鉄竜の子供のガジルが今まさに衝突しようとしていた。双頭の竜が互いの意地をぶつけようとしていた。

「大丈夫かな？」

「心配ないよ、ルーシイ。だってあのナツなんだよ？負けるはずない」

彼女の心配を払うようにハッピーが力強く答える。ナツの怒りは全てを燃やし尽くす灼熱となって現れている。こうなったナツを止められた者はそういない。それほど信用と信頼がある。

「せめて俺を楽しませてくれよ、サラマンダー 火竜」

「お前はギルドの名にかけて俺が倒す。ナメた真似をしたこと、後悔させてやるよ。鉄のガジル」

荒ぶる感情の炎を燃やして、先に殴りかかったのはナツだ。その一撃は素早く、そして重い。鉄と呼ばれて鉄壁の守りと攻めを誇るガジルも流星にこの一発に吹き飛ばされる。

「このクズが…なっ!?!」

「ぶっ飛ばべ！火竜の劔角！」

「すごい！ 圧倒してる！」

「ガジルが吹っ飛ばなんて初めて見たぞ！」

勇猛なる男の威を前に、ガジルも押されていく。だが、それでやられるほど鉄竜も甘くない。続け様に繰り出された拳が当たったが、今度は痛そうにもしていなかった。

「これを使わされるとは、テメエも中々やりやがるな。見せてやるよ、俺が鉄竜なんて呼ばれる理由をよ」

「へ、これって…!?!」

「鉄の皮膚!!」

そう、ガジルの強みはその鉄に変化できる体質にある。頑丈な滅竜魔道士の中でもその防御力はかなり高い。

「ギヒッ、今度はこっちが攻める番だ」

「くそっ」

|| || ||

「貴方もかなりの強情つぱりなようだな、生命の巫女よ」

「はあつ、はあつ……それが、妖精の尻尾おしりの強さ……ですよ」

「苦しむだけだ。そこらに転がってる奴らのように、すぐ楽にしてやるものを……」

双頭の竜が激戦を繰り広げようとしている中、シリルとジョゼの戦いもまた、佳境を

迎えようとしていた。

「ジユピターの一撃で既に死にかけていた女がまだ抵抗するとはね。無駄なのだよ、全て！私の前で飛ぶハエは嫌いなのだよ！」

「っ!? きゃあー！」

「これはただの戦じゃない！我々はハートファイリア財閥の依頼であの小娘を捕らえているだけの事！貴様ら如きに邪魔されてたまるか！」

「きゃあああっ！」

シリルを捉えた魔法に激昂を乗せ、さらに締め上げていく。まるで囚われた邪念を振り払うかのように。

「る、ルーシィ姉さんは泣いていた。自分に全ての責任があるって……そんな彼女の何がわかる！彼女ほど苦しんでいる人はいない！貴方たちには彼女の心は分からないし、あの涙の真意を理解するなんてできない！」

「これから知っていくのさ。だが、すぐには渡さん！そして、貴様らとの繋がりなどというクソみたいなものを全て断ち切ってやる！」

激昂するジョゼの魔法はシリルに凄まじい激痛を与える。意思の強さと意地は彼にもあるのだろう。だが、その魔法がなぜかかき消された。

「なっ、私の魔法が！貴様のせいか、いや、誰だ!？」

「この戦場には多くの涙と、血が流れた。互いのガキが嘆き、悲しみ、苦しんだ。ワシのギルドも、お前さんのギルドも多大な犠牲を払った。この戦争、ワシらの手で終わらせようぞ」

刹那、殺伐とした戦場は暖かくも厳しい光に包まれたようだ。その光は戦場の誰もが感じるほどの大きな光。それを纏って現れたのは小さな巨人、そう、フェアリーテイルのマスターマカロフ。戦争は彼の出現を伴って終焉へと向かおうとしていた。

「天変地異を望むか、マカロフ・ドレアー」

「家族を守るためならば、ジョゼ・ポーラ」

第17の唄 本心

「マスター、どうして…」

「退け。これから醜い争いになる。皆を連れて退いてくれ」

「で、でも…」

「心配しなさんな。ワシは大丈夫じゃ、ナツもな」

その言葉を証明するように、ギルド全体が揺れ、次第に崩壊していく。サラマンダーの全力の炎に瓦解しはじめたギルドのその様は、勝利がどちらにあるかを示しているようだ。

「ふふふ、私と貴方が戦えばどうなるか分かっていないとは言わせん。だが、貴様を殺すのが先のようなだ」

「手だしはさせせん。全てのガキどもに感謝する、ようやった。ギルドの魂、胸を張って誇れ！」

マスター同士、聖十大魔道同士の直接対決だけあって、魔力の衝突は激しいものである。地は揺れ、空は裂け、雷が轟く。まさしく天変地異と言った様だ。

「デッドウェイブ！」

「はあっ！」

雲は渦巻き、空を闇が包む。頂上決戦を表すにはこれ以上の荒れ模様はない。

「何故ルーシィを狙った。その若さでその魔力、聖十大魔道としては十分な力があるというのに」

「あの家族の財産ですよ。ハートファイリア財閥の金さえあれば我々はもつと発展できますからね」

「短絡的な。彼女は彼女なりに悩み、苦しみ、笑い、戦つて、そしてともに過ごしてきた。今はただの一人の少女であり、仲間であり、ワシの娘も同然」

ジヨゼの心無い言葉は親心を持つマカロフの逆鱗に触れた。彼は怒り、そして巨人となったマカロフはその怒りをもつて思い一言を放つ。

「お主はもう、捨て置けぬ。これより妖精フェアリーの尻尾テイルのしきたりに則り、貴様に3つ数えるまでの猶予を与える。跪け」

「は？何をいうかと思えば……跪けだ？ふざけるな！我々は貴様らなんかよりも上を行く！貴様らハエゴごときに屈服してなるものか！」

ここまで来て、まだ事態を飲み込めないジヨゼはプライドに任せて虚勢を張り、咆哮する。

「3……2……」

「消えるのは貴様らだ！今ルーシーを差し出せば良いだけのこと！消えろ、フェアリーテイルウウウ！」

「1……そこまでだ。どうやら手遅れのようじゃな。消えよ……妖精の法律、発動！」

だが、その言葉はこの光の前では無力となった。マカロフの放った審判の光は、敵を葬り、仲間を守る妖精三大魔法の1つ、妖精の法律。その光はギルドどころか町中に轟き、フェアリーテイルのギルド前で戦っていたシェイドたちも悉く一掃していく。光が弱まり、空が晴れた頃に、そこに立っていたのはフェアリーテイルの者達だけだ。

「戦争は終結した。これだけの事をしでかしたんだ、これから評議会が騒がしくなろう。手前のことを心配している、お互いにな」

振り返り、勝利宣言をあげながら歩くマカロフの背中に現れたのはシリルに倒されたはずのARIAだった。戦争には負けたものの、せめて大将だけでも道連れにしようという魂胆だ。だが、それも失敗に終わる。マカロフの拳が見事なまでに直撃し、その小さな野望を打ち砕いた。

「去れ、さもなくば更なる闘争、終焉をもたらすぞ。ジョゼを連れて去れ。二度目はねえと思えよ」

戦争は妖精達に軍配が上がって、終幕した。皆はお互いの無事を確認するや、大いに喜んで騒ぐ。自分たちの誇りと、仲間を守れたことへの何よりの嬉しさがあった。

|| || ||

全ての戦いが終結し、皆が集まったのはフェアリーテイルのギルド前。全壊はしていないもののがかなり派手に壊されていた。

「おお、これはまた派手にやられたのう。修復するのにどれくらいかかるかのう」

「あ、あの…マスター」

「なんじゃルーシイ？」

「私のせいで…あの…」

「気にしなさんな。ワシらは皆、仲間を守るために戦ったんじゃ。そんな暗い顔は似合わんぞ？」

マスターの明るくも優しい言葉をかけられてもルーシイの顔は晴れない。自分の責任で、そんな言葉が心を反芻する。

「マスターの言う通りだよ、ルーちゃん」

「俺たちも、みんなも、誰もお前を責めやしねえさ」

「なんだって俺たちは仲間なんだ、家族なんだ。そうだろ？」

「うい。そう自分を責めなくていいんだ」

「レビイちゃん、ジェット、ドロイ、リーダーズ…」

皆の暖かい心はこのギルドにはあった。太陽より眩しい絆があった。だからこそ、皆

が皆、家族であり仲間である者のために手を差し伸べる。そんな優しさがルーシイの心に染みて、涙を流させる。

「ありがとう、みんな…」

「それで良い。一人の喜びはみんなの喜び、一人の涙はみんなの涙、どんな苦楽も分け合えばいい。それがワシら、ギルドというものじやろう？」

明けぬ夜はない。枯れない涙はない。皆で一緒に過ごせばどんな蟠りや悲しみでも、いつか晴れる。なんだって、それが人間というものなのだから。

それからというもの、フェアリーテイルはギルド間抗争禁止条約、器物破損などの罪状ですぐさま現れた評議会に取り調べを受けることとなった。

「だから、仕掛けたのはあっちでこちらはむしろ被害者なんです。そこどころ、どうにかありませんか、ラハールさん」

「私としても貴女への恩があります。出来ることはしたいのですが、規則は規則、法律は法律です。上の判断を仰がねばどうにも…」

シリルの取り調べを行なっているのは以前の仕事で出会ったラハールだ。今回の事件で取り調べる人数が多いため、こうして部隊のものを従えて捜査に協力しに来ていた。

「そうですか……私から話せることはもうありません。そろそろ解放してもらえると助かるのですが」

「ご協力感謝します。ヤジマさんにはこちらからも口添えしましょう。今の私にはそれくらいしかできませんがね」

「そうして貰えれば十分。これ以上は望めませんから」

一週間以上にも及ぶ聞き取りを終え、取り調べ用のテントを出た頃にはもう既に日は高く昇っていた。

「お、シリルもようやく終わったか」

「顔の効く相手なだけマシでしたけど……ナツ兄さん、怪我は大丈夫です？」

「なんの心配もねえさ。ほら、この通りちゃんど動くしよ」

「良かったです。それにしてもルーシイ姉さん、見かけませんね」

「そういやそうだな。よし、エルザとか誘ってアイツん家行ってみるか！」

一度決めれば聞かないナツの行動力に半ば呆れ、半ば感心しながらもいつものメンバーを連れて早速ルーシイの家へと向かうことにした。そんなナツを見送り、シリルはユリアの元へと向かった。

「おーっす！ルーシイ、元気してるかー！」

「してるかー！」

「また不法侵入かよ。まあ、いいか」

だが、周りを見渡しても彼女の居るはずの部屋はどこももぬけの殻。ルーシイの姿はどこにも見られない。

「あれ、居ないね？」

「どういうことだ？もしかして風呂か!？」

「いや、居ねえ」

「何先に確認してんだ!？」

2人のデリカシーのない言動にエルザは呆れるが、居ないとなっては目的の半分は達成されない。

「ふむ、心配になってきたな…ん？」

「どうしたんだ、何か見つけたのかよ、エルザ」

「実家に帰る、だそうだ」

「何!？マジかよ、アイツ何考えてるんだ!」

「分かん、急ぐぞ!」

|| || ||

ルーシイの部屋で慌てふためく3人が駅へと向かう頃、ルーシイは自分の実家であり、苦手な父親のいる仕事場へと久し振りに帰って来ていた。

「る、ルーシィお嬢様!？」

「久し振り、スペットさん。ごめんね、突然……」

「いえ、無事に戻ってこられただけで私は……」

「うん。ごめんね、それと……ありがとう」

久し振りに帰った実家では彼女を慕う使用人達が笑顔で出迎えてくれた。そんな中でも相変わらずだったのは彼女の父、ジュードだった。彼に伝言を託された使用人がすぐに会いに来るようにと伝えに来たのだ。

「相変わらずだな、あの人も。分かった、ちよつと待つてて」

「承知いたしました。折角ですから着替えていかれては？」

「そ、そうね」

別の使用人に連れられ、奥に進んでいく。ルーシィが館の中へと姿を消した頃、別の客人たちがこの館にやって来た。

「突然の来訪、失礼します。ここはハートフィリア家で間違いありませんか？」

「あの、どちら様ですか？」

「失礼。ルーシィ・ハートフィリアの友人です。それと……」

突然の来訪者は腕の甲にある『とある物』を2人揃って見せてみた。それには使用人も驚き、すぐに屋内へと案内した。

「ルーシイさんは今どちらに？」

「あちらの奥の部屋です」

「そうですか。申し訳ないですが、案内はここまでで十分です。後は私たちが
「かしこまりました」

＝＝＝

「遅くなりました。勝手に家を出たこと、申し訳ありません」

「よく戻ってきたな、ルーシイ。お前は自分の立場をわきまえたまえ」

ルーシイのいるそこは、厳肅なる主人の部屋、ジュード・ハートフィリアの執務室だ。
2人は緊迫感のある部屋で対面していた。

「失礼しました。して、話とは？」

「うむ。お前もそろそろ結婚するべき年だ。そこで、我が社と協力してくれているある
国の王子と結ばれてもらう。相手は分かるな？」

「はい……」

政略結婚というものだ。財閥の令嬢と国の御曹司が繋がれば、より一層財を成せると
いう考えから、ジュードは勝手ながらも決めていた。

「もう話は終わりだ。下がれ」

「お父様……私は……」

「何をしている。下がれ！」

「話を聞いてみれば…勝手に過ぎませんか？ジュード・ハートフィリア」

「なっ!? 誰だ貴様ら！」

ジュードの激昂が轟く中、その少女たちは悠然とルーシイたちの間に割り込んできた。

「この紋章を忘れさせたとは言わせませんよ。『冥府』と『生命』の紋章を…」

「し、シリル!? ユリアまで！」

「お姉ちゃん、びつくりしたよ。突然出ていつちやうんだから」

「何故に神々の使いが私の娘を庇う？その子は私の娘だ、口出しは無用に願いたい」

「そもいけません、我々は彼女を連れ戻しにきたのですから。友として」

家のことに干渉するな。その言葉に真つ向から反対する。それが何故かわからないとジュードはシリルの瞳を見る。

「彼女には彼女の本心があるんです。それを押さえつける権利は貴方にはない」

「本心だと？ 私は私なりにルーシイのことを思つて…」

「ならば何故…傷つけるような真似を？そこが許せないのですよ」

「ルーシイ…お前は、お前の本心は…」

しばらくの沈黙が流れた。そうだ、自分の心はどこにあるのか。その答えを伝えにき

たのだ。決意を秘めた瞳は毅然と見つめ返す。

「私は、私は今度は自分の言葉を伝え、この家を出させていただきます！貴方は私の大切なものを傷つけた。例えどんなに心配してくれようとも、どんな言葉をかけられようと、この決意は変わりません！」

「る、ルーシィ……」

「もしもママが生きていたなら、『自分の行きたい道を進みなさい』って言うてくれるだろうから。ありがとう、そしてさようなら」

それが別れの言葉となった。これまでの自分と決別し、自分の抛り所となる本当の家族と生きることに。それが彼女の答えだった。

「そうか。私はどこか勘違いをしていたのかもな。神々の使いたちよ、貴女たちに感謝する」

「私たちは何もしてないよ。ただ、言わせてね。私たちが信じてほしい」
「そうか。本当に済まない」

山の向こうに落ちゆく夕日はどこか晴れやかな光を放っていた。これから進む妖精たちを導くように。墓参りを終えた3人はただ静かに歩いていった。

「2人とも、ありがとね」

「私は生命の巫女。人の意志が私にとって大事なんです。それを引き出したまで」

「みんな心配してたからね。だから、勝手だけど、ついてきちゃった」
「ううん。さ、帰ろ！みんなのいるギルドに！」

途中で合流したナツたちと共に満面の笑みを浮かべたルーシイは、本当の自分を見つ
ける冒険へと向かうのだった。

第18話 星の至る空

ルーシイの実家騒動から数日、ギルドの改装工事が進む中、仕事の再開がこの日ついにアナウンズされた。

「みんな！ギルドが出来るまで仮設カウンターで仕事の受付をするわよー！」

「うおおお!!待ってましたー!!」

「工事ばかりで気が滅入ってたんだ！」

「じゃあ、暴れるぜー!!」

この日を待ちわびていたのか、一目散に自分の目当ての仕事を手にとっていく。これまで工事しかしていなかったからか鬱憤がたまっていたのだろう。

「何あれ、いつもダラダラしてるのに」

「アハハ、そうね!そういうえば怪我とか大丈夫なの?」

「ちよつと痣が出来ちゃいましたけど、今は大丈夫です」

「良かった。さ、ルーシイも仕事に行ってきなさい。家賃厳しいんでしょ?」

「そういえば今月も厳しいんだっ。うう、助けてシリルくー!」

「(こ)数日ともに仕事が出来ておらず、それによって収入も減り、万年金欠のルー

シイにとってはピンチな状況である。そんな彼女がヘルプを求めたのはシリルだったが、シリルは少し残念そうな顔をしていた。

「ごめんなさい。私、今日からユリアと仕事に行く予定でして…その、手伝いといったほうが良いでしょうか？」

「ああ、そうだった…：…しようがない、ナツたちと行ってこよう。ありがとね」

「いえいえ。それじゃあ私はこれにて…」

そう行って去ろうとしたが、突然怒号と机が近くから飛んできた。その声からしてエルザだ。不穏な空気がギルド（仮）を包むなか、エルザの近くから強気な男の声が聞こえてきた。

「二度も言わせんなって。テメエらが弱えからファントムなんていう雑魚に戦争をふっかけられんだ。ああ、なんつったか、その3人がやられなきやそもそも事が起こらなかつたんだろ？ どうなんだ、ええ？」

長椅子に座り、ツラツラと文句を言うのはギルドで数少ないS級魔道士、ラクサスだった。今回の戦争では仕事でおらず、今しがた帰ってきていたのだ。

「貴様、何もしていないのによくもぬけぬけと…」

「事実を言ったまでだろうが。やるか、エルザ？」

「文句も口出しも喧嘩も、今の貴方にはする権利すらありませんよ、ラクサス兄さん」

「ちつ、口うるせえ奴が来たか。いいか、今度こんなナメられた真似されたら、俺がジジイに代わってギルドの頂点に立ってやる。精々頑張って足掻きな」

「上等。その時はギルド全員が貴方の敵です」

「言うじゃねえか。ハーツハツハツハツ！」

高笑いをあげ、緊張感と不穏な空気を残して去っていった。渋い顔をするエルザやレビイ、ミラジエーンやルーシイであつたが、シリルの言葉に少し顔を緩めた。

「あの人に好きにはさせません…ミラ姉さん、この仕事、キャンセルで。ユリア、ちよつと来て」

「どしたの？もしかして仕事のこと？」

「そうね。折角だから姉さん達と行かない？そつちの方が楽しいだろうし、どう？」

「良いよ。じゃあまた後でね」

ユリアがあつさりとして承し、久し振りに最強メンバーで新しい仕事に出ることとなつた。

|| || || ||

「そつち行つたぞ！」

「決めるのは任せたわ、ユリア！『血縛鎖牢』！」

「あいあいさー！『シャドー・ハンマー』！」

「ふう、これで終わりつと。おつかれタウロス」

いつものメンバーが集まったことで仕事も難なく終わり、予約していた宿もまだ二、三日残るほどのハイスピードだった。

「思っていたより簡単だったな」

「珍しく物が壊れないとはな」

「悪かったな、いつも壊してばっかだよ」

「まあいいじゃない。今日明日とゆつくりできるんだから」

その言葉通り、ルーシイたちは鳳仙花村にて思い思いに羽を伸ばしていた。街に繰り出す者、宿でゆつくりする者、修行に明け暮れる者と様々だった。そんな時間を過ごし、夜もふけようかという頃、全員で外を出歩いていた。

「たまには仕事の後にゆつくりするのもいいね」

「最近働き詰めだったからね。ようやく私も『神の啓示書』のコツが掴めたよ」

「ユリアとシリルは修行してたのか？次から私も手伝おうか？」

「その時は是非頼みます」

話し合って和気藹々とした雰囲気の中、1人、見知った顔と出会う。先の大戦で指揮を取っていた光魔法の使い手ロキだった。

「あれ、そんなとこで何してんだロキ？」

「よう。最近顔見せねえから心配したぜ？」

「やあ、元気そうだね。なに、仕事の一環だよ」

「あ、そうだ！仕事終わったら一緒にゆくりしようよ！」

「え!?あ、いやあ…悪いけど遠慮させてもらうよ。あ、あははは…」

いつもの歯切れの良さは鳴りを潜め、どこかぎこちなくて普段の軽さがどこかへ行つてしまったかのようだ。

「ロキ兄さん?どうしました?」

「なんか元氣ないけど」

「心配かけてるみたいだけど、僕は大丈夫。じゃ、仕事に戻るよ」

そう言い残し、そそくさと何処かへと一目散に逃げていつてしまった。

「ルーシイ、お前何かやつちやつたか?」

「何にもしてないわよ。なによあれ」

「星霊魔道士が苦手なのが起因しているのだろう。心配するな、いつものことだ」

普段の避け方と違うという、漠然とした不安が胸中を占める中、皆で休暇を終えてギルドに戻った。そして、その翌日。ルーシイの不安が的中してしまう。ロキが誰にも伝えず、ギルドを出奔してしまったのだ。

「そんな…」

「俺たちも今探してる。ルーシイも見つけたらすぐに知らせてくれ!」

「わかった!」

皆が必死の思いでロキを探す中、ルーシイは情報をかき集め、ある結論に至り、そしてその答えの導く場所に立っている。

「やつぱりここだったんだね? 星霊魔道士カレン・リリカの墓」

「ルーシイかい? 僕に何か言いに来たのかな?」

「救いに来たんだ。クル爺に話は聞いているよ? カレンを間接的にとはいえ、殺めてしまったこと。その罪を背負ってここにいること。そうでしょ、ロキ…いえ、黄道十二星座獅子宮の星霊、レオ」

「僕は…星霊界にはもう還れない。罪人はその死をもつて償うものさ」

何もかもを諦め、友であり同じ契約者と共にあった白羊宮のアリエスを救う代わりに主人を見殺しにした罪を背負い、ここに命果てようとしていた。

「なんで…あなたは友達を救おうとしただけでしょ!?! おかしいよ!」

「そうだよ。お兄ちゃんやんは友達と逢うまで死んじやダメ」

「ユリア!?! なんで君が…」

「私はね、弱つてたのを見て知ってた。だから来た、みんなを悲しませないためにもね。見てるんでしょ? 星霊王さん?」

『盟友たる冥府神の巫女よ、そのものの罪は重い。いくら古き友や盟友の言葉とはいえ、聞き届けることは出来ない』

顕現した星霊王は、その威圧感、存在感は並々ならぬものであった。このような小さな案件に出るとは思ってはいなかったルーシイとロキは驚きを隠せない。

『古き友、ルーシイ・ハートファイリアよ。何故にその罪人を庇う?』

「例え罪を背負っていても、ロキはそれを清算しようと思界まで生き続けている! それでもまだ贖罪は終わらないって言うの!」

「もう十分戦ってきたんだよ? 罪は消えないけど、これからは誰かの為に生きて贖うことは出来ないの? ねえ、星霊王…」

「いいんだ、2人とも! 僕は、僕はもう…」

死を覚悟し、あるがままに受け入れることを考えていたロキの言葉を否定するかのような2人の言葉に星霊王は耳を傾けた。

『誰かの為に生きて贖うか。たしかにそれも良し。そして、罪人を守り、それと共に歩もうとする友がいる。ならば…間違っているのは法かもしれない』

「じゃあ?」

「星霊王…お願い。ロキお兄ちゃんね、ルーシイお姉ちゃんを一緒にして欲しいの。

巫女として、友人として、誰か死ぬとこなんて見たくない!」

『…古き友よ。それで構わぬか?』

「もちろん」

『ならばレオよ。これからは古き友を導き、星の輝きをもつて守り通すと約束せよ。それを汝の贖罪とし、星霊界への帰還を許可する。星の導きと輝かしき友情に感謝せよ』
この日、堕ちた星は再び空へと還り、輝きを取り戻した。星の導く空は晴れわたつていた。

第3章 楽園の塔 幻の道標

第19の唄 招かれざる来訪者

「迷惑をかけたね」

「良いの良いの！良かったね、天に還れて」

「ユリアとルーシイには感謝してもし足りない。せめてもの感謝の証だ。これをいつものメンバーで使うと良い。ナツたちには渡しておいたよ」

ユリアとロキ、ルーシイは帰り道に着き、ギルドで皆に事情を説明したら、呆れながらも暖かい言葉がかけられた。それから数日、感謝と敬意の表れとして高級ホテルの無料券を渡された。

「ありがとうユリア。じゃ、楽しんできてね」

「うん！あ、シリルお姉ちゃん！」

「良いことしたわね。楽しむ為にも準備しましょ」

「はい！」

2人は仲良く、姉妹のように皆の待つ場所へと向かった。

|| || ||

やつて来たのはリゾート地として有名なアカネビーチだ。夏の太陽と美しい海、夜まで遊べる娯楽により、さまざまな人たちでごった返す夏の名所だ。

「はじめての海だー！」

「遊ぶぞー！」

「やつぱり泳がねえとなー！」

「これは楽しめそうだ」

折角の休暇で、友人から譲り受けた招待券。遊び倒さねば損、とばかりに皆で騒いで楽しんでいく。水泳、バレーボール、砂遊びに何故か喧嘩といつも以上に楽しい一日を過ごし、気がつけば日も沈み、夜の帳が下りた。

「いやあ楽しかったなー！」

「ロキのおかげだぜー！やつぱり持つべきは友だな」

「あいさー！」

「ここの地下にギャンブル場があるみたいですよ。私とユリアは行けそうにないんでロビーでゆっくりしてますけど」

「流石高級ホテルだな、至れり尽くせりだ」

「ルーシイたちも誘うか。じゃあまた後でな」

シリルとユリアは歳が歳なだけあって賭けをやることはおろか、ギャンブル場に入ら

せてもらえるか怪しい為、こうして別行動をとることとなった。

「暇だね〜」

「そうね〜」

「眠い…お姉ちゃん膝貸して…」

「もう、しょうがないわね。ほら」

「はひ…お姉ちゃんの膝、やわらかい…ふにや…」

「おやすみなさい」

静かな時間が2人を包む中、突然、下からやってきた人々が悲鳴をあげながら出口に
大挙して押し寄せたり、自分の部屋へと逃げようとしているのが嫌でも聞こえたり見え
たりする。何事かと思えば、地下のギャンブル場で誰かが魔法を使い、一触即発の状
況になっているという。

「ううん…お姉ちゃん、何?」

「ユリア、伏せて。何か不穏なことが…」

「ね、ねえ。あれってエルザお姉ちゃんじゃ…」

「何!?!」

地下から上がってきた大柄の男に担がれているのは意識を失い、眠っているドレス姿
のエルザだった。襲撃者に攫われているように見え、助けに向かおうとしたがあのエル

ザがいとも容易く捕まっているのだ。返り討ちに合うのがオチだと自制し、ナツたちがいるであろうギャンブル場に意を決して向かった。

「一体何が…」

「カードに人が…閉じ込められてる…」

「この声、シリルとユリアなの!?! た、助けて!」

「ルーシイ姉さん? 何してるんです?」

「変な奴にやられたの! うう、背中が…」

「ちよつと待つてください。すぐにはずしませんが…はい、取れましたよ」

ルーシイの拘束を解き、何があつたのかの説明を受けた。突然エルザの友人と名乗る男たちがやってきて、魔法を使って彼女を攫い、そして周りにいた大勢の人をカードに閉じ込め、ルーシイを拘束してエルザを捕らえ、悠々と去つて行つたという。

「ナツ兄さんたちは?」

「ごめん、分からない」

「ちよつと探してくる!」

「お願い。それにしても、さっきの連中は一体…」

長考に耽りそうになっていた。何故、エルザを拉致同然に攫つたのか。彼らは彼女とどんな繋がりがあるのか。どうして人目につくタイミングで決行したのか。色々と考

えが巡り、底が尽きない。そこに戻ってきたユリアによって意識も戻ってきた。

「ナツお兄ちゃんたち見つけてきた。あと、元フアントムの人も居たから来てもらったよ」

「つたく、いきなり襲ってくるなんてよ」

「銃弾口に打ち込むかよ普通。あー、痛え」

「あんたそれ、尋常じゃないよ」

「さつき連中が外に出るのを見ました。今すぐ追えば、まだ間に合うでしょう」

全員が頷き、友を取り返す為にたちあがる。たとえ無謀な挑戦でも、借りは返さねばギルドとしての名折れ。皆の拳を突き合わせ、港にあつた小船を漕いで、後を追う。

|| || ||

「ジェラール様、エルザを捕まえたとの報が入りました」

「そうか。これでまた計画が一步進んだ。後もう一步、前に進もうか。我々の大いなる夢の為に」

月夜に照らされた大きな塔の中。そこには不気味な笑みを浮かべるジェラールと呼ばれた男がいる。彼の目的は果たして…。

第20の唄 回帰する因縁

「大丈夫ですか、ナツ兄さん？」

「お、おうぶ」

「船酔いしてる場合か！お前の鼻が頼りなんだ！」

「その必要もなさそうですよ、グレイ様。あの塔じゃないですか？」

ギャンブル場で出会ったジュビアが指差すのはこの海域では異様に目立つ巨大な塔だった。何故今まで隠しおおせてたのか不思議なくらいだった。その様子はまるで神に挑むバベルの塔のごとく、聳えていた。適当に船をつけ、岩場に隠れながら様子を見るが、嚴重な警備網が敷かれ、容易には近づけない。

「警備の人がたくさんいるよ」

「ぶん殴って入るか？」

「やめなさい。ハッピーもエルザも危なくなるでしょ？」

「ハッピーも捕まってましたか。別の入り口を探しましょう」

「海の方から少し潜ったところに洞窟があります。そこからなら入れるかもしれませ
ん」

「でかした!」

探りを入れたところ、海底洞窟から行けば下より潜入できる。しかも地上に比べ、そちらの警備は薄いという。

「ここから数分間潜ることになります。この空気の入った水泡を使えばその間呼吸ができませんので」

「へえ、便利な力だな。ところでお前誰だ?」

「それは無事に全てを終えてから。行きますよ」

道案内のジュビアの先導の元、潜ること数分。海底洞窟を抜ければ、そこは誰もいない栈橋となっていた。陸に上がるとそこには扉は無く、上に小さな蓋があるのみだった。

「あの蓋、あつちで開けるパターンか?」

「でしようね」

「他の出入り口は…」

「貴様ら、何者だ!?!」

「やばっ、見つかった!?!」

警備が薄いとはいえ、全く来ないとは限らないようで、あえなく敵襲を受けることとなった。しかし、只の一兵卒の集まりではナツたちを止められる訳も無く、全員返り討

ちにあつてしまった。

「…ガハッ！」

「へっ！覚えておけ、俺らはフェアリーテイルの魔道士だ！」

「こんな雑魚じや俺らは倒せねえよ」

「貴方達、道案内しなさい。さもなくば…分かりますね？」

「それ、いらぬいっばいよ。なんか開いたし…」

ユリアが指差す方を眺めると、先程まで閉まりきっていた小さな蓋が開き、梯子が上から降りてきていた。まるで全てを見ていたかのようであり、挑発的でもある。

「早く上がってこい、つてか？舐めやがって」

「私達を誘つて全員まとめて倒そうとしてるのかしら？」

「わからねえけど、行かなきゃエルザ達が危ねえ」

「そうだね。よーし、一番乗り〜！」

|| || || ||

「ジェラール様。何故彼らをこの塔に？」

「少しの余興が必要だからさ。それがあるから楽しめるといふもの」

「そうですか。して、あの女はいつ生贄に？」

「もう少し待とう。計画の完成にはあの光が無ければな」

真意が測れないと言わんばかりの顔をしている側近のタカに、ジエラールは不敵な笑みを浮かべ、状況が動くのを楽しんでいる。全てが自分の掌で動くのが楽しくてたまらないように、笑みを崩さない。

「待っている、ゼレフ。お前は俺が復活させる」

|| || ||

「誰もいないよ」

「ユリア、少しは落ち着いて…」

「にしても、さつき襲撃してきたわりにはもう終わりかよ?」

「たしかに監視してるのに後話を出してこないって不思議ね」

地下の兵が全滅しているにも関わらず、誰一人居ないとなると、相手の考えが全く読めない。

「上の連中が何か策を講じてる可能性があります。ここは慎重に進むべきかと」

「くそ、さつきの奴らから情報を聞き出しときや良かったぜ」

「皆、静かに! 誰か来ます!」

「休ませてくれないわね」

再びやって来た衛兵に身構えるが、彼らの武器は魔法を放つことはなかった。ある者の剣戟が邪魔する全てを斬り伏せていたからだ。その者は、エルザだった。お互いに会

うとは思っていなかったのか、驚きを隠せない。

「なんでここに居る!？」

「なんでだあ？ お前とハッピーを助けに決まってるだろ！」

「何!? ハッピーもか!？」

「ええ、そのようです。今どこにいるか見当は？」

「おそらくミリアーナ、猫好きの少女が保護しているだろうが、彼女が今どこにいるかまでは……」

「それで十分だ！俺は行くぞ！」

「待て、ナツ！」

己の相棒を連れ戻すため、エルザの制止も無視し、全速力で駆け抜けていった。その後を追おうとグレイ達も一歩踏み出すが、エルザによって止められる。なんでも彼女は無類の愛猫家。ハッピーを傷つけることはあり得ない。彼らを連れ戻すためにもエルザは一人で行くという。

「お前達はすぐに帰れ。そうすれば全て丸く収まる」

「エルザは!?! エルザはどうするの?」

「私は……」

「巻き込むまいとして言っているなら全て無駄。あの兄さんの態度で分かりますよね

？」

心に留めていた言葉を言い当てられ、口を噤む。これは全部自分が原因の事件。せめて自分一人で片付けようとしていた彼女なりの優しさだったが、シリルによってそれは無駄に終わる。

「良いですか？前にもマスターが言っていましたよ？一人で抱え込むことはない、と」「か、帰れ。それ以上は聞かなくて、シリル！」

「俺らを信じられねえってのか？ふざけるなよ、テメエはそんなこと言う奴じゃねえだろ！」

「私たちは何が何でもエルザを助けたいの。だから、ね？強がらずに私たちに頼って」

「私は、妖精の皆さんの言う絆というのを見て思ったんです。これが貴女達の強さなんだと。私が言うのもおこがましいですが、信じてみるのも一つの道では？」

皆の敵しくも優しい言葉にエルザの肩は震える。ここで皆を傷つけたくない。これは己の問題、皆を巻き込みたくはない、と。それでも信じてくれる仲間たちと一緒に帰りたいとも。

「一緒に帰ろう。お姉ちゃん」

「ありがとう、みんな。これは…私のただの独り言だ。聴いてくれるか？」

「当たり前だろうが。何があったんだ？」

「話そう。私と、こここの因縁を」

それは、エルザの壮絶な過去。奴隸として働かされ、なんの目的でここに居るのか問う日々。そして、反乱によって失った大事な人と、元仲間の変異。1人、孤独に耐えながら過ごしたギルドでの日々。仲間達がどう過ごしているか不安に思う日々。そして、彼らとの邂逅と彼らの変わった姿だった。

「これが、私から話せる全てだ。私の仲間だったジェラールとの決別と、ミリアーナ達を救うための私ひとりの戦いだ」

「……」

「私が、私であるための最後の戦いとなろう」

「死ぬつもりなの？お姉ちゃん」

「分からねぬ。全てを終えるまでは」

その瞳には涙と覚悟が浮かんでいた。己の過去の清算のために、今立ち上がる。

第21の唄 THE GAME OF DEATH

「私は、この塔とジエラールとの因縁を断つ」

「エルザ……」

自分の抱えていた誰にも語れなかった過去。それを話したということは、決別を本気でつけようと考えたからだ。

「姉さん、話に出てきたゼレフって……」

「ああ。『呪歌^{ララバイ}』や『デリオラ』をつくった男で、あちこちの闇ギルドの信望を集める災厄とも言える男だ」

「くそつ。そんなやつを復活させようってのかよー！」

「だが、それもこの塔を壊せば済む話。この見せかけの『楽園』を壊せばな」

「それ……ホントかよ？」

震えた声が飛んできた方を見れば、エルザを姉のように慕うシヨウの姿があった。グレイやナツを襲った者の1人だ。彼はエルザの話が信じられないという。ジエラールの話では、魔法を覚えたエルザが自分たちを裏切ってしまった、ジエラールしか信じるこ

とが出来なかった。だから、楽園に行く為に全てをなげうって彼に協力したこと。信じ

る相手を今更変えられない。

「それともあれか、ジェラルルの話が全て嘘だって言うのかよ！」

「それは……」

「シヨウ、エルザの語った言葉が真実だ。この8年間ずっと、あいつの嘘に踊らされてたんだよ」

「シモン……お前」

「俺は信じてたよ。お前のことをずっとな」

信じている。その言葉がかつての仲間から聞いたことが、彼女にとつてはなによりも嬉しい言葉だった。そして、エルザをずっと慕っていたシヨウは、自分の心の整理がつかず、後悔と混乱によって、涙が溢れる。

「俺は……俺は何を信じればいいんだ！この8年間、ずっと信じてたジェラルルが嘘をついてたなんて……」

「私がお前を捨ててしまった事実は例えどんな理由があろうと変わらない。本当に済まない。だが、言わせてくれ。ずっとお前達を信じてきたんだ」

「今なら過去を変えて未来に繋がられる、だろ？」

エルザの意思を確認したシモンはこう続けた。

「俺はこの機を待っていたんだ。強い魔道士が一同に会するこの好機をな」

「強い魔道士の集まる好機？」

「そうだ。フェアリーテイルと元ファントムロードの魔道士、そして神々の力を継ぐ者たち。これほどの魔道士たちがいれば悪夢を払える。手を貸してくれ」

＝
＝
＝

「これは…戦局がまた一つ進んだな。ならばこつちも手を打たねば。タカ、ウォーリーとミリアーナに戦闘準備をさせろ。それと、お前たちの出番も近い」

「ははっ、かしこまりました」

ジェラルルの手元にはチェスを模したテーブルがあった。そこには2つの陣営があり、それぞれにコマが置いてある。片方はナツたち、片方はジェラルル側を示している。その陣営の片方には銃と猫のコマ、つまりウォーリーとミリアーナを示したものが置いてあり、火竜^{ナツ}のコマと向かい合わせになっている。

「ナツ・ドラグニルとウォーリー、ミリアーナの戦闘か。はてさて、どうなることやら…クククッ。そして…あの光のこと、頼んだぞ。ジークレイン」

ジェラルルの呼んだ名前は今、評議会にあった。そう、ジークレインは評議会の代議士を務めていた。ジークレインは評議会とジェラルルを繋ぐ要であり、今回の作戦を裏で引いているもう一人の男である。彼のいる評議会では今、まさしくジェラルルのいる塔、『楽園の塔』とも『Rシステム』とも呼ばれる死者を蘇らせる装置を破壊するなり占

抛するなり無力化する方策を練っていた。

「どうする？あそこには変な宗教団体があると聞くぞ？」

「軍を送ろうにも周辺国や地域に協力を仰がねばならん」

「そんな悠長な方法ではダメだ！」

「何を言うか、ジークレイン。ならば策でも？」

「あの不気味なものを破壊する方法など一つしかない。『エーテリオン』だ」

その言葉にジェラルドと彼の仲間のウルティア以外は戦慄を覚える。なにせエーテリオンを発動すれば、あたりは焦土と化してもおかしくない威力であり、評議会の最終兵器とも言えるものだ。たしかに効果は挙げられるかもしれないが、周辺諸国からの反発は免れない。ただRシステムがあるだけでは使う理由にはならない。

『エーテリオン』は破壊と終焉を齎す！それを使う覚悟はあるというのか！」

「これはあまり言いたくなかったが…ゼレフの復活が目的らしい。そんなことをされるよりもエーテリオンを使う方が後々のためになる！」

「私は…賛成ですわ」

「ウルティア、貴様！」

評議会の崩落の音が聞こえ始める。

|| || ||

「くそつ、ミリアーナとウォーリーのやつ、通信を切つてやがる！」
「通信？」

「念話魔法のことですよ」

「へえ、便利なものですね」

シリルが魔法の広さに感心していると、壁や天井に口のようなものが出てきた。そこから聞こえてきたのはある男の声だった。

『ようこそ、楽園の塔へ』

「な、なんだこれ!？」

「ジエラールか」

「気持ち悪っ!」

塔全体に声が響くように、趣味の悪いとしか言いようのない方法でジエラールがアナウンサーする。

『多少戦局は変わってしまったが、これからあるゲームをしようと思う』

「ゲームだと? ふざけてるのか?」

『たった今さつき、ウォーリーとミリアーナが火竜に倒された。そこでこちらは4人の戦士を出そうと思う』

「なんだそれは! 聞いてないぞジエラール!」

楽園の塔組ですら知らない4人の戦士達。そしてここで更なる衝撃が彼らを襲う。

『このままでは冗長になりかねん。追加ルールをお知らせしよう。ここに評議会からの殲滅の光『エーテリオン』が落とされる可能性が高くなった。時間にしていくばくか：その光が落ちたらゲームオーバー、お互いに勝利を掴めない。それが落ちるより早く、勝利を取めるのはどちらかな？』

評議会最終兵器エーテリオン。それが襲うとなると最早死は免れえない。皆が心に思ったのはいち早く決着をつけること。しかし、ここで誤算が生じた。何を思ったのか、シヨウがエルザをカードに閉じ込めた。

「何をする!？」

「姉さんは俺を守る！何があっても！」

「くそつ、なんてこった！俺はあいつを追う！みんなは各自敵を倒してくれ！」

波乱のゲームが展開された。果たしてクリアは出来るのだろうか。

第22の唄 墮天使参上

「4人の戦士…何者なんでしよう？」

「この塔にいた奴らでさえ知らないみたいだしな。あまり得策じゃねえが別れた方がいいな」

グレイは提案を試してみたのはある意味最後の手段だ。味方同士で分裂してしまった以上、なるべく早く敵を倒すためにペアで行動する方法を考えた。

「私はシリルお姉ちゃんに行く！」

「それなら私はグレイ様と…」

「ちよつとお！一番弱つちいのを1人にしないでよ！」

「皆さん、先に行つてください。ユリア、私に力を貸して」

「おい、どういうことだよ!？」

「貴方が望む敵は私とユリアでしょう？墮天使ベリアル！」

シリルの指差す方には黒い羽を生やした男がいた。不気味なほどの色気と高慢さを持ち合わせる神々の敵である。

「我は天への叛逆者が1人。我と戦え、神の御子たちよ」

「お母様から墮天を言い渡された使いよ。せめて私の手で浄化してあげましょう。皆さん、ここは危険です。先に！」

「任せたぞ！俺たちは追いながら倒して行く！」

「ユリア、生冥の巫女揃い踏みよ！」

「2人の力を合わせれば、向かう所敵なし！」

不気味な墮天使と高貴なる神の子達の人類をかけた戦いが始まる。

「貴方は何者なの!?!」

「400年前よりゼレフに魅入られ、付き従い墮天を命じられたもの。我ら墮天は闇ギルド『フォーレン・スターズ流れる七星』を結成し、ゼレフの再来を目的とした」

「そのうちの1人が…貴方だとは！お母様や先代を裏切った罪は重いですよ！」

「我にとつては小さく些細なことよ。今の我らにはゼレフがついている！」

墮天使となったことで力の枷が外れ、大いなる力を発揮する。無詠唱、印を結ばずして大魔法を發動するその並外れた魔力と精神力は、もはや悪魔とさえ言える。

「『天喰らう餓狼』！」

「我らを守り給え、『八咫の鏡』！」

命を喰らう飢えた狼たちが2人を目掛けて殺しにかかってくる。それに対してシリルは己の扱える防御魔法の中で、最硬の盾を2人の前に召喚する。ぶつかる両魔法

は人類の力をはるかに超えていた。同じ神に仕えていた両者、されど立場も心意気も真反対。遠慮はない、何があろうと相手を倒すまで。

「撃ち貫け、怒りの一閃！『神弓、ダークネスライン』！」

「ゴツ!?やるではないか。だが、外しては意味が無い！『煉獄』！」

「かき消せ、『大血波』！」

闇魔法の次に放った炎の魔法を相殺する血による大波。だが、それでも余波で2人も吹き飛ばされる。2人がかりで戦っても余裕のある表情を浮かべるベリアル、底が見えない。

「貴様らには経験が足りん。我を超えるのは不可能よな」

「こいつ…」

「うう…強い…」

「消えろ。我の過去を清算するために」

「レディに手を挙げるとはダンディじゃねえな」

「貴様は確か…ジェラルルの友の。雑魚は下がってろ、貴様に用はない」

敵であるはずのウォーリーがなぜか、リボルバーを仲間であるはずのベリアルに向けている。

「俺だけだと思ってるのか？」

「何?…っ!この紐は…」

「ニヤー!」

「何故だ?我には貴様らが裏切るメリットが見出せないが」

「外には俺らにはない夢があると気付いてな。火竜サラマンダーを見て気付かされたんだ」

裏切り。それはつまり、彼らの心が未来を見つめようとしていることを意味する。不

思議に思う墮天使にウォーリーは力強く返す。人間に宿る力強さを感じる。

「さあ、立とうぜ。俺たちは自分で勝ちにいかねえとな」

「ありがとうございます。でも、あなた達は…」

「信用するもしないもあんたらに任せる。でもさ、俺たちは前を向くんだ」

「覚悟は受け取りました。とりあえず一時休戦です。ユリア、攻勢を仕掛けましょ!」

「巫女の本気、見せてやるもん!」

再び立ち上がった2人は先程まで対立していたウォーリーらと手を組み、目の前の墮天使に立ち向かう。作戦の要になるのはミリアーナだ。彼女の魔法は縛り付けた相手の力を封じるというトリッキーながらも多人数ではかなり役立つ能力だ。

「魔拘束チューブ!」

「またこの紐か。『魔空波』」

「そこよ!『氣功掌』!」

「『秒間32フレームアタック』！」

「『神の啓示書・第一巻第一章閻魔の項』参照、『河原石』！」

守りに入った隙を狙った3人の能力が見事にクリーンヒットした。4対1では自分に不利だとすぐに察したベリアルは、すぐにまた縛り付けに来た紐を無理やり引き破り最大級の魔法を発動するため、詠唱に入る。

「天を穿ち、地を裂く刃よ……今この時を持って我が命を伝えん」

「俺たちで妨害する！ミリアーナ、行くぞ！」

「任せて！元氣最強！」

「シリルとか言ったな！お前達でとどめを刺してくれ！」

「やれるだけやってみます！（でもどうすれば……あいつの攻撃を消し去るほどの攻撃魔法は……）」

万事休すかと思われた時、ユリアからある提案がなされる。

「お姉ちゃん、一緒に魔法を撃とう！合体魔法だよ！」ユニゾンレイド

「あれはかなり難しいって聞くわ。いくら私たちでも……」

「私を信じて！私はお姉ちゃんを信じてるもん！」

「っ!?……そうね、私がしつかりしないでどうするつての。ユリア、私たちの力、見せつけちゃいましょう！」

しばらく動けなくなる2人を庇うようにミリアーナが立ち、チューブを飛ばしてベリアル妨害をする。だが、その紐も次々に破裂し、時間稼ぎにも限度がある。

「混沌を吹き荒ぶ狂乱の風となりて光を引き裂かん！」

「まだ溜まらないの!？」

「あと少しです！ユリア、行ける!？」

「うみみみみ！もうちよい待って…よし！」

「行けるみたいだ！ミリアーナ、離れろ！」

妨害もあり、2人の力がたまりきるまで時間が稼げた。ミリアーナは素早くその場を離れ、それを確認したシリルたちは遠慮なく全力を放つ。合体魔法、気の合ったもの同士でなければ使えない魔道士の境地とも言える魔法だ。

「合体奥義『天地護業法』！」

「我が魔法で大地の塵にしてくれん！『真・魔空波』」

「勝て…競り勝ってくれ！」

「ウォーリー！私たちも援護するニヤ！」

「でもあの威力の中なか？」

「頑張ってる子がいるんだよ!?!やるしかない！」

自分たちの問題だからこそ、ミリアーナは自分がやらなければならない事案だと自負

している。それに、外から来たほほ無縁の少女たちが奮戦しているとあつては、やらなければ名折れと説得する。

「こうなつては仕方ない！ 漢をあげるぞ！」

「それでこそそのウォーリーだよ！ ネ拘束チューブ、喰らえ！」

「俺の銃弾を喰らいな！」

「くそ、邪魔臭い」

「攻撃が少し緩んだわね。ユリア！」

「チェストー！」

決して一人では打ち破れない壁があつたとしても、皆でかかれば超えて行ける。敵味方で別れた者たちであつても、団結する術はある。縁を切り続け、孤独に陥つていたベリアルにとっては最後まで持ち合わせなかつたものだ。

「こんな雑魚どもに我は…敗れるのか…ガアアツ!!」

「やった！ 勝つたよ！」

「我は墮天…常に孤独か…」

「何か、辞世の句はありますか？」

「ナーガよ…すまなかつた……」

苦悶の表情を浮かべ、最期の言葉を発して事切れた。かつて仕えたチキの先代に陳謝

し、予想外の反応の中、ついに戦いは幕を下ろした。

「なぜ最期に彼の方の名を？分らない…」

「お姉ちゃん…」

「落ち込んでるところすまねえが、逃げるぞ。さつき連絡が入ってよ、エーテリオンまで十数分しかねえそうさだ」

「……そうですね」

敵の思わぬ言葉が心に反芻する中、上へと向かった皆を信じ、撤退を余儀なくされた。運命の光が構える中、果たして楽園の行方はどちらに向かうのか……

第23の唄 祈りを捧げん

「おい、あれってお前さんたちのお嬢ちゃん方じゃねえのか？」

「ルーシイ姉さん！それにフアントムの…」

「なんか変な奴も倒れてたニヤ。多分こいつ倒して魔力切れ起こしたんじゃない？」

逃げるためになるべく全員を安全なところに避難させようと、限りある時間の中で塔を巡っていると、倒れたルーシイとジユビア、そして四戦士の一人、ヴィダルタス・タカが見つかつた。

「よし、俺たちはこの二人を担いで先行つてるぞ」

「二人も早く来てね」

「ええ……その、ありがとうございます」

一緒に戦つた以上、もはや蟠りはない。リスクを顧みずに組してくれた彼らに礼を言い、他のみんなを探すべく塔内をかける。果たして無事であろうか、状況はどうなっている。様々な不安が脳内をよぎる。

「みんな、どうかご無事で…」

|| || ||

裁きの光が展開されようかという差し迫った状況の中、グレイはナツを倒して丸呑みにし、能力をコピーしたフクロウ人間、その名もズバリ梟と相対してた。

「クソ炎が！勝手にやられてんじやねえよ！」

「お前はグレイ・フルバスターだな？名前と数々の悪行は我々も聞き及んでいるぞ、ホーホホウ！我が腹中にある火竜サラマンダーを助けたくば倒していけい！」

「舐めた口きけんのも今のうちだぞ！アイスメイク・槍ランス！」

グレイの氷槍が眼前まで迫るが、ナツの能力をコピーしているだけあって、口から炎を吐いて全て溶かし切る。それには皆驚きを隠せず、余波をモロに受けてしまう。

「お前なら知っていよう、火竜サラマンダーの火の威力を！」

「クソヤローが……」

「まだ足りないようだな！さらに喰らえ！」

「うおっ!?!」

氷対炎。一見かなり不利に見えるこの戦いにおいて、側から見てるシモンは勝ち目は薄いのではないかと半ば諦めがある。それに、グレイの魔力などの情報を得ている彼にとってはそれが最も現実的な判断だ。

「グレイとやら、もう下がれ！お前の残り魔力じゃ……！」

「こんな炎、熱くもねえよ！」

「なっ!? 炎が凍った!」

魔法は意志から発せられる。古来よりそう伝えられている言葉の通り、グレイの強気な姿勢が情報を上回り、発せられた炎を全て凍らせる。

「お前の吐く生ぬるい炎より、俺は熱い心を既に知ってるんだ。甘かったな、フクロウやろっ！」

「ほ、ホホホッ!」

「二度とナツの炎と一緒にすんな! 『氷刃七連武』!」

「ほ、ホブアッ!」

全ては仲間を守るため。その強き意志と覚悟、親愛がなせる技を目の前にして、シモンは驚きを感じると共に、エルザの行き着いた安寧を見たように感じた。

「エルザ…良いギルドに入ったな。流石はロブさんのいたギルド」

「くっ、俺もここまでか…」

「グレイ!」

魔力を意志により引き伸ばしたことによる反動と、炎による火傷。並大抵の人間では意識を保つのもやっつとだろう。

「ここから先は私が…」

「お前たちは確か生命神と冥府神の…」

「うん！さつき猫ちゃんも四角さんに頼まれたんだ！」

「ウオーリーとミリアーナが？そうか、分かった。グレイとハッピーを連れて船着き場まで行っててくれ。必ずエルザを連れて帰る」

「ナツ兄さんは？」

「これから先の戦いに必要なんだ。どうか理解を示してほしい」

梟が倒されて吐き出されたナツをジエラルド討伐のキーと捉えているシモンにとっては、どうしても引けないところだ。

「無茶を言っているのは分かっている。どうか、この通りだ！」

「頭をあげてください：貴方の真摯なる言の葉を信じましょう。そのかわり、貴方も、ナツ兄さんも、エルザ姉さんも：皆、帰ってくるのですよ？」

「ありがとう」

全ての騒乱はナツに託すという彼なりの覚悟と、己の非力さを感じる弱さ。それを否定して止めることも考えたが、最早この手に乗じるしかない。自分の力ではもう止められない次元にまで来ているのだ。

「エーテリオン発射までそう時間はありません。お互いの無事を祈ります」

「分かっている。聖なる者の加護、信じてみよう」

そう言っただけから数分、エルザと共にいたシヨウと合流し、エルザが最上階の

ジェラルルの元へと向かったことを知り、彼女の意思により、避難することを最優先にした。

「ねえお姉ちゃん、大丈夫かな？」

「今は信じるしかない。一人でも無事で帰るには彼らに託すしかないのよ……これほど、自分の力の無さを呪ったことはないわ」

「二人とも、やっと来たのね！こつちよ！」

先に避難していたルーシイたちに導かれ、行きに乗った小舟に再度乗って待つ。エルザやシモンたちの願いとはいえ、まるで見捨て同然の選択しかできない自分がいることが許せない者たちもいる。

「エーテリオンが落ちるまであと10分弱だそうだ」

「ここから少しでも離れてみましょう。『水流拘束』！」
ウォーターロック

「揺れますよ、何かに捕まってください。『氣功砲』！」

今は安全を確保するために塔から離れるしかない。船に乗る皆は空を見上げ、落ちる光がナツたちを何処か遠いところへ連れて行かないことを祈るばかりだ。

「姐さん……」

「ナツ、無事で帰って来てよ……」

「信じれば大丈夫よ。なにせ、あのエルザにナツ、それとシモンだったつけ、がいるんだ

から」

だが、彼女たちの祈りも無残に裏切られる形になろうとは、ゆめゆめ思わないだろう。天からの裁きが下る頃、ある命が散ることになるとは、全く思いもせず…。

第24の唄 因縁

「き、急に揺れが激しくなっていない？」

「おい、塔の上を見てみるよ！あんなデケエ魔法陣が……」

「あれが例の兵器」

空に聳えるのは話に出てきたエーテリオンそのものである。準備段階の魔法陣が出現しただけでこの震え方である、発射されればひとたまりもないのは目に見えてる。ジェラルルがそれを塔に降らせようとしている真意は計りかねる。

「一体なにが起こるってんだ。俺たちの建てた塔でなにをするんだよ？」

「分からん。でもゼレフを復活させることは余程の犠牲が居るってんだろ」

「死者の復活を企むなんて……しかもあの厄災と言われる男を……」

時間がなくなりつつあるが、それでもまだ彼らはやってこない。無事だろうか、無茶はしてないだろうか。色々と思うところはあがあるが、信じて待つしかない。

未来は平穏であると信じて。

|| || || ||

「待ってたぜ、エルザ。制限時間いっぱいだな」

「貴様をここで討ち取る。シヨウやシモン、ウオーリーやミリアーナ、そしてこの塔を建てる時に亡くなったロブおじいちゃんのためにな」

「させねえよ。ここをお前の墓場にし、鎮魂歌レクイエムを奏でてやるよ。ゼレフ復活のためにな！」

「世迷言はそこまでだ。因果を断ち切ってみせる、我が剣を持つて！」

エルザとジェラルルの長きに渡る因縁、そして確執をここで終わらせる。どちらが勝つにしろ、終わりを迎えるのはお互いに分かっている。

「楽園ゲーム、最終章の開幕だ！」

「行くぞ、ジェラルル！」

剣閃が飛び、悪霊が舞う最上階。命懸けの攻防が繰り広げられる。四戦士の一人、剣豪斑鳩との一戦により、体力と魔力を消耗していたエルザにとつては不利な戦況ではあったが、静かな怒りに闘志を燃やす彼女には負けはない。一進一退のせめぎ合いは、最終的にはエルザに軍配が上がり、ジェラルルをねじ伏せて馬乗りになって終幕した。

「ここまでだ。お前の負けだ、ジェラルル」

「これで俺もようやく解き放たれる、か。いいぜ、その剣で俺を刺し殺してくれ」

「……この塔のことは調べ上げてある。ゼレフ復活にはこの大陸中の魔道士全員をかき集めてもやっつと意味を成すかどうか、だろう？」

「さすがだな。無意味に8年間外にいたわけではないか」

「お前の計画は当初から破綻寸前のものだ、なのに、何故固執した!？」

エーテリオン発射まで残り数分もない。そんな切羽詰まった状況でも、ジェラールは笑みをこぼす。諦めによるものか、この状況を楽しんでいるのか。それは、彼の口から明かされた。

「ゼレフの亡霊だよ。あの時、俺は奴に取り憑かれ、今の今までずっと抵抗できずにここまで来てしまったんだ。だけどお前に負けて、最期を迎えようって時によやく……」

「ジェラール……お前……」

「悪かったな」

「良いんだ。今更だ、それにエーテリオンからはもう逃げられん。共に逝くまでのこと」
最後のひと時くらいは二人で一緒にありたい。エルザはそう決め、天罰の光が下るまで、そっと寄り添うことにした。しかし、エーテリオンが発射される時に浮かべたジェラルルの邪悪な笑みには気づかなかった。

|| || ||

「うっ……」

「あの塔はどうなった!？」

「煙で見えやしねえ……」

審判は下された。罪人たるジェラールと楽園の塔は果たしてどうなったのか、波で揺れる中見守るが、煙で一向に見えはしない。

「……晴れてきたか」

「影？」

「壊れてねえのかよ、あんな膨大な魔力くらってよ……」

少ししてようやく見えてきた景色に皆啞然としていた。外壁が完全に崩れ、内側から姿を現したのは巨大なラクリマだ。しかも魔力を吸収し、青白く光っているのがわかる。

「あの塔はどんな仕組みなんだ？」

「俺たちは知らねえんだ。何を作ってるのか詳しく知らされてなかったんだよ」

「人の復活にはそれ相応の魔力がいるから、エーテリオンを落とさせたのでは？」

「あり得ない、とは言い切れませんが。まさかこの展開も最初から織り込み済みだったのですかね？」

「でもそんな事して爆発でもしたらどうするのかな？」

威圧感を与える塔を前に様々な憶測が飛び交うが、正確な答えと情報を持つのはジェラールと楽園の塔の設計に関わった今は亡き、ゼレフの信仰団体の幹部たちのみ。

「……で議論してもダメだ。急いであいつらを連れ戻さねえとヤバイな」

「私たちが行つても巻き込まれて終わりよ？」

「もうその段階を優に超えています。どちらにせよ危険なのは間違いない、なら、すぐに行動に移さない」と

「拙速は巧遅に勝るつてやつだな？誰が行く？」

「私が行きます。ハッピー、運んでくれる？」

真の目的に進む悪魔の所業を止めるべく、最後の決戦に足を踏み入れる覚悟を決めたシリル。混沌渦巻くこの展開を止められるだろうか。

第25の唄 別れと成長

「ハッピー、もう少し早くできそう!？」

「これが限度だよ! それにもう直ぐ着くみたい!」

「分かったわ。着いたらみんなのところに戻って現状報告頼むね」

「あいさー!」

ハッピーのトップスピードに乗って風を切りながら進むと、頂点の間が見えてきた。あそこでエルザとジエラルが待っているのだろう、初手はどうすべきか考える。

「後10秒だよ」

「よし……離して!」

「頑張つてね!」

突入した今、ちようどエルザをナツが抱えて助け、ジエラルが背を向けた好機だ。この手を逃すまいと、大きい一発を放つ。

「喰らいなさい! 『生命神の一声』!」

「なっ!?! いつの間に……『流星^{ミューティア}!」

「よくやったな、シリル。エルザ、大丈夫か?」

「お陰で助かった。けどなんでお前たちがここに…」

「言っただろ、俺たちはお前の味方だ。どんな時でもな」

「どうにか最終段階を食い止めたが、乱入してきた二人を前にジェラールは強烈な殺意を覚え、顔に青筋を浮かべている。」

「お前ら…ゼレフの復活を前によくも邪魔してくれたな！」

「させませんよ。私は何度も止めてきました、今回は今までと同じように止めるまでです」

「仲間にこれ以上手は出させねえよ。行くぞシリル！俺たちのツーマンセルで、やつを倒すぞー！」

「これ以上遅れては計画も台無しだ！ゼレフのために露と消えるがいい！」

冷静さを失っているジェラールは一刻も早く二人を消してエルザを生贄にすべく、天体魔法をもつて二人を塵にしようと全力を尽くす。まず、高速移動を可能にする魔法、『流星』^{ミューティア}で二人を翻弄して行く。

「速い！目が追いつかねえ！」

「先読みするしかないですね。当たれ！」

「目がダメなら、鼻で…集中しろ…そこっ！」

「当たらない!?まだ速さを上げてくるの?」

「貴様らに彗星は追えねえ。七つの星に裁かれよ！ 『七星剣』！」

グランシャリオ

「ここで発動されたのは天罰を下す七つの星。塔自体を崩すほどの膨大な魔力を放ち、二人に降り注ぐ。だが、それをタダで受けるほど二人は戦闘に不慣れではない。

「天を名乗るにはまだ早いわよ！ 神の加護を見よ、『鉄血御柱』！」

「威力を削っておかねえとな…『火竜の咆哮』！」

「どれだけ削ろうと無駄なだけぞ！」

その言葉通り、削ってみたものの、結局は暴力的なまでの威力を少し抑える程度に留まるだけだった。しかし、それのおかげか、逸れるものまであり、直撃によるダメージは軽減できた。

「無駄かどうかはまだわからない。諦めは敵ですよ」

「ふん、無駄な足掻きを…消えるまでの時間が伸びたに過ぎん。これで消えよ！」

地に降り立ったジェラルルが両手を天に向けると、そこに黒い魔球が現れ、少しずつ大きくなって行く。天体魔法『暗黒の樂園』アルテアリス、いわゆるブラックホールだ。影が魔球に向かうように伸びるほどの魔法で、全力で消しにかかっていることが分かるほどだ。

「今度こそ塵にしてやる」

「待てジェラルル！ この私を、生贄の私が殺せるか」

「エルザ、どういいうつもりだ！」

「…自分の身を挺してか。だが、無駄だ。死んでも構わんのだからな」

自分の出来ることをしようとするエルザが二人を庇うように前に出るが、敵にしてみればそれは些細なこと。止めるには至らない。無情に振り下ろされる魔法を前に最後まで仲間のために身体を張るが、いつまで経つても衝撃がやってこない。不審に思つて閉じた目を見開くと、そこにはシモンが入つて受け止めていたのだ。

「シモン、お前！」

「これで…これで良いんだ。お前らを守れば…俺の命も…」

「馬鹿者！なんで…なんで…」

「俺は……お前が好きだったからだ。だから…」

「さて、シモン！…うわあああ!!」

護るべきものを失う悲しみは大きい。しかも、彼は自分の命を賭けて逝つたことはエルザに大きな影を落とす。

「くだらねえな！自分の命を無駄にしやがって！俺が楽園に導いてやった恩を忘れやがってよ！」

「ウルセエー！」

「なっ！」

心無い発言に怒りの拳を叩きつけたのはナツだ。全身から虹色の光があふれ、異様な

魔力を帯びている。それはシリルも同様である。楽園の塔から溢れるエーテリオンの魔力粒子、『エーテルナノ』を食べた影響だ。

「ぐっ、があっ！」

「うっ、くうっ！」

「馬鹿めが、無茶な真似をするからだ！」

「うおおおお！」

片手に収まる量とは言え、密度は高く身体に収まりきる魔力ではない。が、神と竜の申し子は、反動をもつとしなかった。

「おらあー！」

「何?! コントロールしただと?」

ナツの体には竜の鱗が浮かび上がり、シリルは神の天輪が付く。ドラゴンフォースと神依カミイの一时的な出現である。

「これならお前を倒せそうだ」

「命をなんとも思わない貴方を…止めます！」

「面白い。これで終わらせる！」

「二人ともなんてことを…」

無茶な賭けを打つナツとシリルに言葉にならない感情を抱くエルザ。出会って間も

ないシモンのために、何故そのようなことが出来るのか、ジエラールは分からないと言わんばかりに呆れを露わにする。

「アホの一つ覚えだな。喰らえ！」

「その程度じゃ止まれません、『真・気功掌』！ 兄さん、進んでください！」

「俺たちの怒りを受けやがれ！」

「ぬあつ！」

パワーアップした進撃にもはや恐れはない。それまで当たらなかった拳が次々に当たるようになる。ジエラールの抱く畏怖が行動を鈍らせ、思考を止める。

「くそ、正面からはまずい！ 『流星』^{ミューティア}！」

「逃げてでも無駄です！ 『鉄血御柱』、飛べ！」

「うおっ!？」

硬さも太さも飛ぶ速さも段違いになった神の御柱は着実に彼を追い詰めて行く。焦りを覚えるジエラールはもう、冷静さを失い、禁じ手を打つまでに至る。

「これはやりたくなかったが、時間さえあれば不可能はない！ 『煉獄破碎』^{アレスブレイク}！」

「あれは…まさか塔ごと壊す気か!？」

「また8年、いや、今度は三年で再び完成させてやる！」

「テメエに人の心はねえ！ だから…幻影なんかには惑わされるんだ！ 目え覚ましやがれ

！」

最後の手段を使おうとする男に、遂に妖精の竜の翼が開かれる。空中を蹴り上がって飛ぶナツの紅蓮の炎は、ジェラールを遂に捉えた。

「これで終わりだあ！」

「突っ込んでくるとは…！」

「行つてください！ ナツ兄さん！」

「夢と共に砕けちれ！ 『火竜の鉄拳』！」

全てを打ち砕く魔法が放たれるより早く、怒りの炎が放たれる。ナツの拳を受けたジェラールは塔に叩きつけられ、崩れゆく塔と共に深い海へと沈んで行く。

「これが…ナツたちの本気…（これで私の悪夢も終わる。お前のおかげだ、ナツ、シリル、そして…シモン）」

「終わりましたね。あとは…ここを抜ければ…！」

「シリル！ ナツ！」

全てを出しきり、仲間の悪夢を断ち切り、終わらせる。目的を果たした2人は笑みを浮かべながら意識を失った。エルザが望んだ結果と、悲しみを携えて。

その後、崩れゆく塔から脱した3人は暖かく外で待っていた仲間たちに涙と笑顔で出迎えられる、アカネビーチへと戻っていく。悲しい別れを知った彼らはまた一つ、成長し

ながら……。

第26の唄 良き旅立ちの日

「そっか、シモンのやつ…最期の最期までおまえは……」

「悲しいけど、受け止めなきゃだね」

「私はあいつや皆に助けられた。ロブおじいちゃんを彷彿とさせる最期だったよ」

アカネビーチに帰ってきた翌日の夕方、治療を受けたエルザはかつての仲間たちと共に、シモンについて語り合っていた。久しぶりに巡る外の世界に、シヨウたちは驚かさずればかりだ。

「俺たちも前向いて生きなきゃな、あいつのためにも」

「そういうことだ。私はシリルとナツを介抱しに「戻るが、お前たちはどうする？」

「一旦戻るぜ。恩人たちと少しでも話してえからよ」

「それは良かった。あいつらも喜ぶだろう」

まだ目覚めぬ両者や一緒にいたルーシイたちの元へと戻る。そんな中、エルザには海から声が聞こえたような気がした。

『ありがとうエルザ。俺もようやく呪縛から解放されたよ』

「ジェラール!? ……いや、まさかな」

|| || ||

「お姉ちゃん、起きた？」

「ええ。無事みたいね」

「うん。シモンさん以外全員生きて帰ってこれたよ」

「そう。祈りは届かなかったか」

エルザたちが話し合ってる頃、シリルはナツよりいち早く復活を遂げた。まだ体に痺れが残るものの、動くには支障はなさそうだ。

「看病してくれたみたいね。ありがとう、それとごめんなさい」

「良いの良いの！助けてもらったから、それに応えただけだよ」

「ありがとう。さ、みんなに会いに行こう」

無事に復活したことを伝えれば皆も少しは表情が和らぐだろう、そう考えてユリアの肩を借りながら皆の待つ部屋へと戻る。

「みんな、お姉ちゃん復活だよ！」

「ご迷惑おかけしました。ただいま復帰しました」

「お、怪我はもういいのか？」

「ええ。まだちよつと痺れますけど」

「あとはナツだけね。全く、シリルの方が復活早いつて、ナツもまだまだね」

和気藹々とした雰囲気醸し出していたところに、楽園の塔組も戻ってきて、ナツ以外の皆でワイワイと話が盛り上がる。彼らも世界を見たいと夢を語り、正規ギルドに入ればそれも現実味を帯びてくると助言しながらその日は夜も忘れて語り合う。

「それじゃあ俺たちは部屋に戻るよ。また明日話そう」

「そうだな。これからは自由に暮らせる、話すことくらいいくらでも出来よう」

「良かったです、姉さんが楽しそうに話せて」

「お前たちのおかげで蟠りなくいろんな話に花が咲かせられる」

失ったものはあるが、こうして得られるものもある。エルザにとっては幸せなことなのかもしれない。

|| || ||

それから2日後、ようやくナツも復帰を果たした。あまりの遅さに皆からいじられてはいたものの、いつものギルドの雰囲気は取り戻せた。彼も交えて皆と話せば、前よりさらに盛り上がり、楽しいひと時を過ごした。

「あいつらもいい奴らだな！俺たちのギルドにピッタリだぜ！」

「確かにな。あいつらあの塔にいた奴らだがよ、根っこの部分は俺らと一緒にのかもな」

「あいさー！」

「ふふ、仲良くなるのに時間はいらぬのかもかもしれませんね」

和やかで平和な時間がこれからも訪れると思っっている皆に、ルーシイが慌ててある一報を伝えた。どうもシヨウたちが何も知らせずにどこかに行つたのだという。

「どこ行きやがつたんだ？これ以上逃げる必要ねえのに」

「分からない。あと、エルザが花火の用意しとけつて…」

「あれか」

「あれだな」

「え？なんの話？」

長年ギルドにいるグレイやナツ、ハッピーはすぐに何をするか見当がついたが、シリラ比較的新入りに近い者たちは何がなんだかわかっていない。

「まああいつらと話すのはエルザに任せるとして、俺たちもとりあえずあいつのいるところに行くしかねえな」

「妖精俺の尻尾流たちの別れの儀式つてやつだよ。行くぜ」

「はあ…行きましょつか？」

「別れの儀式…え!?!あの人たちどつか行くの!?!」

ようやくルーシイも察しがついたみたいで、皆でエルザの後を追ってホテルを出た。途中で祭りが開かれており、そこで話を聞く限りでは無人の砂浜に行つたということらしい。

「お、居た！」

「もう始まっているな」

＝＝＝＝

「おまえたちは自分の道を歩こうと言うのだな？」

「ああ。俺たちの自由はこの旅から始めようと思つてね。姉さんにはこれ以上迷惑はかけられないし」

「そうか。なら、私としても壮行会をしなければな。たった数日だったが妖精の尻尾の仲間として、3つの約束をしてもらう」

「俺たちそういう立場だったか？」

「言つちやダメだにや。エルちゃん、案外そういうところ、頑固というか真面目だから」

「正直何が起こつているのか飲み込めないウォーリーを嗜めるミリアーナたちを余所にエルザは換装し、口上を述べていく。

「1つ！ギルドにとつて不利益となる情報を他言すべからず！」

「いや、不利益な情報つて…俺たちなんも知らねえぜ？」

「2つ！過去の依頼者にみだりに接触し、個人的な利益を生むべからず！」

「依頼者つて何？」

「これから別のギルドに行けば、自然と知るだろう。そして、最後の一条だけは…どんな

時でも守ってほしい。3つ！たとえ進む道は違えども、力ある限り、強く行きねばならない！そして…自分の生命いのちを決して小さなものとして見ず…愛した友を決して、生涯ずっと忘れてはならない！！」

たとえ距離がどんなに離れていようと、ずっと心は繋がっている。涙を浮かべて話し、涙を拭いて聞く。それぞれに抱えた思いはあれど、心は常に寄り添っているのだから。

「私はお前たちを決して忘れない…心に思い出を刻んで進もう。だから、お前たちも今日までの艱難辛苦を忘れずに、進め。妖精フェアリーテイルの尻尾式壮行会、開始！」

「お前ら、また会おうな！」

「私たちはいつまでも友達だよ！」

「どうか息災であってください！」

彼ら見送る妖精たちの花火の音色に背中を押されながら、これから自由を知る者たちは新たな旅路へと行く。心構えがあれば、強く生きていけるだろう。この旅立ちを思い出に。晴れ渡った夏の日、シリルはこの情景を歌に残していた。

『行く船の 去りて離れて 目に涙 されど心は 寄り添いしかな』

|||

その頃、ジェラールを陰で操っていた元評議員で彼の側近だったウルティアはある男

と連絡を取っていた。

「そういう訳で、評議会は壊滅。しばらくは機能しないため、私たちからは注目はせらるるか」と……

『よくやったウルテイア、これで我らの念願に一步近づいたろう。あの男も哀れよな。死んでもいない『ゼレフの亡霊』に踊らされるとは』

「ええ。彼は400年間、ずっと生きてましたから」

彼女たちは知つていながら、計画のためにあの楽園の塔を巧みに利用したのだ。

「それではまたギルドで会いましょう、マスターハデス」

『ではな。それと、あるギルドから3人、墮天使を寄越してもらった。我らのために、働いてもらうこととなった。詳しくは後でな』

「了解しました」

闇はまた一步、光の知らぬところで進んでいる。

第4章 争う妖精 バトルオブフェアリーテイル編

第27の唄 輪廻廟

「よおーし！ やつとマグノリアに戻ってきたぜ！」

「あれからしばらく経ったからなあ。工事が進んでりや良いが…」

「その不安も、あまり意味なさそうだな。ほら、見てみる、完成してる」

アカネビーチにて一週間近くに及ぶ休暇を満喫した一行が到着したギルドは、今までよりパワーアップしていた。外装が新しくなり、小綺麗になっていたし、一回り大きくなっているようにも見えた。

「すげえな！」

「おう、お前ら帰ってきたのか。なんだかんだで久しぶりだな」

「マックス、お前なに売り子みたいな真似してんだ」

「事実売り子だよ。新しくなっただろ、ギルド。その際に売店も作つたんだ。中の説明は他の奴らに聞いてくれ」

そう言われて中に進むと、カナがこちらに気づいて寄ってきた。改修されたことをいち早く伝えたいのか、表情まで明るい。

「あんたたち、なかなか顔を見せないから心配したよ！ま、とりあえず中を見な！」
「おおー！広い！」

「ウエイトレスの服も変わってるな！」

「それだけじゃないよ。プールに地下遊技場があるし、上の階のS級魔道士専用スペースが開放されてね。仕事もS級魔道士がいれば誰でも行けるようになったんだ！」

「俺たちが勝手に行かなくてもいずれこうなつてたつてわけか。無駄骨だったな…つてどうしたナツ？」

「違いすぎて慣れねえ」

ナツは前までのギルドが良かったのか、かなり不貞腐れてる。そこにマスターがある人物を連れてやって来ていた。先日の一件で協力し、先にギルド加盟に動いていたジュービアだ。

「よろしくお願いします」

「本当に入っちゃまうとはな」

「あの時は礼が言えなかったな、ありがとう」

「おろ、知り合いかの!？」

「ええ、つい先日お会いしまして。元ファントムの方ですが、多分信頼しても大丈夫です」

「そうか、なら一層仲良くしてやってくれ。ああ、それともう一人おる。ほれ、挨拶せんか?」

もう一人新入りがいる。ジュビアの仲間入りは予想できたが、もう一人については全く聞いておらず、予想ができない。だがそれも、数秒で理解することになる。

「ガジル!!」

「なんでこいつがここに……!」

「こいつはギルドを破壊したんですよ、マスター! どういうことですか!」

「まあそう騒ぎなさんな。ワシが彼を直に引き入れたんじやよ、そこにいるジュビアのたつてのお願いでな」

「さすがに放つて置けなくて……別に好きとかそういうわけじゃないんですよ?」

「ふん、好き勝手言いやがって」

やはり相手が先の戦争の主犯格なだけあって大半のメンバーは警戒心を抱かずには居られない。同じギルドに居ながら、早速溝が出来てしまう。

「まあまあ……ここに入ったつてことはマスターにも考えがあるんですよ、きつと」

「昨日の敵は今日の友。根は悪い奴じゃないし、先の件もジョゼの命令じや。奴も改心すると思うておる」

「マスターの意向なら我々も反対しませんが……」

戻ってきて早々に波乱の予感がしているが、この日は何も問題なく、1日を終えることとなった。そして次の日、シリルはユリアを連れてある場所まで来ていた。

「……何？」

『輪廻廟』よ。聖域の1つでね、修行にはもってこいよ」

「初耳」

「殆どの人は知らないからね。ただの遺跡にしか見えないわ」

入り口を抜け、階段を降り、さらに奥深くまで進む。そこは地下なのに森が形成されており、その中央には蔦が絡まった祠がある。

「うわあ…鬱蒼としてるね」

「ここが本体の入り口よ。ちよつと封印解くからさがってて」

「う、うん。でもこれ誰が作ったの？」

「私も知らないわ。修行をちよつとさせてもらったただけだし」

神代から伝わるかなり古いもので、存在や由来、開門法を知る者はごく一部だし、設計者となると古くから存在する神以外誰も居ない。指で空をなぞり、不思議な呪文を呟くと、それに呼応して門に紋様が浮かび、扉が厳かな音を立てて2人を受け入れるために開かれる。

「行くわ。覚悟はできてる？」

「うん！」

味わった悔しさをバネに2人はさらなる高みを目指し、修行に励む。この輪廻廟では時の流れが外とは大きく異なり、外の3倍の速さで時が流れる。つまりは外の1日が中の3日分に相当する。修行者が短期間で力をつけるには、もってこいの修行場だ。

「何をすればいいの？」

「そうねえ……この6つの部屋のどれかを選んで、それに見合った修行をするの。天の間なら魔力、人の間なら丈夫さ、修羅の間なら体力、判断力、筋力ってね」

「じゃあ天の間行こっ」

「私もそこにするわ。魔力の底上げをしなきゃ大技出せないし」

大扉の先にあったのは、静かな空間のみ。数体の石像と御神体が見守るだけだ。

「さて、私たち神の巫女が力の底上げをする方法って知ってる？」

「瞑想するの？」

「そう。心にある器と向き合い、精神力と想像力を養い、中身の質と量を底上げするの。私たちは仙人の力に通じるものがあるから、どちらかかっていうと昇華に近いかも」

「なんか難しそうだけど……」

「大丈夫。まずは座禅を組んで、深呼吸よ」

神に仕える者の魔道士とは違う力を身につけるには魔力の流れ、空気の流れを感じ、

それに乗って流れるように自然に合わせる力を身につけることが必須だ。魔力の流れを掴み、自分の力に変えることが神の一步手前の仙人に到達する方法だ。

「じゃあ、始めましょ」

「うん…ふうっ」

静かな時間が流れ、呼吸をする音しか聞こえず、心音さえ漏れ聞こえるのではないかというほどに静まり返る。2人きりの修行である。

|| || ||

マグノリアに目を向ければ、夏の終わりとともにある祭りへの準備がちらほらと見て取れるようになる。この街有数の収穫祭、ファンタジアである。そこを歩くマカロフとミラもその楽しそうな雰囲気に含まれた街を楽しそうに眺めながら、買い出しを済ませて歩く。

「いやあ、いよいよこの時期がやってきたのう」

「私も楽しみです。秋到来、って感じですね」

「今年のパレードはどうしようかの」

街有数のギルドとあって、妖精の尻尾フェアリーテイルの方でも夜にパレードを行って、祭りを盛り上げる。

「そういえば、ラクサスが戻ってきたって聞いてます？」

「あやつがが!?この大事な時期にあの問題児が…昔は素直で可愛いものだったのじゃがな」

「彼も参加してくれると良いですね」

「そう願うばかりじゃ」

遠い目で空を見上げるマスターを励まそうと、ミラは努めて明るく振る舞う。

「今年は新しい子たちがたくさん来ましたし。ほら、ユリアとかルーシイとかジュビアとか…」

「おお、そうじゃったー！して、ユリアとシリルはどこに行つたんじゃ？一昨日から見えておらんが…」

「一週間ほど空けるそうです。マスターに伝えてあるつて言つてましたが」

「……忘れとつた」

「しつかりしてくださいね」

最近は何かと多忙なだけあり、忘れてしまうことの1つや2つは出来てしまう。面目無いと心の中で詫びを入れながら、少し肌寒い風が吹く通りを過ぎていく。荷物をギルドに置いた彼は、彼のための執務椅子に腰を下ろす。

「今年も無事に祭りが終わると良いが」

ラクサスの帰宅とあつて一波乱ありそうだと、家族を信じてやれない不甲斐なさとな

安が渦巻く。

|| || ||

「最初の2日間は天の間だったけど、今日からどうするの？」

「修羅の間よ。全身に魔力を薄く纏うようにしなさい、入ってすぐにレースが始まるわ」
「レース？」

「森の中を全速力で走るのよ。途中で大岩がいくつも置いてあるから魔力の拳で壊すこと。それ以外の方法はないわ」

先程とは違う類の集中力が求められるこの修羅の間。走りながら足や拳に魔力を纏って行く手を阻む障害を乗り越えていかなければならない。

「準備はいいかしら？」

「天の間を先にやってて良かったよ。効率よく行かなきゃね！」

「行くわよ！」

入ってみると、木々が生い茂りながらも一本道を成しているのが見えた。何処からともなく音声が流れる。

『修羅の間、試練開始まで5、4、3…』

「全速力よ。振り返ったら終わりの一本勝負！」

「集中しなきゃ…！」

『2……1……はじめ!』

一本道を駆け出す2人。そんな2人を妨害するのは木の根っこに枝、大小様々な石だ。あるものは伸び、あるものは動いて迫ってくる。

「臆さず驕らずに進んで!一瞬の隙や慢心が命取りよ!」

「分かつてるよ!」

「最初の大岩が来るわ!拳に力を込めて!」

「うう………はあっ!」

一瞬でも気が抜けないし、少しでも速度を落とせば後ろから迫る悪霊にとって喰われる。彼らはこの間で命を落とした数千年に及ぶ修行者たちの怨念だ。

「(やっぱり噂通りね) ユリア、振り向かず速度を上げて!今度は私が行くからしっかりとついてきて!」

「分かった!」

「全魔力解放……『神依・脚』装着!」

あの楽園の塔による一件から平時でも一部の神依を装着できるようになり、それをつけた今、全速力の壁のさらに先まで行く。姿勢を低く保ち、ジグザグに根を避け、枝を避ける。ユリアも負けじと親譲りの神の力をもって更に加速する。

「また岩ね。破あ!」

「道が分かれてるよ！」

「私は左、そつちは右よ。絶対にあつちで合流しましょう！」

「うん！」

修羅というだけあって天の間とは段違いの鬼畜さだ。それぞれの間を司る大いなる存在が自分たちの鍛錬のために使ったとも言われ、並の人間では1つの間を突破するのがやつとだ。

「この輪廻、必ず突破する！」

神の申し子、この試練を乗り越えるため、次元を超える勢いでただひたすらに駆け抜ける。

第28の唄 神の苦悩

「猛獣が放し飼いだなんて聞いてないわよ！」

「ガルルア！」

「鬱陶しいわね……そこを、退きなさい！」

「グツ、ギヤオンツ！」

修羅の間の試練は続く。魔法で作りあげられた魔獣が点在し、シリルのゴールインを阻む。かれこれ数時間は走り続けており、そろそろ疲労も限界に近い。

「…見えた。あそこがゴールね」

「お姉ちゃん早くー！後ろからやばいのが来てるよー！」

「マズイわね。全速力で行くからアレを少しでも遅らせて！」

「わかった、『デッドウエイブ』！」

二手に別れたうちのユリアのコースはこちらより短く安全だったようで既にゴールしていた。彼女が放つ魔法を避け、伸ばすもう片方の手を掴みにいく。

「うー……よいしょ！」

「ふうー、間に合った」

「流石に疲れたよ。早く出て休もつと…」

「明日明後日は休みね。魔力回復と体のケアをしなきゃダメだろうし」

2人はなんとか修羅の間を潜り抜け、疲労困憊である。まともに食事も取れずに数時間走っていたため、空腹感にも見舞われている。

「この試練、一番きつい気がする」

「まだまだよ……あと4つも残ってるし、これからは二週間くらいしかないんだから」

「ええ〜……」

確かに厳しい試練だったが、これでも他の一部の間に比べれば優しい方だ。特に地獄の間や餓鬼の間は試練でも一二を争う修羅場だと聞かされている。

「とりあえず出ましよう」

「やつと休める…」

だが、今はそれより回復だ。これからの試練のことは後で考えればいい、ただ休むのみだ。

「やつと外で1日経過つてところね」

「もう何日もやつてるのにまだそんなに経ってないのかー」

「そういう場所だしね。最後の試練は一週間かかるくらい凄まじいものらしいけど、冥府神お母さんから何か聞いてない？」

「全く。ここが あることすら聞いてなかったくらいだし」

大陸中に散らばる神とその奉仕者は大抵この場所について耳にすることは多い。そんな一人である彼女が知らないとなると冥府神もクローバーも彼女にはまだ早いと判断したのだろう。

「そ、なら『地獄の間』は今回は辞めておきましょう。残りの三つの間を順次やるしかないですね」

「はいはい」

＝ ＝ ＝

『ここに何の用ですが、盟友 グランディーンネ 天 竜』

『炎竜王イグニールと話してね。そしたら、貴女を思い出したのよ…女神チキ。私のところの子が貴女の愛娘と会うのはそう遠くないでしょうから』

『そうですか…『竜王祭』に私は娘を干渉させることは極力したくありません』

生命神の祠では天竜グランディーンネと生命神チキが対話をしていた。いつか訪れるだろう大きな厄災、竜と人と魔の狂宴『竜王祭』についてだ。

『それもそうでしょうね。前の竜王祭で先代、慈恵神ナーガが亡くなったもの、こちらも無理強いするつもりはないわ。でも…』

『ええ。あの男とあの竜がいる限り、不干渉も限界がある…そう言いたいのですね？』

『理解が早く、冷静で助かるわ。おそらく彼らが動くのはそう遠くない未来。貴女の愛娘にも時期がくれば気をつけるよう伝えて頂戴』

不穏な闇は世界を包みつつあるのは神の座を継いでから常々思っていたことだ。それに400年以上経つ間に彼女自身は自身の消失可能性を感じ始めていた。シリルのことについては色々と未来のことを含めて考えることは多い。

『次代に託すこと…私もそれをそろそろ考えねばならないのでしようね』

天竜去りし後に世界を支える一柱はこうひとりごちた。天地を動かす神の座は、世代交代を果たそうとしていた。だが、これはまだ彼女以外誰も知らない静かな決意だ。

|| || ||

「さてと、ここに来てからもうすぐで一週間ね。順番が前後したけど今日は『人の間』で試練の続きをするわ」

「残り三つだね！後10日もあれば余裕だー！」

「元気ね。でもその余裕がいつまで続くかわからないだし、慎重にね」

修行を始めて外の世界で早2日、帰る時間とファンタジアの準備のことを考えても残り2日ほどしかない。焦ることはないが、のんびりとやっているほど暇でもない。

『人の間』。お母様によると、ここは然程時間がかからない良い修行の間だと言ってたけど…」

「なんか変な木の人形がたくさんあるよ」

「あれは修練用の物なのかしら？」

木偶が全部で四体いる。何をどうすれば丈夫さに繋がるのかさっぱりという2人の前には、こ丁寧にも説明用の看板が所々古くなつていながら立っていた。

『木偶が放つ攻撃を受け流すか受け止めよ。決して反撃してはならない。流し込む魔力量により、攻撃時間と強度が決まる』

「ひたすら耐えて守り抜けていうことかしら？」

「天の間とか修羅の間はこのためにあつたのかな？」

「さあ？ 順番なんてこつちが決めるようなものだしなんとも言えないわね」

入り口で突つ立つて思考の海に耽つても始まらない。1人ずつ交互に試練を始めるのと決め、先にシリルが四体の囲む中央に立つ。

「行くわ。少し離れてて」

「う、うん……」

＝＝＝＝

『ナーガよ、今ほど貴女にいて欲しいことはない。私は娘に後継の座という重荷を背負わせて良いものなのでしょうか……人の生を捨て、大切な人との繋がりを断ち切るかもしれない、大きな重荷を背負わせても……』

その悩みは深い。種族の違いによる寿命の差は大きいのは生命神自身が一番よくわかっている。

『彼女には人間として過ごして欲しかった。私の生死によって人生を狂わせたくなはない。それが、せめてもの願いだったのですが……これは彼女の答え次第ですね。まずはあの老ギルドマスターに挨拶して、事の次第を伝えることから始めねば……『ジエン』、紙と筆の用意を』

「ははっ、仰せのままに」

神に仕えるはシリルのみならず。彼女の師にあたるのは側近筆頭のジエンで、彼は既に年老いているものの、大仙人の称号を持つ実力者だ。しかし、彼は仕える身であることを自覚しており、歳も歳なので、後進の育成に力を注いでおり、自分から神の座を却下するという風変わりな男として神や奉仕者の間では噂になっている。

「シリルはまだ神の力を器に受け入れられるほどではございませぬが、いずれは大成しましょう。それにまだ若いゆえ……ギルドに入れさせたのは、器の完成に最も必要である純粋な人との交流と思ひ出を紡ぐため、でしたかな？」

『左様、いかにも。さすがは私の右腕です、ご名答ですね。たった一、二年では完成は難しいでしょうが、今の彼女はその器に足る何かを手に入れています。戻って来れば大いなる可能性を秘めていてくれるでしょう』

神、それ即ち人の心が求める安寧なる存在。シリルが人の希望たり得るには人と希望を紡ぐことが肝要なり。果たしていつになるか分からないが、その時は少しまた少しと、近づいているのだ。

第29の唄 雷鳴の唄

「よし、これで修練は終わりね」

「し、死にそ…なにあの最後の二つの難易度… 『餓鬼の間』、どんどん魔力取られるから…は…ふっ」

「まあそれも無事に終わったんだし、生きてるんだから。来た時よりパワーアップは十分してるはず」

輪廻廟にて過密な修行は一度幕を下すこととなる。何日もギルドを空けていることもあり、最後の『地獄の間』をやる予定を切り上げて帰る。

「もうあと少してファンタジアだね。今年はお姉ちゃん参加するの？」

「そうねえ。せつかくユリアも来たんだし、頑張っちゃおうかな？」

「お祭り、お祭りつと！楽しみだよ」

力をつけて自信もついた。そう長くない修行時間で得たものは決して少なくはないだろう。しばらくは祭りを楽しもうと明るい表情を浮かべながら帰り道を歩いていると、遠い空に雷がちらつと見え隠れする。晴れているのに局所的に雷が落ちる。不穏な空気を感じると、2人の隣にある男が姿をあらわす。

「こうして会うのは初めてか、生命の巫女と冥府神の申し子
「すみません、どなたでしょうか？」

「名乗っていなかったな、失礼した。私はミストガン、ギルドのS級魔道士だ」
「確かギルドに何人もいないっていうすごい魔道士なんだっけ？」

「その通りだ、そして私はあの雷鳴を、ラクサスを止めに来た」

「これまたS級で、マスターの孫にあたるラクサスはギルド最強の一角を担うほどの強
豪だ。そんな男がなぜ暴れ、猛威を振るっている。」

「これはギルドや街にとっては危険な状況、即座に止めるべき。ついて来てくれ、今は2
人の力が必要だ」

「祭りどころじゃありませんね、そんなんじゃ…」

「なにすればいいの？」

「まずはラクサス親衛隊の雷神衆の3人を止める。さすれば、後顧の憂いなくラクサス
を止めに行ける」

|| || || ||

「くつ、ラクサスめ！ミスフェアリーテイルの出場者を人質にとるとは…これでは…」
「あのヤロー、卑怯な真似しやがって！こんな面倒な術式さえなけりや！」

その頃、既にマグノリアはラクサスの起こした反乱により、阿鼻叫喚と化していた。

ファンタジアの前日に行われる秋祭り1日目のミスフェアリーテイルの会場に突如として乱入し、マスターの座を譲るように脅迫。女子数名を雷神衆の1人、エバークリーンの石化眼ストーンアイズの能力で人質に取り、マスターとギルドメンバーに遊びと称した同士討ちを始めたのだ。更にはフリードの術式魔法により、ナツとマスター、食器を食べていたガジルは止めることができなくなってしまったのだ。

『参戦メンバー、残りあと2人』

「何?! あとはここにいる2人だけじゃと!?!」

「こりやあやべエぞ」

「ぐぬぬ、なんで出れねえんだっ! こうなったら誰か復活させるしか…」

「待てナツ! 早まるな!」

マスターが止めた矢先に電光掲示板にある文章がおどり出る。それが吉報か凶報か、静かに見守るなか、更新された情報にはこう書かれていた。

『参戦メンバー更新。』

ーミストガン参戦

ーシリル参戦

ーユリア参戦

残りあと5人』

修行によって出ていた2人と仕事で外にいたミストガンの思わぬ参戦により、逆転のチャンスが生まれる。嬉しい誤算が発生したことにより、マスターの顔にも安堵が広がる。

「これは攻めるチャンスかもしれない…頼むぞ、3人とも…」

|| || ||

「私はこのままラクサスの元へと進む。2人は雷神衆からだ」

そう言つて姿を霞のように消し去る。残されたシリルとユリアの眼の前に、1人の女性が変わりに姿をあらわす。雷神衆の紅一点、エバことエバーグリーンだ。

「まさか途中参加者が出るなんてね。はじめまして、とだけ言っておくわ」

「ユリア、あなたは他へ…この人は私の獲物」

「うん。気をつけて…」

「私に勝つつもり？随分と舐められたものね」

暗に自分が一人でも勝てる、事実上の勝利宣言をしていることに、エバーグリーンは己の実力と自信が傷つけられたと考えてしまう。シリルは先ほどまでの修行により、心に自信がついたことがそうさせているのかもしれない。

「途中で倒れてたリーダーダス兄さんから聞きました。貴女の魔法の効果が切れれば人質は解放される……ここで貴女を、倒す！」

「かかってきなさいよ。負けるつもりはないわ」

浮遊していくエバーグリーンを追って建物の屋根を飛ぶように伝う。修羅の間での修行に比べれば他愛ない。

「こちらから行かせてもらうわ。『妖精爆弾グレムリン』！」

「(思ったより広い。でもいける!)『生命神の大声』！」

魔力の総量が増えたことと質が上がったことにより、前よりも更に強力な一発が撃てるようになった。強くなった咆哮は爆発する鱗粉を吹き飛ばすにはもってこいの威力である。

「なんて馬鹿力なの……」

「これが私の功夫クシフです！『練気掌』！」

「惜しいわね。ほら、こっちよ」

「逃がしませんよ、『神依』発動！」

挑発するように逃げるエバに追うシリル。建物の中を抜け、柱を越え、煙突をよけ、エバのしつこい弾幕魔法を避けながらどんどんと距離を詰めていく。

「思ったより早いわね……これでどうかしら!？」

「くっ!」

つけていた伊達眼鏡をずらし、魔眼を発動する。それをあらかじめ聞かされていたシ

リルは顔を伏せ、難を逃れるが、その隙について距離を開けられる。

「あの眼、厄介ですね……」

「とどめよ。『妖精機銃……』」

「それはさせぬ！はあつ！」

間に割り込んできたのは石化から復活したエルザだ。彼女の復活は予想外なのか、さつき以上に苛立ちが目立つ。

「まさか妖精女王が直々に顔を見せるなんてね。私、あなたが嫌いなのよ。何が妖精の女王よ、このギルドで一番妖精らしいのは私じゃない」

「そんな逆恨みを発しても私はお前にはなれないし、お前は私にはなれない」

「助かりました、エルザ姉さん。でもなんで……」

「理由は後で話そう。私に続け！」

エルザの剣閃は美しく、大胆であり、優雅だ。久しぶりに組むツーマンセルは先程までの拮抗状態を崩すには、開いた期間など無かったかのように滑らかなまに進む。

「舞え、剣たちよ！」

『『弾血乱舞』！』

「小癩な、『妖精機銃レブラホーン』！」

必死に抵抗するが、S級魔道士の援護による差と2対1という状況下では追い詰めら

れるのは必定というべきか、逃げ場をついには失ってしまふ。

「いけ、シリル！ トドメを！」

「はい！ 聖なる力は邪をも打ち破る、『御業血気砲』！」

「これが…妖精女王の強さ…そして、神域の覚悟…私は……」

もはや撃墜は火を見るより明らか、エバは目を瞑り、大技が当たるのを静かに待つ。だが、待てど暮らせどいつまで経つても衝撃や痛みが襲ってこない。恐る恐る目を開けると、思っていた以上にまずい光景が広がっていた。エルザの幾多もの剣が浮いていたのだ。

「えっ？ あの、これどういう……」

「お前を気絶させるのは彼女たちの石化を解いてからだ。断るたびに剣を一刀ずつ飛ばす、良いな？」

よくよく見れば、服の両袖は剣で止められており、逃げる隙を封じられ、その上には大穴が空き、万が一逃げればすぐに消し炭にされかねない。諦めるしか無かった。

＝＝＝

「うう…あれ？」

「っ！ 石化が、治っておる！」

「もしかしてあの二人…やったのか！」

ギルドでは、石化されていた女性陣が悉く元どおりに戻っていた。右目の義眼の影響でいち早く復活を遂げたエルザ以外のミスフェアリーテイル出場者は元に戻り、理不尽なゲームの性質は解放された。もはや無用な争いに参加する理由はない、そうと言わんばかりに堂々とマスターは胸を張る。

「いやあー、シリルもエルザもようやくってくれたわい！これであとはラクサスを……」

「まさか私たちが石にされてる間にそんなことになってるなんて……」

「あいつを一発ぶん殴らなきゃねえ」

「やめておけい。このふざけた悪戯に付き合うことはもうない」

このままラクサスをなんかしらの形で罰を加えれば終わり、そのように思えた瞬間、マスターの容体が急変する。突然胸を苦しそうに抑えたかと思えば、その場で動かなくなってしまう。

「う、ぐう……」

「大変！いつものお薬を……みんな、マスターを救護室に連れて行って！心臓の持病よ！」
「くそ！死ぬんじゃねえぞ、じつちゃん！」

慌てふためく状況の中、二階にある薬を取りに行っていたミラから新たなる情報ももたらされる。どうやらラクサスが次の手を打ってきたようだ。皆で外に出ると、空には見慣れない球体が町中に浮いている。

「なんだあれ？」

「あれは確か…『神鳴殿』、設置型の魔法だよ。あれが発動すれば、町中に雷が大量に落ちるね」

「じゃあ撃ち落とすしかないね」

「やめておきな。あの魔法に攻撃すると反撃して来る『オートカウンター』型の典型的な魔法さね」

そうとなれば落雷の発生するより早く、ラクサスに止めさせる以外の手はない。こちらの方針は決まった、ならば動かかねばならない。皆で一致団結して動くこととなる。

|| || ||

「敵って誰だろ？このギルドの人、知らない人多いからな…うわあ！」

「へえ、今年は新入りが多いな」

「え、仮面に人形？何あれ？」

「雷神衆ビツクスロー、テメエを倒す男だぜ、覚えておきな」

雷神衆は残り2人。果たして雷鳴轟く見戯はどちらに転ぶのだろうか。

第30の唄 冥府の子の實力

「俺と遊んでくれんのはお前か？そろそろ骨のあるやつとやり合いてえんだよな」

「うにゆ、『ポイズン・シヨット』！」

「うおっと、いきなりかよ！だが、やる気なら来な！」

ユリアが相對するのは雷神衆の中でもトリツキーな戦い方と火力を誇る陣形を得意とするビックスローだ。それを知ってか知らずか、二の句を喋らせず、先手必勝とばかりに物を溶かす毒を放つ。

「ラインフォーメーションだ、ベイビー！」

『オオー！』

『切レロー！』

「うわわ！」

「俺と戦う羽目になった自分の不^{ハードラック}運と踊^{ダンス}つちまいな！」

変幻自在のフォーメーションと自由自在に操れる人形たちは實力者の名にふさわしい技術だ。でもユリアもただやられるだけではない。

「『神の啓示書、第二卷二章悪魔の項、第六天の一刀』！」

「なっ!?俺のベイビーたちが、くそっ……」

「いっくよー、『黒波の型』!」
ブラック・サーフィン

「ぐげっ!ぐおおっ!」

人形たちを全てなぎ払い、そのまま一気にビックスローに乗っかり、黒い波に乗ってサーフィンの要領で別の建物に飛ばしていく。間髪を緩めず、『シャドー・ハンマー』を叩きつけるが、即座に新しい人形をオモチャ屋から引つ張り出し、盾にして防いで行く。「俺の魔法と下のオモチャ屋があれば持久戦なんて容易いぜ」

「むうー……だつたら、えいっ!」

「おいおい、まさか……」

『『地獄の業火』!』
ソウル・フレア

尋常ならざる四股踏みと共に建物の下から黒い噴煙が吹き上げる。建物の崩壊だけでは生温いとばかりに、周りに全く被害を出さずに中のオモチャごと冥府を漂う炎で焼き尽くす。これでビックスローの魔法は威力が半減するだろう。

「なんて無茶苦茶な奴だ!」

「てえい!」

「ふガッ!」

「やっ、とおっ!」

「ぐっ…撃て、ベイビー！」

「うわっ！」

もはや無茶苦茶な乱闘だ。技もへったくれもない殴り合いとかしている。かたや殴ればもう一方は魔法を打ち込む。側から見れば、魔道士同士の喧嘩とは思えないような何かになつてしまっている。

「うわ、ひどい光景ね」

「あ、ルーシイ姉ちゃん！」

「オイラもいるよ」

「へえ、コスプレかよ。しかも『チアガール』か」

「い、今それはどうでもいいでしょ！」

現れたのはルーシイとハッピーで、ユリアの援護としては良いタイミングでの登場だ。人形を含めた数の差を少しでも埋めることや、ビックスローの視線を逸らすことで人形の行動を抑えられるからだ。

「そういうえば一週間もどこ行つてたの？」

「シリル姉ちゃんと修行！私も強くなつたんだよ！その成果を見せてあげる」

「確かにお前は強えけどよ、ラクサスには敵いやしねえ。ギルドは俺たちと共に変わる

！」

「それはもうフェアリーテイルとは呼べない何かになってる！私はギルドを守る、まだ数ヶ月しかないけど、そんなことは志に比べれば大きな違いはない！」

そう言い放って召喚したのは弓使いの『人馬宮』の星霊サジタリウスだ。宙に浮く人形たちは彼の弓を前に打ち砕かれ、ビックスローの魔法を封じていく。だが……

「くそ、残り少ねえベイビーたちが……なんてな」

「ぐおっ!？」

「サジタリウス！」

道化のように表層では慌てていたビックスローだったが、不意に見せた笑顔と共に新しい人形が魔法弾を撃ち込む。

「えっ!?!新しい人形!？」

「確かにおもちゃ屋の破壊はベイビーたちの補給って意味じゃ大きいダメージだったがよ、余分に持ってねえとは言っていないぜ。やっちまいな、ベイビーたち！」

「この程度の数なら……あつ、鍵！」

「星霊魔導士相手ならこれが常道ってな」

星霊魔導士はアイテムを使う『ホルダー』系魔道士の筆頭のような存在だ。鍵を奪えば無力化、あるいは抑制が効くタイプなのは魔道士の間では有名な話である。無力化されたルーシイとそれを庇うユリア。そのコンビとして経験の浅い2人を相手にすれば、

百戦錬磨のビックスローには隙を突くのは簡単だ。

「今だ、やつちまえ！『バリオン・フォーメーション』！」

「や、やばっ…」

「お姉ちゃん！」

2人を分断し、ルーシイの倒れ込んだところを高威力の魔法で迎撃する。ユリアの届かない場所を狙ったほぼ完璧な一撃に思われたが、彼女を救う影が一つあった。

「なんでかな、僕は鍵の制約なしに行き来できるみたいだ。これが愛の力、紳士の嗜みってやつかな？」

「あ、あんた何言ってるのよ。でも助かったわ」

「今日は最高に決まってるよ…ロキお兄ちゃん！」

「さあ、紳士たるものの務め、主人のために果たすでしょう！」

ロキ改め黄道十二門、獅子座の星霊レオ、顕現である。彼の出現は鍵を介さないという異例の方法ではあるが、星霊王との約束、主人との絆が成した星霊魔法の根本とも言えるものだ。

「僕は自分の意思でここに来たから、長くはいられないよ。さ、2人とも。華麗に決めよう、シリルとエルザのようにね！」

「なるほどな、エバがやられたってのはそういうことか。それに、レオ！テメエが星霊

だってのは俺に負けてからずっと黙ってやってたのに、のこのことやられに来たってか
!？」

「あいつ、分かってたの？」

「ビックスローの眼の魔法は相手の心が少し読めるんだ」

雷神衆にはそれぞれ主に使う魔法とは別に『魔眼』を持ち合わせており、エバーグリーンなら『石化眼』がそれにあたる。

「あの頃の僕は星霊としての力を失いかけていた。だけど今は違う。守るもの、主人、仲間……ルーシィやユリアのおかげで沢山のことを僕は得、強くなったんだ」

「ああそうかい！なんならやってみな！」

「援護するよ！『ポイズン・フォール毒牙の滝』！」

大きな滝を出現させ、ビックスローを移動させ、視野を狭める。注意をユリア自身に引きつけ、ロキとルーシィの連撃を後押しする。それがビックスローにとってある魔法を発動する引き金を与える。

「しょうがねえな。あまり使いたくねえが……『ファイギュア・アイズ』！」

「みんな、目を閉じて！あの眼を見たら魂を抜かれるよ！」

「あつぶなっ！」

魔眼『ファイギュア・アイズ』。相手の魂魄を発動している間、自分の支配下に置くとい

う奥の手だ。これを発動するということはそれだけ追い詰められている証拠でもある。だが、この魔眼と彼のもう一つの魔法のコンボは強力であり、目を閉じている状況では人形たちの動きが読みづらくなるからだ。

「ラストダンスだけ、バイビーたち！」

「うにゆ!!」

「うわっ！」

「きやあー！」

人間の情報源の大半を占める視力を奪う戦法は強力で、押せ押せムードが断ち切られるくらいには逆転されてしまう。そんな中、ルーシイが攻略の糸口を無意識に口にす

る。

「目が使えないなら、あいつを……」

「目を……それだ。ユリア、僕の後に続いてくれ。これが唯一の突破口なんだ」

「任せて」

「行くぞ……『獅子光耀』！」

「なんだ!?!目が、目がっ！」

目を使うならばそれを使えなくすればいい。その為には閉じさせるのが一番手っ取り早い方法だと考えたロキは、取り戻した力を発揮し、あたり一帯を強い光で包む。

「今だー！」

「やあつー！」

「ガハッ！くそつ、何でお前らは……」

「僕たちは愛や絆で出来ているんだ。それを全否定するなら、容赦はしない」

「私たちの『ゼンリヨク』、受け取って！」

それは、ギルドの精神を示すような力強い一撃であり、さらなる力を発揮させてくれる。

『レグルスインパクト獅子宮の輝き』！』

『シャドー・ストレート』！』

「ぐあああつー！」

2人の拳がビツクスローに突き刺さり、大きく吹き飛ばした。人形たちも動きが止まり、元の意思なき状態に戻った。これが勝利を示す証となり、3人は華麗にハイタッチを決めた。

残る雷神衆はリーダーたるフリードのみとなった。

第31の唄 不気味なる静寂

日も沈みかけている頃、ハッピー、ユリア、シリルとエルザは偶然にも再開できた。

「ユリア！」

「あ、お姉ちゃん！」

「どうやら何か上手くいったみたいだな」

「ビックスローって人倒して来たんだ！ルーシィお姉ちゃんは魔力の使いすぎでへばつてる」

「となると、残る雷神衆はフリードのみか。私はラクサスの元に向かうが、お前たちはどうする？」

「止めることの出来る魔道士は残り少ない。ミストガンが先に向かっているとはいえ、こちらが勝てるとは限らない。」

「少し気になるものがあります。あの空の……あれをどうにかしたいので」

「神鳴殿か」

「神が鳴る……私たちへの挑戦なのかな？」

「分らん。別れるのなら、急ぐ他ない……ではな」

エバから得た情報を頼りに駆け出すエルザを見送り、残った3人は静けさを取り戻しかけている街の中でしばし思考に耽る。

「あの神鳴殿って魔法、どんなものかわからないね。一旦ギルドまで戻ろう」

「おいらはルーシイのところに戻るよ。それと、あれオートカウンター付きだつて」

「オートカウンター？ そんなものまで……彼の狙いは私たちの動きを止めて、降伏させるつてところかしら？」

吹く一陣の風は少し不気味さを帯びて街を巡る。

|| || ||

「今度はビックスローか。全く、何やってやがるんだ」

「彼女らの力を見誤ったな、ラクサス」

「へえ……お前まで参戦してるとはな。意外だぜ、ミストガン」

「お前を止めに来た」

カルディア大聖堂にて待ち構えていたラクサスの元にやって来たのはフリードでもエルザでもなく、ミストガンであった。倒れた仲間から集めた情報を集め、たどり着いたのだ。

「俺はお前と戦えるのを心待ちにしてたんだ。知ってるか、このギルドである噂が上がつてんのを……」

「噂？ 済まないが、寡聞にして知らん」

「俺とお前、どちらが最強にふさわしいか、だ」

ラクサスの今回の内輪揉めもとい内乱を起こした一つの理由がこの最強論議をはつきりさせたいという彼個人の意思がある。

「私はそういう類のものには興味がなくてね。あえて挙げるとすれば、エルザ、ナツ、ギルダーツあたりか」

「あの親父は帰ってこねえから無しだな。エルザもナツもいい線いつてるが、まだ弱え」
「あの二人が弱い？ とんだ節穴だな、その眼は」

仕事の難易度上数年に一回帰ってくるかどうかのギルダーツが最強と言う者もあれば、女性魔道士の中で際立って強いエルザを推すもの、パワーと戦時下での頭のキレを推す者はナツに一票入れる。このように十人十色の意見がこの論議にある。

「さあ、決めようぜ。このギルドの頂点てっぺんにふさわしい魔道士を……」
「そのくだらん考えとこのゲームとやらに、終止符を打つ」

相対する両者の間にしばしの静寂が訪れる。S級の称号を持つ2人の間には今、戦う以外の選択肢は消え、ミストガンは抱える杖を地面に放射状に突き立てる。

『摩天楼』……」

「っ、これは…!？」

突如として大聖堂が壊れ、ラクサスは宙へと打ち上げられる。姿勢を保つことがしにくい状況の中、ありとあらゆる方向から縛り上げられ、目の前の空間が裂け始める。そこから圧を感じさせるほどの魔獣があらわれる。

「なんつー魔力量だ。こりゃあやべえぞ！」

『グルルル、ゴアアアアッ！』

「くつ、うおおおおつ！」

雷鳴と咆哮が唸りを上げ、空間が軋み、点滅を繰り返したと思えば、ひび割れ、遂には壊れてしまった。

「ははははははっ!!こんな幻影でどうにかできるとでも思ってたんのか、ミストガン！」

「ほう、思ったより早いな、だが……十分だ！眠れ、『五重魔法陣・御神楽』！」

「おっと、足元には注意しな」

「っ!？」

雷撃がミストガンを打ち上げ、砲撃が天よりラクサスをめがけて撃ち下ろされる。S級同士の攻防は並大抵なものではない。

「へっ、やるじゃねえか」

「……………」

「ラクサス!!」

「ちっ、来やがったか」

ここでやって来たのはエルザと、いつの間にかギルドのトラップから抜け出したナツだ。どうやらレヴィイが術式を書き換え、ナツとガジルの解放に成功したようだ。

「おいラクサス！俺と戦え！」

「さて、あいつは誰だ？」

「……ミストガンか？」

「くっ……」

ギルドに滅多に顔を出さないとあって、一瞬誰かわからなかった二人に対し、彼は顔を隠し、目をそらす。だが、その隙が命取りとなる。

「貰った！」

「なっ、ぐはっ！」

そして露わになった顔にナツ、エルザは見覚えがあった。ついこの間戦ったジェラルと瓜二つの顔があったのだ。何か知っているのか、彼はすごく気まずそうな顔をしている。

「ジェラル、なのか？」

「なんでお前がここに!?!」

「ほう、知り合いなのか？」

「くっ……出来れば見られなくなかった。エルザ、私はお前の知るジェラールを知っているが、そいつとは違う。済まない、後は任せた」

「おい、おい待てよ！」

霧のように消えて立ち去り、後のことをナツたちに任せることとなった。呆けるエルザの前に立ち、ラクサスに対して喧嘩を売るのはナツだ。

「ラクサス、俺と戦えやー！」

「うっとおしいんだよ、このカスが！」

「よつと……くえ、『火竜の鉄拳』！」

「ふん、オラア！」

頂上対決はナツとラクサスの決戦に移った。かたやギルドの名誉のために、かたや己の意思を貫くために。それぞれの思いは紡がれて、拳に乗る。

|| || ||

「……つまり、ラクサス兄さんを止めるか、あの神鳴殿を壊すしかないのですね？」

「そういうこと。私の方でもできる限り調べたけど、そうするしかないって」

ギルドに戻ってきたシリルとユリアはレヴィイから状況説明をギルドで受けていた。ナツとガジルの参戦、ミス・フェアリーテイル参加者の解放、そしてマスターの容態についてだ。

「マスター、身体が悪いんだね」

「うん、心臓発作だつて。ミラが言つてたよ」

「それは本当かい？」

「えっ？あ、ポーリユシカさん！」

「胸騒ぎが起きたんでね、気まぐれで来てみればなんてザマだい」

彼女の来訪は願つても無い好機。マスターの治療を任せるために案内すると、しばらくの沈黙の後に、涙を浮かべながらシリルたちに言葉を告げる。

「ラクサスを連れて来な。マスターは…マカロフはそう長くないよ」

「えっ？冗談、ですよね？」

「お願い、早くあのバカを連れて来て頂戴。マカロフは、危篤よ」

強気な彼女らしくない、しおらしい言葉と顔が、そこにはあつた。

|| || ||

「ちっ、あの頑固ジジイ、まだ降参しねえのか！」

「よそ見してんじゃねえ！それに、俺たちはお前なんかには屈しねえ！」

「このクソ餓鬼が！」

ラクサスとナツの戦いはまだ続く。未だ、ある悲報を知らないまま……。妖精の内乱は果たしてどんな終わりを迎えるのだろうか。

第32の唄 強者の強者たる所以

「消えろナツ！お前はいつも目障りなんだよ！」

「うるせえ！俺は諦めねえぞ、お前が倒れるまではな！」

「ナツ……（私は、私はっ……！）」

二人の攻防を見守っていたエルザは、この場をナツに任せ、ある計画を実行することを決めた。シリルに言われた、神鳴殿のことだ。あれを破壊すればラクサスのこの戦いは無意味と化す。それならば、と動き出す。

「ナツ、ここは任せるぞ！いいな？」

「あつ！おまえ、まさか……分かった！だがよ、ぜってえ命は大事にしろよ！」

「ああ、勿論だ。お前やシリル、シモンたちに生かされた命だ。捨てるつもりはない！」
「おい、まさか……待ちやがれ、あの神鳴殿は二百近くあるんだぞ、全て壊したらどうなるかわからないわけじゃねえだろ!？」

その身を翻し、大聖堂を後にするエルザはラクサスの焦りのこもった叫びに、胸を張って答えた。

「分かっている。が、そのつもりだ！」

「くそ、行かせるか！」

「お前の相手は俺だ、『火竜の咆哮』！」

「邪魔するな、ナツ！」

「あいつならやってくれるさ。そう焦んなよ、ラクサス」

|| || ||

「ねえ、ラクサスはどこにいるの!？」

「エルザ姉さんは彼を止めに行くって言って大聖堂の方に向かいましたが……」

「確かにあそこはこの街のランドマーク、そこで支配を宣言するつもりなのか？」

ラクサスにマスターのことを伝えようと、街を走るレビイたちは彼のいるだろう場所を探し回る。もう『遊び』とは言ってられない領域にまで来ているのを彼はまだ知らないのだろう。

「待っててラクサス兄さん、私たちが、あなたを止める！」

「シリル、ありがとう。私たちのために……」

「私はまだこの街に来て日が浅いですが、色々と優しくしてもらいました。人との絆は切れるものではない、繋がるからこそ輝く。それを教えてくれたことへの恩返しです」

絆の力を信じる者と力ある者の天下を望む者、王道と覇道のぶつかり合いとも言えるこの戦いに、シリルは王道の輝きを見出しているのだ。ユリアだってそうだ、ギルドの

力はそれだと気づくことになる。

「私たちが勝つもんね！なんだって、人の力を信じてるんだから！」

「よし！行こう、私たちの祈りを大聖堂の鐘で鳴らしに！」

＝
＝
＝

「どいつもこいつも、俺の邪魔をしやがって。このギルドは、誰にもバカにされない、力がある！そうだ、最初から解放すりやあ良かったんだよ」

「くそつ、身体が……」

「鳴り響くは招雷の轟き。天より落ちて灰燼と化せ！『レイジングボルト』！」

瘡癩に似た暴走を起こしたラクサスはナツを圧倒、彼の膝を地につけさせ、消しかかっている。天より召喚した雷鳴は轟音とともに地に落ちてくる。だが、完全にナツを消したと勘違いして高笑いをあげるラクサスの耳に、聞き慣れたある声が響く。ガジルだ。彼がナツをすんでのところで救いに現れたのだ。

「テメエの仲間消すのがそんな楽しいのか？とんだ男だな、お前は。生憎、こいつを消すのは俺なんだよ」

「ガジル……」

「くくく、また獲物が一人。消えろ、消え去っちゃまえ！」

「完全にタガが外れてやがんな」

感情の高ぶりど苛立ちによるリミッター解除が彼の心を蝕んでいるように見えた。それを止めに来た二人は、かつて敵同士という皮肉な状況下で、コンビを組むこととなった。

「この空に竜は二頭、いらねんじやなかったか？」

「はっ、要らねえな！だがよ、こども雷がうるせえと、悠々と飛ぶこともできやしねえ。テメエの相手はこの兄ちゃんを止めてからだ」

「行くぞー！」

＝ ＝ ＝

「もうちよつとで、後もうちよい……」

「うん？あれ、エルザかな？」

「なんか急いで来た感じだね」

ユリアたちはマグノリアのシンボル、カルディア大聖堂へとひたすら走る中、近づいてくるエルザに遭遇した。あちらも気づいたようで、急いで彼女らの元へと走って来た。

「ラクサスの魔法を止めに行く。協力者がいてくれると助かる」

「私は、ラクサスに用があるの。大聖堂の方でいいんだね？」

「やはりあの神鳴殿を止めるんですね？」

「左様。して、用というのは？」

「マスターが危篤です。それを伝えに来ました」

前々から体調が優れないのは知っていたが、まさか倒れるとは思っていなかったのだろう、目を見開いて驚いている。が、すぐにやるべきことを思い出した。

「分かった。気をつける、今のあいつは冷静さを失っているみたいなので」

「……ユリア、レヴィ姉さんの護衛をお願い。私は神鳴殿破壊に協力してくるわ」
「待って！そつちと交代するよ。あれを壊すのは私の仕事。ねっ？」

「覚悟はできてるみたいね。いつの間にか強き意志を得ていた、か。分かったわ、でも無理だけはしないでね」

彼女なりの覚悟は見えたのだ、無理に止める必要はない。自分のやるべきことをなすために二手に分かれ、雷鳴の轟くのを止めに行く。

「ラクサス兄さんのやろうとしてることは、家族を壊すのと同じ」

「止めなきやね。私たちの手で、なんとしても」

「兄さんは、本当にこのギルドを支配するのが……目標なんでしょうか？何か裏がありそうな気がします」

「今は分からないよ。でも、あいつはギルドでは一人だった。多分、それもあつたのか
なってる」

ギルドを動かすためのクーデターに似た行動の意図が未だに読みきれないのだ。彼の実力あらば、こんな回りくどいことはせずとも、簡単にギルドの天下は取れてもおかしくはないはずなのに。

「もうすぐ大聖堂だよ。考えても仕方ない、伝えることを伝えなきゃ！そうすれば止まってくれるはず！」

レビイの目にはかすかに涙が見て取れる。こうなってしまった仲間を何としても止めたいと願うての涙だ。

＝＝＝

「クソが、手間取らせやがって」

「ぐっ、強え……」

「これがS級の強さかよ。こいつが居たら、あの時の戦争は……」

竜の力を継ぐ2人をもつてしてもなお、雷鳴は止まるところがない。なぜここまで強いのか、倒れふす双竜を前に、遂にラクサスが牙を見せて正体を明かす。

「これはよ、まだジジイとクソ親父以外は知らねえ秘密だ。冥土の土産に教えてやるよ……」

「う、鱗に牙だと？」

「ま、まさかラクサス、お前も！」

「雷竜の咆哮おー！」

そう、ラクサスも滅竜魔道士であり、彼の強さの理由の一つでもある。その強さの前に為すすべもなく、ナツもガジルも叩き潰され、伸されてしまう。

「けつ、まだ生きてやがるか。消え去りやがれえ！」

「ぐつ、あの光はまさか……『妖精の法律』か！」

「マスター・マカロフがジョゼを一発で倒したつっ、あの殲滅の光か!? くそつ、どうすりゃいいんだよ！」

幽鬼の支配者戦でマカロフが放った審判の光を今目の前でラクサスが放とうとしている。敵と認識した全てを滅することのできる光を前に打ち震えるのが精一杯の状況だ。そこにやってきたのは、シリルを連れ戻したレビイだ。

「やめてラクサス！ これ以上はやめて早くマスターのところに行つてあげて！」

「何しにきやがった！ 死にてえのか！」

「マスターが、貴方のおじいちゃんがいま、危篤なの!! だから、今すぐ行つてあげて！」

「なっ!?! じつちゃんか……危篤……」

その言葉に、一瞬だが、ラクサスの瞳に正気が戻ってくる。しかし、それもすぐに狂気のみでかき消される。

「丁度いいじゃねえか。俺がギルドの頂点に立つには絶好の機会だ」

「そ、そんな……」

「貴方は、人の死をなんだとっ！」

「俺が天辺に立つには犠牲がいる、ただそれだけのことだ。消え去れ妖精の尻尾フェアリーテイル、これからは俺の天下だ！ 『妖精の法律』、発動！」

因果を断ち切るかのように殲滅の光がくだされる。ギルドの明日はどちらに……

第33の唄 力とは

「くくく、これにて終劇つてところか」

煙が立ちこめ、勝利を確信する。あの審判魔法を放つて無事で居られるものなどいい。そう、完璧に使いこなしたはずだ。だというのに……。

「ぐつ、ガハツ……」

「なっ!？」

「あれ？私、無事?」

「どういうことだ。あの魔法は、完璧だったはずだぞ!」

「魔法に本心を見抜かれたな、ラクサス。妖精フェアリーロウの法律はそういう魔法だと気付いているはずだ」

皆が無事で立っていた。しかも現れた傷だらけのフリード曰く、町の住人や観光客はおろか、魔道士は神鳴殿の反動で倒れてはいるものの全員無事だという。

「お前は心の奥底では皆のことを傷つけるつもりはなかった。そういうことになるな」
「んなわけねえ!俺は…俺はこのギルドを変えるために!」

「もう意地をはるな。マスターのところに行つてやれ」

「黙れ！俺は、俺が最強なんだあー!!」

側近中の側近であり、ラクサスの友の一人の言葉さえ、今は心に届かず、響かない。そんな中で声を上げたのはナツだ。

「テメエの強さも、夢もよく分かった。でもよ、俺たちはお前の夢と一緒に歩けねえ。それがお前の弱い部分だ」

「あつ?」

「お前は、俺たちの……妖精の尻尾の絆を馬鹿にした！それだけは許せねえんだよ！」

「ふざけた事を……ほざくな、ナツウ！」

火竜と雷竜の拳が交差し、ラクサスが荒れた心のままにナツを殴りぬく。だが、それでもナツは屈せず、己の信念に基づいて再び立ち上がる。ある者には恐怖を、ある者には驚嘆を与える。

「おらあー！」

「いい加減に、しつけないだよ！お前には俺の心は分からねえよ。なにがあつても！」
「だからこそその、ギルド……仲間だろうが……」

「ナツ、もうやめて！死んじやうよ！」

屈しないナツの頑丈さに、遂にラクサスがトドメをさすために、己の持つ超攻撃魔法を溜め込む。

「この、クソがあー！」

「あれは……待て、ラクサス！ それを使ったらナツが！」

『雷竜方天戟』！」

「ナツー！！」

雷竜の最強の矛の一つ、それをナツを殺しにかかるほどの憎悪を持って投擲する。言葉では強がっていたが、ナツの体にも限度が近づきつつあり、膝を屈してしまう。このままでは当たってしまうかに思われた。

「うおおおおお！！」

「ガジルっ！」

「いけ、サラマンダー火竜……！」

「この、雑魚どもが！」

ガジルが身体を張って避雷針の役を請け負い、ナツを勝たせるために己を犠牲にする。その力強さに応えるようにシリルは魔力を使い果たしたラクサスに力を叩き込む。

『崩撃』！」

「ガハッ！」

『雲身』！」

「ぐっ！」

「行つてください、ナツ兄さん！『双虎掌』！」

未来に繋げるための2人の覚悟にナツも燃え盛る炎を纏う。

「火竜の……」

「この雑魚があー！」

「鉄拳、碎牙、翼撃、劔角！」

「ガハッ！」

それは怒涛の連撃の始まりだった。『滅竜魔法。それは竜の鱗を砕き、肝を潰し、魂を狩り取る刃。竜の血を継ぎ、心を継ぎ、魂を纏う盾』。とある神がそう語った言葉はまさしくその言葉に相応しいものだ。

「滅竜奥義、『紅蓮爆炎刃』!!」

「がっ、うああっ！」

雷竜の静かなる声はなりを潜め、火竜の天に轟く咆哮が町中に聞こえ渡った。これが勝利の狼煙となり、ギルドや町の住民に聞こえただろう。

|| || ||

その翌日、大きな喧嘩は終わり、街はファンタジアの準備に再び戻った。マカロフの発作はポーリュシカの治療の甲斐あって収まり、街やギルドに平穏が訪れる。

「いやあ、一時はどうなるかと思ったよ」

「あのマスターがそう簡単にくたばると思うか？」

「それもそうですね。それにしても、ファンタジアのパレード、見るの楽しみです！」

「あなたは参加する方よ。新入りでも関係ない、あれを見ればそう思えるはずさね」

ジュビアの期待を壊すようにカナがある方向を指す。そこには、ボロボロになったナツとガジル、全身に軽傷を負ったシリルの姿があつた。

「私は参加できると思っていますが……」

「ふおんごほおひは！ほへにほはんはほへほ！」

「うるせえな。このチビはまだしも、俺とお前はどうか考えても無理なもんは無理だ！」

「わ、私はチビなんかじゃないです！」

「やるかコラ！」

「2人とも落ち着きなさい、傷が開くわよ。それとナツ、なに言ってるかさっぱりわからないわ」

他の2人に比べてまだマシなシリルと、2人の竜を見て、誰もがなんとなく言いたいことを察した。動けるメンバーはほぼ強制参加だ。

「ち、相変わらず騒がしいなここは」

「ラクサス！テメエ、どのツラ下げて来てんだ！」

「そうだ！帰りやがれ！」

「黙らぬか!! いけ、奥の医務室にいらっしやる」

「そうかい。ああ、それとナツ。すまなかつたな、息災でいろよ」

いままでは打つて変わった態度に面食らう仲間たちをけしかけ、ギルドはいつもの活気を出し始める。これがフェアリーテイルの暖かさだとラクサスに通じるように。

|| || ||

「全く、騒がしい連中だ」

「お主もお主で大きい騒動を起こした。どんな厳罰が降るか分かっておろうな」

「ああ」

表の喧騒から離れた医務室ではラクサスとマカロフが『祖父と孫』の会話、そして『ギルドマスターとギルドメンバー』としての会話をしていた。

「お主は昔は身体が弱かつたな。だからワシとしては元気に育ってくればそれで充分、力を持ちすぎることにはなかつたのじゃ」

「すまなかつたな」

「過ぎたことは良い……これはマスターとしての命じゃ、よく聞け」

よろよろとベッドから降り、ラクサスの前に立つ。今までそうしてきたように、優しさで厳しさを併せ持つ声色で、ある言葉を告げる。

「ラクサス・ドレアー、お主を……無期限の『破門』に処する。お主のやったことを考え

た判断じゃ」

「そりやそうだろうな。そうやってギルドを初代から守り続けてきたんだからよ。これで今生の別れってどこか、世話になったな『じいじ』」

「……出ていけ。(済まぬ、許せよラクサス)」

幼き頃、まだ仲が良かった頃の呼び方にマカロフも涙が頬を伝う。例え厳しく当たろうとも、その心は常に寄り添おうとしてきたのだから。

時は夜になり、本格的にパレードが始まりを告げる。氷と水で芸術的な城を造り上げるもの、得意の変身能力で会場を沸かせるものなど様々だ。

「お、あれってミスフェアリーテイルの参加者たちか！」

「おおー！」

「(あれは……ルーシイか。成長したな)」

レヴィイ、ビスカとともに踊るルーシイを見守る者がいたが、その男はルーシイの笑顔を見て、あの日のことを思い起こしていた。

「あ、あれってエルちゃんかにや!？」

「いやあ、やつぱり凄いなあ姐さんは」

「さすがダゼ」

エルザが剣舞を披露すれば、立ち寄った楽園の塔時代の仲間たちが歓声をあげ、楽し

くひと時を過ぎす。

「……そろそろ行くか」

マスターの台車が近づきつつある頃、破門を受け、雷神衆をギルドに残すこととなったラクサスは1人寂しく町の出口へと向かう。だが、そこで待っていたのはパレードに参加しているはずのシリルとユリアだ。

「おまえたち、良いのか？」

「私たちはただの分身、本体はあっちにいますので」

「抜かりねえな。さすがと言っておく」

「お兄ちゃん、また戻って来てね」

「破門されたから戻れねえと思うがな。じゃあな、元気でやれよ」

ギルドからの贈り物たるメッセージと、2人からの温かい言葉を背に受け、ラクサスは涙を浮かべながら街を去っていった。

それからというもの、ギルドはいつも通りに騒がしく楽しく過ごしている。雷神衆の3人も少しずつ馴染み始め、ギルドに来る楽しさを覚えるようになり始めた。

「良かったですね、こうして上手くまとまって」

「そうじゃな。(あのイワンがラクサスに手を出さねば良いが……二重スパイとしてガジルもやってくれておるし、しばらく様子を見ようかね)」

「そういえば、お母様から手紙が来たと言っていました、一体何が書いてあったんですか？」

「お主を呼び戻す旨の手紙じゃ。こちらを冬ごろに出るように、とな」

その帰還要請は何を意味するのか、シリルは明確に分かった。神の座の受け継ぎ、つまりは母の命日が近づきつつあるということ。無限に思えるその寿命も、神とて限度がある。

「そうなると長い間お別れとなりますね」

「むう……寂しくなるが、致し方あるまい」

「土産話を楽しみにしててください」

「ははは、それじゃあ長生きせんとなー」

彼女たちはまだ知らない。大いなる力が、冬將軍を伴ってやって来るのを。

第5章 命と光と魂と 六魔將軍編

第34の唄 集う者

「バラム同盟？」

「ええ。最近ギルド連盟の方で動きが活発になってるって議題に挙がっているみたいよ」

ギルドの方に顔を出してみれば、そのような話題が出ていた。『バラム同盟』は闇ギルドを統括する立場にある四つの大きなギルドのことであり、それだけ強大な組織とも言える。

「急に活発になったんだとよ。何か裏があんじやねえのか？」

「それ、まずいよね？それと、『鉄の森』って……」

「ああ。前に戦った闇ギルド、あのエリゴールのいたギルドだ」

「バラム同盟の『流れる七星』も確かシリルと因縁があったな」

何かの因縁か、こうして図式化してみると、厄介な相手を敵に回しそうな予感が出て来る。そこに嫌な予感の答えを携え、会議から戻ったマスターがある宣言をする。闇ギルドを統括する者たちの一つ、『六魔將軍』討伐の決定、そしてそれを『妖精の尻尾』以

下数ギルドで受け持つという事だ。

「それは本当ですか？」

「無論、本当じゃ。じゃが、ここを集中的に報復されぬようにするためにも同盟を組むつもりじゃよ」

「それでじつちゃん、誰が行くんだ？」

「ナツ、ルーシイ、グレイ、エルザ、ハッピー。ここからはお主らが向かう。それとここにはおらぬが、シリルとユリアはギルド連盟の推薦で向かう」

さも当然だと言わんばかりに告げられる。周りも反対する者はおらず、なし崩しのように5人の出撃は後押しされ、決まっていく。

「うう、なんで私まで……」

「チームを組んでる以上、仕方ないよ」

「そ、そうね」

|| || ||

ファンタジア終了から早一週間。ギルドでは仕事に行く者、酒を友と飲む者、喧嘩に走る者といつも通りに過ごしていた。マスターが引退宣言をした事もあったが、フリード直々の嘆願により、事なきを得た。そんな日常を取り戻した頃、ルーシイはシリルにある質問をぶつけた。

「そういえば2人はどこに住んでるの?」

「少し歩いたところですよ。仕事終わったら来ます?」

そんな誘いもあり、金欠を解消し終えた彼女たちはチームメイトのナツたちを伴ってシリルの家のある丘に到着した。そこにあつたのは静かな場所にある一軒家だった。

「ただいまー!」

「姉さんたちも一緒にどうぞ」

「悪いな、邪魔させてもらうぜ」

「結構広いね」

「あまり物を置いてないだけですよ」

客をもてなすために簡素なお茶とお菓子を準備している2人の背中に、ギルドであった話をエルザは静かに問いかける。

「そういえばシリル、ユリア、聞いたか? 『バラム同盟』の話」

「何それ?」

「お茶入れてきましたよ。で、バラム同盟ですか?」

「ああ。実は2人がギルドに到着する前に出た話なのだが……」

エルザ曰く、闇ギルドを束ねる組織が4つあり、それをバラム同盟と呼ぶ。その中の一つにたった6人のギルド、『六魔將軍』オラシオンセイブスがある。今度、そのギルドを共同戦線にて討滅

するとのことお達しがマスターからあつたのだ。

「俺とルーシイ、ナツとエルザで向かうことになつてな」

「あれ？ 私たちは？」

「無論、一緒に行くことになる。どうも悪魔のごとき者がいるそうさ。2人がその様な者を相手取つたと聞くが」

「墮天使。楽園の塔にいたアイツの仲間だろうね」

「ベリアル……『フオーレン・スタース流れる七星』が居るのね」

2人を苦しめた墮天使と同等かそれ以上の実力を持つだろう相手だ。そう楽には勝たせてくれない作戦になりそうさ。

「今回2人は地方ギルド連盟からの推薦で行くことになる。出立は明日だ。今日はゆっくり体を休めることとしよう」

「ならばせめて泊まっていつてください」

「何から何まですまねえな」

少しでも英気を養つておこうと、この日は何事もなく眠りにつくことになった。

皆が眠りにつく中、シリルは外で星を眺め、まだ起きていたルーシイが隣に腰かけ、問う。

「シリル、まだ寝ないの？」

「なんだか眠れなくて……このお守りを見ると、色々考えちゃうんです」
「どういうこと？」

「産まれた村が原因不明の病に冒され、お父さんとお母さんのおかげで私だけ無事でした。そんな話を聞いて思ったんです、私はその原因と裏にある何かを探さなきゃいけないって」

過去に想いを馳せながら、自分のいた村のことを調べたり闇ギルドと戦ったりといった自分の運命とやらについて誰にも言えなかったことを語る。今のルーシイにならわかるかもしれない、親と子のすれ違い、そして彼ら親の想いとやらに。

「最初は捨てられたんだと思ってました。でも、今なら分かります。私を助け、未来を託したんだと」

「そう、なんだ」

「親の死は無駄にたくありません。いつかその病の謎を解いてみせるんです」

「重い使命ね。私たちも出来ることがあれば手伝うよ、なんたって仲間なんだから」
「ありがとうございます、姉さん」

そう、ギルドは家族であり、仲間だ。思い悩むことがあれば皆で背負えばいい。やはりギルドは良いものだと改めて認識させられる言葉だった。

|| || ||

「さて、もうそろそろだろう」

「ま、まだ……つかねえのか」

「しつかりしろよナツ。これから大事な作戦なんだぞ、こんなトコでくたばってる場合か」

集合場所は青い天馬のマスターボブが持つ別荘だ。今回の作戦の提唱者の1人として、馬車と開始場所を用意してくれていた。

「ここが集合場所か」

「結構いい趣味してるわね」

「仮にもマスターだからね」

「うぶ、まだか……」

「もう着いたよナツ」

まだ他のギルドはついていないようで、いつもの5人だけだ。シリルも少し遅れてやって来るようで、今はまだ道中にある。

「お待たせしました、そしてようこそ。我ら『青い天馬』^{ブルーベガサス}の別荘へ！我らは代表たる『トライデント』、どうかお見知り置きを」

「僕は『聖夜のイブ』」

「『空夜のレン』だ」

「そして頭脳たる僕は『白夜のヒビキ』」

華麗に登場したトライデントの壮麗な顔ぶれにルーシイは少しときめき、あれよあれよといつの間にか用意されていたキャバクラのような椅子に為すすべもなくエルザ同様座らされる。

「今回の任務、よろしく頼む……」

「うわあ、やつぱりその笑顔は素敵だよ！」

「あ、ああ……」

「おい、お前にこれ、やるよ。べ、別にお前のためじゃねえから」

「っ、ツンデレ!?!」

「何やってんだ、ったく。おい、俺らの姫様に手エ出さねえでもらおうか!」

同じ仕事をするというのに早速一触即発となりそうな空気が流れ、現れたトライデントをまとめるエルザの彼氏を一方的に名乗る一夜を、彼女が殴り飛ばしたことで、さらに険悪な空気が流れる。しかもそこに現れたりオンら『ラミアスケイル』に間接的に喧嘩を売ることとなり、空気は最悪なまでに凍りつく。しかし、それを止めるものが現れた。ラミアスケイルのリーダーで、聖十大魔導が一人の『岩鉄のジユラ』、そして遅れてやって来たシリルとユリアだ。

「やれやれ、ようやく着いたと思えば。喧嘩はやめなさい、さもないと……全員死にます

よ」

「シリル殿の言う通りだ。無駄な争いを仲間内でしてる場合ではないぞ。これから協力して強大なる闇に立ち向かうのだからな」

彼の言葉に皆冷静になり、残るひとギルドの到着を待つばかりとなった。

「さて、もうひとギルドがきたら、話を進めるとしよう。頼めるか、一夜殿」

「勿論ですよ。ああ、それと…最後の『化け猫ケットシエルターの宿』からは一人のみが来ると聞いてまあーす」

「へえ。なんかすごい人が来そうだね！」

「そういうことじゃないと思うわよ」

喧々諤々と議論がなされる中、その少女はやつてきた。青色の綺麗な髪をなびかせているその少女はシリルより若く、皆を驚かせることとなる。

「ま、間に合った…えっと、遅れてごめんなさい。『化け猫ケットシエルターの宿』から来ましたウエン・ディ・マーベルです、よろしくお願いします」

これで4ギルド集結と相成った。果たしてこの出会いが未来を動かす力となり得るのだろうか。これは天のみぞ知る。

第35の唄 襲来

「子供!？」

「一人で来たのがこんな子供だとは……」

「そんなことなら私もユリアも大して離れてないような」

「ふむ、これで全員揃ったな」

「おい、話進めんのかよ」

ウエンディの幼さに驚きを隠せない一行だが、彼女についてきたハッピーに似た喋る猫のシャルルの出現により、尚更騒ぎが広がる。それをジュラが諫めて沈め、ようやく話が進むことになった。

「今回の目的地はワース樹海の中に眠る『ニルヴァーナ』の破壊とそれを狙う『六魔将軍』オラシオンセイブの討伐およびそれに協力する謎の闇ギルド『流れる七星』フローレンスタースを撃破すること」

「あの、私戦力にならないと思うんだけど」

「私もです。あの、サポート魔法しか使えなくて、ごめんなさい」

「花のルフラムのように安らかな心で聞きたまえ。討伐といえど、直接戦うのは本来の目的にあらず」

「と、言いますと？何か策が？」

弱気なルーシィとウエンディに対して、一夜は自信ありげに応え、シリルの疑問にヒキキが答える。

「その通り！僕たち天馬が大陸に誇る爆撃艇『クリステイナ』があれば、集まった彼らを纏めて砲撃できるんだ！」

「なるほど、つまりはかの連中をその爆撃拠点まで導くか、それ以外の範囲であつてもある程度の範囲にまとめる、そういうことかな？」

「さすが聖十、お察しが早くて助かります。僕たちの計画は簡単に言えばそういうことになります」

つまり、直接倒そうとしなくても、クリステイナの砲撃が当たれば良いのだ。実力がなくとも作戦を成功に導ける。今回標的になるのは8人。『六魔将軍』のメンバーはコードネームであり、高速で動けるとされるレーサー、人の心を覗けるエンジェル、滅竜魔道士のコブラ、天眼を持つというホットアイ、情報がほとんどない不気味な男ミツドナイト、そして司令塔のブレインなる男から構成される。『流れる七星』からはカスピエルとイブリスという姉弟で、2人でコンビを組んでいるようだ。

「へへ、簡単で良いじゃねえか！なんなら、俺が先にぶつ倒してきてやるぜ！」

「おいナツ、聞いていたのか！全く……追うぞ」

「あのバカヤローが」

「うえ、もう行くの？まだ心の準備が出来てないって」

作戦を聞いてもなお、自分の手で倒そうと張り切るナツをフェアリーテイルが追いかける形で先手を取る。それに遅れを取るまいとラミアに所属するグレイの兄弟子リオンとシエリーが追う。皆がそれにつられる形で出撃した。

ただ、敵が後ろにもいることを知らず。

|| || ||

「あう…なんかよくわからないで着いてきちゃったけど、私みんなの役に立てるかな？」

「大丈夫！自分なりに頑張るんだよ！」

「強いんだね。ユリアちゃんは」

「えっへん！」

年が似通っている2人は早速打ち解けていた。今回の作戦で戦うことに自信のないウエンディを励まし、手を引くユリア。引つ込み思案なウエンディとガンガン進むユリアは性格こそ違えど、仲良くやれそうである。

「2人とも、ムリは禁物よ。私たちが頑張るから」

「ウエンディお姉ちゃんは私が守るよ！」

「ふふ、その意気よ。ウエンディも出来る限りで良いから、ムリしないでね」

「あ、ありがとうございます」

すると、皆を覆うように影が現れ、先を走っていたナツが急に止まる。空を見上げる彼にグレイがぶつかり、文句を垂れる。

「んお？」

「おい、急に止まるなよ！なんだってんだ」

「上見ろよ。アレすげえぞ！」

「おお！あれが……魔道爆撃艇『クリステイーナ』か！」

空に現れたその爆撃艇に皆、驚嘆を禁じ得ない。大陸を探してもこれほどの物はそうそうお目にかかれない。青い天馬ブルーベガサスが大陸に誇る兵器、クリステイーナのお出ましである。

「すごいですね」

「驚いてくれて嬉しいよ。だけど、これからが本領発揮の時かな」

「よし、順調だね。このまま進んで……」

事は快調に進んでいるように見えたが、突然爆撃艇が攻撃を受ける。それを呆然と見送ることしかできず、気づけばそれは地に堕ちてしまっていた。

「クリステイーナが！」

「敵か？どこにいるんだ？」

「……来たか」

墜落したクリステイーナの影から8人が姿をあらわす。『六魔將軍』と『流れる七星』のうちの2人である。先に口を開いたのは弟のイブリスだ。愉快げに細い体躯ながら大きな斬馬刀を振り回す。

「どいつもこいつも弱そうだね」

「油断したらダメよイブリス。でもま、強くないのは確かでしょうけど」

「無駄口はそこまでだ、始めるぞ。レーサー、行け」

「オーライ！」

レーサーの高速魔法により、先手を譲る羽目になる。歴戦の魔道士をもつてしても攻撃がかすりもせず、ジエラルルの『流星』ミューティアを超える速度を見せる。

「くそ、アイスメイク……」

「させないゾ？ジエミニ！」

「ピーリ、ピーリ！」

「なっ!?!」

「星霊魔道士!?!」

「作戦はすでに把握済みだゾ。それに、ジエミニは心が読めるもの」

「こちらの動きが分かっているかのように攻め、コブラにも、ホットアイにもかすりも

しない。寝ているミッドナイトに至っては魔法が曲がるほどだ。墮天使の二人は頑丈さとコンビネーションがひかり、次から次へとなぎ倒していく。唯一立ち回りをキープできているのはエルザだけだったが、彼女も多数対一では攻め手に欠け、コブラの連れている大蛇『キュベリオス』の毒牙にかかり、倒れる。

「邪魔をするからだ……ほう、まさか天空の巫女と冥府の子がいるとはな。後ろの二人を捕らえろ！」

誰も動けない状況下、最悪の事態を招いてしまう。レーザーの高速魔法を止められず、ユリアが単独奮起するものの、連合をあつさり倒した男らには敵わず、ウエンデイ、そして巻き込まれるようにハッピーとともに攫われる。

「ユリア!!」

「ウエンデイ!!」

「ハッピー!!」

「ふふ、これにて第一段階は終了だ。消え失せろ、『ダーククロンド』!!」

もはや用は済んだ。ブレインは慈悲もなく広範囲魔法を連合の上空から放つ。絶体絶命に思われたが、ここで救世主が現れる。遅れてやってきた岩鉄のジユラだ。

「岩鉄壁!!」

「た、助かったよ」

「何氣にありがとう。庇ってくれたのね」

負傷したジユラの迅速な判断と対応に助けられ、敵の追撃は免れたものの、3人を捕らわれた上に逃亡を許してしまふ。その上、先ほどの戦闘でエルザがコブラの毒にやられ、身動きが取れない。心を読むエンジエルの奇襲により遅れた上に傷だらけの一夜の鎮痛効果があるパルファムをもってしても彼女の痛みは和らぐ兆しはない。

「まさかユリアとウエンデイ、ハッピーまでも……私が不甲斐ないばかりに！」
「落ち着いて、冷静さを失ったらダメだよ」

「しかし！エルザ姉さんがやられてて、あちらもいつ何が起こるか！」
「だからこそよ。あの妖精女王を治すならウエンデイの能力がうってつけなの」

シャルル曰く、ウエンデイは天空の滅竜魔道士であり、彼女の言っていたサポートは多岐にわたっており、回復や能力の上昇、解毒や解熱、鎮痛まで可能なのだという。

「そうとなれば、今後どうするかは明らかね」

「そうだな。まずはウエンデイとユリア、それとハッピーの奪還だ」

「それと、ニルヴァーナなる魔法の在り処の特定、六魔將軍オラシオンセイメスの各個撃破だ」

仲間は取り戻す。皆の決意が一つとなり、真に同盟がなつた。敵を倒していくもの、目的の物を探していくもの、救助に急ぐもの、この場に残るもの。それぞれ目的は違えど、やるべきことは心得ている。

「彼らの好きにはさせません」

「舐められた真似されて、引き下がっていられるか!」

「闇の思惑、おもい断ち切るのは今しかない。各々、秘めたる力を糧に……進め!」

「「おおおつ!」」

重ねる拳は小さな魂を穢れなき高潔な光へと昇華させる。闘争の鐘は鳴れり、いざ出陣。

|| || ||

「おい小娘ども、お前らにはやってもらうことがある。良いな?」

「え?」

「何をさせるつもりなの?」

「レーサー、あのポイントから例のやつ、もってこい」

「了解だ。だが、こんな小娘どもに出来んのか?」

「無論だ。目の前で特別に見せてやろう」

ブレインの言う例の人物とは一体何者なのか。賽は投げられた、あとはその目の赴くままに進むのか。それともその目を変えるほどの革命が起こるのか。果たして連合の未来はどっちだ。

第36の唄 混沌

「持ってきたぞ。ふう、重たくて敵わねえぜ、俺のスピードを持っても15分もかかるとはな」

「ゴッ苦勞」

「で、こいつらに何させんだ？」

「この中身の男の復活よな。開けるぞ」

コブラの質問に淡々と応じ、棺桶の中を見せる。そこには、エーテルナノに侵食されながらも生命の鼓動を微かに帯びた、ジェラールの姿があった。

「ジェラール！」

「こ、こいつがそうなの!？」

「エーテルオンにやられたかと思ってたよ」

「ほう、見知った顔か。なら話は早い、天竜の子『天空の巫女』よ、こいつを復活させよ」

彼女を攫った理由、それは能力によるジェラールの復活だ。ためらうウエンディにユリアは手を置く。天空の巫女の決断は……

|| || || ||

「シリル、どこに向かっているんだ？」

「ユリアの生命力を感知してます。ナツ兄さん、鼻の方は？」

「嗅ぎ分けるにはまだ遠いみてえだ」

「竜の鼻といえど意外と嗅ぎ分けられないのね」

「多分匂いが多いからかもな」

ナツ、グレイ、シリルとシャルルは搜索の為に動いていた。鼻のきくナツとシリルの生命探知を頼りに編成された。

「むむむ……ユリアたちはまだ先の方ですね。その前に、接敵です。数が多いみたいで」

「暴れてやるか！」

「情報を吐かせてやる！」

どうやらあちらも配下のギルドを率いているようで、ギルド二つぶんの兵隊が待ち構えていた。

「ウホホッ！ やっつけてやるぜえ！」

「うるせえぞ、クソ猿。こいつらはあたいら『ナイトフォックス』のもんだ！」

「行きますよ」

「やられてえ奴からかかって来い」

「なんなのよあの三人、こんな兵数相手に勝つつもり？」

数十人から100人規模の敵に対して戦力は3人。「常識」をもつて語るなら勝算は低いと見るのが最もだろう。だが、そんな常識をも覆し得るのが「妖精の尻尾」フェアリーテイルの魔道士だ。傷が増えて息も上がるほどに疲れたが逆転、勝利した。

「で、ウエンデイたちは何処にいやがる?」

「さつさと吐かねえとぶっ飛ばすぞ」

「す、数百メートル先にある滝壺の底にある横穴だ」

「そつちから3人の生体反応を確認しました。間違いなさそうです」

「よし。悪いけど、やっぱぶっ飛ば」

「え?ウギヤ!」

傘下ギルドの尊い犠牲をもとに、探すべき仲間の居場所を突き止める。シリルの情報と照らし合わせ、森を抜けると、大きいとはいえないものの隠れるには格好の場所だろう滝壺にたどり着いた。

「ここか」

「おーい、ハッピー!ユリア!ウエンデイ!居るかー!」

「ちよつと!バレるでしょう!」

「あつちからしちやあ、想定済みだろうから今更だぜ。スロープ作るからそれで降りて先行ってな」

万が一に備えてグレイを上に残し、他3名で入り口に向かう。だが、そこには想定外の男と、想像以上に悪い方向へ行こうとしていることが分かった。

「お前、ジェラール!？」

「あの時倒したはずだし……てつきりエーテリオンに巻き込まれてたかと」

「ごめんなさい……私が……」

「あ、ウエンディお姉ちゃん!」

助けに行つた先で会つたのは、エルザの因縁の相手であり、夏に楽園の塔で倒したはずのジェラール本人が居たのだ。ウエンディらをさらつた目的が少しずつわかり始めた瞬間でもある。

「くそ、なら……でもう一度!」

「……ふん」

「がっ!」

連戦の無理がある。いくら復活したとはいえ無傷な相手と戦うのは無理だ。すぐに吹き飛ばされ、壁に打ち付けられる。冷たい目で他の5人を眺め、ブレインとともに外へ向かい始める。

「さすがだなジェラール。次の地点に行こうか」

「……それは無理だよ」

「なつ、ジェラル貴様！」

だが、何を考えたのか、そのブレインを穴に落とす。復活を手伝った男への反乱にシリルらは絶句しながらもその背を追うようにハッピーやシャルルに手伝ってもらいながら外へと皆を抱えながら飛び立つ。

「あいつ、何考えてんだよ」

「分かりません。グレイ兄さん！退きますよー！」

「悪いけど先に行ってくれ！このレーサーつつうふぎけたヤローを止めておくー！」

上で待っていたグレイは既に戦闘を始めており、退ける状態ではなさそうだった。止むに止まらず、彼に敵を任せ、いち早くエルザのところに戻るべく空をかける。

『誰か、誰か応答できるかい!?!』

「この声どこかで……」

「ビビキさん、どうしました!?!」

『良かった、ナツくんとシリルくんは無事なんだね！ウエンディくん達はそこに居るか
い?』

「おうともよ！全員取り返したぜ！」

『なら目的地を教えよう。口頭で指示したいけど、どうやら耳のいいやつがいるらしい。』

『これ以上情報が漏れるのは防ぎたい、地図を送るよ！』

何が何やらという感じだったが、しばらくして頭に現地点と目的地が正確に分かるように浮かぶ。ナツは喜んでいたが、そうもしてられないのは分かっているため、シールの先導の元、天を飛ぶ。

|| || ||

「お二人とも無事でしたか」

「どうにかね。ところでウエンディくんは？」

「ここにいないぜ。おい、起きてくれ！緊急事態なんだ！」

「う、ううん？っ！」

魔力消耗による気絶から復活したウエンディであるが、自分のしてしまったことや驚きからゆすり起こすナツから遠ざかる。何やら謝っていたが、それでも構わないとナツは頭を下げる。

「お願いだ、頼む！」

「私からもお願い。エルザを助けてあげて！」

「どうか、この通り」

「わ、私にできることなら！やります！はい！」

正義感の強い彼女だ、ここまでされて否定することはできない。ふんす、と気合を入れて、されど慎重に解毒を進めていく。過去にジエラールと名乗る男としばらく旅をし

た彼女だ。彼が悪い男だとは思いたくない。

「……よし、完了しました！しばらくすれば動けると思います」

「おおお！」

「よっしゃあ！」

「ありがとうウエンディ！」

「さっすが私の友達だね！」

「いやあ、顔色が良くなったよ。流石と言うべきか」

これで危惧すべき課題は2つ消えた。残るは敵の狙いの古代魔法のみとなった。だが、絶望とはそう生易しいものではない。順調に物事が進む時に限って、曲がり角から不意に現れるものだ。地鳴りが轟くとともに、遠くの森から黒い塔のように光が立ち上がる。開けている場所だというのもあるが、それでもこうしてはつきりに見えるということは、並みの魔法ではありえない。しかも闇魔法を操るユリアがすぐそばにいれば、自ずと答えは出る。

「まさかあれって！」

「間違いないよ。古文書アーカイブに乗っていた……ニルヴァーナだ」

「もしかしてジェラールが……くそっ！」

「ちよつとナツ！ジェラールってどういうこと!？」

「あいつは、俺がぶっ飛ばしてやる！エルザには近づけさせねえ！」

「ねえ、あいつ止めないと……ってエルザもいない！」

「もしかしてナツ兄さんを追ったのでは？」

飛び出したナツ、いつの間にか消えていたエルザ。混沌としはじめる事態に、光明は射し込むのだろうか。

第37の唄 3人の墮天使と相見ゆ

「もー、なんで先に突っ走るかな〜?」

「しようがないよ、それがナツだから」

「ヒビキさん、あの柱は何ですか?」

「あれこそが破壊予定に入っていたニルヴァーナだよ。でも柱が上がっているってことは発動したか、封印を解いたか。どっちかだろうし、結果を言えば最悪の状況ってところ」

情報収集に特化した魔法を持つヒビキによれば、ニルヴァーナとは心の善悪を入れ替えられる魔法なのだとか。最初の黒い光が立ち上がる段階では、心の善悪の狭間を様々な理由でさまよう魂を半強制的に向かっている方向に引っ張り、悪に墮とすことも光に包むことも可能になる。

「ウエンディくんは何か心に後悔を抱えた。だからこうして気絶させ、その負の連鎖を食い止めたんだよ」

「でもそれって強制的にみんなを、って訳じゃないよね?」

「いや、油断できないね。僕の魔法で調べた限り、あの魔法には何段階かあって、その段

階が進むにつれて強制力を増すんだ」

「早く壊さなきゃね」

先に見つけられた可能性が高いとしても、まだ準備段階だろう。今からでも十分巻き返しが効くだろう。時は少し遡るが、ジェラールは森の何処かにある洞窟に来ていた。それを追って、ブレインの命令で追ってきたコブラは、ジェラールの心の声がまるつきり聞こえないことに不信感を抱いていた。彼の体質かわからないが、昔から心を聞き取ることにかけているが、何故か追う男の考えだけは読めない。

「……か」

「(あいつ、何を考えてやがる? こんな森の中で何をするつもりだ?)」

こんな森の中で一人で来た上に、思考が読めないとすると、色々と勘ぐってしまおう。すると、突然止まって指で空を切る。魔法陣が現れたと思えば、黒い瘴気が漏れはじめる。

「解封印!」

「(っ?! この狂気、もしかや……)」

「ジェラール! お前、こんな所で何をしている!」

エルザはナツの言葉を耳にした時より、あちこちを走り回り、ここに入るジェラールに気づき、追いかけてきたのだ。

「君は、誰だい？」

「……憶えていないのか？」

「俺は、ここで目覚めるまでの記憶が殆ど無いんだ。ここにニルヴァーナがあること、それくらいは記憶しか……君は俺にとってのなんなのか、ここで目覚めた理由は？分らないことが多すぎる」

かつての友であり、敵でもある彼の悲痛な姿に、エルザは口を閉ざしかけたが、今彼を救えるのは一番近くにいた自分しかない。ならばやることは一つ、己の言葉で真実を伝えることのみ。

「……私はエルザ、エルザ・スカーレット。かつてお前と共に過ごしてきた囚われの身だった者だ」

「く、来るな！」

「そしてお前はジェラール・フェルナンデス、かつて囚われの身でありながら悪に染まり、仲間にも手をかけた。それを、そんな大事なことを忘れただど!?そんな腑抜けたことを言うなら、私がこの手で思い出させよう！来い、ジェラール！」

「俺が、人に手をかけていたなんて……くそ、くそお……」

「ジェラール……」

「通りで心が読めねえと思ってたらよ、そういうことか。釈然としねえが、納得したぜ」

コブラは全てとまではいかなくとも、多少なりとも納得がいった。記憶が無いのなら、心を読んでも得られる情報が少なく、聞き取れるほどの感情が流れない。だから姿を見せ、ここからは動くしかない。

「テメエ、ここで何をするつもりか知らねえがよ、手っ取り早くそのブツを貰ってい
ぜ」

「そうか、そのつもりなんだね、君たちは。だけどこつちも無策じゃない」

「っ!?自律崩壊魔法陣か!くそ、ニルヴァーナにも自分にもかけてやがるとは!」

自分が悪にこれ以上染まらないために打った手は、自律崩壊魔法陣による自殺、もとい『死なば諸共』の特攻に近い方法だ。

「ほう、自律崩壊魔法陣とは考えたな」

「ブレインか!こいつ、ニルヴァーナと一緒に消え去るつもりだぞ!どうすんだ!」

「そう焦るな。そもそもそいつにその魔法を教えたのは私だ。解除方も心得てるとも、ブレインの名は伊達じゃない」

「なっ!?ここまではか……」

「ふふふ、ニルヴァーナの搜索と起動、感謝するぞ。おかげで手間が省けた」

自律崩壊魔法陣を壊し、すぐさまニルヴァーナを起動させる。全ては計画通りだ。

|| || ||

「これ以上先には行かせないゾ」

「私たち3人に勝てるかしら？」

「切り甲斐がありそうだね」

ナツを追う最中、エンジェルと墮天使姉弟と遭遇した。目的の為に連合軍の足止めをしようというのだ。

「星霊魔導士として、負けられない！」

「墮天使は私とユリアで倒しましょう」

「私らだって、コンピネーションは負けないよ！」

途中離脱したウエンディはここには居らず、3対5の光と闇をかけた争いは、ユリアの魔法から拮抗状態が動き始める。影で作った鴉の刃と毒の弓が飛ぶ。

「『シャドー・レイブン』、『ポイズン・アロー』！」

「弱い弱い！この程度なら僕の斬馬刀の敵じゃない！」

「貫け、『生命神の剛拳』！」

「隙ありよ、『水人形のワルツ』！」

「『身発勁』！」

身体に触れた魔法を弾くように消し去る。再び静寂が訪れ、一陣の風が間を駆け巡る。

「この二人の相手は我々が。姉さんはエンジェルを」

「了解したよ」

「貴女ごときの星霊じゃ私は倒せないゾ」

星霊魔導士同士、神の子達と墮天使。相見える両陣営は決戦を覚悟する。

第38の唄 魔獣変化

第38の唄

「人間の割に良くやるね」

「お二人は人の可能性を見出せなかった。だから墮天などするのでしょ」

「私たちの愛の前に人間どものチンケな感情など些細なものよ。それを理解しなかったのは貴女たちでは？」

武による戦とともに舌戦による問答が繰り広げられるが、平行線を辿るだけで交わることはない。

「『土人形の舞』！」

「『シャドー・ハンマー』！」

「あの二人、やり始めたか。じゃあ、こっちの相手は君かな？」

「そのようですね。『波動バースト』！」

余裕の表情を崩さぬ墮天使に、神の子は攻める。未来を作るためにも。

|| || || ||

ニルヴァーナが発動したことであたり一帯の森林にも影響が出始めている。搜索を

行いうイヴやレンがまず察知したところでは一部の木がニルヴァーナに似た黒い瘴気を放ち、木自体が黒く染まっている。

「これは、なんなんだろうね」

「ニルヴァーナってやつの影響か？通信できねえのもそれが原因かもしれないな」

「早く見つけないと……ウエンデイちゃんたち、無事だといいいけど」

ニルヴァーナの影響はここだけではない。グレイと共闘しに行ったりオンとシェリーと離れているジュラと戦うホットアイにもニルヴァーナの本来の力が働いている。

「ぐっ、ノオー！」

「何事だ!?ニルヴァーナが出てから様子が……」

「私は、私には金……など必要ないデス！」

「えっ……はあっ!?!」

先程までは金のために戦っているなどと述べていた目の前の人間が、急にそれを前言撤回し、厄が落ちたかのような慈悲深い顔をもって愛を語り出した。

「私は弟を探すためにこのギルドに入ったデス！ですが、今気づきました！このままで私は弟に合わせる顔がナイと！世の中には愛、ラブが必要デス！」

「え、ええ？」

「さあ！私たちの手で他の皆さんにも愛を伝えるのデス！」

「(ど、どう対処すれば良いのだ?)」

このように様々な現象を引き起こす事態の元凶、ニルヴァーナを巡って今戦闘が繰り広げられる。

＝＝＝

「真つ二つにしてやる!」

「やたらめつたらに振り回して……くっ!」

真横に振り回された大剣をくぐり抜け、体制を低くして好機を伺う。

「でえい!」

「そっ!」きれつ・どうかいきやく『氣烈胸廻脚』!」

大剣を振り上げた所に攻め時が有る。その直感に従って低い姿勢から脚を回し、頭めがけて天を廻る脚を打ち降ろす。空手の技、『回かいてんどうまわしげり転胸廻蹴』の応用である。

「ぐえっ!」

『ブラッド・ランス』!

『波斬撃』!」

追撃をすれど、頑丈な墮天使はすぐに体制を立て直し、相殺を狙った波攻撃を繰り出す。衝突する両技が煙を上げ、それが晴れると、シリルの脚が顔面を捉えた。

「浄化されなさい、『神ホルテイツク・シユート氣烈脚』!」

「ぐっ、がはあっ！」

「終わりです」

「まだだ、まだ終わらせないよ。かああああっ！」

隠し球を持ち合わせていたのだ。はだけさせた胸の中央には柘榴石のような水晶がはめられており、それが彼のパワーを引き出していたのだ。その力を解放した時、人間の姿から悪魔の本来の姿へと変貌する。

『これが僕の力だ！』

「まだ隠し玉があつたなんて……あの水晶を壊せば……」

『余所見なんて随分と余裕だね。ウヒヤア！』

「（速い！）」

『リアットオ！』

「ガハッ！」

ガードのために纏った神依・腕と胴がまるで意味をなさないような猛スピードとパワーがシリルを襲い、後ろで戦っていたユリアやルーシィを追い抜くくらいの距離を吹き飛ばされる。

「（一撃が重すぎる。神依を纏っても痛みがこんな酷いなんて……骨が軋むし、血管が切れてしまったわ）」

猛獣のような驚異的な腕力により、十数メートルは飛ばされてしまい、骨は折れかけ、岩にぶつかって血が飛び、痛みで体の動きが鈍くなる。

『アヒヤヒヤ、やつぱり人間は脆いね。まだ序の口のつもりなんだけどな』

「あの、一撃が……ぐっ……」

膝をつくシリルにイブリスは飛び、噛み砕かんと大きな口を開く。まともに動くことも叶わないシリルは丸ごと飲み込まれた。

「お姉ちゃん！」

「シリル！」

『捕食完了。これで敵はいなくなっても同然だよ』

終われば呆気ないとばかりに他の獲物を見渡す。だがその時、急に顔が歪む。身震いが起こり、痙攣を起こし始めた。

『お、お(い)……』

「神の力を喰らおうなぞ、無謀な真似をしますね。それにそれは我が分身体、途中ですり替えておいたのですよ」

『うが、うがが……ど、どうなってる。確かに食らったはず』

「相殺した時に分身と入れ替わったのです。私の魔力は貴方の体内に残っている、ならば貴方のその水晶、内側から壊してみせましょう」

シリルの本体は先ほどまでイブリスのいた場所に立っていた。右手を前に突き出し、詠唱を唱えて拳を握る。死に様を悟った墮天使は、大いに慌て、再び食ってかかろうとする。

『や、やめろ！ウガア！』

「慢心は命を殺す。今度こそ浄化してあげましょう、『血気葬送』！」

『ぐ、ブベラッ！』

魔獣の牙が触れようかという時に、その体は水晶ごと木つ端微塵に砕け散った。生命の巫女と言えど、相手に手をかけることがあるのだ。多くの無垢なる命を守るためならば。

「輪廻を廻り、今度は綺麗な魂として戻って来なさい」

シリル対イブリス。勝者シリル！

第39の唄 古代都市の上を目指して

「すごい！私も負けられないね！」

「そんな……イブリス……私を置いて逝ってしまふなんて。絶対許さないわよ、生命の巫女！あの『フヨウ村の壊滅』同様、消し去ってやるわ！」

愛する弟を失い、平静を装うことすら出来ないほどに我を忘れる。

「まずは貴女からよ！『四元素の人形劇』よ、その女を切り刻め！」

「お姉ちゃんたちには手エ出させないよ。略式詠唱『神の啓示書3の6・鬼門！シヨックウエーブ！』」

修行の成果か、数字の低い啓示書なら詠唱を略して唱えることが出来るようになり、困う人形どもを闇に飲み込み、破壊し尽くす。

『ギャオー!!』

「いいところに来た！『波乗りの型』！」

「何よあれ、破天荒すぎるわ」

「一気にGO！『シャドーバイク』！」

水の魔獣に跨り、一気に詰め寄り、ガードの上からカスピエルを張り倒し、喉輪を蹴つ

て水面を横滑りしながらダメージを与えていく。

「ひゃっほう！」

「げほっ、ごほっ！野蛮な女ね。『水上の太刀』！」

「よっ、はっ！」

「(舞った!? 剣を踏んで飛ぶなんて……)」

『淵黒握』、シユート！」

太陽を背にした少女の拳が顔面にあたり、上を見上げていたカスピエルはそのまま全身を川に叩きつけられ、後頭部が岩にあたり、還らぬ人になった。

「私の拳は痛いよ」

「流石ねユリア、私の知らないところで強くなってるんだもの」

「これでこっちは片付いたし、ルーシィ姉ちゃんもどうにかしたみたいだね。ねえ、一つ聞いていい？」

「何かしら？」

「さっきの敵、『フヨウ村の壊滅』って言ってたんだけど、知ってる？」

何気ない質問をしたつもりだった。気になる事を言っていたのだ、それを知っていれば聞こうと思つてのことだ。

「……確かにその村の壊滅は知ってる。でも今はその事を話せないわ、どうしても、誰に

もね」

「そっか、でもいつかは話してよね！」

「ありがとう。その心だけで私は救われるわ」

少し難しい顔をしていたシリルは束の間の笑顔を見せる。その時、一際大きな揺れが起きて森を揺さぶる。

「揺れが……」

「お姉ちゃん、あれ！」

「黒から白になってるわね。もしかしてこれって……」

「段階が進んだんだ、より一層精神への干渉力が上がったと思ってくれ」

腕を負傷したヒビキが説明をしてくれた数段階あるうちの二段階目があの白い光の柱だという。しかもあそこまで行けば本体のニルヴァーナ出現までそう遠くない。

「ルーシイくんはもう既に動いてくれてる。僕らも出よう」

「そうですね。(フヨウ村……私の産まれた村を壊滅させたのはあいつら、ね。今はそれしか分からない、だからこそいつか……)」

「(お姉ちゃん……難しい顔してる。よし、私が頑張らなきゃ!)」

ニルヴァーナをこれ以上復活させてはならない。それぞれのやるべきことのため、ただひたすらに突き進む。

|| || ||

「ふふふ、これで万端。出でよ、ニルヴァーナ！白を黒に変え、それを正義へと塗り替えよ！」

「やらせん！」

「邪魔させねえぜ。いけ、キュベリオス」

「くっ！」

毒蛇の脅威を身を以て知っている彼女が避けている隙にニルヴァーナが地中から姿を見せる。直近にいた彼女とジエラールは空に浮かばされながらも手を取り合い、脚柱にしがみつく。

「捕まれ、ジエラール！」

「エルザ！」

離れた森を突き進むシリルとユリアも顕現を視認し、空を舞う。

「あれがニルヴァーナ……ユリア、飛ぶわよ！」

「アイアイサー！」

味方になった天眼ホットアイとジユラも柱を登り、側面から上を目指す。

「ジユラさん、気をつけるデスネ！」

「うむ！」

ニルヴァーナが姿を現し、本性に赴くままに動く中、希望を携えた者たちはそれを破壊するために乗り込んでいく。未来を変えてみせるために。地上に残った連合のメンバーはそれぞれビビキの指示により、ある計画を実行するために一箇所に集まる。

「みんな乗り込み始めたよ！僕の指示に従ってクリスティーナの墜落地点まで急行してくれ！」

「了解した」

＝＝＝＝

「これがニルヴァーナか。まさかこんな古代都市があつたなんてな」

「この魔法はかつてニルビット族が作り上げた善悪反転魔法だ。これさえあれば我らの目的も成就出来よう」

「で、どこに向かうんだ？」

「ニルビット族末裔のギルド、『化け猫ケットシエルターの宿』だ」

コブラとブレインは古代都市を操り、目的の障害を封印するため、歩みを進める。

第40の唄 善悪の狭間で戦え

「ニルビット族？なんだそれは？」

「このニルヴァーナを創り上げた一族であり、封印する術を持つ忌まわしい奴らよ」「成る程な、そいつらを片づけりゃあこの魔法も封印されなくて済むって訳か」

創造者なら操り方から封印法、破壊の仕方も熟知しておかしくないし、そのような者たちが居たら計画も瓦解しかねない。一番最初に狙うべきはそこになる。

「進もう。この都市は我らの根城となる！」

進路を『化け猫の宿』へ。本格的に起動した瞬間、空から奇襲が起こる。ナツだ。

「俺が止めてヤラア！」

「こいつは……！コブラ！」

「おうよ！キュベリオス、飛べ！」

「なっ!?あの蛇、飛べんのかよ！」

「テメエはここで止めてやる」

羽の生えたキュベリオスに乗るコブラと相對するナツ。自分の体質上地面に降りれないことから、空中で拳を交えることとなる。

|| || ||

「着いた」

「ここが、ニルヴァーナ……まるで国のようね」

「でも誰も居ないよ？」

「封印される前のものがそのまま残ってたのかしら？」

シリルとユリアがたどり着いたのは旧都西部。長年の間使われていなかったのか、朽ちかけた建物が多い。この都市の中にあと数人は敵が残っているのだ。動かなければ何も始まらない。

「シリル、ユリア！無事か！」

「グレイ兄さん、ルーシー姉さん！ジュラさんも！」

「あれ？四角い人敵じゃなかったっけ？」

「今は味方だ、ニルヴァーナの影響でな」

「愛、ラブこそ至高！」

「すごい変貌ぶりですね」

追いついてきたグレイたちと共に来たのはホットアイだが、かなりの変貌ぶりに少しばかり引いてしまう。

「……まあ、敵対する気がないならこれでも良いでしょう。この後は？」

「この魔法を止める方法、あるいは破壊法を探らねばな」

「あの塔のてっぺん怪しくねえか？」

「目立ってるね」

グレイが指差した方にはたしかに怪しげな塔が聳えたち、威圧する。その塔の天辺には何か操縦する方法が見つかるかもしれない。もしかしたら敵がいるかもしれないが、その敵を倒せば何か聞き出せる可能性がある。目指して損はないだろう。だが、それを止めるようにやって来たのはミッドナイトだ。

「まさか本当に裏切るなんてね、ホットアイ」

「私は自分の心に従ったまでデスネ。貴方も心を入れ替えるべきデス。そうすれば見える世界も変わりマスデスネー」

「軟弱になったね。ここで消し去る」

「皆さん、塔に向かうのデス！ミッドナイトは私が相手しますー！」

まさかの同士討ちが始まる。ジュラが心配そうに声をかけるが、自分の本名を告げると共に、無事に戻ることを告げて先を急かす。

「ジュラさん！ここはホットアイ、いえ、リチャードさんに任せましょうー！」

「うむ。ここで彼の心遣いを無駄にしてはいかな」

それぞれの思う未来のために、2つの祈りは戦いを決意する。

「君が挑んでくるなんてよっほどだね」

「私も変わったのデス。行きますヨ！」

「落ちぶれたね、君も」

＝
＝
＝

「どうやら傘下ギルドのようだ」

「囲まれちゃったかしら？不味いわね」

「こういう時にやることと言えばーつじやないですか、ルーシイ姉さん」

「だな。ぶっ飛ばす！」

リチャードと別れ、塔に向かう一行を取り囲んだのは『流れる七星』の傘下ギルドだ。

どうやら空を飛ぶ術を持ち合わせていたらしく、上空から現れた敵に囲まれる。

「よくもイブリス様とカスピエル様を！敵討ちじやあ！」

「Shoot！」

「えっ？ブベラッ！」

「よ、よくも同士を……かかれえ！」

「手伝うぜ。アイスメイク・ランス！」

どうやらあの2人の墮天使の直接の配下らしく、激昂しながらやつてくる野郎どもをチーム力を持って撃墜していく。聖十のジュラもさすがと言うべきか、傷一つ負うこと

なく全員を蹴散らす。

「ふん！」

「グハアツ！」

「こいつらには聞きたい事が。先に塔へ」

「シリル、もしかして……」

「ええ、そういうことです。行つてください」

少し切り傷ができたものの、大方片付き、皆を先に行かせる。その後ろ姿が見えなくなったところで意識の残っていた男を問い詰める。

「十五年前の『フヨウ村の惨劇』を知ってます？」

「な、何のことかねえ……」

「惚けても無駄よ。これ以上傷を増やしたくなかつたら素直に答えなさい」

「くっ……俺たちは頼まれただけなんだ、イブリス様によ。とある魔法の詰まった箱を運べと」

観念したのか、滔々と語り始めた。曰く、あの日、墮天使どもに頼まれて箱を運び、開封するようにと。その中には病原菌に似た魔法が詰められており、あの日の悲劇の原因となるものが拡散されたこと。それを直前まで聞かされておらず、なぜあの村を狙ったのかは聞いていないこと。

「そうですか。分かりました、貴方はこのままにしておきましょう。本当なら色々吐かせたい気持ちがありますが、私にもやることがあるのでね」

「まさかあの村に子供が居たなんて……今更だけど、本当にすまねえ」

「ふん。その言葉、信じますよ……今からでも真つ当な生活を送りなさいな」

その場を立ち去り、皆に追いつくために駆け出した。その先にある絶望を知らずに。

第41の唄 ゼロと作戦

「なんか大きな咆哮が……ナツ兄さんでしょうか」

ニルヴァーナ全体を揺るがす獣のような咆哮に何故か勝利を確信する。あのナツだ、負けるはずもないだろう。そう信じて塔に向かっていると、何故かエルザと倒れたジェラルル、気絶したミッドナイトに出くわす。

「姉さん！」

「大丈夫か？こちらも今しがた敵を倒したんだ」

「良かったです……」

「塔の方で爆発があつたが、何か知ってるか？」

「兄さんたちやジュラさんが向かいました……」

「まさかな」

「少し様子を見てきます！」

「おい！まったく……」

居ても立っても居られないとばかりにエルザとの話を切り上げ、全速力で塔まで向かう。すると、そこから出てくるのは六魔に居なかつたはずの色白の大男だ。

「ほう、まだ生き残りが居たか。丁度いい」

「貴方は何者です？ 敵、で間違いなさそうですが」

「これから死ぬつてのに……俺はゼロ、このギルドの真のマスターさ。あの坊主、俺のもう一人の人格によくやってくれやがって」

六魔のマスターと名乗る男、ゼロ。後ろをむけば、倒され、傷だらけの仲間たちが眼に映る。間違いない、目の前の男がやったのだ。

「よくもみんなを……」

「テメエもあいつらの仲間ってんなら、ぶっ壊してくれろ！」

『『生命神の剛拳』！』

「緩いな。はあっ！」

「ぐっ！」

「まだまだこれからだろうが！ 『常闇奇想曲』！」
ダークカブリチオ

ジュラの岩鉄壁さえも貫く魔法がすぐさまに追い打ちをかけ、壁に打ち付けられた少女の肩にいと也容易く穴を開けていく。

「（か、肩が射抜かれるなんて。分身を出す前に撃たれるとは……）」

「ははは！ まだぶっ壊れてねえだろうが！」

「言ってくれますね。『血縛鎖牢』！」

「何だ、この程度か？ふん！」

痛くも痒くも無いと言わんばかりに片腕をひねれば、神の鎖をも引きちぎってみせる。

『生命神の一声』！

「ぐっ……ふむ。俺に傷を付けるたあ他の連中より骨がありやがるな」

「伊達に修羅場は潜り抜けてないんで」

「ふふふ、フハハハハ！抜かしやがる！『常闇奇想曲』！」
ダークカプリーチオ

「同じ手は食いませんよ」

「どうかかな？」

ただ岩を貫いて削る怪光線ではなかった。真横を通り過ぎたはずの魔法は下から出てシリルの身体に傷をつけ続ける。しかも変幻自在に曲がりうねって、連打を浴びせてくる。

「ぐっ、うあつ！」

「テメエは確かに他の奴らとは違いみてえだがそれもここまでだ！沈め！」

『『ディオ・アモーレ』！』

「なっ!?がっはあ！」

防戦一方になっていた彼女に油断していたのか、ジュピターと相打ちになった大魔法

がかすった程度とは言え、ナツたちを一方的に打ちのめしたゼロを吹き飛ばした。

「二矢……報いましたか」

「何だよ、面白くねえな。ちっ」

だが、あまりにも傷が出来すぎた為に一発を放つのがやっと。魔力の急激な消費と出血により、前のめりに倒れたシリルに興が削がれたのか、目的のために多少の破壊をするのも躊躇われ、またしても王の間に向かうべく去って行ってしまふ。

「結局俺の破壊衝動に耐えられたやつなどいかなかったな。あの『化け猫の宿』も今の俺の前に屈する」

王の間から見下ろす先にはウエンディとシャルルのギルドが肉眼で捉えられる位置にあった。かつてこのニルヴァーナを作り上げた一族の末裔の暮らすギルドだが、ゼロからすれば潰すだけのただの的だ。

「今こそ完全に破壊し尽くしてやる！ニルヴァーナの魔導砲、とくと見よ！発射だ！」

無慈悲なる号令が下され、前方から唸りが響き、ゼロの高笑いとともに撃ち放たれようとしている。

光は闇に屈すると思われた瞬間、砲撃は狙いを外して上に逸れてしまふ。有り得ない光景にゼロがイラついた顔を振ってみると、空には撃墜されたはずのクリスティーナがそこにあつた。地上に残ったメンバーが応急処置を施し、それぞれの魔法を持つてなん

とか浮かせていたのだ。

『みんな、無事かい!?』

「ヒビキか！私とウエンデイ、シャルルは無事だ」

『良かった、居るんだね！実はニルヴァーナの破壊方法が分かったんだ。今のはイヴの雪魔法を混ぜた一発なんだけど、これ以上は飛行も迫撃砲も無理なんだ』

「何かあるのか!?!なんでも良い！『化け猫の宿』が狙われてる、急いでくれ！」

『それは、今伝える』

ヒビキの魔法、『古文書』を遡ってみたらニルヴァーナに関する情報に行き着いたのだ。そこに記されている限りでは、古代都市を動かして支えている脚の内部にラクリマがあり、そこを同時に破壊することで一気に崩壊を招くことが出来るそうだ。

『脚は全てで8つ！分散して1人一脚に当たって欲しい!』

「ご、ごめんなさい。私、破壊魔法なんて持つてなくて……」

『それなら……』

「ここには2人いる。もう1人私のそばに魔法を扱える奴がいる」

『それなら私にお任せください、メエーン』

念話を通して志願したのはいつの間にかこの都市に入り込んだ一夜だ。彼の持つバルファム香りには筋力増強用があり、今回の任務にはうってつけだ。

「あとは5人だ！誰か、誰か返信してくれ！」

『それは無理って話だよ。ちよいとハッキングさせてもらって聞いてりやあ物騒なこと
を言ってくれてよ』

念話を突然ジャックされ、皆にゼロの声が聞こえてくる。彼が何を言うのか、皆が警戒しながら聞いていると、思わぬ凶報がもたらされる。

『今しがた火竜、星霊使い、氷の造形士、生命と冥府の巫女を倒してきたところだな。更に俺はラクリマの真ん前にいる、人数が揃っても無駄なんだよ！はははははっ！』

「ナツたちを……念話が切れたか」

『不味いね。このままでは人数が居ないよ！』

そう、この作戦に参加している人数から倒された5人とクリスティーナに乗る人数、そして応答した人間から計算した結果、8本ある脚に向かえる人数に足りないことが判明する。だが、ここでやられっぱなしのままじゃないはず、必ず皆の声に伝えてくれるはず。祈るように呼びかける。

「ナツ、答えてくれ。お前なら……」

「ユリアちゃん。立って、声を聞かせて」

『グレイ、お前は誇り高きウルの弟子だ。ここで屈するような教え方はされてないはずだ。立て、立つんだ。今こそウルの教えを実践する時だろ』

『私、ルーシイなんて嫌いですわ。でも、今ここで死なれたら嫌みも言えませんわ。だから、早く答えなさいな』

『みんなが期待している。聞こえているよね？』

「ああ、聞こえてる！」

「私は……守るもののため、このままでは死ねない！」

仲間の声が力を分け与えてくれる。ゼロに墜とされた妖精たちは再び立ち上がる。

第42の唄 喪失の紅

「聞こえてる。大丈夫だ」

『良かった、一時はどうなるかと……』

「とりあえず、その脚の部分に行けば良いのね？」

「そしてラクリマをぶっ壊すんだな？」

もう残り少ない絞りかすほどの根気と根性を捻り出し、どうにか立ち上がる。魔法も尽きかけ、体の力も弱々しいのに、大事なものを守りたいという使命感が彼らを突き動かす。

『僕の魔法もあと少ししか持たなそうだ。マップを送る、今のうちに行くラクリマを決めてくれ』

「っ！マップが勝手に……すごい」

「俺は一番に行く！」

「私は七番に行きます」

「私8ね！」

次々と行くべきラクリマを定めていく。口を挟みそうになったジェラルルの行く先

をエルザが制する形で指示をし、それぞれの行くべきラクリマへと散っていく。

|| || ||

『シリル……貴女は今、力も志も仲間も手に入れた。では、それを失った者を見て貴女はどう動くのでしょうか？これは、ある意味試練の1つ』

聖なる祠に神霊体として聳える生命神は静かに語る。人は失う悲しみを知って強くなるか、はたまたそこで歩みを止めるか。その岐路に今から飛び込もうとしている愛娘を静かに見守るしか出来ないが、これも人のために生きる神として大事なことだ。

『さあ、貴女の魂の高潔さ、見せる時が来ます。怯まず弛まず、示し続けなさい。私の愛する子よ』

|| || ||

「ここが、七番ラクリマ……無茶するなんて、私らしくもない」

力も使って少なく、傷だらけになっている今、やってくるのだけでもかなり負担になっている。つつい自虐的な言葉を紡いでしまうが、今はそんな余裕もない。8個のラクリマを同時に破壊せねばならない今、頭に残るタイマーが唯一の合わせる方法となる。

「私は、この力を今使わずしていつ使うっての。困ってる人がいるならやるしかない」

握りこぶしを作り、静かにその時が来るのを待っていると、ゾワリ、と背中に悪寒が

走って嫌な汗が噴き出す。入り口に待ち構えていたのは怨霊にも化け物にも似た恐ろしい異形のモノだった。

『オゴ、アガガ……ブリュリヤヒエア!』

「なんなのよ、こんな時に。しかも何よこれ」

『グゲガガ……ワレニ生キ血ヲ与エヨ。魂ヲ捧ゲヨ』

「何を言うのかしら? この化け物」

『ワレニ捧ゲラレシ命、コノニルヴァーナニ眠ル同胞ノタメ……グギヤラバア!!』

その異形のモノは自分がニルヴァーナに堆積された怨念の集合体であり、兵器だと語り、魂と生き血を欲する。全ては死んでいった者や善悪に翻弄された者たちの為に。

「もう、身勝手な奴ね。浄化するわ」

『グツギヤオン!』

真つ直ぐに、かつ荒れ狂いながらやってくるニルヴァーナの亡霊をいなし、数少ない魔力を効率よく当てていく。大技が出しにくい今は繋いで倒すしかない。

「せえい! やつ、はっ! 『気功蓮華』!」

連撃に次ぐ連撃が少しずつ亡霊を引き剥がしていく。亡霊を吐き、剥がし、少しずつ動きが鈍る中でも闘争心まではひきはなすことはできず、シリルと後ろにある壁を吹き飛ばしていく。

「(足場ごと崩すなんて……でも!) 『血縛鎖牢』!」

外へと弾き出された体を引き戻すためにフックシヨットの要領で、外と内を繋ぐ穴に鎖を引つ掛ける。追い討ちをかけてくる化け物を元いた位置に戻す強烈な蹴りを浴びせ、再びラクリマの前で相對する。

『ナゼワレヲ邪魔スル。人間ハ難シイ』

「貴方のしようとすることはただの破壊よ。私は生きる人間の味方をしたから、貴方を止める」

『分カラヌ』

「でしようね。(さて、あと2分強しかない今、このまま冗長な戦い方をしていては間に合わない。それじゃあ、なりふり構わず無理をしましょうか!) 『生命神の剛拳』!」

後で動けなくなるなど、いま気にしてはいれられない。遮二無二突き進むのみ、そう心に決め、大技を繰り出していく。

「『氣烈胴廻脚』!」

『グゲラツ! ジャカアシイワイ!』

「もう貴方のあるべき場所はこの娑婆にはない! 消え去りなさい!」

派手に亡霊が消えていき、当初に比べてかなり小さくなつていく。この化け物はニルヴァーナと一心同体であるから、本体と共に浄化できる。

『氣功掌』！』

投げ飛ばした先にあるラクリマに大きな気の弾丸を打ち込み、ゼロ秒丁度に破壊した。皆も同じように破壊できたようで、大きな揺れと共に瓦解していく。瓦礫が落ちてくる中、少しずつ消えていく化け物を見送ろうと、膝をつきながら語りかける。

「これで終わりです」

『ワレハ、ワレハヨウヤク解放サレルカ。アリガトウ』

「それは重畳。(やつと終わった……でももう動けそうにない)」

『セメテモノ礼ダ、外ニ飛バソウ。サラバダ、生命ノ巫女ヨ、オマエノ才陰テ輪廻ヲ巡レル』

「な、何をつ！きやあ！」

最期の力を振り絞ったのだろう、先ほど開けた穴からシリルを投げ飛ばし、笑みを浮かべて完全に消え去った。

『我々はとうに死んだ身、今ここで浮世の縛りを解いてもらえた。有難う、あとは頼みます』

|| || ||

「まさか無事に戻ってこれるなんて……」

「お姉ちゃん大丈夫？木に引つかかっていたから」

「歩けそうにないわ」

「私が背負うよ。よいしょっと。ほら、みんなあそこに……」

ラクリマに向かった皆もほぼ無事で、出てきていないのはナツとジェラールだ。

「シ ril 達が無事つてことは後はナツだけだな」

「(ナツ、ジェラール……戻ってこい。何をしている)」

「それなら、心配には及びません。私が助けましたデス」

「うわあ！あれ？この人……」

「リチャード殿！ご無事で何より！」

地面が軟化して、穴を開けて出てきたのはホットアイもといリチャードだ。どうやら気絶状態から復帰し、ジェラールとナツの救助をしてくれたらしい。これで全員無事、仕事もこなして何もかもが円満に終わる。そのように思えた。しかし……

「みなさん、そこを動かないように。ああ、脱出しようにも術式の魔法陣を敷いてありますので無用な策は弄さないように」

「評議員!? つーかもう評議会復活したのか!？」

「これはどういうつもりですか? ラハールさん」

「申し訳ありません、生命の巫女殿。今回我々新生評議会は悪の根絶を目指してまして……他の者は捕らえました、そこにいる天眼ホットアイをこちらに差し出していただき

たいのです」

強行検東部隊長ラハールの任務はオラシオンセイイス捕縛であり、他のメンバーは捕獲済みなのだ。これに関しては絶対に譲れないとばかりに眼鏡を光らせる。

「お待ちください！この方は確かに悪事を働きましたが……」

「その通りだ！どうにかならぬか隊長殿」

「情状酌量はこちらで決める事。いくら恩あるお2人の言葉とて今回ばかりは聞き入れられません」

「良いのデス、シリルさん、ジユラさん。確かに悪事を働き、禊ぐことのできない程に重ねましたデス。ならばせめて……」

「そうか。ならば我らで出来ることをしよう。言ってみよ」

「それならば、生き別れの弟を探して欲しいのデスネ。名はウオーリー、ウオーリー・ブキャナンデス」

その名に何人かは思い当たる節がある。そう、楽園の塔の一件以来友人となった四角いダンディな男の名前だ。彼が今、別の友人とともに大陸中を元気に旅していることを告げると、リチャードの目から大粒の涙が溢れる。

「ああ、これが光を信じる者に与えられた奇跡か。ありがとう、これで私は心置きなく罪を償いに行ける。ありがとう……ありがとう！」

|| || ||

「なんか寂しい背中ね」

「仕方ねえさ。罪を丸ごと消せるなんてことは出来やしねえさ」

「生命の力の1つ、それが反省して次に罪を重ねないための努力ですから。ラハール隊長、そろそろ術式を解いても良いのでは!？」

リチャードを見送り、ラハールに目線を送るが、静かに頭を横に振られた。まだ用は済んでいないようだ。

「確かにオラシオンセイブ捕縛に協力なさってくださいましたこと感謝しますが、我々の本命は彼らにあらず」

「私たちの捕縛をする?意味がなさそうですが」

「いえ、貴女方ではありません。そこにいる男、旧評議会の崩壊を招いた大罪人。お前のことだジェラルド!我々の縄に大人しくつくことだ!」

それも彼らの理だ、死んだに思えた男が目の前にいる。それを捕らえる好機はこれ以降でないだろう。

「待ちなさいな、彼の記憶はほぼ無い。捕らえたところでどう捜査するのです?」

「彼の体内にあるエーテルナノ濃度はあのエーテリオンを喰らった影響が確認できましたので。前に見せましたね、この魔力判定機?」

「いくら貴方とはいえ、記憶喪失の人間を死刑、なんてことは言いませんよね？」

「いえ、間違いなくそうなるでしょう。良くても終身刑や無期懲役止まり。残りの一生を牢の中なのは間違いありません」

「もういい、シリル。俺はそれだけの罪を重ねたんだろう。せめて最後は潔くさせてくれ」

まるで死を受け入れるかのような言葉に、仲間のことを思っただけか、生命の巫女として逆鱗に触れたのか、しばらく湧かなかつた怒りが頭を埋め尽くす。

「……貴方はそんなので良いんですか!!せつかくエルザ姉さんと会えたというのに、こんな結末で!!死ねば終わるなんて甘えを言わないでください、この後彼女がどんな十字架を背負うことになるか!」

「それ以上は言うなシリル!私は構わない、それさえも背負って前に進もう。濟まないが彼を……連れて行ってくれ……」

遮ったのはエルザ自身の涙に震える声だった。もう出会えないと思っていた最愛の男とこうして話して手を触れられただけでも自分にとっては嬉しかった。決してこの別れが最後だと思いたくない心もあつたが、ここで弱さを見せたくない。

「ありがとうエルザ……そうだ、お前の髪の色だ」

「っ!?!」

「最後に思い出せたよ、綺麗な『紅髪』スカーレットの由来を。さらばだ、もう出会うことは叶わないだろうけど……」

「あ、ああ……」

その日、日暮れに照らされた綺麗な紅髪を持つ女性は涙にくれた。最愛の人の出会いと喪失、もはや叶わないかもしれない愛を知り、孤独な雫が大地に降りたのだった。

第43の唄 涙の別れ

仕事は終わった。心身に大きな傷を負った者もいたが、概ね問題もなくニルビット族の村まで戻ってこれたのだ。

「うわあ、この着物かわいい！」

「これはニルビット族に伝わる織物です。気に入ってもらえてよかったです」

「そういえばシリルさんはどちらに？今朝から見かけませんわ」

「マスターが用があるってどこかに行ったわ」

ニルビット族特有の召しものに袖を通してある女性陣がいる一方でシリルは一人、静かな丘で独白を続けていた。最後は仲間のエルザの心を救うことが出来なかった。それが自分の弱さなのだろうか、これが試練なのだろうか。

「正直私も状況が整理しきれない。犯人が分かってもこれからどう立ち直れば……お父さん、お母さん、生命神よ……私はまだ弱い。今の私には何ができると言うの？」

心にできた鎖が思考を暗く落とす中、草を踏み分ける音と共に『ケットシエルター化け猫の宿』マスターのローバウルが心配そうに声をかけてきてくれた。

「……ここにおいででしたか？お時間がよろしければ、なぶら少しばかりよろしいです

かな?」

「マスター・ローバウルですか。何でしょう?」

「これから皆さんにお話しすることがあるのですが、貴女にだけ先になぶら伝えておきたく存じましてな」

それはギルドの秘密、彼自身の秘密、そしてニルヴァーナの誕生の経緯だった。とても重く、悲しい歴史の爪痕。

「……ということですよ。どうか、ウエンデイとシャルルを頼みます。なぶらこの通り!」
「頭をあげてください……貴殿のおかげで私にも決心がつかしました」

「そうですね。なぶらありがとう。さき、どうぞ村まで来てくだされ。新しいお召し物を用意してますので」

「お邪魔します」

＝＝＝

「さて、皆様に集まっていたいたのは他にもございません。あのニルヴァーナと我々ニルビット族の事です。今まで黙っていて申し訳ない」

「良いっての。俺らはどこの誰だろうと味方なら深く詮索しねえよ。なあ?」

「あい!その通り!」

「しかし、この事は例えどんなことがあろうと言わねばなりません。先に巫女殿には伝

えましたが、我々はニルビット族の末裔にあらず、四百年前に滅んだニルビット族そのもの、つまりは亡霊なのです」

その言葉は皆を驚愕させるには十分で、ウエンデイに至っては信じたくないとやわんばかりの表情だ。当たり前だ、家族同然に仲良く暮らしていた身近な人々が死んでいったなどとは到底信じられまい。

「ニルヴァーナは我ら一族の暮らしていた国。されど、過去の大戦で溜め込まれた厄は必ずしも良面にばかりは作用しない。ニルヴァーナの反転魔法は我々に降りかかり、ワシ以外の村人全員が亡くなってもうた。当然ワシも人間、永き時を生きられない。亡霊となり、この世にとどまってあの魔法を壊せる者を密かに待っていた」

「そんな、そんなこと信じたくは……」

「そして、心が荒ぶワシの元に姿を現したのは青髪の青年。そこにおけるウエンデイを置いてな。それがこのギルドの始まりでもあった」

「1人のためのギルド、なのね？」

生きる希望を与えられ、ギルドのメンバーを自身に残された残留魔法により、実体を持つ亡霊を作り上げたのだ。

「やめてマスター！ そんな話聞きたくない！ みんな消えないで！」

「ワシの役目もここまで、ようやく肩の荷が下りた」

静かに語る言葉の最中、次々に周りにいた男女たちが笑みを浮かべながら消えていく。

「なんて魔力だ、これだけの数の自己を作り上げるとは！」

「並大抵ではない……」

「やだ、消えないで！私を一人にしないでよ！」

悲痛な少女の悲鳴も虚しく、触れようとする手は虚空を切るばかり。マスター・ローバウルも少しずつ光に包まれ始める。

「お前はもう一人ではない。そうだろう？後ろを見なさい、そこには君の新しい道を示してくれる同胞、友がいるではないか。これからの未来は広く明るいものにしなさい。皆さん、この子らをなぶらよろしく頼みます」

「マスター、マスターー!!!!うわああああ！」

最後に最愛の父の代わりであり、何よりもかけがえのない存在が消えてしまう。ウェンデイの涙に濡れた痛ましい姿に誰も声がかげられない。

「ウェンデイ。悲しい別れは仲間が埋めてくれる、どんなに重く辛い過去でも皆となら分かち合える」

「親を、親愛なる家族をなくす悲しみ、私にも分かる。私たち皆、貴女の隣に立ち、貴女の手を引き背を押しながら共に歩む」

「だから、来い。『妖精の尻尾』へ」

それは暖かな手による導きは新天地への誘いに他ならない。その手を取り、新たな竜はその翼に雲を得ようとしていた。

＝
＝
＝

「ここで皆別れ、それぞれのギルドに戻るわけですな。マスターマカロフによろしく」

「またお会いしましょう、皆さんのパルファムはどんな時でも忘れません、メエーン」

「どんなに離れていようと私たちは同じ仕事で築いた絆がある。またいつか……」

それぞれのギルドに帰り、各々仕事をして過ごす平穏な日々が戻ってくる。港に戻る船の上で、『妖精の尻尾』の面々は新しくウエンデイとシャルルを迎え、ギルドに戻っていく。

「ねえお姉ちゃん、そろそろ話してくれろ？」

「……ええ。フヨウ村は私の生まれた村の名前よ。墮天使たちはそこを狙って壊していったみたい。その人間は神の力を授かる神聖な場所だったから、それを狙って……だと思う」

「酷い。そんなことするなんて」

「だからこれ以上辛い思いをする人を増やしたくない。今はそう思うの。ユリア、貴女とウエンデイたちが私に力をくれたのよ」

今は後ろを向いている場合ではない。ユリアやみんなが背中中に寄り添ってくれるなら真つ直ぐ前を向いて戦えるのだから。その覚悟を少し芽生えさせ、ようやくギルドに戻つてくれた。皆新しいメンバーを素直に受け入れ、ドラゴンスレイヤーであろうと、どんな魔法を持つていようと、ウエンディたちの素直さの前には些細なことのようだった。皆歌い、笑い、喜んだ。

「本当に来て良かった。ね、シャルル？」

「そうね、騒がしいけど、これで寂しい思いはせずに済みそうだね」

＝ ＝ ＝

「新しいギルドはどう？もう慣れた？」

「はい！楽しいです！そういえばルーシイさんやシリルさんたちは女子寮じゃないんですね」

「お金がないのよ、少なくとも私は。それに存在自体最近知ったしね」

「女子寮なら確かにギルドに近いんだけど、色々巫女の仕事をがね。家に戻らない時もあるし」

楽しい時が過ぎるのは早いもので、ウエンディたちがギルドに加入してから一週間が経とうとしていた。新たな仲間新たな環境は二人にとって快適なものだったらしく、もう既に馴染み始めていた。そんな折に数年ぶりとなる鐘の鳴り方が街を包む。

「なんなのこの鐘、いつも時報と違うわね」

「そういえば……私も初耳ですね」

「知らないのも無理ないわ、だってこの鐘の鳴らし方はギルダーツが帰って来た時だけだし。しかも前は三年近く前のことだもの」

「三年も!?!何してたんですかその人!」

「仕事よ。S級の遙か先にある高み、『百年クエスト』よ。100年間誰も達成できていないから百年クエストね」

その任務に当たっていたギルド最強と謳われる男ギルダーツはその任務に時間を費やしており、帰ってくるのも年単位である。しかも街を歩く際には彼の魔法『クラッシュ』の被害を受けないために改良しており、ふらつと歩く癖のある彼専用の変形『ギルダーツシフト』として街の入り口からギルドまで一本の道を作るのだ。ただのアホではないかとシャルルが突っ込んでいたが、そして彼が姿を見せ始めるとギルドメンバー総出で出迎える辺り、かなり慕われているのは間違いない。

「ふいふ、ようやくと戻れたか?」

「お帰りなさい。お疲れ様でした」

「この人がギルダーツ……」

「あれ?ここフェアリーテイルで間違ってるねえよなお嬢ちゃん。お前さん誰だ?」

「ミラよ。三年前とギルドも私も様変わりしてるから分からないのかしら?」

「あん? おお、ミラか! かなり変わったな! いやあ新しいメンバーもいるし、分からないかったぜ!」

「ただだけよ? すぐ気づかないなんて」

これはシャルルの言う通りかもと少し抜けた感じのギルダーツへの第一印象がルーシイの中で固まりつつある。

「よく戻ってきてくれたな、ギルダーツ。して、首尾は?」

「いやあ、はっはっはっ! すまねえ失敗だ、俺にやあ荷が重すぎた」

「なにい!」

「あのギルダーツが失敗!」

「どんな仕事なのかしら、百年クエストって」

ギルド最強をもつてしても失敗するような超難関クエスト。その凄まじさが伝わる一言にギルド内も驚きを隠せない。

「そうか、お主をもつてしてもダメじゃったか」

「悪いな。ギルドの面を汚してしまつてよ」

「そんな些細な事はどうでも良い。むしろ生きて戻つてこれだけでも余りあるほどに儲けものじゃ。ようやくってくれた、しばらく休暇を取つてくれい」

「すまねえ、そうさせてもらうわ。ひい、疲れた疲れた。ナツ、お前にお土産がある。喧嘩ならそこでやろうや、じゃあ失礼」

「壁壊すなよ！出入り口から出てくれよ！」

最強の男が去ったギルドは任務失敗のことでんやわんやしており、所々で喧喧諤諤の議論に熱中するものも居るにはいたが、普段通りの時間が流れていた。だが、突然の来訪者が暫くしてから秋の空に訪れることをまだ誰も知らない。

第6章 welcome to lost world

エドラス編

第44の唄 高く飛べ、高く唄え

「♪♪♪♪」

「綺麗な歌声ね」

「シリルに歌のセンスあったんだ。もう半年近い付き合いだけど知らなかったな」

「あまり歌わないから仕方ないよ。まあ、雨の日にはもってこいだね」

秋雨前線の到来によりこの日は一日雨が予想され、その通り昼過ぎになっても止むどころかどんどん強まってきている。ギルドでのんびんだらりとする者が多く、仕事などに行く気はなさそうだ。暇を持て余した皆のためとシリルはステージの方で歌を披露するなど思い思いに過ごしている。

「あーあ、雨さえなきや仕事行つたのにな」

「そうねえ」

「おーい姉ちゃん、そろそろ行くぞ」

「はいはい。じゃあ少し用事を済ませてくるわね」

シリルの歌が響く中、ミラはエルフマンを連れて雨の日に出かけていく。ユリアもルーシイもなんでこんな日になどと考えていると、愛大好きな樽酒しの彼氏を抱えたカナがやってきて大まかに説明してくれた。二年前に彼ら二人の末妹リサーナが仕事での事故で亡くなったこと、ミラがそれにショックを受けたこと、今日がリサーナの命日であること。生きていればルーシイやナツと同一年だっただろうこと、そしてナツとリサーナが幼馴染のように仲が良かったことなどだ。

「へえー、お兄ちゃんにもそんな仲良しな人いたんだ!」

「そういえばルーシイはナツと仲がいいって意味じゃ似てるね。ユリアの底なしの明るさも」

「あのナツが女の子とねえ、意外なことこの上ないわ」

静かな雨が大地に降り注ぐこの秋の日。脅威はすぐそこまで来ている。突如として開いた大穴はこの世界を吸い込む悪食のように食らっていく。いち早く気づいたシリルは皆に呼びかけようとしたが、時すでに遅く、空は世界を切り取って腹に収めていく。

「くっ……一体どうなってるの!?!みんな!何処にいるの!」

「こ、この声……シリルさんですか!?!」

「ウエンディ。何故あなただけいるの?」

「分かりません。気づいたら私しか……」

「あいたたたく、何々？何事なの？」

「ユリアちゃん！」

「ナツお兄ちゃん、そこで寝てたから引つ張ってきたよ」

真つ白な世界に取り残されたのはナツ、シリル、ウエンデイ、ユリアの四人のみなのが現状だ。ドラゴンスレイヤーと神の使いのみが取り残されたのか。謎は深まるばかりだが、そこに現れたのはハッピーを連れてきたシャルルで、彼女は何か情報を知っているような口ぶりだ。

「ここが急にこうなったのも空に開いた穴、超時空魔法『アニマ』によるものよ。何の偶然か、ウエンデイたちだけ残ってしまったみたいだけど」

「ん？何か知ってるの、シャルル？教えてよ」

「アニマを発動させたのはこの世界の住人でも闇ギルドでもないわ。この世界の裏にあるもう一つの世界線、『エドラス』の仕業でしょうね（あの『別の世界線のジエラール』ミストガンとかいう魔導士の言うことが本当ならね）」

「街ごと吸い込むなんて何でこうも……」

「魔力がごくごく限られた有限のものだから、よ？」

なんでもエドラスでは魔法が徐々に欠乏していく現象に見舞われているらしい。そ

れゆえの強硬策、吐き出す以上の魔力を吸収しようという事なのだろう。生まれは皆のいる『アースランド』ではあるものの、少しだけあちらの世界の情報が分かるとシャルルは言っていたが、ハッピーは全くだそうさ。

「……なるほど、乗り込むしなくなつたわけだな！みんなを救つて来ねえと！」

「そうですね。この際、どうしてシャルルがこの情報を得られたかなんてどうでもいい話。乗り込む他ありませんね」

「私はウエンディを、ハッピーはナツね。他の二人は別ルートから入ってちょうだい。

「これも一網打尽なんてことにならないためよ」

「仕方ないなあ。あつちで落ち合えるといいね」

「それと、あつちでは魔法は使えないものと思つて頂戴。さつき言つたけど魔力がない以上例え使えても温存しとかなないと最悪すつからかんになつて死ぬかもしれないから」

「ありがたい忠告を受け、二人は別れ、別のアニマを探して回っていると、小さなビンに入った丸薬を見つけた。

「何かしら、この瓶？」

「お薬？」

「それはエドラスで魔力が使えるようにするための薬だ。こつちの世界では初めましてかな？」

「えっ!? ジェラール!?」

「私はエドラスのジェラールだ。この姿を悟られたくなくてな、ミストガンと名乗っているが、君たちなら構わないだろう」

フードを取った姿で現れたのはエドラスのジェラール、顔を見せたがらないことでの名なミストガンだった。今回の一件をシャルル以上に知っている。

「このアニマを封じるために動いていたのだが、どうも間に合わなくてな。済まないがこの薬を飲んであちらに渡って欲しい」

「事情は大体聴いてます。それで、仲間のラクリマを探し出せばいいんですか?」

「その通りだ。計画を練っているだろう国王はそのラクリマを欲するはず。王都に向かうとみつかれるかもしれん。私はまだやることがあるからな、済まないが頼むぞ」

あちらへの転送を準備し、薬を飲んだのを見届けると、二人を残ったアニマの残痕へと送り込んだ。

|| || ||

「うわっ……マグノリアと全然違う!」

「自然豊かだね。仲間の命がかかって無ければゆつくり観光したいところだけど」

たどり着いたもう一つの世界線、アースランドの裏側の世界はあまりにも自然が豊かで、不思議な川の流れ方やトリの飛び方を見れば観光したくなるが、いかんせん今回は

仲間の命の危機である。ゆっくりする暇は与えられていない。

「街まで行ってみようよ」

「何か探らなきゃね」

止まったらいつ何が起こるかわからない。二人は近場の街を目指して砂漠に行く。

第45の唄 邂逅

「ここが、街？」

「すごい寂しいわね。閉まつてる店も多いじゃない」

「魔法道具店かあ。魔法使えないつてのと関係あるのかな？」

「ホルダー系しかいないのかしら？」

街に来たは良いものの、人がまばらで閉店している箇所も目につく。しかも閉店しているのが魔法関係の商売が多い。

「おや、こんな辺鄙な街に人が来るたあ珍しいねえ。旅行者、あんたら？」

「え？そうですけど……」

「悪いことは言わないわ、あんまこの危険な街をうろつかない事ね」

「貴女は何者ですか？」

「あたいはセリナ、傭兵さね」

「そうですか。私は『ライム』です、よろしく」

本名を話したらどうなるか分からない以上、心苦しいが安全策として偽名を名乗ることにした。シリルはミドルネームを変えてライム、ユリアはファミリーネームを変えて

リリースと名乗る。

「うん、そうかい。よろしくな！」

「えっ？着いてくるんですか？」

「そこまで、なんで？」

「さっき言っただろ？危ねえって。それにあんたら何でか放っておけない感じでき、知り合いによく似てんだわ、そっちの子。こっちが勝手に着いてくだけだから金とか報酬はいらねえって」

裏で何考えてるか分からないが、正直情勢が分からないことだらけだ。傭兵なら詳しい情報を地理含めて知っているだろうから着いてきてもらう次第になった。

「で、どうやって動くんだい？あたいは戦闘と情報収集、護衛くらいならお手の物だ」

「最近こちらでデカイラクリマが出たとか発表されませんでした？自分らはそれを探してまして」

「ラクリマねえ。どんくらしいのサイズのこと言ってるのか分かんねえけど最近魔力のアテが出来たつっ情報なら知り合いから入ってる。つい数時間前に出てきた、人の数倍のサイズは軽くあるつっつたな」

「なるほど。何処にあるかとかは？」

「そこまでは分かんねえな。でも、今まで通りなら王都に行くはずだよ。これまでも何

「回かこうというのがあったからね」

「そうとなれば行く場所は定まった。そこまでは今いる町から二、三日で着くだろうと告げられる。」

「あたいに着いてきな。地理は頭にねえんだらう？」

「助かります。では、参りましょう」

「レッツゴー！」

それから歩くこと半日、月が見えはじめた頃、まだ次の街が見えず、砂漠地帯で休息を取るようになった。

「ほれ、今日取れたクマの肉だ！固えしマズイからこの調味料かけな」

「何から何まで世話になります」

「これ、塩胡椒にトウガラシ混ぜてるんだね。意外と美味しい」

「傭兵は何処で何食うか分からないからねえ。調味料が味を豊かにすんのよ」

「結構慣れてるんですね」

「もうかれこれ5、6年はやってっから」

「前までは安定した暮らしをしていたそうだが、職場での方針が合わず、辞めて傭兵になったのだとか。家は裕福でそこで暮らすことも可能ではあったが、未練を断ち切るた

めに独り立ちした。

「あたいは安定した暮らしでぬくぬくして苦しんでる人を見て見ぬ振りなんて、性に合わなかったんだ」

「それで始めたのが傭兵と」

「そうさ。少しでも暮らしを変えてあげたいんだ。でもね、やつぱ国の連中をどうにか動かさねえと無理だつて気付いちまったんだ。だからあいつが……悪い、なんでもない」

「どうしよつかお姉ちゃん、せつかく助けてくれてるんだから、私たちも何かしてあげない??」

「国のことを想う苦しい心の内を明かされて動かないなんてことは出来るはずがない。しかも何も受け取らないで無償に近い状態で働いてくれるのだ。命を守るための行動を放つては置けない。」

「王都に私たちの探すラクリマがあるなら、目的地は同じ。やってやりましょう!私に貴女の夢を支えます!」

「あんたら優しいねえ、ありがとさん。それなら尚更仕事をちゃんとこなさなきゃ。ほれライム、リリース、そろそろ寝るぞ」

不用意な体力の消耗を避けて早々に寝ることになった。そして翌朝、日が出るか否か

の頃合いに叩き起こされた。

「おい、二人とも動くぞ〜」

「早いですね。まだ日もほとんど出てませんが……」

「眠い……」

「あんたらやることあんだろ？それに砂漠越えするなら今の日が出てないうちが一番だよ」

太陽光の反射も考えると今のうちにこのだだっ広い砂漠を超えて街に入りたい。二人の体調が崩れたら元も子もないと思い、眠そうに目をこするユリアの手を引く。

「王都までどれくらいかかります？」

「歩きだとあと二、三日かなあ。魔力の抽出まで数日間準備が必要だろうから、まだそっちは大丈夫だろうけど、国王軍と会ってしまったら面倒さね」

「そんなになの？」

「何度か逃げるがあつてね、しつこいのなんの。前は三日三晩追いかけてられて結構肝が冷えたよ。あー、それはそれとして、なんでラクリマに用があるの？聞きそびれたよ、そういうや」

今更といった感じだが、性格なのか、あまり気にしていない風に聞いてきた。それに対して、ラクリマにはジェラルルの名前を伏せながらアースランド出身であることとそ

の魔力の由来だけを当たり障りなく伝えた。

「ちよつとばかり、頼まれごとをされましてね。今回はそのラクリマが関係してる、つて」

「頼まれごとねえ。ま、無理には聞かないさ、あんたらと利害が一致した以上はね」

「ありがとう。お姉ちゃん優しいね」

「お姉ちゃん、か……おつと、街が見えてきたよ。あそこで少し休むとしよう」

日が高くなる頃によくやく街にたどり着いた。ここも前の街同様店が閉まっていることが多かった。それ故か、街も人が見受けられず、閑散としている。

「ここもここで寂しいね」

「魔力に限りがあつてさ、無駄遣いしないために魔法制限令が出てんの。ま、王都に集中させることに使つてるから反発する人も出たけどね」

「ダメじゃないですかそれ」

「魔法ギルドとか体内に魔法持つてる人とかどうしてるの？」

「体内に魔法つてむしろ何なのさ？それと魔道ギルドなら『妖精の尻尾』だね。違法ギルドつーか闇ギルドだけど」

シャルルの言う通り、この世界と自分たちの世界では魔法の概念が大きく違う。それにギルドも聞いてみれば一っしかなく、『妖精の尻尾』が闇ギルド認定されている。

「(私たちが特殊なのは確かみたい。紋章が見えにくい位置でよかったよ)」

「(魔法が道具しかないって感じなのね。魔力持ちはゼロ、かしら)」

「ん? どうしたの?」

「「いえいえ何でも!」」

「まあいいや。それと、王国軍がうろついているみてえだから、慎重に進むよ」

その言葉通り裏道から覗いていると、あちこちに軍隊らしき集団がドタバタと忙しく走り回る。何かを見つけたのだろうか、しばらくするとなにも聞こえなくなってきた。

「急に静かになったね」

「そうみたいだね。でも近くにいんのは間違いなさそうだ」

『居たぞー! フェアリーテイルの魔導師だ!』

『この顔、ルーシイか!?!』

「え!? ルーシイ姉ちゃん!?!」

「知り合いかい?」

少し見やれば、見慣れた格好に見慣れた顔、ルーシイが先ほどの集団に囲まれて連行されそうになっていた。

「これはマズイわ……やるっきゃない!」

「おい待てよライム！」

「ちよつ……お姉ちゃん！」

国王軍を相手にするのはまずいと止めにかかるが、シリルは既に飛び出した後。左手には気功の力、右手には血の力を溜めている。

「姉さん、姿勢を低くして！」

「えっ!? 何でシリルがここに!?!」

「今はいいから！」

「えっ、うん！」

「一発入魂、『気紅双波』！」

「これは、何の力なんだ？」

「魔法の一種だよ！ほんとにあの薬効果あったんだ」

シリルから出された力を知らない者、魔力の体内からの創出を可能にするすべを知らない者からすれば、何があつたのかさっぱりわからないことだろう。国王軍の1小隊を片付けたところで近場にいたエドルーシィとナツ、ウエンデイらとともに近場の森まで避難する。

「おい、どうしてここにあんたがいんだよ、国王軍の元隊長さん？」

「傭兵としての採用だよ。国王軍を辞めてるし、あんたを捕らえる気はねえさ。文句あ

んならあの二人に言いな？」

そこではエドルーシィとセリナが険悪な雰囲気を醸し出していた。今は傭兵に身をやつしているセリナだが、元は国王軍の一部隊の隊長であり、本当の名をシリル・S・バレンシアと言うらしい。名前を知ったからにはシリルとユリアも本名を告げ、本当の渡航目的や出自も語ることとなる。

「ちつ……あの二人ももう一人のあたしやナツ達と知り合いみてえだから、今回はこれで終わりだ」

「助かるねえ。ま、正直あのライムがもう一人のあたいだとはね……それにリリースも、ユリアだとは……」

「奇妙なもんだよ、ほんとに」

「不思議なもんだ、同感さね」

仲間と会え、心強い味方も得た。まだ戦いはこれからだ。

第46の唄 始動

「さて、こつからどうするんだい？あたいはアースシ ril 達と一緒に行動するけど？」

「私はもう一人の私を連れて王都に行くつもりだぜ」

「行く場所は一緒か、やつぱり」

「本当にこの人たち私たちなのよね？」

「まあ、間違いなさそうですね。特にルーシィ姉さんは見た目も一緒ですし」

王都に向かう中で一度確認を込めての作戦会議を開いた。もちろんナツ達の目的と一致しているため、王都に向かうことは確定事項だ。ここで別れるか、同行するかである。

「私は別れるべきだと思うわ。ナツ達にはここに来る前に伝えただけ、一網打尽だけは避けたいところなのよ」

「同感だ、私もシャルルと同じ考えだ」

「あたいは戦力の分散は避けたいねえ。国王軍に手エ出した以上、戦争は不可避だぜ？」
「エドラスのお姉ちゃん、私たちはシャルルの言うことに納得して別れてたんだ。そこ分かってくれないかな？」

まっすぐで純粋なその眼差しはかつての妹分を思わせる目だ。これに弱いのを知ってか知らずか、エドシリルに向けていく。

「はあ……分かったよ。お願い聞いてしまったからな、最後まで従うよ。でも、自己責任だよ?」

「私を手を出さなきゃ良かったんです。ごめんなさい」

「いいよいいよ、どっちみち避けられねんだ。是非もねえさ」

「男よりさっぱりした人ね、エドシリルは」

話が固まったところで此処から離れ、実際に行動に移すことと相成った。シリルとユリアはエドシリルと、ナツ達はエドルーシイと動く。

「そんじゃあここを嗅ぎ付けられる前に動こうか。頼んだよ、妖精のリーダーさん?」

「そっちもしくじんなよ、傭兵さんよお?」

「任せろや。こちとら伊達に傭兵として働いてねえかな」

|| || ||

「あたいらはあいつらの援護だよ。先に王都に入って工作しとかなきゃね」

「工作?なにすんの?」

「まさか混乱のために騙し討ちとか?」

「混乱を呼ぶのは合ってるし、騙し討ちっちゃあ騙し討ちかね?怪我人を出す程度に爆

破と、兵力分散さ。これはあたいが作った時限爆弾だよ」

なんでも用意しておくのが傭兵として生き残るコツだと不敵な笑みを浮かべて答える。本来なら中のラクリマが時間と威力を制御するが、今回は魔道士が二人もいるとなればその魔力を使って属性と威力を上げることになった。

「あたいには情報がある。抜け道も知ってるし、奴らの考えそうな捕縛ややり口もあらかじめ抑えてある」

「頼りにしますよ、『私』には」

「どうすればいいの?」

「そうさねえ、奴らの目を欺きながら倒しつつこの爆弾を仕掛けるって感じ?」

えらく愉快そうだ。それだけ不満が募っており、自分の夢を実現できるかもしれないと気分が高揚しているのが表情からも読み取れる。

「さて、行きましようか」

「あつちも待つてくれなさそうだし」

「見ててくれ、ジェラール。あんたの夢でもあるからな、幼馴染として、あんたとの未来作り上げてみせるよ」

決意を固め、王都へ向かう道を歩いていく。

|| || ||

「陛下、今回の収穫、数ヶ月分の魔力に相当しましゆ。使い方次第では向こう半年は安泰でしゆな」

「おお、すげえつつうかやべえつつうか！」

「すごいです！」

「んん、素晴らしいね」

「ここは城内会議室。数名の将隊長に参謀や補佐役、そして国王が今後の魔力の有効活用法を探る会議を開いていた。魔力の元は今回得られたマグノリアを指している。

「足りぬ。その程度では気休めでしかない」

「陛下、何かおっしゃいましたか？」

「我が望みは永遠に安泰なる魔力よ。即ち、この国の繁栄だ。足りぬ、もつとよこせ」

「……ははっ」

＝
＝
＝

「こちらの世界線のユリアさんはどんなお方ですか？」

「国王軍の1隊長でよ、うちの後輩なんだわ。でもって、かなり冷静沈着だな。アースユリアとは真逆だよ」

「もしかして私馬鹿にされてるのかな？」

「んなわけねえって。それに昔の頃とそっくりだったからよ。あたいのことをお姉ちゃ

ん、お姉ちゃんって追っかけてた頃が懐かしい。いつからか変わっちゃったがな」

エドユリアは男装の麗人という言葉が似合う女性らしい。昔は仲良く遊んでいたが、軍部に入る頃には様変わりしていたという。

「昔は素直で手はかかったけど可愛い妹分だったのによ」

「そう、ですか」

「私たちは仲良くやってるから大丈夫だよ。それより、街が見えてきた」

「そんなじゃ便利な足と呼ぼうかね。おい、魔導四輪を持ってきてくれ！レギアの町だ、今すぐに！」

懐から念話式電話を取り出し、電話口に誰かを呼び出す。どうもこのままではユリアの体力が心配だと判断したのか、魔導四輪を持ってくるように伝えている。

「……明朝には着くって？ああ、無茶言ってるのは承知してんのよ、ありがとさん。ほれ、明日には新しい足が来る」

「聞くのも失礼ですが、お相手は？」

「傭兵の知り合いでよ、名前はチキだ」

「え!?お母様ですか!?……いや、それはないか」

「はあ!?あんたの母さんと同名なの!?!」

まさかの名前に驚きを禁じ得ない。しかしながら同姓同名の人間がいてもおかしく

ないのがここエドラス。名前が一緒でも姿や特徴は大きく違うだろう。

「とりあえず今日は休もう。ほれユリア、もうちよいだぜ」

「やつと休める……疲れたよう」

「ここは、だいぶ賑わってますね」

「王都に近づくほど一般の人々からすれば治安がいいからね、商売は繁盛するさ。ま、闇市の数は減るけどな」

確かに人通りもよく、元気に往来で買い物をする姿が見て取れる。近場の宿で休み、明日の具体的な行動を練ることにした。

「王都全体の地図だ。ここに地下道があんだが、おそらくここを通る可能性はあつちも把握済みだろうさ。前にここから侵入しかけたやつがいたんでね」

「となればここはやめたほうが良さそうですね。こちらの側道は？」

「魔法部隊の巡回先だし王の間の近くだから、警備がきついだろ。そうだなあ、魔法を有効活用するのが一手あるが」

「潜入任務みたいだね」
スニーキング

「ああ。時間としては夜間より昼間がいいだろ。警備の人員の警戒心が夜より劣りやすい。場所は裏手がいいだろ」

「何か当てても？」

「まあな。当てを外しても逃げ切れるだけの場所だしよ」

こうして携えた策を実行に移すために彼女たちは王都へ向かう準備を整えている。もう一人のユリアと相見えるのも時間の問題だ。決戦の狼煙は密かに昇っていく。

第47の唄 作戦

「ようチキ！遅かったじゃねえの！」

「うっさいわね！急に呼び出しくらったからこれでも急いで来たんだよ!? あら、そつちの子達は？」

「アースランドの私とユリアだ。あつちだとあたいはあんたの娘なんだと」

「あらまあ、奇遇だね。ま、このアホに使われんのは癪だけどもおもしろいから許す」

「そりやどうも……ってアホはねえだろ、ばかやろー」

お互いに憎まれ口を叩いてはいるものの、本気で嫌がっている訳ではなく、長らくいっしょにいる事によるある意味仲の良さの裏返しである。その証拠に3人とも遠慮する事なく乗せているし、全速力で車を出してくれている。

「で、王都だつて？ あそこ今パーティ状態だから変なことしなきゃ怪しまれないと思うけどね」

「あそこに運ばれたつて言うラクリマに用があるんです。よろしかったんですか？ 私たちを乗せて」

「何言つてんの。あんたは強いもんを心のうちに秘めてる、それを見れば断るのは無

粹ってもんさ。私はそこまで鬼じゃない」

「変わらないねえ、あんたも」

「うっさい。あんたもどっこいどっこいでしょうが！」

この車に乗って気づいた事だが、SEプラグ（セルフエナジープラグ）が無い。魔力を体内に持たない人間が大半である以上、ラクリマを使つての運転になる。正直車に關してはこちらの方がかなり進んでいる。くだらない会話から大事な作戦会議まで色々話していると、早いものでもう王都裏の崖まで来ていた。

「ほれ、裏側に着いたぜ。巧くやんなさい、成功を祈るわ」

「ありがとう！また会えたらいいね！」

「偉いわねえ、国王軍の奴とは大違いだ」

「よし、気を引き締めていきましよう。ありがとうございました、お母様^{チキさん}」

「なんかこそばゆいね。ま、うちの出番は此処までだ、後はそのポンコツ傭兵を頼んな」

軽く手を振りながら帰路に着いたエドチキを見送り、眼下の王都を見やる。かなり広いこの王都を攻略するため、一度視察をすることになり、それに合わせて商人に扮装する。

「さて、やるか！」

「商人に扮して潜入ですか。こんな衣装で大丈夫なんですか？」

「似合ってるぜ、まあバレはしないさ」

「これで裏口から入るの？」

「いや、これは城内偵察のためさ。潜入は別でやるぜ」

一旦城内や街をくまなく巡るために搬入を装って地理を把握し、抜け道を探る。作戦は翌日からということになった。

「始めるぜい。じゃ、二人とも運搬がてら偵察をよろしく」

＝＝＝＝＝

「今日の会議はここまでだ。各自緊急事態に備えよ、我が軍の部隊が攻撃を受けたようなのでな」

「はっ！」

「以上だ。備えよ」

王宮の一角にある大会議室では、先日のシリルがした攻撃によって警戒態勢が引かれる。そんな中、大きい人型猫のパンサーリリーとユリアだけが会議室に残る。

「どうした、パンサーリリー、ユリア」

「陛下に……いえ、失礼しました」

「ならば下がれ」

「失礼しました」

「ユリアはどうした？」

「実は、こちらにシリル元隊長が来ているとか。いかが致しましょうか？」

「ふん、そんな奴に用はない。やれ」

「……承知いたしました」

＝
＝
＝

「さて、見た感じあたいた頃と大して変わってねえな。あたいを知ってる人間がいる以上、これがすでに罠なのかもしれないけど」

「やるしかないでしょう。ここまで来たら引き下がれませんので」

「裏門、結構人いたね。これ、外から無理やり行くより内側から行った方がいいかも」

「うーん……そうなると捕縛偽装作戦でもありだな。ただ、誰が捕まるかって話だし、あたいが行ってもねえ」

「城内を覚えてる限りで構いません、私たちが行ったところ以外の地図をできれば描いてください」

そこで懐から紙と筆を取り出し、極力詳細な道まで記入し、二人に示す。道がかなりうねっており、一見ただけではどう動くべきか迷うほどだ。

「こんな感じだ。他者他国の侵攻を抑えるためにあえて複雑にしてんのよ」

「これは……遊園地ですか」

「なんか楽しそう」

「これはあたいが抜ける前に出来た城内の兵向けの娯楽施設さ。ま、集めた魔力をここに当ててるって訳よ」

「ふう、やりたい放題ね。で、肝心の牢屋は城内の上側か」

「上から侵入かな？」

「いや、あえて二人捕まって城内を回って仕掛けるのが最上作かねえ？ユリアは錯乱用の暴れ役としてあえて裏門から侵入だな」

「手錠に魔法封じの効果がなければ私とエドラスの私が行きますか？」

「私影に入れるから上手くやれば見つからないよ」

「おおよそ策は決まった。後は動くのみ。もう1つのチームが動くのを待つばかりだ。

「…よし、これで行こう。アースシシル、あんたと私は捕まるにはもってこいの事情がある。あっちも放つて置かんでしょ」

「念のため、分身体をこのお札に入れておきます」

「よし、『じゃじゃ馬大作戦』の開始だね！」

「思いつきり暴れてやんな！」

「もつとマシな作戦名は無かったのかしら」

「気にしたら負けさね。さてと、そろそろ別行動エドールシイのあつちも達ここに来るはずだ、それに合わせて始めようぜ」

「仲間や町民が成り代わったラクリマを見つけるか、王国を叩く作戦。ついに始動だ。」

第48の唄 激流

「なあ二人とも、アースナツたちが捕まったみたいだよ」

「どうしますか？ 作戦変更は余儀なくされそうですが」

「とりあえず助けに行こう。爆弾は忘れずに、だけど」

「混乱を呼んでその隙に進みたいねえ」

朝のホテルに入った情報では、昨夜に地下通路を通ったナツたちがエドエルザの襲撃を受け、一網打尽にされたそうだ。ナツ、ウエンデイ、ルーシィは王都の牢の中に、ハツピーとシャルルは猫の国エクスタリアに護送された。王都ではどうやってか、薬なしで羽根を使えるようになって戻ってきたシャルルたちと脱走したルーシィのことで騒がしくなっている。彼らを救うには動くしかないが、作戦変更を余儀なくされる。

「王都の方にまず向かうよ」

「あれ？ 見つかったらまずいんじゃない？……？」

「そつちに被害が降りやあ軍を動かすんでね。中の兵を減らすんさ」

「その間に突入ですね。やりましょ、未来を変えてみせるー！」

宿を抜け、大通りを通り、そこに爆弾を次々に仕掛けてゆく。途中の王都軍を蹴散ら

し、的確に四方八方に広がる位置に仕掛けていく。

「シリル元隊長だ！ユリア隊長より捕縛許可が出てる、行くぞ！」

「もう嗅ぎつけたか。でももう遅いぜ、アースの私、やっちまいな」

「理解しました。発破！」

作戦は形が変わったが遂に始動した。

＝
＝
＝

「ねえ、エクシードってこの世界じゃ天使と同じ扱いなんじゃないの!？」

「分からないわ、でも多分反乱じゃないかしら」

「でも今ならナツたちを助けられるよ！」

手錠をつけられたルーシィを連れ出せたハッピーとシャルルは、地下にいるだろうナツとウエンディを助け出すべく、ひたすらに移動を急ぐ。だが、ある扉の前には大剣を持つ女将、ユリアが待ち受ける。

「そこまでです」

「あれって……」

「妖精の尻尾の魔道士たちよ、我が名はユリア・フェンリス、貴女たちをここで倒す！」
振るわれた大剣を大剣で弾く音がする。シリルら別働隊だ。表での一仕事を終えて城下まで爆弾を使いながら突破してきたのだ。

「おっと、そこまでだぜ、ユリアちゃんよお」

「出ましたね隊長。いえ、シリル」

「堅苦しいのは変わってねえな。ある意味安心したよ、あたいは」

「ゆ、ユリア!? あれが!？」

「外は良いの? 騒ぎが起こってるってのに」

「部隊の者がそちらに向かっていますので、私はこの警護です」

エドユリアに立ち向かうのはアースユリアにエドラスとアースランドのシリルだ。

もうすでに爆弾を街や城内に仕掛けて発動させており、敵の混乱を凶っている。

「良いご身分だねえ。おい、ルーシイとエクシードども、あんたらは先に行きな!」

「ここは我々が止めます」

「ありがとう。行ってるね!」

「行かせない…ここで死ね!」

「焦らないであらうと遊ぼうじゃないの。昔より派手にね!」

|| || ||

「陛下、賊たちが攻めてきました。兵器の使用許可を」

「何をためらう、殺せ」

「はっ!」

「陛下！城内城下に爆弾が仕込まれた模様！あちこちで被害が上がっています！」

「無駄がないところを見る限り内部を知る者の犯行かと！」

「よもやまさかシリルではあるまいな……勝手に脱退しておきながら、裏切りに飽き足らず遂に牙を剥いたか！早く捕まえて連れて来るのだ！」

＝＝＝

「シリル、貴女は陛下のお赦しを仇で返すつもりなのかしら？」

「ふん、あんな老いぼれなんぞの為に死ねねえつての。それにそんな赦し、された覚えはないよ」

「不義者め」

「あたいは別の道理、義理を見つけた。あんたはこのまま滅びゆく国と共に果てるつもりかい？」

「私は国のためなら、陛下の仰る通りに動く……」

「しがみつくなよ、その言葉に！あんた自身の決意で動きな！」

鏢迫り合いは火花を散らし、お互いの覚悟と心中をぶつけ合う。

「足元、隙だらけです!!」

「上から行くよ、『シャドーハンマー』！」

「良い連携だよ、しゃあ！」

冷静さに欠いて進むエドユリアに対して、クリティカルダメージを与えるように足を奪い、胴の防御を開けさせ、一気に攻め立てる。

「まさか鎧を壊されるとは……（ならば守りを捨てて瞬攻のトンファーで）」

「二人とも気をつけな。あのトンファー、仕込み銃付きだよ」

「ならばこちらは高速で攻めるのみ。神依『拳』、『脚』発動……神の子の名において貴女を倒し、仲間を取り戻す！」

睨み合いが起こる中、思わぬ形で終幕が訪れる。

「隊長、こちらは我々が……そろそろ竜撃砲の準備に移ってください。国王陛下も御出でになるとのことです」

「足止めしておいて。時間を稼げばいいの、危険になったら退いて頂戴（自分の言葉、決意……あの人には分からないわよ、私の気持ちなど）」

「ははっ……シリル隊長、恨むなどは申しません。部隊にいた頃の恩義で、貴女を殺したくありませんが、仕方ないのです」

「構わねえよ副隊長さん。あんたには妻子がいるし一軍人だからねえ……でも、ただではやられないぜ、あんた自身の覚悟を問うよ」

人混みに溶け込むように去ろうとするエドユリアをこのままにしておくつもりはないが、目の前の部隊をどうにかするしかない。別れるしかない。

「逃げるのね……ユリア、ここに残るか、彼女を追って」
「行つてくる」

「分かったわ。私はこの人たちの相手をします、着いてきて」

「おう。副隊長さん、あんたの相手は二人のあたいだ」

「始めましょ。『弾血乱舞』！」

＝
＝
＝

「陛下、これより竜鎖砲を稼働させる準備に入ります。ご同行を」

「うむ、心得た。エクシードの支配は終わる。我ら人間の真なる自由は目の前だ」

第49の唄 竜鎖砲

シリル組が城兵を片付けている間、ユリアはもう一人のユリアを逃すまいと魔法で足止めを敢行している最中だった。

「逃がさないよ〜！ 『ポイズン・ショット』！」

「（早いな……危なっ！）」

「むう……えいつ、えいつ！」

「くそつ、これが本当にもう一人の私なのか!？」

「神の啓示書第五巻三章暗黒神の項、『エレボス五奏撃』！」

追い討ちをかけるように大魔法を発する。五つの魔法陣から放たれる闇の槍が降り注ぎ、城壁を抉りながら迫っていく。相手の足場や動きを制し、一発命中させる。しかし、それだけで倒れる相手な訳なく、当然反撃にあう。

『『トリガー・ブラスター』！』

「ふぎやつ！ 痛あ……傷になりそうだよ……」

「隙あり！ なつ、影に入った!？」

『潜影術』。影に入り込み、隙を減らしたり傷の回復をしたりととにかくと便利な能力を使

い、逆に不意打ちを食らわせる。

『潜影刃』！」

「ガハッ！くっ……すばしっこい奴め。これで！」

「っ！閃光弾?!」

「目が眩んだわ。今度こそ！」

影が出来ないほどの光をたけば、先ほどの厄介な能力も使えないと踏み、怒涛の連撃を与えんと、トンファーを振る。二発三発と攻め立てていく。

「あ痛っ！」

「はあっ！」

「うわあ!!」

だが、続けざまに振り下ろそうとしたトンファーだったが、実体を捉えきれず、霧散した影を切るだけになってしまった。光は消えかけていたが、それでも動けるとは思っていないかったからだ。

「よいしょっつと」

「(霧散した?どこ行っただ?)」

「(背中、ガラ空きだよ!) 『冥府神の一声』！」

「なっ!?!」

迷いを生じさせたのが運の尽き。背中を捉えた特大の咆哮は無情な鉄槌となり、エドユリアを吹き飛ばしてダウンさせるには充分な一発となってしまった。

「こ、これがアースランドの……魔導、士の……力、か」

「油断大敵、だね！」

「ユリア、無事!?!」

「おーおー、こりやド派手にやってくれちゃったねえ。ユリア、これで分かったでしょうが、時に自分の意思で進む力つてのを」

「まだ私たちは……負けた訳では……竜鎖砲がある限り……」

追ってきたシリルたちと合流した際に、そんな言葉を発し、ユリアは気絶した。『竜鎖砲』が何なのか分からない以上、不気味な言葉となり、波紋を広げようとしていた。

「さつき言つてた竜鎖砲とはなんです?」

「ドラゴンスレイヤーの魔力を動力にした砲弾だ。それでラクリマとエクスタリアを衝突させ、永遠の魔力を手に入れるための代物だよ。辞める前に計画自体は聞いてたからね」

「そんなことしたらみんなは!」

「ああ、二度と戻らねえだろうさ。もちろん止めに行くよな?」

「当たり前だよ! みんなを取り戻す!」

「よく言った、流石だ！」

|| || ||

「こちらです、陛下」

「うむ、準備は整いつつあるのだな？」

「ははっ」

その竜鎖砲の前には国王と数多くの兵士たちが待ち構えている。この一撃を放てば魔力を永遠に手に入れられるとあって、国王本人の希望で彼の目の前で発射が行われる。そこへやってきたのはボロボロになっているエドエルザだ。

「失礼します、陛下。賊の一部を捕まえて参りました」

「おお、ようやったエルザ。ユリアは見かけなかったかな？」

「いえ、まだ駆除中なのでしよう、見かけておりませんが」

「そうか。まあ良い、竜鎖砲を稼働させる。準備せよ」

「はい。しかしながら鍵を破壊されているようです」

「どうするつもりだ」

その疑問に対し、グレイを突き出した。鍵が壊されているなら複製させればいい話だ。断れば仲間、ナツの首を切り落とすと脅迫めいた方法で従わせる。

「この魔道士の片割れ、自由自在に氷で物を造れるそうです。鍵の代用品を造らせれば

問題ないかと……立て、人質がいることを忘れるな。逆らえばどうなるかわからん訳でもあるまい」

「くそっ……」

仲間の命がかかっている以上やるしかない。しかもデメリットばかりかメリットもうまく使えば出てくる。ガジルに復活させてもらった際、滅竜魔法にラクリマを元の状態に戻すという、願ったり叶ったりな性能があることがわかったからだ。だがここで問題が生じる。肝心の機械の操作方が分からないのだ。

「くそっ、どうやって照準の向きを変えるんだよこれ！このままじゃ……滅竜魔道士の魔力をラクリマに当てさえすれば、皆が元に戻るつてのに！」

「……(こ)まで、か。ナツ、やれ！」

「へへっ、おうよ！火竜の翼撃！」

「なっ!?何が起こって……」

突然のエルザの裏切りと攻撃を受け、混乱に陥る兵士たち。その合間を縫って今度は国王を人質にとって見せる。

「照準をラクリマ本体に変更しろ！国王の首がとんでも良いのか!？」

「何をするエルザ！貴様、シリルに毒されたか……」

「毒された？何を言う？私は元々貴様らの敵だ！」

「なっ!? 貴様はアースランドの!」

「作戦通りだな、流石はエルザだぜ。咄嗟に変身するとはな」

「これぞ作戦Dだまし討ちだな!」

そう、見た目が一緒なことをいいことに、エルザ・ナイトウォーカーに変装し、皆を騙しとつてみせる高等技を為している。しかしそれも一時。ナイトウォーカーの襲撃を受けた。

「まだ終わってないぞ、スカーレットオ!」

「ナイトウォーカー!?! くそ、こんな時に!」

|| || ||

「わわっ!? すごい揺れが……」

「ちっ、発射したか。とりあえず空に行こう! 状況を把握しねえと……ここだ」

「翼を持った動物?」

「レギオンだ。飛行艇がわりに使うんだけどね、少しばかり寧猛だぜ。あたいの使つた個体は居ねえな」

「やってみないことには分かりませんよ、一匹拝借しましょう」

『グアオオオッー!』

「ほら、落ちて着いて。貴方を傷つけようってわけじゃないの。少しだけで良い、貴方の背

中と翼を私に貸して。ね？」

『グルツ？ガルウ……』

「すごい……落ち着きやがった。あたいやエルザでさえ乗るのに何週間もかかったのに」

感嘆と驚きを込めた言葉に、空を飛べる魔獣の背中に乗って2人の手を引く。

「私たちと飛んでくれるのね、ありがとう。さ、2人も乗って」

「あ、ああ。ホントにあんたは何者なんだい？」

「動物達と分かり合える力を持つ巫女みたいです。ふふ、新しい特技発見です。じゃあ、私たちを鎖の先に連れてってくれるかしら」

『ガオオオオ！』

「最後の戦いになりそうだ。国を変えるためにも進むしかない！」

第50の唄 決戦

「うみみ、この子速い！」

「引き？がされんなよ」

「見えてきました、あそこにラクリマがあります！」

竜鎖砲の繋がった先を指して借りたレギオンの背に乗って飛ぶと、そこには巨大なラクリマの乗った島が眼に映る。徐々に近づくにつれ、そこで闘うある者たちの姿が見えてくる。滅竜魔道士故に無事だったガジルと、ハッピーたちと同じエクシードながら王国軍に参加しているパンサーリリーだ。

「ガジル兄さん！」

「おう、お前らも来てたか！こいつは俺の獲物だ、譲らねえぞ！」

「お兄ちゃん、足止めよろしく！」

「任せておけ」

「リリー！」

「シリル、なぜ貴様が……」

「あんた今の状況に満足してんのかい!? 迷いがあんだろ！ならあたい達を手伝ってくれ

やしないか!」

「それが出来たらどれほど楽なことか」

そんな言葉にも苦虫を噛み潰したように顔をしかめる事しか出来ない。国の為に戦わねばならない、かと言って故郷をそう易々と捨てられる訳でもない。苦悩が頭を支配する。

「ラクリマのついた島と鎖を切り放そう!」

「少しでも動きを止めておかねえと難しいぜ。爆弾をつける時間をくれ!」

「シリルー!!」

「ナツ兄さん、この島を押し留めてください! レギオン、島をぐるっと一周。焦らずにお願いな」

彼らが島の動きを少しでも抑えている間に、鎖を引き剥がそうと島をぐるっと一周しながら使い切っていない余りの爆弾を仕掛けていく。鎖の食い込んだ部分を含めた島の下部ごと引き離そうと言うのだ。島より下には鬱蒼と生い茂る森しかないがゆえに気兼ねなく行える。

「よし、鎖のある高さは仕掛け切ったよ!」

「エクシード達が手伝ってくれてるけど、エクスタリアにぶつかりそうだよ!」

「行きましょう……兄さん達は速やかに離れて!」

途中でウエンデイの説得に耳を傾けてくれたエクシードやその女王も来てくれたのだ。彼らに速やかに離れるように告げ、安全なところに行ってくれたところを確認し、一気に事を進める。

「二世一代の大仕事よ。発破！」

印を結べば、仕掛けた爆弾が彼女の魔力に反応して連鎖的に爆炎を上げていく。作戦は功を奏し、鎖を土台の岩ごと抜き切ってみせた。

「上手くいったね」

「ええ。少しあつちの陸地も削れちゃったかしら？」

「みんなが押ししてくれてたから少しで済んだね」

「ギヒツ、やるじゃねえかあのガキども」

そこである事に気づく。島が後退していること、そしてその上にあるはずのラクリマが光とともに一瞬にして消え去ってしまったことだ。その答えを求めて視線を動かしている、上からそれに応ずる者が現れた。エドジェラルことミストガンだ。

「ミストガン！」

「やっと戻ってきたか、ジェラル。遅すぎだよ」

「待たせて済まなかったな、シリル。皆もありがとう。君たちの力なくば、ラクリマの送り返しは成功しなかったろう。感謝する」

エドシリルにとつての幼友達、そしてこの国の国王の息子でもある彼は、シリルらを送り込んだ後にアニマの残痕から上手くラクリマを元の世界へと送り返す方法を探っていたのだ。これにはエクシードも、アースランドの魔道士も、エドラスの住人さえも入り混じって歓喜の声を上げる。

「王子……」

「済まなかったね、リリー。命の恩人たる君に面倒ごとを任せてしまったみたいだ」

「いえ、私の真の居場所を守れたのです。それで充分でしょう。むしろ陛下を止められなかった俺に責任があります」

かつて傷ついたジェラルを救い墮天扱いとなり、彼を支えるべく王国軍に志願した。しかし、国王の専横に近い政治について改めることができなかつた自責の念がある。

「今度こそ、あるべき国を作り上げていく」

「ええ、王子……ガハッ!」

「リリー!?!リリー!」

腹部を魔法弾で撃ち抜かれている。傷が出来、力の入らない彼は徐々に地面へと落ちていく。視線を前へやれば、憎らしげな表情を隠そうともしないエドエルザとその部隊、そしてユリアの倒したはずのエドユリアが到来してきていた。

「まだだ、まだこの程度じゃ終わらない！終わらんとぞ、スカーレットオ！」

「ユリア・フェンリス、再び参る！」

「だれかりりーを！」

「任せてください!!」

一人のエクシードにリリー救出を任せ、王国軍の持つ兵器でラクリマに変えられそうになっているエクシードたちを助けるべく、立ち塞がるユリアたちの方を向く。

「シリル、今度は貴女と闘う番だ！」

「それより前にやることがあるからな。ユリア、あんたは後だ！」

「レギオン、縫うようにほかのレギオンたちの間を飛んで。急いでエクシードを狙う奴

を撃ち落とすわ！『鉄血御柱』！」

「飛び出て驚けえ！『デビルハッツダンサレス蝙蝠舞踏団』！」

「こいつをくらいな！」

レギオンを乗りこなしながら魔法やあるいはマジックアイテムを駆使して次々に兵器を壊し、敵部隊を叩き落とすが、エルザたちがいるものの2部隊もいるとあって数が多い多く処理しきれしていない。

「纏めて叩き落とす。ユリア！」

「言うと思った！私の魔力を貸すから、一発大きいのを撃って！」

「大いなる爆炎よ、我らの牙となれ！ユニゾン・レイド、『パレット・フレイア 気炎舞踏会』！」

ユニゾン・レイドの魔法陣が次々に兵士を囲い、爆炎でレギオン諸共撃ち落としていく。難を逃れた者たちも爆風の煽りを受け、不安定な飛行を余儀なくされる。

「やってくれたわね……撃つて！」

「レーザー光線?! まずい、下降だ！」

「まだ逃げてるエクシードたちが残ってるというのに……くっ！」

エクシードより目の前の敵を優先的に落とそうと切り替えたエドユリアにより、強制的に防戦をする羽目になり、救出が難しくなる。まるで何かに執着しているかのような狙い方だ。

「ユリア、あんたもしつげえな。昔はそうでもなかったんだけどねえ？」

「昔は昔、今は今です。貴女を超えて、未来を！」

「……あいつの心をまっすぐにできんのはあたいだけのようだね」

「ようやく戦う気になりましたかシリルさん」

このままではラチがあかない。エドシリルは単騎飛び出し、ユリアの乗るレギオンまでひとつ飛びに舞う。

「終わらせてやるぜ、ユリア。あんたはあたいの妹でありながら、自由を忘れて沈んだ」
「貴女は私の姉でありながら王を裏切り、落ちぶれた」

「例え元の関係に戻れずとも……」

「先に進むのがどちらになろうとも……」

「恨みっこなしだ!!!」

エドラスでの2人は最終決戦へと突入した。

第51の唄 還る魔力

「姉さんの決戦、始まったわね」

「お姉ちゃん、ナツお兄ちゃんたちの後を追おう」

「どつかで落とされたみたいね。レギオン、探せる？」

エドシリルとエドユリアの決戦の開幕を見送り、落とされたもう一つのレギオンを探しに飛び回ると、森の開けた場所に彼らの姿があった。エドエルザと敵対しに行ったエルザと国王の乗る兵器を倒しに行ったナツらドラゴンスレイヤーは居ないが、それ以外のメンバーは全員いた。だが、既に国王軍の包囲に晒されている状況だった。

「もう囲まれてるか。レギオン、私たちを降ろしたら元の場所に帰ってね。初っ端から飛ばすわよ、魔力残存量なんて気にせず！『生命神の大声』！」

『冥府神の大声』！」

「シリル、ユリア！救援助かるぜ！」

「まだ先は長いですよ」

「押し返すよ！『影狼』！」

＝＝＝＝

「おらあ！」

「はあっ！」

2人のあがる音は森の中に響き、静かな闘争を繰り広げる。

「腕あげやがって……もうあの頃と段違いだぜ」

「貴女も鈍っているどころか、澄んですらきていますね」

「勝ち譲れないよ。あの子達との約束があんだからねえ」

「こちらも一度『私自身』に敗れたけど、もう二度とあんなことは起きませんよ」

覚悟も背負っているものもある。両者とも譲れない状況があるのだ。希望を背負い、攻めるまで。この状態まで隠していた秘技を浴びせんと、シリルは武器のアクセルを開ける。

「それは、どうだろうね！」

「(魔力の隠し持ち!?)」

『斬空破』！」

「魔力を飛ばしてくるとは……(こんな使い方、軍でやってたかしら!?)」

『桜花夢双』！」

『菊花香嵐』！」

武器に仕込んだラクリマを応用した第2ラウンドの開幕だ。

|| || || ||

「『氷欠泉』！」
アイスゲイザー

「『弾血乱舞』！」

「全然減らないわね」

「これじゃ、まずいよ」

魔法武器の数の圧力にレギオン隊の参戦が徐々に彼らを追い込んでゆく。絶体絶命に思われたその時、どこからか聞き覚えのある声がある。

『手こずってるみてえだな、アースルーシイ！うちらが手エ貸してやるよ！』

「エドルーシイ!？」

「どハ!？」

地面から生えてきた苗は急成長し、レギオンを押し返しながらギルドが現れた。エドラスのフェアリーテイル全員で駆けつけてくれたのだ。エドルーシイが王都で別れてから仲間の元へ走り、全員に必死に戦おうと訴え、今ようやくやってこれた次第だ。

「ギルド!？ま、まさか……」

「みんなで来てくれたんだ！さっすがお姉ちゃん！」

「遅くなっちゃまって済まなかったな。加勢してやるから追い返そうぜ」

|| || || ||

「『龍仙牙』!」
りゆうせんのかば

「『蒼断棍』!」

魔法を使つての応酬を繰り返すこと数十撃、傷が増えても倒れようとはしない。このまま攻めあぐねている事を良しとせずにいるシリルはある提案を示す。一騎打ちの一発での決着だ。

「決着つかねえか。なら、お互いこれで最後にしようや、なあユリア?」

「そうですね。これ以上無駄撃ちはしたくありませんので」

「なら決まりだ」

もう拮抗した状況で動かないのなら、一発に全てを乗せて決着をつけるべきだとお互いに決意する。己の意思に呼応して武器を最強の形へと変化させていく。

「双棍は竜を天へと登らせる槍になる。『昇竜の槍』!」

「聖なる牙は邪なる野望を星に帰す。『斬竜刀・星彩』!」

かたや双棍を一本の槍へ、もう一方は大刀に全魔力を注いで光り輝く星のようにする。乗せる思いも夢も約束も何もかもが違う。

「これの一撃で王国の力を示します」

「打ち砕くまでだ」

「うおおおっ!」

「はああああっ!」

正面に一振り、互いの決闘は雌雄を決しようとしていた。すれ違いざまに放たれた一閃、軍配を上げたのはシリルだ。肩を切られながらも武器をへし折り、峰打ちでユリアの膝を屈させた。

「あたいの勝ちだ、昇竜破れたり。剣術三倍段とか言うけど、こつちの実力が上回ったようだね」

「なぜ、なぜ私を斬らなかつたんです?」

「あなたには死なれたら困るし、ジェラルもあたいもそれを望まないからさ。付いてきな、アースシリルのところに行くよ」

「……分かりました」

|| || ||

「エドルーシイ、なんで来てくれたんだ?」

「何か感化されたらしいよ」

「まあ援軍に来てくれたんならそれで良いか」

エドルーシイが決戦への参加を決意したのはアースランドの皆の熱い覚悟に心動かされ、エドラスの自分たちが動かないで何がギルドだと心意気を感じたからだ。

『『ブラックホール』!そこからの……』

「『大気功掌』！ナイス連携よ」

「やるわね、まだ小さいのに」

「私はもう15です。小さくないです」

「私も心はおつきいつもりだよ！」

「ごめんね。私お姉ちゃんとお兄ちゃんしかいないし、ギルドに私より年下中々い
からね。それにしてもルーシイとか似てるのに、貴女たちの顔は見かけたことないわ
ね」

「それもそうでしょうね。こっちの私たちはあまり似ていませんから」

まだしばらくは知る由もない、話しかけてきた彼女がどんな存在なのかを。

|| || ||

「シリル姉様、王子はこの後どうするおつもりなのでしょうんか？」

「久しぶりにそう呼んでくれたな。そうねえ、魔法の返還だろうさ」

「それじゃあアニマを!？」

「そうさ。この世界には本来魔力なんて殆ど無かったんだ、求めすぎたんだよ。それを
あるべき形に戻すまでだ」

ジェラールことミストガンが向かったのはアニマ制御室のある方。それはつまりア
ニマの操作によるアースランドへの魔力放出と融合だ。豊潤な魔力を持つアースラン

ドなら放たれたものを受け入れるだけの器があるからだ。

「そう、ですか。私たちにはもう……」

「心配すんな、ちゃんとやっていけるって」

＝＝＝

「魔力が!?!急に魔法が!」

「どうなってるんだ、こつちも急に壊れたぞ!」

「な、何が……」

「おそらくアニマの逆展開だ」

「魔力をあるべき形に、アースランドに帰すんです」

レギオンに乗ってきたエドラスのシリルとユリアは魔力の流出の原因を説明してくれる。ミストガンの真の目的はこの世界からの魔力の放出、喪失による新しい世界の創生だ。

「姉さん、それ、本当ですか?」

「マジもマジ、大真面目だよ。元からこうするつもりだったんだ、ジエラールも」

「じゃあ、魔力を身体に持つ私たちは?」

「時間を置いて元の世界へ、これでお別れだろうか。もう戦争はおしまいです」

要はアニマで吸い込まれた時の逆の現象が起こるのだ、魔力を持つ者は全てアースラ

ンドへと送られる。もう魔力がなくなるといふ事は二度と並行世界が交わる事は無いのだろう。最後の別れを前にシリル同士、贈り物をする。

「アースシリル、これをおんたに渡しておくよ」

「オカリナですか？」

「あたいのお守りみたいなもんさね。餞別だよ、あたいなりのね」

「いただきます。お返しと言ったらなんですが、これを……」

「髪留めか、良いじゃん。そろそろ髪伸ばそうかねえ？」

それは大切に持っていた宝物だ。この別れの贈り物を大事に、お互いを決して忘れない。そんな誓いの贈り物だ。そしてリミットが来たのか、遂に身体を光が包み、アニマに向かって引力が働き始める。

「身体が……光ってる」

「そろそろ戻る時間だ。たった数日だったけど、楽しめたぜ」

「敵対してしまいました、貴女がたのお陰で……滅竜魔道士の方も上手くやってみました。これで国も変わるはず。ありがとうございました、色々」

「私は、貴女たちの事を何百年経とうとも忘れません」

「ああ。じゃあ、あんたらの事はあたい達の人生を変えた人として忘れやしないよ。

「元気でな」

|| || ||

「うわっ……つと。あ、戻ってる！」

「アースランドに帰ってこれたのね（この指輪、大切にしますね。エドラスの私……）」

「ナツ兄ちゃん、勝ったの？」

「おうよ！まあギリギリだったけどな」

国王の乗る竜兵器を倒した彼らと共に、なんとか街に戻ってこれたが、街の様子も気になるところだ。

「さてと、街の様子を見ておきたいが……」

「みんな無事だよ、気づいてなかったみたいだけど！」

「えっ？ど、どうしてエクシード達もいるのよ！」

「僕達も魔力持ちだからね。引っ張られてきちゃったんだ」

魔力を持つ彼らエクシードもアニマの逆展開の影響を受けていたのだ。そんな彼らとの会話でシャルルの情報が未来予知の暴走による影響である事が判明した。そして、これからは彼らは女王の元、静かに暮らせる場所に移住する決意を固めた。彼らが去り、妖精の面々のみになった時、ガジルがあることに気づく。

「そういえばリリーはどうしたんだ!?あいつを相棒にするつもりだったのによ！」

「俺ならここにいます。身体は小さくなってしまったがな」

「うわ、ちっちゃっ!どうしたの!」

「どうもサイズがこちらの世界に馴染まなかったらしい。おいガジル、俺を王子のいたギルドに入れてくれるのだったな? 約束は守ってもらおうぞ」

「勿論だぜ、相棒!」

戦っている最中にもそんな約束をしていたのか、新しいエクシードがギルドに入る事が決まった。何故かガジルが泣いて喜んでいたが。

「それはそうと、1人怪しい奴を捕らえてな。出てこい」

「うわっ!ちよつと、私も妖精フェアリーテイルの尻尾の魔道士なんだつてば!」

「えっ!」

「お前、リサーナ!!」

死んだはずのストラウス家次女の姿がそこにはあった。

第52の唄 帰郷、そして哀しみ

「ちよつと、この縄解いてよ猫さん」

「俺はエクシードだ、名前はパンサーリリー、覚えておけ」

「なんだお前は、俺の相棒に文句でもあるのか!？」

「そ、そういう訳じゃ……ってナツ、ハッピー!」

「えっ? うおっ!？」

あまりに突然の登場に惚けていたナツは突撃したりサーナを受け止めきれずに倒されてしまう。こつちのナツにハッピーを知っている事に違和感を抱くが。

「久しぶりに会えた……三年ぶりだね」

「待て、アースランドのリサーナは死んだはず。ここに来れる筈は」

「でも魔力を持たないならこちらへは来れない筈。もしかして」

「うん。本当はこつちの私なの」

「でもどうして……あつちのギルドで会つただろうが!」

ナツとハッピー、ウエンディとシャルルはあつちのギルドで一度対面しているにもかかわらず、ちゃんと話すのは今になってなのだ。

「私ね、三年前のあの事故の時、アニマに吸い込まれたみたいなの。ただの偶然だろうけど。その時にあつちのリサーナは死んでてね、ちよつと後ろめたかったけど、成り代わったの。三年間それで過ごしたんだけど、ナツたちが来て、あの戦争があつた」

「最後にアニマの転送に引き込まれた、そういう事ですね」

「ええ。私は魔力を隠してただけど、どうにもあつちのミラ姉とエルフ兄にはバレてみたい。あの時言い出せなかったのはあの2人が居たからね」

あちらの姉や兄、仲間たちを悲しませぬために嘘を三年かけて貫いた事、そしてそれすらバレていたことなどを告げていく。

「色々事情は分かった。今ミラたちはお前の墓のところにいる、場所はカルディア大聖堂の裏手にある。行つてくるといい」

「ありがとうエルザ。それと……エドラスでの隊長さんたちね、あの2人」

「そうだ、お前が居なくなつてから加入したメンバーの内の2人だ」

「そうなんだ。ありがとう」

＝
＝
＝

「いやあ、ギルドもミラ姉も雰囲気変わったねえ」

「ふふ、そうかしら？」

「うんうん。でもまあなんだろう。このギルドはどこに行つてもこのギルドらしさはあ

るなあ」

どちらのフェアリーテイルにも居たりサーナの率直な感想がそれだが、これに関しては確かだし、新たな仲間になったパンサーリリーも同じ感想を抱いており、皆に魔力がある事を含めて戸惑っていた。

「ギルド、いつもより賑やかですなマスター」

「そうじゃなあ。ミストガンの事は残念じやったが、元気にやっておるじやろうか」

「心配ねえさ。なんとたつてこのギルドで育つたんだ、力強く生きていくぜ」

「そうですよ……それとマスター、あれの発表があつたら、その頃に出発しようかと」

「そうか、約束の時期に差し掛かったか。2年弱、長かつたような短かつたような」

チキによって出されていた帰郷の命はこの冬に出立する事を条件にしていたのだ、そろそろ帰る準備などをしないといけないし、もう長くは街にもギルドにも留まれない。

「あつちに帰つたら次いつになるか分かりませんが、毎年連絡だけはしておきますので」

「うむ。ユリアのことは任せておけ、ワシらでしつかりと預かる。それまでの間に皆に挨拶しておいてやってくれい」

「嬢ちゃんもう帰つちまうのか。会つたばつかであんまり話せなかつたなあ」

＝
＝
＝

「ふうん、2人とも神様の巫女さんなんだね」

「私はまだ見習いだけだね。師匠がまだダメだつて」

「そっか。なんか妹が出来たみたいで楽しいわね」

「まだユリア10にもなつてないから仕方ないわね」

「あ、お姉ちゃんひどいよう！」

リサーナやユリアと残り短い時間を過ごす事にしたシリルはユリアをからかいながらも楽しく過ごしていると、そこにナツやエルザなどのいつものメンバーがやってきた。ナツは既にハッピーと組む事を決めており、他の8名も相棒を次々に決めていく。リサーナはジュビアと組んでいて、ユリアはこのギルドに残る事になった。

「おうシリル、お前実家に帰るんだつてな」

「ええ、あちらで色々とやらないといけないので。もしかしたら数年くらい帰つてこれないかもしれませんけど」

「あれ、そうなの!?!聞いてないよお姉ちゃん！」

「仕方ないことだユリア、シリルにも事情があるんだ。それで、やる事というのは？」

「神の座の引き継ぎでしょう。母様も限界に近づきつつありますから」

「さみしいけどもう決まってたんだね。あつちに着いたらお手紙とか出してよね！約束だよ！」

|| || ||

「さて、そろそろこの時期か」

「何が起こるんだろう」

「毎年の恒例行事で、試験の時期なんだ」

「試験？それって……」

「マスターが来た、よく聞いておけよ」

いつの間にか作られていた舞台に立つ現S級魔道士とミラ、そしてマスター。彼らの登場に皆大いに盛り上がり、何かの発表を急かしていく。

「待たせたのう。発表しよう、今年の『S級魔道士昇格試験』出場資格者をー」

「S級昇格!」

「燃えてきたぞー!」

マスターからの発表はそれ即ち一年に一度のS級選抜の試験である。この試験は難関であり、不合格者しかおらず、合格者ゼロなんて年もあったくらいだ。そんな試験に誰が選ばれるのかを毎年楽しみにしているのだ。

「資格者は次の8名と定めた。ナツ、グレイ、ジュビア、レビイ、エルフマン、カナ、フリード、そしてメストじゃ。場所は我がギルドの聖地天狼島にて一週間後に開始する。それまでの間にS級魔道士以外のギルドの現役魔道士からパートナー1人を決め、港に

集まるように。それともう一つ話がある。既に知っている者もおろうな」

「私、シリル・L・ゼウスティアは、試験の始まる前に帰郷させていただきます。2年近くお世話になりました」

「話の通り彼女はあと数日をもつて一度ギルドを離れる、積もる話もあるじゃろう。以上じゃ」

＝＝＝

「じゃあ行きますね。ユリア、元気でね……兄さんたちも試験頑張ってください」

「次会った時は俺がS級かもな。誰がなつても驚くなよ？」

「お姉ちゃん、頑張つてね！」

「あつちに着いたら連絡するわ。私の部屋は好きに使ってもらっていいから」

あの発表から二日後、遂にシリルは帰郷の日を迎えることになり、ギルド総出で送り出しに来てくれたのだ。シリル達の家はユリアに全て譲り、そしてある紙を彼女に手渡す。

「これ、連絡ラクリマ用のチャンネルよ。私はあつちから直接家に置いてあるラクリマに繋ぐわね」

「了解したよ」

「また成長して会うのを楽しみにしてるわね。頑張つてちょうだい、『冥府神の巫女』と

しても」

「うん、次に会う時はもう神様の座に就いてるかもだけど、それでも私の大好きなお姉ちゃんなのは変わらないからね！」

彼女との出会い、さまざまな人との繋がり、墮天使との敵対、そして数多の別れ。2年弱であまりにも多くを経験したが、それが成長に繋がっている。

「(またいつか会いましょう。私に大切なものをくれた人たちよ)」

====

『いよいよ時は来ました。引き継ぎの儀式的準備を進めてください』

「ははっ、かしこまりました」

『貴方の仕事はそれで最後とします。今までの労をねぎらい、最期のひと時まで暇を与えます。我が右腕、フアラスよ』

「貴女に仕えて60年、とても充実した生涯の仕事となりました。せめて貴女の側で、最後まで働かせていただきましょうぞ」

帰還の一報を受けた神と彼女の数十年來の臣下は最期の挨拶を交えていた。主人の死と並行するように引退する者。世代交代を果たそうと言うのだ。

『(シリル、貴女には童王祭の話、そして我が先代のナーガの死に際を知ってもらわねば。これも宿命なのでしょうが、私の死が発覚した時に貴女を、神の力を継ぐべき存在を拾

うことになるだなんて)』

「チキ様、如何なさいました?」

『いえ、昔を思い出していただけですよ』

愛娘との出会いはまさしく因果、そう思いに耽る神は、1人の母親でもあったのだ。

|| || ||

「あれ、あそこにいるのは……」

「おう、久しぶりだなシリル。こんなところでどうしたんだ?」

「帰郷の真つ最中ですよ、ラクサス兄さん。こんなところで会うなんて奇遇ですね」

「気ままな旅の道中なんだね。あれこれ勉強しなおしてるとこだ」

マグノリアを出て二日、砂漠近くの町で出会ったのはギルドを破門にされたラクサスだ。数ヶ月ぶりの再会だが、元気に旅の最中なのだ。

「お前、あの頃と少し雰囲気変わったな。大人びてきたって感じか、成長したな」

「ありがとうございます。兄さんも元氣そうで良かったです。これからどうなさるんです?」

「どうだかな、あてのない旅だからなあ。ま、次の街でお別れになりそうだが」

「そうですか。じゃああの後のギルドの話、今のうちに少ししまししょうか?」

|| || ||

「それじゃあここで別れようか。ギルドの話、楽しかったぜ」

「ええ、こちらも久しぶりに会って元気なのが確認できて良かったです。またいつか」「ああ、いつになるか分からんがな。もしかしたら偶然また会うかもしれないねえが」

次の街まで二日近くかけてやってきた2人だが、とある予感を感じたラクサスとはここで別れる事になった。まだ夕方ではあるものの、これ以上進むと野宿になりそうだったためここで一泊する事になった。

「ふう、私も頑張らなきゃ。ラクサス兄さんも頑張っているみたいだし」

途中で襲ってきた獣をいともたやすく倒した彼の力に、磨きがかかっている事を見て、自分も強くならねばと固く決意を固めたのだ。明くる日、日のまだ出きっていない時間から動き、砂漠^ゴこえを敢行し、夕方には新たな町に到達した。一休みしようとした酒場で凶報を聞く事になる。S級試験会場に闇ギルドの筆頭が一つ悪魔の心臓が来訪、うまく追い返したものの、その後には強襲してきたアクノロギアなる竜の咆哮が島を包み、天狼島は消失、現地に行っていた20名前後は全員行方不明になったと。

「嘘でしょ……なんで……」

|| || ||

「母様、ただいま戻りました！生命の巫女シリルです」

『おかえりなさい、愛娘よ。あちらで過ごした日々はどうでしたか？』

「みなさんのお陰で楽しく、そして実りある旅路となりました。2年の間に多くの出会いと別れが私に少しだけ道を示してくれました」

『それは重畳です……貴女の友たるギルドの一部が、魔の竜アクノロギアに襲われて行方不明だと聞きました^が』

「……彼らなら大丈夫なはずです。でもまだ信じられないです」

あの知らせを聞いてから三日後、急ぎに急いで走ってきたシリルをチキは暖かく迎え入れた。少しでも早く連絡を取りたいシリルを落ち着かせ、話を済ませる。

『彼らは私の探知で探してみましよう。さてと、貴女を呼び戻した理由、大凡検討はつきますね?』

「母様の、寿命についてでしょうか?」

『ええ。それと、貴女にその後継を頼みたいからです』

「私ですか?」

『はい。それに先立って、私の先代と闇ギルドの一つ流れる七星の因縁フォーレンスターズに関する話を、少しばかりさせていただきましよう。これから先の事に繋がりますから』

ナーガのことと、衝突した闇ギルドの話。たしかに仲間のことと同等に重要なことだ、聴き逃すまいと佇まいを正して傾聴する。

『ナーガはこの世界に平穏を与えるお方でした。私の師であり母であり尊敬するお方で

した。しかしながら、彼女の思想に反する考えを持つ団体が現れ、その団体からゼレフが400年ほど前に所属していたのですが、不老長生と周りの生物の命を奪う呪いがかけられました』

「今も生きていますか?」

『無論です。そして彼の力に魅入られた天使や神の使いが彼の力に賛同し、かのギルドが生まれました。貴女が何度も衝突した墮天使たちはゼレフの崇拜とナーガの封じたある悪魔の復活を目指しているのです』

「悪魔の復活? その悪魔とは……」

『ガルフォス、墮天使を率いた大物の悪魔です』

曰く、山を消し、海を割くことが出来たのだという。その悪魔と雌雄を決する戦いをしたのがナーガであり、竜王祭のもう一つの決戦の舞台になった。ナーガとガルフォスの戦いは十日にも及び、倒すことは出来なかったが弱体化させて数百年にも渡る封印を施すことに成功した。その解除を出来る可能性をゼレフに見出したのが彼の傘下だった墮天使たちだ。それから力を使い果たしたナーガは後継をチキに定め、残った力を与えたという。

『私の生きている間に復活はなかった。貴女が墮天使を倒したことで意図せず食い止めてくれたからです。この厄災を貴女に押し付けてしまうかもしれません。それで

もこの神の座につきますか、シリル。貴女には選択する自由がありません、強制はできません』

「元より覚悟の上です。貴女の娘になって十数年、いずれこうなってもおかしくはないと感じていましたから」

『そうですか。ならば貴女の神としての器を完成させましょう。あと二ヶ月、修練の間はそれだけです』

「はい、畏まりました」

＝ ＝ ＝

「ユリア、聞こえるかしら？」

『あ、お姉ちゃん無事に着いたんだね!?!それよりマスター達が!』

「旅の途中、方々で聞いたわ。正直ショックだわ」

『今他のギルドの人とか評議会のラハールさんとかが調べてくれてるよ!』

帰郷翌日、早速ユリアに連絡ラクリマを通して話を聞こうとラクリマを立ち上げた。慌てたようにユリアが応答してきた。マスター達が行方不明になってから天馬やラミアなどが積極的に探しており、ラハールの要請によって評議会の方でも動いてくれていること。それでも4日経つがエーテルナノの異常数値を観測したが故に搜索が難航していることなどが分かっている。マスターが居ないのは今後問題になるとしてマカ

才が暫定的に4代目の座についたこと、そしてユリアもギルドに残りつつ正式な巫女の座に就くことが分かった。

「私の方は暫くここを離れられそうにないわ。肝心な時にごめんなさいね」

『しょうがないよ、これはこれ。それはそれだもん』

「ありがとう、そう言ってもらえると救われるわ。あの強いメンバーがそう簡単に死ぬとは思えない」

『うん、同感だよ。じゃあ一旦切るね、また来月くらいかな？』

「そうね、また話しましょ」

連絡を切り、シリルはユリアに見せなかつた涙を流す。信じているが、それでもまだ不安は拭えない。信じているからこそ、前を向く。

「私は……皆を探し出してみせる、必ず！」

第7章 復活への道 大魔闘演武編

第53の唄 唄は再び奏でられる

「母様、お呼びでしょうか？」

『シリル、この数ヶ月の鍛練、よくぞ乗り越えました。いよいよその日が来ました』

「継承の儀、ですね」

『そうです。器、心の内にあるべき魂の唄、身体的な力、それが完成に近い。今の貴女なら私から力を受け継ぐに足りません』

785年になって最初の雪の日、シリルは遂に修業の成果を果たすべく400年近くぶりに行われる神の座の後継に移る。その前にチキより新たな名前をつけられる。

『貴女のこれからの名は『豊命神カノン』、新しい世の中を豊かなものにするのですよ』

「カノン……いい響き」

『本当によろしかったのですね、神の座を受け継ぐこと。もはや人間としての一生は捨てると同義になります』

「少し、考えました。でも、私はその一生を一度は捨てたも同然、貴女に会わなければ死んでたのですから。それに、神になったとしても、魂の繋がりはできる。私はこれでい

いのよ、母様」

満足そうに、そしてどこか寂しそうな顔のシリルに少し心配そうに眺めるが、覚悟を決めた愛娘を止める言葉は見つからず、最後の確認をする。

『これから貴女に力を継承させます。それから、私という存在も無くなります。書物と記憶にしか残りません。信仰は貴女のものになるでしょう、守るものが増えますが、覚悟はよろしかったですね?』

「我が心に迷いはありません。貴女の司る力を受け、愛する者たちや仲間の為、その力を使います。誓いましょう」

『良い答えです。この魔法陣の上で継承の儀を行います。瞑想を』

「ふう……」

『（心は平穏そのもの。死の前に良い娘を得ました）貴女は私の誇りです、どうか前へ前へと進みなさい。はっ!』

全ては平穏な世のため、自らの持つ力を全て受け継がせ、新たな門出を祝うかのよう
に光がシリルを包み、消えていく。これで古来から行われてきた継承の儀が滞りなく進
んだ証でもある。

「これが、母様の力……」

『継承は終わりました。もうこれからは貴女が現人神として進まねばなりません。そし

て……この十数年間、貴女と出会い、思い出を紡ぎ、言葉を交わしたことは私の生涯の楽しみでした。貴女をこれ以上側で見守れないのが残念ですが、心健やかにあちらへ逝けます。ありがとう、さようなら。心の奥底から愛していたわ、シリル」

「母様、ありがとうございました。そして400年間お疲れ様でした。どうかあちらでもお元気で」

これが現世での最後の言葉になる。涙声になりながらも胸を張って送る。

「さようなら、私の誇り高い母様。ありがとう……」

『泣かないで。最期くらい笑顔で送って』

「はい……私も、頑張るね、母様」

＝＝＝

「あれからもう7年か。早いものね……母様、私はまだ未熟だけど、元気にやってるわ」
時は流れて791年になり、神の座を継いでから早6年半が経った。仕事も力もだいぶ馴染み、余裕さえ生まれつつある。この日は時々連絡していたユリアから呼び出しを受け、街に降りてマグノリアまでやってきていたのだ。

「待たせたわねユリア」

「カノン姉さん、みんな待ってるわよ」

「ええ。そういえば天狼組は戻ってきた？」

「それがまだなの。連絡した通りだけど、あれからギルドが弱体化するし、ロメオくんは落ち込むしで大変なのよ」

「そう、色々あるのね」

マグノリアの市街地を抜けるに従い、あちこちで変化が見られた。まず妖精の尻尾があつた建物は閉鎖され、その近くには黄昏の鬼なるギルドが力をつけたのか大きな存在になっている。

「姉さん、ギルドに戻るつもりは無いんだよね？」

「私もできればそうしたいけど、立場もあるし忙しいから何とも言えないわね」

「そっか、やっぱり無理そうなんだ。みんな戻ってきてほしがってるけど」

「それにしても、街の方もだいぶ変わったわね」

「新しいギルドがここの筆頭ギルドになったし、私たちの方は隅に追いやられるし……」

「多分今のままじゃ潰れるのも時間の問題なの」

「ここからどう巻き返すか、ね。だいぶ厳しい状況ね」

「存続はギリギリ、メンバーも大半がこの弱体化の中で去って行き、別のギルドや仕事に就いているケースが増え、更に弱体化の拍車をかけた。」

「姉さん、チキ様のこととかはもう大丈夫なの？」

「私は母様からこの世を笑顔で託された、泣いている場合じゃないわ。闇ギルドにアク

ノロギア、ゼレフにあの悪魔。やる事はまだ沢山あるもの。それとね、あれから消えた仲間の探知を何度もしてみたんだけど、ここ一年くらいでようやくだけどうつすらと生命の拍動は感じるわ。薄すぎて消えそうなくらいに小さいのだけど」

「本当に!? それ聞いたらみんな喜ぶよ! まだ希望は失せてないし!」

「ダメよ、ぬか喜びをさせる訳にはいかないわ! 大丈夫、彼らなら自分たちで帰ってこれる」

「う、うん。そう……よね」

「ごめんなさい、怒鳴ったりして」

希望になるのは確かだ。しかしながら万が一のことを考え、それを伏せておこうと言うことになった。しばらく話しながら歩いているうちにギルドの現在のある場所に辿り着いた。

「ほい、見えてきたよ! あそこが今のギルド」

「予想以上だわ、これ。でも温もりはあるわね」

「うんうん、いいでしょ!」

「どう挨拶すればいいかしら?」

丘の上に立つ小さな建物こそ今の妖精の尻尾のギルドの建物になる。だいぶ小さくなり、弱体化の証左とも取れる。

「マカオさん、戻ったよ！」

「だから4代目って呼べよ……で、その姉ちゃん是谁だ？」

「だいぶ変わったもの、気づかないのはおかしくないわ。久しぶりね、いや初めましてと言っておこうかしら。シリル・L・ゼウスティア改め豊命神カノン……7年ぶりの再会ね」

「し、シリルだあ!？」

「ど、ど、ど、どういうことだよリア！今日来るって聞いてねえぞ！しかも名残があまりねえじゃねえか！」

「ワカバさん、4代目、落ち着きなよ」

知り合いを連れてくるなど曖昧な伝え方をしたのか、シリルが帰ってくるとは思わず、困惑の声ギルドの中に木霊する。しかしながら仲間の来訪を喜び、歓迎してくれた。

「まあとりあえずゆっくりしてってくれ、お前がどんな立場だろうと俺たちの家族なのは変わりねえからよ」

「そう言ってもらえて助かるわね」

「何人か居ないけどどこ行ったのかしら」

「ああ、それなら天馬に教えられて……天狼島の跡地に向かったよ、ユリア姉」

「もしかして、全員見つかるのかしら？（一年前からのこの魔力の感じ……あながち嘘じゃなさそうだしね。それに何故か今はつきりと感知できる）」

クリステイーナ改により、偶にはあつたが協力を無償でしてくれた結果、天狼島があつた海域のエーテルナノ数値が変動し、復活の兆しが見えたという。それを確認しに何人か行っているそうだ。そんな折に借金の返済催促がやって来る。

「よお、借金の返済の件だけ？」

「お前ら、まだしばらくは良いとさつき言つてただらう！」

「ところがどっこい、そういう訳にはいかねえつてマスターの指示だ。諦めな」

「借金ねえ……金困つてたなら私に言いなさいよ4代目」

「額がなあ……それにお前に頼つてばかりもいらんねえよ」

「テメエ何者だ？ 昼間までいなかったよなあ？ 俺たち『黄昏の鬼』トワイライト・オーガを知らねえとは言わ

ねえよな？」

「申し訳ないけど、ほとんど知らないも同然ね」

「ふざけやがつて……テメエは引つ込んでやがれてんだ、部外者だろうが」

「あら、残念ね。身内よ」

「ナメた態度しやがつて」

今や街一のギルドを自負する彼らにとってカノンのこの態度は受けつけないのだろ

う、次第に喧嘩腰になってくる。だが、仕掛けようと武器を手にした途端に入り口から声が飛ぶ。

「俺たちのギルドで喧嘩すんなら容赦しねえぞ」

「あ？誰だ……グボア！」

「あら？」

「兄貴！クソオ、やつちまえ！」

蹴飛ばされた仲間を見て怒りが爆発したのだが、全員返り討ちに遭い、伸される。何事かと見てみると、そこには懐かしく会いたかった顔があった。

「へへ、ようやく帰ってこれたぜ！」

「ナツ兄、みんな！」

「遅かったじゃない、来てくれなかったらどうしようかと思ってたわ」

「よく言うよ姉さん。分かってやってたでしょ」

そこにあつたのは見に行っていたメンバー、そして7年前と変わらぬ姿の天狼組だった。思わぬ帰還に皆涙し、そして笑顔でもって迎え入れた。

「おかえり、みんな！」

「成長したじゃねえか、ロメオ」

「4代目、みんなが帰ってきたし、私も来たもの。もうやる事は一つよね？」

「ああ、勿論だ、勿論だとも！こんな嬉しい事はねえよ……宴会だあ！」

＝＝＝

「まさかあの別れが7年前の姿をみる最後の時だったとはな」

「こつちもびつくりしたわよ、まさか別れてから天狼島に行ってるなんて思いもしないし」

「差をつけられちゃったね、ウエンデイ……」

「ええ、いろんな意味でつけられちゃいましたね、レビイさん」

「そう落ち込まないでよウエンデイ。まだまだこれからじゃない」

「まさかユリアちゃんが歳上になってるなんて……うう……」

「ああもう！泣かないでよおく！」

身長や年齢、そしてとある部分で大差をつけられ、気落ちするレビイとウエンデイをユリアは宥めることになった。

「いやしかし、本当に神になってたとは。これからなんと呼べば良いものやら」

「あれから7年ですし、こつちも色々ありましたから。カノンでもシリルでも好きなくうに呼んでくださいな。偉くなったとはいえ、余所余所しいのはごめんなので」

「そうか。しかし、そうなると母君は……」

「ええ、7年前に。ただ、彼女は今も我が心に生きていますから。それにちゃんと墓は建

てましたよ」

神になったとはいえギルドの一員なのは変わらない事実だ。だから親しい人間にはかつての名前を呼んで欲しいと願う。そこにやってきたのはアルザックとビスカの娘、アスカだ。まだ小さく、5歳前後とこのギルドでは最年少の子だ。

「ねえねえお姉ちゃん！わたしと遊んで！」

「うん、良い子ね！よおし、いっぱい遊ぼうね」

「うん！」

「こらアスカ……ごめんねシリル、どうしても遊びたいって」

「良いのよ、子供は私にとっても宝。いつでもどうぞ。よーし何しよつか？」

「おはなしきかせて！」

豊かな命を育む存在にとってどんな種族でも子供を大事にしたいと欲していたし、元々の性格ゆえか、嫌がるどころか嬉々として遊んでいる。その近くではロメオが嬉しそうにナツやガジルと話していた。

「ロメオ、お前も魔法使えんのか！」

「父さんやナツ兄と同じ炎の魔法だよ。元ファントムの兎々丸先生にこっそり教えて貰ったんだ。父さんが使うのと同じ粘着質の紫の炎に青い冷たい炎、臭い炎も出せるよ」

「へえ、あいつそんなことしてんのか。ギヒツ、あいつらしいかもな。しかしお前親父さんよりハイスベックじゃねえか？」

「ロメオくんのマフラー、ナツ兄さんに憧れてだそうよ」

「ユリア姉、言うなよ！」

憧れの存在に近づこうと同じ属性の魔法を覚え、服装も真似ていたのだ。なんとも微笑ましい光景とも言える。ナツたちがそれ以上に驚いたのがユリアの成長だ。あれから7年、もうすぐ十六歳になる彼女はギルドの支えとなっていたのだ。

「お前も成長したよな」

「7年前のチンチクリンがこうもでかくなるとはな」

「今は私がこのギルドの主力よ！」

「ユリア姉が居なかつたらもつと厳しかったよ。評議会とか他のギルドとの繋がりがあつてさ、そこから頑張つて仕事持つてきてくれてたからさ」

シリルたちのいない間は他のギルドから仕事を分けてもらったり、シリルの作った評議会との繋がりを受け継ぎ、そつちからも仕事を融通して貰っていたのだ。それでも減る仕事の中でどうにかやりくりしていたという。

「まあ、それでも存続がギリギリだったのよ。良いタイミングで姉さんも兄さんたちも戻つてきてくれたわ」

「俺らに任せろよ！」

「助かるわ。最近巫女の仕事も増えてたし、姉さんとの連絡も疎かにするわけにもいかなかったから、正直きつかったのよ」

「お、おう……泣くほどきつかったのか」

＝＝＝

「ユリア、久しぶりに一緒に仕事どう？」

「良いわ、行きましょ」

「お、お前らも仕事か！俺たちもついてくぜ」

「兄さんたちもかぁ。良いよ」

7年ぶりにチーム再開とだけあつてどこか生き生きと仕事に向かう。そんな一行の中で話題になったのはラクサスの破門解除だ。4代目が辞めると告げたことで急遽5代目の指名があり、白羽の矢が立ったのはギルダーツだが、その5代目の意向だ。

「そういえばラクサスがギルドに戻るんだと。流星はギルダーツのおっさんだな」

「結局はマスターの座も三代目に渡ったのね」

「えつと、マカオさんが4代目で、ギルダーツさんが5代目で、マスターが三代目兼6代目と……ややこしいわね」

4代目マカオから5代目にギルダーツの後継があつたものの、性に合わないからと即

座に辞任、ラクサスの復帰と3代目のギルドマスター再任、そしてギルドの再建を託して旅に出た。

「そういやあ、ユリアが主力って話だけだよ、魔法はどうなんだ？」

「属性は大して変わってないわよ。威力は段違いだと思うけどね」

「面白そうだ、帰ったら一回戦おうぜ」

「やってみる？ ナツ兄さんには負けないだけの力をつけたのよ！」

＝＝＝

「『シャドーハンマー』、『フレイムソード』！」

「パワーアップした弾幕を潜れるかしら？ 多重弾幕結界『弾血乱舞・神式』！」

「俺たち必要だったか？」

「2人で大半片付けてしまったわね」

「私、何もできてないです〜」

実力をつけたユリアに神の力を宿してるカノンの前に全員啞然とし、消化不良のまま仕事が終わってしまった。

「お疲れ様つと。やっぱ姉さんが一番やりやすいわね」

「腕を上げたわね。みんなも頑張ってたんじゃない？」

「よせ、今の2人には敵いそうにもない」

付いてきた意味が有ったのかと考える者もいる中、ギルドの前まで戻ってきた一行。ここでナツとユリアは出発前の約束通り一戦交えることになる。

「よつし、じゃあナツ兄さん。約束を果たすよ!」

「へへ、燃えてきたぜ!」

「やる気満々!こつちも心が震えるよ!」

「うわ、ナツと渡り合えてるよ」

「潜在能力は十分だったもの、あの調子だと更に成長の余地ありね」

「うげ、やりあつたら勝ち目ねえな俺とか」

ギャラリーが増えていく中で話題になったのはこの7年間についてだ。

「しかし、7年間の間に成長してるあいつや他のメンバーと、あの天狼島の一件以降ずつとそのままの私たちの間では実力に差がついたりしててもおかしくない」

「私たちも戦力になるには修行とか必要ってこと?」

「うむ。見てみる、あのナツでさえ少々押され気味だ」

ふと戦闘に目を戻すと接近戦をユリアが優位に進めており、ナツが珍しく苦戦を強いられている。7年間のギャップが如実に出ている。

「くそお、本気出さねえとマジイな。『モード・雷炎竜』!」

「えっ、何よそれ!」

「『雷炎竜の……』」

「打ち消せるかしら。『冥府神の……』」

「咆哮！」

「大一声！」

ラクサスから譲り受けた力を發揮しても決着がつかない。並み居る魔導士に比べて威力の高い滅竜魔道士のパワーを持つてしても勝てるとは限らない。

「こ、これもダメかよ……」

「はあ、はあ、危なっ……ってナツ兄さん！」

「やべっ、魔力切れか」

「あーあ、無理するからよ」

結局は五分五分の戦いがナツの魔力切れによりユリアの勝ちになった。これを見るだけでも実力の差がついたり、平均的に力が向上していると見てもおかしくない。

「これで分かったな。ナツの全力を持つてしても五分五分だ、元々破格的な強さのギルダーツやラクサスはともかく、これでは我々は時代に取り残されている可能性が高くなったということ」

「しようがないか。やろうか、修行」

「手伝えることはするわよ」

こうして時代の流れを肌で感じた天狼組は自分の力を底上げすべく特訓に励むことになったのだ。

第54の唄 宴と時と

特訓と一言にいつても目指す形は様々だ。戻ってきた天狼組は大魔闘演武での出場と優勝と賞金を目指して各自様々な場所に散り、己の課題と向き合う。いつものメンバーにジュビアとシャドウギアの3人を加えた一行は夏のビーチにやって来ていた。

「本来の目的として遊びに来ていられるわけじゃないから、そういう事をするのは今日の昼間まで。そこからは修行に励むのよ」

「分かってるって。そうと決まりやあ遊ぶか!」

「昼食つたらまたここに集合ね!」

夏のビーチに来ているのだ、浮かれる気持ちを抑えろというのは無理がある。皆思い思いに楽しんでいる。泳ぐ者、砂遊びに熱中する者、日焼けする者と様々だ。ウエンデイだけはポーリユシカから譲られた二つの滅竜奥義を習得せんと頑張つて勉強している。

「さてと、エルザ姉さんは剣術修行。ルーシイ姉さんは魔力の底上げでウエンデイはポーリユシカさん経由でグランデイーネさんから貰った新しい魔法の習得ね。ナツ兄さんたちは身体的なトレーニングと……」

「見事なまでに目的がバラバラね。貴女はどうするの？三ヶ月後に大魔闘演武に出るってマスターが決めたわけだし」

「そうだねえ。まあ、輪廻廟でやったような方法で巫女としての実力を上げるかな？」

「なるほど、あれなら皆のやりたい事にも合ってるかもしれないわね。とりあえず皆の練習メニューを伝えてくるから頑張ってねユリア」

夏の大特訓は昼休みが開けた瞬間から開始される。各々磨きたいスキル、磨くべきポイントを大きく伸ばす時間だ。三ヶ月と時間は目一杯あるのだ、この時間を惜しみなく使いたい。

「よし、これからは修行よ！先程伝えたメニュー通りにね！終わったら各自やりたい方針に沿ってやって頂戴！」

「よっしや、断然燃えてきたぜ！」

「それじゃあ解散！」

各々の修行に励むべくそれぞれの場所へと散っていく。カノンも自分のやるべき修行を考えており、今持つ技の改良や新技の練習だ。

「よし、私も一つやろうかしら。『神依』……そろそろ名前変えようかしら、この技」

＝
＝
＝

「ふう……今日だけでも大分成長した気がするぜ」

「修行の効率が良かったからか、身体が少し軽く感じるわね」
「お疲れ様。また明日からよろしくね」

1日目の修行は有意義な過ごし方ができた。内なる力が練り上げられ、心も体もさぶる調子が良い。一日でここまで澄んだ気持ちになるのなら三ヶ月で大きく成長できるのではないか、そう感じさせられるほどの濃い一日になった。そして翌日。

「よおし、今日もやるかあ！」

「そうね！やる気も十分だし！」

「姫、その前に少し宜しいですか？」

「きやあ、バルゴどこから出てきてんのよ！」

「お置ききですか？」

さて修行だ、と意気高らかに叫ぶ一行の元にやってきたのはルーシイの星霊処女宮のバルゴだ。呼び出されない限りよつぼどのことがなければ現世に降り立つ事は珍しい。よく来るレオを除けば何故やってきたのか分からない程だ。

「どうしたの急に？」

「実は、星霊界で未曾有の危機が迫っているのです。それを皆様に解決していただきましたのです、どうかこの通り」

「何？それは聞き捨てならぬな」

「それなら行くよ！でも……」

「今回は特例です。星霊王直々の依頼ですので……移動します。輸送中に星霊界用の服を着ていただきます。では！」

転送魔法陣に何故かマックスとドロイ以外が送られた。いつの間にか変わった服と目の前の風景に驚くばかりだ。

「……が星霊界……」

「あら、至って普通じゃやない？特に問題は見えないわね」

『よくぞ来た、古き友に盟友たちよ』

「お前が星霊王か？」

「久しぶりね、獅子宮シオンの一件から7年かしら？」

『うむ、突然ですまなかつたな』

現れた星霊王、星霊たちも皆無事、星霊界には異常は特に見られない。危機に陥っていると聞いていただけにこの冷静かつ普段どおりの姿に違和感を覚える。

「危機に陥っていると聞いたが……」

『ふふふ、あれは嘘じゃ！7年ぶりに時の呪縛から帰還した友人を迎えて、宴をしようと思つてな！』

「えっ？ば、バルゴ？」

「えへっ」

どうもこうやって嘘をつかねばやってきてくれないだろうと思つての行動らしい。だが、どんな行動であれ、受け入れてくれてるのは間違いない。せめて今はこのひと時を楽しんで味わねば損という事だけは皆心から理解できた。

「ふう、まあいいんじゃないかしら?」

「そうだね」

『おお、豊命神殿か! お主はこちらへ来てくれ、個人的に話したいことがある』

星霊王直々に話がしたいという。星霊界に導かれた事を見ても特殊な例なのだ。こうして直接話したい事とは何なのか不思議に思いつつも宴で盛り上がる舞台から一先ず降り、ひっそりと話し合う。

「話って何かしら?」

『生命神からお聞きかもしれないが、七星のマスターについてでな』

「ああ、例の」

『彼の者を討伐する際には我ら星霊界も協力する事を酌み交わしておつてな、世代交代に当たつて再度確認しようかと』

「そうして貰えると助かるわ。星霊王の協力を仰げれば、安心だもの。お願いできるかしら?」

『何を水臭い、我はナーガの代からの付き合い……今更掌を返そうとは思わぬ』

それは絆とも取れる世代や種族を超えた結びつきだ。目指す世界の形のひとつとして種族を超えた絆をもたらしたいカノンとしては有難い申し出なのだ。断る道理はない、素直に受け入れた。そしてもう一つ聞かされたのは宿敵中の宿敵、フォーレンスターズ流れる七星の動きだ。

『それと、少しずつではあるが、あの悪魔の復活のために準備をしてるといふ噂を耳にした。そうとなれば、我々もまた古き友と手を組まねばならないかもしれんのだ』

「あの墮天使ども……まだ半数が残っていたものね」

『我からは話せることはもうない。済まないな、引き止めて』

「有意義な話になった、構わないわよ」

味方は多いに越した事はないし、星霊の王とも言える彼の後ろ盾は大変ありがたい話だ。数百年ともいえる交流もこれからますます盛んにしていきたい。

「あら、これは？」

「我ら星霊と貴女の母君との間の友情として貰った柘榴色の宝石です。我々にとつても人間とこうして契りを結べるのも彼女の存在があった故でございます」

「母様が……ふふ、懐かしい暖かさを感じるわね。私の力を込めても良いかしら？多分母様の能力が入っているわ」

「構いません。それはつまり我々と友情を育んでいただけると解釈しても?」
「そのつもりよ」

人間、星霊、神やその巫女。数多の意思や思いを抱える者たちがここに一つとなった。歌えや踊れの大宴会は流れていく。ルーシイと星霊との絆、妖精たちの絆、人間と神たちの思い、神と星霊との夢、これは小さいながらも新しい希望と夢に満ちた大きな一歩だ。奏でられた唄は紡がれる。

「楽しかったわ、星霊王」

『盟友や古き友との時間、有意義だった。また会おう』

これで楽しい星霊界巡りは終了した。友や思う者との夢のようなひと時は有意義なものだった。そしてこれからは切り替えていこうと修行に勤しもうとしたが、良いものと悪い話は立て続けにやってくる。

「さあて、今何時?」

「三ヶ月経つてます。星霊界での1日はこちら現世の三ヶ月相当ですから」

「はっ? おいおいつまり……」

「もうすぐ大魔闘演武!? やばいよ!」

「終わった……」

「時間返せー!」

「1日過ぎただけなのに大事な3ヶ月をほぼ使い込んだ事に当てる先のない虚しさと怒り、焦りがこみ上げてくる。これから修行するにしてもたった数日しかないのだ。」

「どうしよう。今から修行しても間に合わないわよ」

「それでもだ！私の地獄の特訓で！」

「待ちなさい、伝書鳩よ」

やってきたのは一羽の鳩だ。そこについてきた手紙には短いながらも時間と場所、記してあるべき事項が伝えられている。差し出してきた相手は不明だが、こちらの動きに合わせてやってきていた。

『近くの森の壊れた栈橋近くで待つ、全員で来るように』

「差出人は不明、予告時間は30分後ね」

「行こう、我々の存在を知っている上に反故にする理由もない」

＝＝＝

「ここだな。誰も居ねえみたいだがよ」

「それでもなさそうよ。そろそろ出てきてちようだい！そこに居るのは分かっているのよ！」

「流石は豊命神、気づいていたか」

現れたのはフードを被った3人組だ。皆が警戒する中、その素顔を見せていく。1人

は彼らと因縁深いジェラールだ。一度は捕まっていたはずの彼は脱獄していたのだ。そしてもう2人は元悪魔の心臓幹部、煉獄の七眷属のウルティアとメルデイだ。

「ジェラール!?!」

「ウルティアと、誰だ?」

「メルデイよ」

3人は過去の体験から来る反省と罪の清算をする為、新しくギルドを組織し、『魔女の罪』と名乗って方々の闇ギルドを殲滅している実績を持つ。

「久しぶりね、ジェラール。何回かいつしよに仕事もこなしたわね」

「シリルか、楽園の塔の時も暗黒都市ニルヴァーナの時も何度かの闇ギルドの討伐の際にも世話になったな」

「ジェラール、お前記憶が……」

「ああ、6年ほど前に突然な。それから彼女たちの手を借りて脱獄した後はクリムソルシエールの罪として活動してるんだ、全ては闇を払うためだ。二度と闇の被害者が出ないためにもな」

「私は彼らと密かに連絡を取りながら闇ギルドの殲滅にあたっていたの」

元々闇ギルドと戦っていたカノンは水面下で彼らと時折連絡し合いながら、共に当たらうと支援や協力をしていたのだ。今回の事は聞かされていなかったものの、こうして手を組んで事に当たっていた。

「すごいじゃねえか、そんなら正規ギルドとして認めてもらえよ」

「俺は脱獄犯だし、この2人は元グリモアだぞ？それにこの形の方がギルド間抗争禁止条約に引つかからないからな」

自由な形が元闇ギルドのメンバーや犯罪者の一面を持つ彼らには最も適した形である。だからこそこうして自由に行動できる。今回会いに来たのは単に自己紹介を兼ねたものではなく、正規ギルドだから出来る事を頼む為だ。

「さてと、ここに来てもらったのは理由があるの。大魔闘演武に参加するんでしょ？」

「お、おう。そうなってるな」

「あの大会ね、毎回不審な魔力を感じるのよ、それを調べて欲しくてね」

「不審な魔力？それなら国中のギルドが集まるんだから一つや二つあっても……」

「最初はそう思ったさ。だが、毎年感知できる上にゼレフのそれと近しいものなんだ。ゼレフの存在に近づいた俺らだからこそ分かった」

「ゼレフ……」

7年前の天狼島にもあの大魔導士は来ていたらしく、ナツは彼と面識があり、悪寒が走る。闇の権化であり、今ある闇の根本的な原因の大半が彼を元にしていないと言つても過言ではない。その彼が影響を与えたとみられる痕跡を探し出し、壊すなりして欲しい。それが今回の依頼だ。

「報酬は前払いよ」

「金！」

「家賃！」

「ごめんなさいね、金じゃないのよ。進化した私の時のアークを利用して最近発見されたセカンドオリジンを開放してあげる。隠れた魔力を引き出すことで魔力量も質やパワーも上がるはずよ」

「おおー！」

「ただし！かなりの激痛が襲うわよ！」

そう、徐々に増やすのがセオリーの魔力開放を一気に済ませようというのだ。身体への負担がかなり大きく、本来なら馴染むまでに時間を要するのだ。短期間でこの数ヶ月分のロスを稼ごうというならそれ相応の覚悟と痛みを伴うのだ。

「私はもう神力を受け入れた時に開放済み、ユリアも開きかけてるから残るのは貴方達だけよ。残り五日間を修行に費やすより効率は良いけど、しばらく身体が怠くなるから」

「げっ……でもやるしかねえ！俺からだ！」

|| || ||

ナツの勇ある行動だったが、蓋を開けてみれば、想像以上の苦難が待ち受けていた。

頑丈な身体を持つているナツでさえ痛みにも苦しみに悶絶している次第だ。一緒に来ていたシャドウギアのうち2人はあまりの状況に自分たちは関係ないからと逃げの一手をうち、他の皆も絶句し、これから来る状況に震えて現実逃避をしているほどだ。

「う、うおおっ！」

「やばいなこりや……俺たちもこれやんなきゃなんねえのか？」

「かなりやばいわね」

「ほら頑張つて。まだ開ききるには時間かかるわよ」

しかしエルザとジエラルが居ないのだ。グレイは目の前の光景から目を逸らしつつ問う。

「そういえばエルザとジエラルはどこ行つたんだ？」

「2人なら話し合いだそうよ。そつとしてあげなさい」

「そつか、色々あるもんね」

エルザとジエラルはニルヴァーナの一件以来の久しぶりに話し合える。記憶も戻つたのだ、積もる話もあるうと、ここはそつとしておこうと判断した。それ以前に鬼門が待ち構えているからその余裕もないのだが。

「私が出ることは無いから席外すわね。それと次会うのは五日後よ、それまで頑張つてね。それじゃ」

|| || ||

地獄の痛みを乗り越えて会場のある街にやってきたが、あのセカンドオリジン解放の余波を受けている為か、魂の抜けたような状態が何日か経った今も続いている。不調な妖精達はエルザを除き、ここに来るのもやつとだった。

「うーん、身体の節々がまだ痛む……」

「本当に大丈夫だったのかよ、この方法」

「こら、しつかりせんか。これからが大会本番だろう！」

「なんでエルザは平然としてんのよ」

「元からセカンドオリジンが開いてたんじゃねえか？」

「ふつうにあり得るから怖いわ、それ」

そんな冗談を言うのは詮無いことと思いつつも宿へと向かうが、カノンだけ先に来ていることに疑問が出てきた。

「そういえばシリルは？あれから見ないけど」

「姉さんなら国王と面会してる。大会の時は毎回こうよ」

「本当に偉くなつたんだな、あいつ」

「元気なところを全国のみんなに見せる好機、捨てないでよ」

そう、これは国中はおろか大陸に勇姿を見せるまたとない格好の機会だ。そう胸に決

意を固め、大会へと望む。

第55の唄 演武、開幕

「一年ぶりですな、豊命神様」

「元氣そうで何よりですよ、国王殿、ヒスイ姫、アルカディオス大佐」

「女神様、今年は見えていかれるのですか？」

「今年は波乱に満ちた大会になりそうですもの、無論よ」

久しぶりの妖精の尻尾フェアリーテイルの実力者たちが出る大会になる。見学や応援は当然するつもりでいる。この数年間最下位という苦汁を舐めさせられた状態だが、今年ばかりは期待が膨らむのだ。ヒスイ姫の要望と一緒に見ることになった。

「そうとなれば三年ぶりでしょう、警護の方も嚴重にせねば」

「相変わらず真面目ねえ。それはそうとして、何か秘匿して無いでしょうね？」

「はは、何のことやら。我々は万全を期しているだけですのぞ」

「信用して良いんでしょうね？」

「もう、大丈夫ですよ」
隠していることや後ろめたいことなど一つもないと言わんばかりに即座に姫や騎士団長から否定の言葉が出たが、何かを隠すようにその瞳には何かがよぎる。

「それじゃ、今年も頼みますよ（ジェラールたちの頼み、暴かせてもらうわよ）」

ジェラールたちの言っていたゼレフに似た魔力の正体を明かしたい。危険なものなら即排除しておきたい。様々な因縁や思惑の交差する大会の幕開けは近い。

＝
＝
＝

「夜の12時、宿に集まり待つようにか。一体何があるのだ？普通は昼間に会場では？」
「まあ一日街を覗れたんだ、良かったじゃねえか。しかしまあ確かに時間は気になるかな」

深夜の宿に到着している一行はこの不可解な時間指定を訝しむ。大会本番は昼間からだと聞いていた為、この夜の宿の到着指定は休息以外に何か裏があるんじゃないかと考えてしまう。4人が揃った中でまだウエンデイとシャルルが帰ってこないのもまた心配の元になっている。そこにやってきたのはエルフマンとリサーナで、飲み物や食糧などを届けに来てくれたのだ。

「おう、差し入れついでに様子を見に来たぜ！」

「お、エルフマンにリサーナか！エルフマン、お前だしぶデカくなったな」

「鍛えたからな。そういえばウエンデイが居ねえみたいだが」

「まだ戻ってこないの。心配なんだけど時間がないし……」

「この宿にいなきやなんねえしな」

立ち寄ってくれたタイミングが良かったので、彼らに搜索を頼もうとしたところで外から音声が響く。立体映像を使った大会本部からの連絡だ。

『お待たせしましたカボ！』

「なんだ？外からか」

『今回は以前に比べて多数のギルドの参加がありましたが、年々内容が薄く感じるとの指摘もありましたカボ。そこでカボ、今回参加している全113のギルドやチームから本戦に参加する8つのギルドを厳選すべく予選を行いますカボ』

「予選だけ？」

『5人全員で競争競技『スカイラビリンズ空中迷宮』に参加していただきますカボ。ゴールの会場ドムス・フラウに向かっていただくカボ』

この宿への帰宅指定はこのためにあつたのだ。予選会の為なのか、各ギルドの予選参加メンバーの宿が変形し、そこから道が中央に浮かぶ大きな球体に向かって伸びていく。

『なお、途中での事故等には一切責任を持たないつもりカボ。そして5人全員でゴールして貰わないと失格カボ。魔法制限は特になし、自由にお使いください。時間は8チーム目がゴールに到達するその時か、深夜3時まで』

「やべえぞ！ウエンディが居ねえとどっちみち失格だ！」

『それでは、開始!』

出場予定だったメンバーのうち1人が欠けているというまさかのアクシデントがある中で無情にもスタートが切られる。だが、ここで頼れる漢が我こそはと言わんばかりに皆を抱えてスタートダッシュを決める。エルフマンだ。

「ウエンデイが居ないと嘆くより、俺が漢として進んで道を切り開こう!行くぞお、メンバー変更じゃーい!」

「……こうなったら頼むぞ、エルフマン!」

「おうよ!任せな!」

「リサーナ、ハッピー!ウエンデイの搜索を頼むぞ!」

「了解!ギルドのみんなにも伝えておくから頑張つて!」

|| || ||

「始まったわね。予選会なんて考えたわね」

「流石にギルド数が多いので。本戦で冗長にならない為の対策、されどより長く楽しんでもらうための手段です」

「そう……厳選つてことね」

たしかに予選を行えば濃密な大会になる事は間違いない。各々のギルドが出発し、中を巡つてゴールへと向かう姿が目の前的大型モニターに映し出される。隣で共に眺め

るヒスイ姫やその護衛役のアルカディオスと共に見ていたが、カノンにはジェラールたち魔女の罪の依頼もある為、この時間を利用して少しづつ動き出す。

「しばらく動き無さそうだし、仕事に戻るわ」

「ではまた後ほど」

観戦用モニターのある部屋から去り、先に来ていた巫女のクレスを呼び、この大会や諸々の動向を聞く。カノンと八つほど歳の離れた彼女だが、巫女としては申し分無い。

「ふむ、貴女はどう見る、クレス」

「今年が例外なようですカノン様。今までもたくさんのギルドが参加してましたけど、予選なんてなかったみたいでしたし」

「何か裏があるか、ただの気まぐれね。裏を探るにも危険、か」

「この大会自体急に7年前に始まりましたからね。確かに怪しいですけど」

国王の意向とされているが、それにしても黒魔術師セレブの気配がするのはおかしいというもの。裏で何かを手引きしている者がいると考えられる。主催者の裏で暗躍する者でもいるのだろうかと推測する。

「とりあえず様子見ね。お疲れ様、明日からしばらくお休み、少し大会を見ていきましようか」

「はい」

「(クレスが探りを入れてても何も反応しなかった。まだ動くほどでもない、って判断かしら? アルカディオオスの目からして何かあるに違いないけど)」

|| || ||

「よおし、ゴールだ!」

「結構早かったわね! もしかしてかなり良い順位なんじゃない?」

「俺たちの手にかかればこんなもんよ」

「いやーお疲れ様カボ。おめでどう、本戦出場決定だカボ!」

「うむ、当然だ」

「で、順位は? もしや1位か?」

「8位、最後ですカボ。ラッキーでしたね」

迷宮を突破してゴールをした妖精たちは、結構速かった為に好成績かと思っていたが、蓋を開けてみれば8位。次のギルドが惜しい所まで来ていたらしく、かなりギリギリだった。落ち込むナツたちだったが、これで本戦に参加できるのだから、いくらでも巻き返していけるチャンスはある。

「マジか、こんな頑張つて最下位かよ」

「ま、まあ本戦出れるからまだ良いんじゃない? こっから巻き返せば良いもの!」

「そうだな、シ ril も見に来るつつつたし、ユリアも本戦出たがってたしな」

「活路はまだ開けるな」

「本戦の入場式は明日の朝10時からカボ、今日のこのメンバーでお願いしますカボ」

「他の7チームどこなんだ？」

「それは明日のお楽しみカボ、こちらから伝える事は今出来ないカボ」

残り7チームは明日からぶつかる敵になる。本番に向けて一行は宿へと戻る道中に向かう。

「ウエンデイ大丈夫かな？」

「シャルルと一緒になんだったか？」

「そのはずなんだが……」

その少女の行方、安否など気にかかることがまだ残っている。希望と暗雲の見え隠れする状況に、夜の帳が降りる。

|| || || ||

「ウエンデイー！」

「シャルルー！」

「どこ行ったのかなー」

「待って、これウエンデイの鞆！」

「ここ、庭？」

搜索を任されたりサーナとハッピーはギルドのみんなに手を借りながら観光名所やウエンデイたちの立ち寄りそうな場所を隈なく探していく。見つからないことに焦りを感じる中、ハッピーはウエンデイの鞆を見つけ出した。この近くにいる、そう信じて城の庭を走り回る。

「ウエンデイ！ シャルル！」

「あ、リサーナさん……ここは？」

「落ち着いて。王宮近くの庭よ」

「私たち、ここに來てから急に……」

意識が朦朧としていた2人を見つけ、医務室に運び、ギルド付きの薬剤師ポーリュシカに診てもらおうと魔力欠乏症による頭痛と失神、全身の倦怠感が見られると告げられた。その事をマスターや搜索に乗り出してくれたみんなにも知らされる。

「そうか、何者かに襲われたと」

「ひどく怯えていたわ、しかも魔力の欠乏が酷い状態だつてポーリュシカさんが。なんでも黒い猫みたいなのを見かけた瞬間こうなつたつて」

「テメエのガキが傷つくとは……どこのどいつか分からんが、生半可な状態で帰れると思わねえこつた」

マスターの怒りは静かながら確かに言葉の端々から漏れ出てくる。自分の大切な子

供達に手を出されて黙っていられる程、マカロフは軟弱では無い。

「しばらく戻らない間にそうなるとはね」

「シリル、少し治療をしてやってくれ。しかしだ、ワシら妖精に手エ出したからには容赦せんぞで」

「心配しなさんな、こっちの治療は任せな。妖精の尻尾顧問薬剤師の名にかけて必ず本戦の七日中に治しておくよ」

＝＝＝

「ワシらは精一杯応援するまで。今日はシリルも見守つてくれる、勝つてくれよ、ガキども」

「3ヶ月の成果の力でもつて観客や私を魅せて欲しいわね」

仲間の見守る中、遂に大会本番は幕を開ける。7回目となる今回は復活を賭けた大一番であり、優勝すればギルダツとの約束を果たせるというもの。それだけにマスターは子供達になんとしても勝つてもらいたい。

「さあいよいよやってまいりました、大魔闘演武本戦！ 実況は私チャパティがお送りします！ 解説には元評議会議員ヤジマさん、ゲストには青い天馬よりジェニーさんに来ていただきます！」

「よろしく」

「頑張つてね、みんな！」

「更に今年は別席にビッグゲストお二人にもお越しいただいています！生命神チキの後継者にして現人神の豊命神カノン様、そして我が国の誇るロイヤルファミリーのお一人、ヒスイ姫です！」

「今年は楽しみにしてるわ〜」

シリルはゲストとして見る立場になり、参加はできる見込みは無い。しかし、妖精たちの奏でる魂の協奏曲を楽しみにしており、その為になんざわざわ来ているという側面がある。

「さあこれから本戦に出場できたギルドを紹介していきますましょう！8位での入場はフェアリーテイル妖精の尻尾！過去の失われた栄光を取り戻すことが出来るか！」

「想定通り通過してきたわね、流石だわ。頑張つてねー！私たちが応援してるわよー！初代もわざわざ天狼島から応援に来てるんだからねー！」

会場から響くブーイングやバツシングの嵐の中で彼女の叫びは、確かに妖精たちの耳に入る。それだけで前に進む原動力になるというものだ。応援してくれる人、信じてくれる仲間がいるだけで気持ち前を向ける。

「大半がブーイングかよ。こりゃ予想以上の酷さだな」

「挽回するまでだ、ウエンデイや皆のためにもな」

「初代も応援しに来てくれてるようだしな」

「シリルもがんばれっつき。これは無駄には出来ねえよ」

決意と覚悟を決めた所で次々と出場チームが呼び出されていく。まずはマスターと旧知の間柄にあるマスター・ゴールドマインの率いる獵犬軍団だ。男が大半を占めている熱血ギルドだ。

「続いて参りましょう、7位は地獄の獵犬軍団、クワトロケルベロス四つ首の番犬！今年はどうな活躍を見せてくれるのでしょうか！」

「ワイルドゥ、フォー！」

「存分に暴れてやれ野郎ども！」

更に次に呼ばれたギルドには男性陣が特に反応が大きかった。

「女性限定ギルド、大海原の舞姫、マーマイドヒール人魚の踵が第6位です！」

「そんなギルドがあんのか？」

「あそこのフードのやつ、なんか匂いに覚えがあんな」

「あの猫耳、どこでだ？」

1人だけフードを被っており、ナツの鼻になぜかヒットした。過去にどこかで出会ったのか、記憶を掘り起こしてみるのが結局思い出せなかった。

「5位入場は漆黒に煌めく蒼き翅、ブルーベガサス青い天馬！」

「なんだあのウサギの着ぐるみ?」

「あんな奴いたっけ?」

「さあ? あんな奴見た事ねえな」

こちらも謎の着ぐるみに注目が行く。トライメンズと一夜はかつて一緒に戦ったが、その時にはこのうさぎは居なかった。誰だか全く予想の立たない中で4位のチームが呼ばれる。

「4位は愛と戦いの女神、聖なる破壊者、聖十大魔道のジユラを擁する蛇姫の鱗!」

「なんで4位なんだい! 手でも抜いたのかい、馬鹿者!」

「ご、ごめんなさい。ドジしちゃって」

「なんだ、いつもの愛を連呼してる奴が居ねえじゃん」

「こいつはシエリア、シエリーのいとこだ。強いぞ」

何も無い所で転んではいたが、異様な魔力を持ち合わせており、確かにただならぬ力を身につけているようだ。グレイとリオンの間で何やら賭けが行われているようだが、グレイはそれに関しては露骨に話しながらなかった。

「第3位は……おっと、意外なところからの参戦だ! 初出場ながら第3位に入ってきた! 真夜中遊撃隊、大鴉の尻尾レイヴンテイルだあ!」

「なんじゃとお! あそこは闇ギルド同然じゃぞ!」

「最近になって正規ギルド認定されたのよね、チャパティさん？」

「ええ、そのようですね。7年前には既にギルドとしては存在していたようですが」

ギルド同士の確執、親子の確執から両者に険悪な雰囲気が出る。そして仮面の男が話しかける内容によって更に爆弾が投下される。

「フェアリーテイル、あの小娘は挨拶がわりだ」

「お前らが……ぜってえぶつ潰す！」

「さあ残りあと2ギルドとなりました！」

観客の方では剣咬の虎の突破は既に予想されており、残るもう一ギルドがどこなのか其処彼処で議論が巻き起こる。初参戦のギルドなのか、無名のギルドなのか等議論がなされたが、まさかのギルドが入ってきた。

「第2位！墜ちた翼で再び大空を飛ばたけるか!?まさかまさかの参戦です、『妖精の尻尾

Bチーム』！」

「んなつ!?ありかよそんなん！」

「ガジルにラクサスにユリアとか何よ！戦力過多じゃない！」

「ミラにジュビアまでかよ！聞いてねえぞジイさん！」

「今回はこつちで参戦だよ。ナツ兄さん、この前の決着、パワーアップして挑戦だよ！」

しかし同ギルドで2チーム進出していることに会場は戸惑いの声飛び。今回から

のルール変更で一ギルド2チーム10人まで出せるということになったためだ。同ギルド同士で戦えるのかという声もあったが、協力して大会を乗り切れる可能性もあるため有利な展開でもあるし、これはある意味実力を発揮したからだろう。そして最後のギルドが呼ばれる。皆予想できていたのか、ここで歓声が上がリ、開会式で一番の盛り上がりを見せていく。

「二位はやはりというべきか！ここ数年での一番人気、王者の風格を見せてくれることでしょう！覇者の連覇と相なるか、『剣咬セイバートゥースの虎』の登場だ！」

「よお、楽しもうぜナツさん」

「あ？」

「ガジル……」

「何ガンたれてんだ、クソガキ」

「神の子に雷竜か、俺の黒雷のチリにしてやる」

「その虎柄ズボンのあんた、妖精を甘く見てると灰になるわよ？」

「全くだぜ、だが落ち着けユリア」

お互いに睨みあい、一触即発の両ギルド。ナツとガジルは双竜と謳われるステイングとローグに対して、ユリアとラクサスはオルガの挑発に対してあくまで冷静にだが睨み返していく。

「これよりカノン様に挨拶を」

「私は命の輝く瞬間を楽しみにしている。命の産み出す煌めきこそ至高、さあ私を楽しませてくれるのは誰かしら？ 虎か、妖精か、鴉か、蛇か、天馬か、人魚か、獵犬か？ 輝きを放つため、頑張つてちょうだい」

「ありがとうございます。では、これより全体日程の説明をさせていただきます」

この大会は途中で休日を設けて七日間のうちの五日間試合が組まれる。初日の今日から四日目までは競技パートとバトルパートの二つで構成され、最終日はバトルのみだ。1チーム5人と万が一、怪我人や離脱者などが出た場合に出場できる交代要員が1人の計6人で戦い抜く。具体的な競技やバトルの組み合わせは事前には知らされず、直前になって公開されるという。各チームの控え室に皆移動した後、早速競技パートが幕を上げる。

「今日は『ヒドゥン隠密』です！」

「隠密という事は隠れるか隠すか何かなのかね？」

「その通りです。今回は隠れんぼように互いを探しながら戦うというものです。うまく隠れることが勝利のカギかと」

「続きはこつちで話すカポ。と、その前に各チーム代表者1人を選ぶカポ」

この競技パートは各チーム一名ずつ代表を立てて行かなければならない。情報のな

い段階で如何にメンバーを選ぶか、チーム全体と個人の質が問われるのがこのパートの一つの楽しみ方とも言えるし、今後の勝敗を分ける。そこで妖精の尻尾の両チームはグレイ、そしてジュビアの志願で決まった。

「ここは俺が行く」

「頑張れよグレイ」

「グレイ様が行くなら私も」

「フアイトだよ、ジュビア姉さん！」

他のギルドからはリオン、イヴ、イエーガー、ルーファス、ベス、ナルプディングが参戦を決意し、各々のギルドの代表者が決定する。8人の戦士たちが会場に降りると、大会マスコット兼審判マトー君から隠密専用の幻影都市への移動が伝えられると共にルール説明もなされる。

「会場に転移してもらおうカボ。時間制限中にいかに多くの敵を倒せるかでポイントが上がったり下がったりするカボ。しかし、都市の中には偽物も紛れており、それに攻撃したと見なされたらマイナス一点カボ。終了時に一番多くポイントがあるチームから大会得点が得られる仕組みカボ」

このように真偽を見極める審美眼と攻撃方法の多様さ、会場を如何に動くかなど戦う上での重要な能力が試される、ある意味頭を使う競技とも言える。

「しかし、妖精たちが2人いるとなると他のチームが不利じゃありませんかねえ、審判さん」

「そうとも限らないさ。記憶が正しければ、そこを突く手段はいくつかあるものだからね」

「こつちも異論はねえべ」

「あちきも。自分が頑張ればいい話だもんね」

「ちっ、甘ちゃんどもめ」

本会場から幻影都市へと飛ばされ、各々バラバラの地点に降り立ち、出場メンバーの幻影が大勢歩いたり座ったりしている中に取り残される。宵闇に惑い、真なる声を聞き出すことが出来るのか。

「それでは、ヒドゥン隠密、開始！」

第56の唄 奈落の初日、希望の二日目

1日目の競技『隠密』は結果だけ申せば散々だった。大鴉による意図的とも言える積極的な妖精狙いの妨害、剣咬の虎の他7人への一斉攻撃、ルールの中で探す難しさも相まって結局Aチームは8位と大きく出遅れ、Bチームも7位と一点入ったものの、予選レースでの2位から比べたらかなり出遅れたのだ。これには出場していたグレイとジュビアは落ち込み、苛立ちさえ覚えていた。皆の期待に応えられず、しかも観客からのブーイングはエスカレートする一方で、遣る瀬無さに苛まれている。

「くそー！」

「グレイ様、落ち着いてください。気持ちわかりますけど」

「あの記憶造形師とか言う奴も、ふざけた大鴉の奴も俺が倒す！必ずだ」

1日目前半時点で大きく出遅れた。順位はこの時点ではまだ覆せるものの、淀んだ暗い空気が妖精の尻尾のうちに流れかける。順位は上から剣咬の虎で大会得点10点、大鴉の尻尾が8点、蛇姫の鱗は6点、青い天馬4点、人魚の踵3点、四つ首の猟犬が2点で、妖精の尻尾Bチームは1点、Aチームが0点となった。一度に7点を叩き出した剣咬の虎や集中狙いで得点を重ねた大鴉の尻尾が上に上がったため、この2ギルドが得点

上は大きく他のギルドを突き放す結果になった。

「気持ちはいざらぐ切り替えられそうにないな。そうなればこの後の試合をどうにか勝つしかないか」

「そうだな」

「さあ、競技パートは終わりました！これから試合パートに入ります！」

1日目の最初の試合はルーシイと大鴉の尻尾の紅一点フレア・コロナの試合が組まれた。お互いに敵視しているギルドとあつて熱がこもる。試合開始のゴングとともにルーシイの修行の成果の一つ、2体同時召喚により優勢に進めるが、フレアも髪の毛を使った魔法で中々互角に渡り合う。しかし、途中から会場にて応援していたアスカを人質に取るといった卑怯な戦術に出て一時手も足も出せなくなったものの、ナツの機転により解放された。心置きなく攻められると考えたルーシイはかつて一度だけ使った大魔法『ウラノ・メトリア』を発動した。誰もが勝利を予感したが、突然魔法がかき消されるという不審な現象が起き、その場で倒れたルーシイは結果敗北した。あきらかな介入があつたにも関わらず、誰一人として気づけずにいたのだ。

その後は順調に試合が進み、青い天馬と剣咬の虎が勝利を収めた。そしてついに最後の試合が伝えられる。妖精の尻尾Bチームと蛇姫の鱗の対決だ。

「さて今日の試合は残すところあと一つ！妖精の尻尾Bのユリア・アマリリスvs蛇姫

の鱗ジユラ・ネエクス！」

「来たぞ、ジユラだ！」

「見てみたかったけど初日からか！」

相手はあの聖十大魔導の一人で人類最強と謳われるジユラだ。7年前には末席だった彼は今5位にまで席次を上げており、その実力と知名度、人気は他の魔導士に比べてずば抜けて高い。

「こりやきついなあ」

「頑張つてね、ユリア」

「そんなにすげえのか、あの坊主頭」

「私とエルザ2人がかりでも勝てるかちよつと怪しいわね……」

「これも母さんの試練かな？やるだけやってみる……『死の恐怖』を我が名において」

それでもユリアの目には光が宿っている。例え相手が誰であろうとも、やることは変わらない。ただひたすらに戦うのみと心に定めた。

「ユリアは神の巫女を務め、次期聖十候補とも言われています。カノン様は彼女と縁が深いそうですね？」

「かつて私も神の巫女だったし、同じギルドで育ったし、大事な妹のような存在でもあるわね。実力派魔道士よ」

大好きな姉が見守っているのだ、無様な真似だけはできない。自分の7年間を信じて前へ進むのみ。冥府神の巫女の一世一代の大舞台の幕開けだ。

「それでは、試合開始！ゴングです！」

「先手は貰うわよ！『ポイズン・シヨット・ウイズ・フレイム』！」

「岩鉄壁！龍のように唸れ！」

「（攻撃を跳ね除けながら私も追う。攻防一体のまさしく聖十の動かし方だよ）ならびこれどころかしら！『炎蛇の双顎』！」

「ぬうん！」

片方が攻めれば、それに合わせて巧みに守りながら攻め、岩と炎の交錯は互いに破壊をもたらすだけだ。だが、それで怯むほど2人は経験がないわけではない。鉄火場を潜り抜けた両者は次の行動に移る。

「『冥府神の剛拳』！」

「岩鉄壁！」

「『地獄の業火』！そして『閻刹那』……」

「ぬっ、目くらましか。だが、ワシにはお主の足音さえも耳にある。そこ！」

「捉えた！」

魔には魔を、拳には拳を。全力で凌ぎ合う両者の力は互角であり、先程まで聞こえて

いた罵声は歓声に変わり、まさしく祭りにふさわしい盛り上がりを見せる。

「凄まじい応酬だー！両者共に一步も引きません！」

「あのジユラを相手に互角かよ！」

「すげえな、あの子！」

「妖精の尻尾にもあんな魔道士がいるのかよ!？」

「ふう……流石に強いわね」

「それはこちらの台詞よな。堅い守りよ」

「（攻めるにはあの岩鉄壁の合間を縫っていかなきゃね。この魔法を纏えば加速する分守りが薄くなるのと同義、でもやるしかない！『神気』開放！）まだまだこれからよ！」

「おお、なんか纏ったぞあいつ！」

「神依のような技かしら」

身体に秘めた実母の力の一端を受け継ぐ彼女は姉に見習い、身体攻撃強化の術を持ち合わせたのだ。これにより守るより攻めを重視する方向に方針を変え、一撃でも多く叩き込む算段だ。拙速は巧遅に勝ると言わんばかりに一步を踏み出した。

「攻めは神速を尊ぶ、つてね！」

「こちらからも参るぞ！はあつ！」

「よっ、はっ、せい！」

岩の柱が畝り喰る中でも高速で駆け抜ける。迫り来る柱を避け、攻め寄せる牙をへし折り、流れるように前へと詰め寄る。遂に数メートルまで近づいた両者だが、そう簡単に撃ち込ませてくれる相手ではないのは皆が知っていることだ。

「崖錐！」

「はあっ！」

岩をせり上げ、飛んだ先を追うジユラに対してユリアは枝を飛び交うが如く動き回る。攻めと守りが逆転しかけている中でもお互い冷静に動静を見極める。そして遂にユリアが仕掛ける。速度を上げ、ジユラの目に追えぬ動きで背を捉えた。

「吼えよ！『影狼砲』！」

「（動きも出足も速い！）ぬおおっ！」

放たれた影の砲撃はジユラに大きなダメージを与えた。会場のボルテージは一気に高まり、妖精の尻尾にとっては希望の一撃だ。自分たちでも頑張れば戦える、勝てるかもしれない。そう思わされる一発だ。だがジユラもただではやられない。

「崖錐、岩鉄壁！」

「うわっ！よっ！よっ！はいやっ！」

「足捌きも攻めの見極めも見事よな、ここまで当てさせてもらえぬ魔道士は久しぶりだ！しかも今の一撃、結構な威力だ」

壮絶な攻防戦が繰り広げられる中、更に白熱した展開となる。一撃入ってからも一進一退のせめぎ合いが続き、魔法と拳の入り乱れる熱戦は互いに決定打を打てない状況が観客を大いに楽しませる。

「闇よ穿て『宵時雨』！」

「唸り捉えよ『岩鉄龍』！」

「迎え撃たれし『闇龍縛』！」

「ここでユリアがまた仕掛けていく。闇の鎖で脱出をさせないようにし、そこに特大の一発を打ち込む態勢に移る。

「これで動きを完全に止めてみせる！宵闇に唄え、黄昏に酔いしれろ……」

「あの構え、なんだ!？」

「奥義か。ユリアめ、成長してんな」

「冥府奥義、四重魔法陣『黄昏トワイライト・デイズの歌姫』！」

闇、炎、雷に毒の属性を盛り込んだ冥府神の奥義だ。『死の恐怖』を齎す、彼女と師匠に許された特大技だ。

「巖山！」

「くそつ、これも防ぐのね!？」

「ワシも行くでしょう、岩鉄壁！」

「くっ、 囲まれて……」

「唸れ岩石の巨人の声よ、 鳴動富嶽！」

「うわあああつ！」

ジュラは鉄壁の守りから動きの止まった一瞬の隙を見逃さずに、先程の技への一種のお返しとばかりに奥の手を使う。ジュラの奥義が遂にこの激戦に終止符を打たんと、ユリアを全力でもって攻めた。

「うっ、 くうっ……」

「お主の一撃、 誠に見事。 なれどワシもギルドの一員としての誇りがある。 倒れるわけにはいかん」

「はは、 ここまでやって倒せないなら敵しいかな？ 降参だよ、 貴方には今の私じゃ無理だ」

「勝負あり！ 勝者はジュラ！」

この勝負を通してみて、 押しに押ししても決して膝をつかず、 折れないジュラのまるで岩のような強固な意志には敵わないと感じ、 降参した。 20分以上にも及ぶ大激闘はジュラの勝利で幕引きとなった。 勝てなかったことを仲間に詫びるが、 健闘を皆が讃え、 次に繋げようと言葉をかける。

「ごめんみんな。 今の私には敵うはずのない相手だったよ」

「気にすんな、相手が悪かったただけだ。だが、頑張ったじゃねえか」

「次頑張りましょ！」

「あそこまで行かれちゃあな、借りはいずれ返してやるからよ」

|| || ||

「ユリア殿、先程は大丈夫だったか？熱が入りすぎたようだな、流石にやり過ぎたか」

「気にしないでよ、ギルド同士のプライドがあんのよ。これくらいならまだ良いって。

お互い様でしょ？」

「済まない、気をつけるでな。しかしながらあの時よりも技のキレも魔力も申し分なかった。次が楽しみだ、また手合わせ願いたいものよな」

あの試合の後、治療を受けていたユリアの所にわざわざ謝りに来てくれたジュラと軽く話した後、カノンはユリアの包帯を巻き、これからの残り四日の話をする。

「ユリア、頑張ってたじゃない。ほら、包帯も終わったわ。みんなのいる酒場に戻りましょ」

「勝てなかったけど、頑張った甲斐があったよ。次こそは勝つよ！」

「無茶だけはしないでよ？冷や冷やしたわ、今回ばかりは」

「明日からはどうなるかな？流石に勝たなきやマズイでしょ」

「そうねえ」

宿に戻る前に皆と酒を酌み交わそうと妖精の尻尾の宿舍近くの酒場に繰り出した2人を待っていたのは明るく楽しく今日の試合を振り返っていた皆だった。グレイもルーシイも負けたことを明日の糧にする覚悟が見られた。

「みんな、来たわよ。お疲れ様なのね」

「おうシリル、先に始めてたぜ！」

「ルーシイ姉さん、グレイ兄さん、大丈夫なの？」

「気にしてないわよ、これから巻き返すだけだから！」

「いつまでも落ち込んでらんねえからな！絶対に巻き返してやる！お前の試合を見て思ったんだよ、やり返すのは可能なんじゃねえかってな」

1日目に惨敗したギルドとは思えない明るく前向きな空気になるのが、このギルドの良さであり、このギルドのらしさだ。悲惨な結果にも関わらず皆笑顔になる。そんな空気につられたのか、1人の男が大酒飲みのカナを相手に飲み比べで勝つという乱入の仕方で行ってきた。四つ首の番犬のエースであり、酒の神と同じ名前を持つ酔いの鷹ことバツカスだ。

「おう、盛り上がってるねえ。俺も混ぜてもらえねえかい？」

「お前、バツカスか？久しぶりだな」

「お、エルザじゃねえか、変わらないねえ。7年間も行方くらましてたんだって？」

「まあな。今回は参加しないのか?」

「そう思ってたんだけどよ、ウォークライのあのザマをみちやあなあ!明日からリザーブ枠を使つて参戦だ。ワイルドに行くぜ」

エルザとは7年前からの旧知の仲であり、お互いによく仕事先で出くわすという。時にはぶつかり、時には愚痴をこぼす仲なんだとか。

「ま、どこかでぶつかるなら、いつかの決着もつけておきたいねえ。流石に勝敗つかずの五分五分のまままで終わらせるのももったいない。じゃあな、わはははは!」

「ねえ、あいつ何者?」

「ケルベロスのエースでな、こちらのS級魔導士に相当するくらいに強い。何度か仕事先で顔を合わせているのだが、決着がつかないくらいの実力はある」

酔つてあちこちにぶつかりながら帰る彼は普段の見かけとは違い、確かな實力を持ち合わせていて、エルザ相手に無敗を誇るというとんでもないバケモノ級の武闘家なのだ。エルザの言葉に皆多少の差はあれ戦慄を覚えたほどだ。1日目の終わりにやってきた波乱とどこかでぶつかる予感がエルザの中にはあった。

|| || ||

「さて二日目に突入しました!今日の競技はレース戦の『戦車』チャリオットです!」

ルールはこうだ。動く車輛の上を走り、クロツカスの町の観光地を巡りながら如何に

落ちずに早くゴールするかというレースだ。今回の出場者はナツ、ガジル、剣咬の虎ステイング、蛇姫の鱗ユウカ、昨日会った四つ首の猟犬バツカス、六魔將軍討伐以来の知り合い青い天馬の一夜、大鴉の尻尾からクロヘビ、人魚の踵のリズリーが参加している。このうち5人はともにレースができており、トップにはクロヘビがおり、2位から5位の間はデッドヒートが繰り返されている。しかし後方6位から8位は酷いもので、滅竜魔導士3人組は揃って乗り物酔いを発症していた。

「おい、なんでナツを出したんだよ！名前で乗り物つぼいの分かっただろ！」
「どうしても出たいと言って聞かなくてな」

「ガジルも乗り物に弱いのか……」

「あの剣咬の虎のステイングもか。全員確か滅竜魔導士だったか？」

「締まらない展開ねえ。まあ、まずは先頭争いかしら？」

「そうですね。今先頭に行くのは大鴉の尻尾のクロヘビ選手、その後方をペガサスの一夜選手、マーメイドのリズリー選手、そしてラミアのユウカ選手が続き、そして少し遅れてケルベロスのバツカス選手が走ってますね」

5位までの集団から大きく遅れている3人のうち、ガジルは今まで乗り物酔いを経験してこなかったのか、大きな戸惑いを感じながら他2人とちんたら走るようになってしまっている。ちなみにだが、ラクサスも乗り物が苦手らしい。

「くそ、俺も乗り物ダメだったか？これは火竜サラマンダーの役だろ！」

「ようやくあんたも滅竜魔導士の真の意味で仲間入りしたんだな？おめでどう、『新入り』……うぷっ！」

「テメエ……このヤロー！」

「うぎゃー！」

「うおっ！おえっ……」

「くそ、力が入らねえ……」

なんとも締まらない感じの最後尾集団を見守るカノンは暖かな視線を送っており、その隣にいるヒスイ姫が不思議そうに問いかける。

「頑張ってるわねえ」

「女神様、何故そこまで妖精の尻尾を応援してるんです？昨日の試合ではユリアさんと同じギルドとか言っていました」

「私のいたギルドがそこだったからよ。まあ、今でもそのつもりなんだけど」

「仲間思い、家族思いなのですね。羨ましいような、そんな気がします」

「大丈夫よ、国王もアルカディオスさんも貴女のことを想っていてくれる。無論……私もね」

「ありがとうございます」

「でも良いわね、お父様がいて。実親は居ないし、家族はギルドだけの私にとつては……もう無いもののよ、本当の意味での血の繋がった家族は」

「大事なはその魂の繋がりですよ。前にそうおっしゃってましたよ、カノン様」

魂のつながりとは何かと話しているうちにレースに動きがあった。5位と少し2位集団の後ろにいたバツカスが目の前で行われた2位奪取の戦いを眺めた後、ワイルドに本気出すと言い、四股を踏んで乗っていた車両を大きく捻じ曲げ、前の3人を落としかねない衝撃を叩き出した。

「先頭集団に動きがありました！なんと、バツカス選手の四股踏みで戦車が壊れました！その隙に一気に加速、トップでゴールです！10ポイント、入りました！」

「なんてパワーなんだ、7年前より上がってるぞ！」

「どうなってるんだよ、あのパワー！」

レースコースの戦車を揺るがす踏み込みによって止まった3人を一気に追い抜き、一気にスタートをかけたバツカスが1位、クロヘビが2位となり、5位までは順調にゴールまで駆け抜けた。

「5位までは終わりました、後は最終の3人になりました」

「滅竜魔導士3人組のビリ争いね。誰が抜け出すかしら？」

残るはなんとも言えない6位争いのみ。残る3人は全員グロッキーながらもナツと

ガジルが抜け出そうと必死にもがきながら前へと進む。

「うおおおっ！」

「ぬうあああつ！」

「なんでだよ、なんでそんなに意地を張るんだよ。情けねえつたらありやしねえ……俺の知ってる妖精はそんな感じじゃなかったよ。もつと自由っていうかさ、そんな周りの目を気にしねえっていうかさ。何のためにあんたらやってんだよ？」

「仲間が、苦しんでたからだ……笑われてたからだ！その為にも、みんなの為にも絶対に勝ってやるんだ！」

「くだらねえ……この1点くらいはくれてやるよ」

「ぎひ、最後にその『くだらねえ、たかが1点』で泣くなよ、坊主！最後に勝つのは俺たちだ」

熱い魂に強い意志で仲間たちの苦しめられた7年間を覆そうという覚悟が会場の皆や、応援しにきてくれた妖精の尻尾の皆の目に涙を浮かべさせる。

「うおおおっ！」

「つえあああつ！」

「ここで妖精の尻尾Aのナツ、6位でゴール！続いてBチームのガジルが7位！剣咬の虎ステイニングは途中棄権で8位となりました！」

「ぼ、ポイントなんかゲットだぜ……初ポイント……」

「ぎ、ギヒツ……完走だぜ」

「仲間の為？くだらねえよ、そういうのは」

＝＝＝

「で、なんか見たのかい？」

「ええ。未来のどこかで崩壊する城、火の上がる街、そこで泣くルーシイとユリア」

「予知なんぞ外れることはよくある事さね、気にするもんじゃないよ」

「……だと良いけど」

不吉な予感を感じるシャルルの予知は果たしてどうなるか……

＝＝＝

競技パートが終わり、試合パートに移る。実況と解説は昨日と先程と同じ2人であり、今日はゲストとしてルーシイの愛読している雑誌週刊ソーサラー（通称週ソラ）の記者ジェイソンが来ている。

「さあ、これから試合の方に入ります！」

「最初の組み合わせは、クロヘビとトビーだね。今度こそフェアにやって欲しいよ」

「COOOOL!!なんだいあの犬つぶり！」

競技の結果により、妖精の尻尾両チームは点数を手に入れ、反撃の準備を始める。ま

だ2点と他のチームには遠いものの、まだ試合パート次第では追いつける位置につけた。第一試合は大鴉の尻尾クロヘビと蛇姫の鱗の犬つぼい人ことトビーだ。

「おおーん！『超麻痺爪メガメガラゲ』！」

「面白い技だね。ククク……」

「おおーん！少しは当たれよ！」

「ククク……やだよ」

「クロヘビつて名前かつこいいな！」

「ありがとう。本名じゃないけど」

「違えのかよ！俺が勝ったら本名教えろ！」

「僕が勝ったら？」

「俺のとつておきの秘密を教えてやるよ、お前が勝てたらな！」

「面白いから、良いよ」

「おおん？消えた？」

「バカモン！擬態魔法だ！」

『『砂サンド・リペリオの反乱』』

「おおーん!?!」

擬態魔法から砂の魔法をコピーして、マックスと同じ魔法を繰り出して勝利を収めた

クロヘビ。トビーとの賭けを実行しに移る。

「僕の勝ちだね。で、秘密は？」

「靴下……片方だけないんだ。もう3ヶ月も探してるのに一向に見つからなくてさ……うえっ」

「あのさ、ここにあるよ？首から下げてるじゃないか、気づかなかったの？」

「えっ？あつたあ!!」

「「えええっ!!」」

「良かったな、犬っぼい人」

「泣くほど感動する場面か、エルザ？」

「な、なんて言えば良いのやら」

感動的だと受け取ったエルザのような人もごく少数居たが、その後がさすがともいうべきか、その大事な靴下を握手するように見せかけて破り捨て、笑いと鳥の高らかな声だけが会場にこだますることになった。なんとも後味の悪い結末になってしまったが、次の試合の出場者が呼ばれる。1人目は四つ首の番犬のバツカスだ。

「さて第2試合です! 『四つ首の番犬』バツカス！」

「ういゝ、ひつく……俺の出番だぜ」

「対するは『妖精の尻尾』！」

「えっ!? ナツだったらどうしよう!？」

「叩き起こす、何が何でもな」

「妖精の尻尾Aのエルフマン!」

「なにいい!? あいつ、エルザと互角なんだろうお!？」

「頑張れ、勝つしか道はないんだ」

「お、おう」

勝てるのかと観客も観覧に来ていた国王もエルフマン本人も思う中で何としても勝利をというエルザの檄のもと、試合に臨む。

「よう、お前の姉妹、えらい美人だねえ。ここは俺らもさつきみたく賭けでもしねえかい?」

「内容次第だが、別に構いはしないぞ」

「流石は男だ。俺が勝ったら、そうだなあ……お前の姉妹を一晚貸せや。お前が勝ったなら……」

「貴様、漢として譲れんものがあるぞ。ふぎけるなよ獵犬が、砕ける!!」

「交渉成立か。魂が震えてくるぜ」

漢同士の戦いのゴングが賭けと共に開始される中、カノンは何かの気配を察知し、昨日倒れたというウエンディやユリアのことが急に心配になり、席を立つ。

「カノン様、どちらへ？」

「少し仲間の様子を見てくる。セレス、少し見てて構わないわ」

「……心得ました。くれぐれも変な真似だけはなさらないようにしてください」

「分かっている」

|| || ||

「ウエンディ、具合はどう？ ナツ兄さんも……あら？」

「んお？ シリルか？」

「ナツ兄さん、ウエンディやポーリユシカさん達は？」

「分からねえ、さつきまで寝てて……いや、なんか変な匂いがある。ギルドにはねえ匂いだ」

「誰かに連れ去られたとでも？ だとしたらまずいわね、追うわよ！」

ギルドにいない何者かの微かな匂いと生命の名残を感じたナツとカノン。もしや何か起こったのではないかと感じ、2人は看護室を飛び出し、その名残の濃い方へと向かう。

「あつちからだ！」

「ここって屋上通路？ どこに行く気かしら？」

「分からねえ。だけど仲間に手エ出してんだ！ 容赦しないでいいぜ！」

「あつたり前！」

そこにいたのは気絶したウエンディにシャルルとポーリュシカを抱えた不審な盗賊風の格好の連中だ。おそらく襲撃して誘拐したのだろう、仲間に手を出された以上はきつちりかつちり締めておかねばと先ほどのレースとは打って変わったナツとカノンが猛ダツシユで追いかける。

「やべえ！もう追いかけてきたよ！」

「あいつさつきまでチンタラ走つてたのに!？」

「もう一人来てるぞ！確か特別観客席の……」

「待てや teme エらあ！」

「理由とか色々吐いてもらうわよ！」

「こうなつたら対魔導士用の俺のリボルバーでもつて……ぶべらつ!？」

「邪魔だ、どけ！」

「ぶぎやつ！」

「うわあ、速え！」

「そもそも依頼は少女2人の誘拐だろ！この婆さんと猫は余計だろ！」

少女2人をさらつて来いというとんでもないワードに反応し、急襲。裏で糸を引く連中に対しての怒りをもって鉄拳を降した。

「テメエら……」

「誰の引き金かしら？」

「ひ、ひええっ!!」

ひっそりと騒ぎが起きる中、会場の方ではエルフマンがバツカスに対して不利をとり、ボロボロになっていた。

「おおっと、エルフマンがバツカス相手に手も足も出ない！」

「ワイルドオ、フォー……」

「(このままじゃ一撃も入らねえぞ。ウエンディの分も任されてんだ、退けはしねえ!)」

『ビーストソウル獣王の魂・ワータイガー』!」

「高速戦闘タイプのテイクオーバー接取魔法ね、一気に攻め立てるつもりみたい」

「いけるんでしょうか、相手の動き、かなり変則的ですよね？」

オーソドックス

劈掛掌という独特な動きを取る拳法に拳に魔力を溜める割と典型的な魔法により、エルザを相手に五分をとるほどのパワー、経験と知識、度胸がある。その為か、ワンサイドゲーム一方的な展開になりつつある。更に酒を飲むことで変幻自在な動きに磨きがかかる酔拳を取り入れた拳法を持ち合わせることで、その拳に力を注ぎ込むことができるが、まだ一口もつけていない。事実、ジュビアやエルザらの心配通りにかすりもせず、返り討ちにあうということになってしまい、変身も解けて膝をついてしまう。

「へへっ、良いねえ。美人2人との夢の一夜か」

「くそ……ああ、そういやあ、賭けの内容……俺の条件をまだ言っていなかったな。今、良いか？」

「良いよなんでも。今からじゃ勝つの無理だろうしな」

「じゃあ言ってる、俺が勝ったらお前たちのギルド名、大会中四つ首の仔犬クワトロロバビな？」

「ぶっ、あつははははは！良いぜ、そんならいなら！じゃあこつちもそろそろ本気出すかね？ケリつけてやるよ」

「酒を飲んだ!」

「酔・劈掛掌……奴の本領発揮だぞ！気をつけろ！」

試合を楽しむために隠していた酒を飲み、一気に決着をつけにきた。独特の構えに更に読めない動きが加わり、攻めが加速される。

「行くぜえ」

「ビーストソウル獣王の魂……」

「無駄あ！」

「一気に7発!」

「ははっ……ん？な、なんじゃこりゃあ!?俺の拳に傷が!」

「……『リザードマン』!こつちの攻撃が当たらねえなら当ててもらえりゃあ良い、得意

なんだろ？近接攻撃はよ！」

「なんつう戦法だよ……」

一度も当たらなかつたし、当てられないのなら、自分の身体にあえて当てさせる。昨日のユリアとは逆の戦略、つまり攻めを捨てて守りに全振りしてきた。身体中に仕込まれた鮫肌のような棘の鱗が敵の拳へのオートカウンターとなる、バツカスのような相手にはある意味最適解の一つともいえる。しかし傷を受けることを前提にしている為、自分の身体にも大きな負担になるとんでもない戦法だ。

「おら来いや！俺の身体とテメエの拳！どっちが先に碎けるかの漢の勝負じゃい！」

「は、はははっ！なんて野郎だ、普通じゃねえ！だがそこが気に入ったあ！俺の魂が最高に震えてくるあ！」

「壮絶な意地のぶつかり合いだー！これは生温い戦いというより漢と漢のプライドをかけた闘争！攻めるが果てるか、守るが果てるか！空前絶後の衝突の結末はどうなるー！」

棘さえ砕くバツカスの鷹の拳か、必殺の拳さえ防ぎきる攻防一体の鉄壁の身体か。漢同士の意地と魂を賭けた、熱気溢れる闘いとなる。先程までの展開からデッドヒートへと変わり、会場が熱のこもった視線を飛ばす。攻めと守りの乱戦の中で遂に両者が膝を地面につく。

「ぐおっ……はあっ、はあっ」

「うぐっ……ぜえっ、ぜえっ」

「両者膝をついた！先に立ち上がるのはどっちだ!？」

「なあ、お前エルフマン、つつたよな？うはっ、うははははっ！ワイルドオ!!」

「先に立ったのはバツカス、エルフマン立てないか!？」

「なあお前……そのガッツ、漢だぜ、俺の負けだ」

「バツカスマさかのダウン！エルフマン大金屋ー!」

「うおおおおおっ!!!」

「この雄叫びは復活への狼煙かー!」

守りのエルフマンのあげた大きな10点の獲得は四つ首の番犬改め四つ首の仔犬に追いつく大事な点になった。復活の狼煙、優勝への希望ある展開だ。

「おお、勝ったぞ！エルフマンすげえな!」

「やりましたね！私たちのチームにも大きい点が入りましたよ!」

「ボロボロになってまで勝ちを取りに行くのね。恐れ入ったわ」

「もう大丈夫なのかい、ウエンデイ?」

「大丈夫だよグランディーネ！完全に復活できたよ」

「これからは気をつけてね。ギルドの方にも今回の襲撃誘拐の件は伝えておくし、私の

分身か巫女を治療室に居させるから」

「何から何まで済まねえな」

「それは言わない約束よ、私たち仲間じゃない。仲間を守る為なら労は厭わない」

金星を挙げたエルフマンの試合を眺め、盛り上がるナツたち。今後の展開が面白くなってきたところで、彼らは看護室へ戻る最中にあれこれと今回の一件について議論がおこる。裏に何があるのか心配になる。

「元気になったら次の試合の応援とか視察に行くわよ。ポーリュシカさん、エルフマンの治療の方を」

「重々承知の上だよ。敵の視察が明日の勝利につながるから、頑張るんだよ?」

「ありがとなばっちゃん、気をつけろよ」

「心強い神の目があるんだ、そう易々と手は出されなはずさね」

「しかし今回の誘拐、目的は何かしら?」

「確か少女2人の奪取が、とか言ってたな」

「2人? 誘拐された時あそこにはグランディーネと私とシャルルぐらいしか……」

「いいや、居たじゃないか。今日に限って言えば少なくとももうあと2人は来てたじゃないかい?」

「もしかして……ルーシイとユリア!?」

そう、ナツがダウンした時に彼を連れてきたのはルーシイだし、ユリアは昨日の戦いで得た傷を治しに来ていた。少女2人の誘拐未遂は少なくともルーシイ、ユリア、ウエンデイの誰かを狙って起こしたものだろう。大鴉の尻尾に依頼されたと供述していた犯人たちだが、目的も理由も何もかも分からない。大金星の裏で漂う暗雲は果たして晴れるだろうか？

第57の唄 加速する妖精、そして大会の裏の闇

「今日の試合、痺れたぞ。漢をあげたなエルフマン」

「すげえ度胸だったな。流石だぜ」

「よせよそういう死者を悼むような言葉。痛えっ……こつから先は参加できそうにねえからよ、後は頼むぞウエンディ」

「任せてください！出遅れた分は取り戻してみせます！」

浮上するきつかけを掴んだエルフマンは怪我のためにこの先の出場が厳しくなり、本来出るはずだったウエンディにバトンを渡し、次の勝利を託す。そして、この先この治療室を襲われないための対策の為に雷神衆が守りに当たることになった。

「さ、次の試合だよ。もうすぐ始まるから敵の視察をしよう」

「おう。また後で来るからよ」

「ここの守りは我々雷神衆がきつちりしておくから安心して観に行け」

「私たちはこれから応援の方に向かうから」

|| || ||

「しかし、まさかルーシーが狙われるとはな。大鴉の尻尾は何を狙ってたんだ？」

「戦力ダウンじゃないかな？それくらいならやりそうだよ？」

「それにしてもやりすぎだし、実際には未遂で終わってる。しかも標的のミスまでしてのよ？些か詰めが甘くないかしら？それに、私とウエンディを襲ったレイブンの『魔力を奪う魔道士』が居ながらそいつを使つてこなかった……正直あの小動物だけで出来る点を考えるとね」

大鴉の尻尾の不気味な魔道士オーブラを使えば、こんな杜撰な作戦をしなくてもいいのではないかとシャルルは考察する。実際方法としてそれをするこも十分可能な筈だった。しかしながらその推理に疑問もある。

「参加者は会場から離れられないし、もしかしたらバトルパートに参加する可能性もあったんだから、考えすぎじゃない？」

「だと良いけど（問題はルーシィとユリアを狙ったことそれ自体かもね）」

襲撃に時間がかかれば怪しまれると踏んだのか、その作戦を行つてこなかった。疑問や疑念を抱えながら応援に向かうと、3試合目はエルフマンの姉、ミラジエーンと青い天馬に所属する7年前の『彼女にしたい魔道士』人気魔道士ジエニーの対戦になっていた。

「さあ第3試合に参りましょう！妖精の尻尾Bチームのミラジエーン対青い天馬のジエニーです！」

「うえっ!? エルフ兄の次はミラ姉!？」

「お、リサーナじゃない。エルフマンはどうだった?」

「傷だらけだけど元気そうだったよ」

「おお、シャルル! もう動いて良いのか?」

「問題無さそうよ。なんか参加者以外はこっちらしいわね」

「オイラさみしかったよう!」

「それより応援よ。(まあ気にしてても仕方ないわね……しつかりしなきや!) ミラ、なんとしても勝ちなさい、よ? これ、どういう?」

「うむ。実はな……」

「2人ともグラビアやってたから……」

まさかの殴り合いではなく、グラビア対決という男性陣やマスター・マカロフの喜ぶ展開となっていたのだ。審査は解説者3人が行うという。このカード、両者ともグラビア経験があり、かつ変身魔法を使えるため、この形式で試合する事になったのだ。

「なによそれ、最低ね」

「仕方ない、2人ともオツケー出してしまったからな」

「ミラに至ってはノリノリだよ?」

実際に見やると、そこには2人でノリノリになってポーズを決めている姿があった。

公開グラビアなだけあって会場も異様な熱気と盛り上がりを見せており、男性陣の中には写真に収めようとする者までいる始末である。

「こんな感じ?」

「こつちよ、ほら?」

「うふふ、どうかしら」

「は〜い」

「ど、どうなつてんだこりゃあ!?!」

「ば、バトルパートつてこんなことするんですか?」

「と、特例じゃないかしら?」

女性陣はといえば恥ずかしくて顔を紅潮させていたり戸惑ったりしている者が大半だ。しかし、一部はこの盛り上がりの中に飛び込む蛮勇を見せる者まで現れ、何故か皆で乱入しながら楽しむという事になってしまっている。

「これは、ちよつと見るのが恥ずかしくなってくるわね」

「何故か皆さん乱入してますね」

「……私は行かないわよ。流石にみんなの前で肌を晒すのは……その、恥ずかしいわ」

「わ、私も流石に王族ですし。こ、こういう時こそ節度は大切ですよね?」

「そ、そうね。本当に誰よこんな試合の組み合わせにしたの?」

「お父様がアルカディオスとそれっぽい話をしていたような……」

見守っていたカノンとヒスイ姫は立場もあるし、気恥ずかしさから乱入せず、目を逸らしながら試合と言っているのか分からない混沌とした会場を眺めていた。

「まさかの乱入がありました！が試合は続行です！次のお題はスク水！その次は眼鏡っ娘、そしてボンテージ！」

「どんどんマニアックになっていきやがる!?!」

「やりたい放題かよ！だがそれが良い！」

「何考えてんだよ、もっとやれ！」

「流石にやるわね」

「ジェニーこそ。でもこういうので良かったわ、あまり殴り合いとか好きじゃないから」

「まあ、私もこういうのは嫌いじゃないわ」

「さて、決着がつかないので残念ではありますが、最後にしたいと思います！」

「(来た！どんなお題が来ようと私には勝てる作戦があるわ!) ミラ、ここまで3試合賭けが有ったし、私たちも何か賭ける？」

「いいわね、張り合いがあつて面白いもの」

「じゃあこれでどう!?!負けた方は週ソラでヌード掲載よ！」

「なに!?!」

「良いわよ?」

「「ほあっ!」」

「正直負けても良いかと思っちゃった」

「悪い、俺もだ……」

負けた方がヌード掲載というとんでもない賭けが成立し、妖精の尻尾の中でも負けても良いやという男性陣の声が出てしまう。正直どっちが負けても得してしまうと思っ
てしまったのだ。

「と、とんでもない賭けが成立してしまいましたね。では最後の形態は戦闘モード!」
「ふふ、私の勝ちね。7年ぶりに歳をとっていないミラが帰って来たところば週ソラとして
も取り上げない訳がないもの)これが私の戦闘形態よ」

「じゃあ賭けが成立したんだし、私からも一つ……最後くらいは力のぶつかり合いでど
うかしら?」

「あれは私の知る最強のサタンソウルの一つ『ミラジエーン・シュトリ』だ。これは勝つ
たな」

変化した姿はサタンソウルの内最強格の変身。最後はグラビアらしからぬ本来の
ルールでの力のぶつかり合いとなり、勝者はミラになり、これで妖精の尻尾の両チーム
が12点と並ぶ。点数が大いに伸びた1日になった。

「勝者ミラジエーン・ストラウス！」

「それじゃあジエニーの生まれたままの姿、楽しみにしてるわね？」

「いいやああ！うわああああん、あんな賭けしなきや良かったあ！」

「凄えなありやあ。まあ勝ち点10点だ、まだ行けそうだな！」

「ユリア、あいつとエルザだけは何があつても怒らせんなよ？じじいでさえビビって手がつけられないレベルだからな」

「りよ、了解……強い女性つてあんな感じなのかな？普段あんなホワホワした空気出してるのに……」

第四試合は剣咬の虎から星霊魔道士のユキノが、そして人魚の踵からエースのカグラが対面した。2人の間に賭けられたのはお互いの命を差し出すというもの。いざ試合が始まり、先手を取ったのはユキノだ。黄道十二星座の2つ、天秤宮のライブラによる重力操作と双魚宮のピスケスによる攻めで攻勢に出る。しかしカグラも負けじと鞘に納められたままの刀を振るう。結果としてカグラが納刀したまま勝利を収め、ユキノの命は預かることとなった。

「これで今日の大会の予定は終了!!また明日お会いしましょう！」

|| || ||

「クレス、今日の試合どうだったかしら？」

「良いものですね、ギルドというのは。それと少しばかり探りましたが、アルカディオス大佐近辺を中心にですが、やはり何か計画しているようです」

「やはりか。中身の方は分かったかしら？」

「それはこれからです。もう少し、あと二、三日以内には」

「お疲れ様。苦労かけるわね」

「いえ、貴女や皆の為ですから。話に聞いたゼレフと同じ魔力というものを放つてはおけませんしね」

例のゼレフの魔力に似た力、それが人なのか装置なのか。規模や発動の可能性、動きを見なければならず、速さと同時に慎重さも求められるのだ。

「何か必要なら言つてね、やれることはやるわ」

「はい、ではこれにて」

「(アルカディオス大佐が動くなら王家も何かしらで動くかもしれないし、もう少し探つたら動こうかしら)」

国王に謁見できる立場の人間が裏で工作しているなら、王家も一枚噛んでいる可能性が十分ある。初日の反応からして、そろそろ何か動きがあってもおかしくないと感じ、事前の情報から鑑みるに、危険を孕んだ物だろう。注意してコマを進めるべき時だ。

「アルカディオス大佐、計画の方は順調に進んでいます」

「そうか、なら良い。星靈魔道士の確保には失敗したが、今日の試合でもう一人金の鍵を所有しているのを確認できたのは収穫だ」

「呼び込みますか？」

「手筈を整えておけ。これから先、彼女の協力が必要になるはずだ」

「ははっ！」

「ゼレフ卿にアクノロギアか。くくく、邂逅の時は近いな。待っていたまえ」

闇の権化ゼレフ、ギルダーツに一生残る傷を与えて妖精の尻尾の天狼島組を七年間行方不明にするきっかけを作った暗黒の翼の竜アクノロギア。それらとの対面を心待ちにしているとも取れる発言をするアルカディオスの真の目的とは一体どこにあるのか。そこにそのような疑問を抱えているダートン国防大臣が問いただしにやってきた。

「アルカディオス大佐、少しよろしいかね」

「どうしました、ダートン国防大臣殿」

「何故拙速に動いた？星靈魔道士の件だ」

「今が時期だからですよ。もうすぐ計画も大詰めなのでね」

「たった七年間で実行に移せるはずない」

「それが出来るのですよ。ふふふ、ここまで来れば未来も……」

「悪魔か貴様は！」

「私は国のため、国王や姫の為なら鬼にも悪魔にもなれるのだよ。貴方が反対派なのは周知の事実。ふふ、ふははははは！」

|||||

「今日も騒いだなあ！」

「今日は両チームとも勝てたし、ポイントも一気に12点まで増えたし、良い感じよね」
「疲れたし、このまま寝ようかしら。宿まで送るから、その後はちゃんと休みなさいよ」
「はいはい……あれ、あそこにいるのつてもしかして？」

「剣咬の、星霊魔道士の……」

「ユキノだったかしら？何故ここに？」

夜の帳が降りて大宴会を終えた一行は宿に向かっていたが、その宿の外で待っていたのは剣咬の虎の星霊魔道士のユキノだ。今日の戦いで来ていた服ではなく、装いを変えていた。とりあえず外で話すのもと思い、宿に全員で入る。

「すみません、こんな夜分遅くに……どうしてもルーシイ様と星霊魔道士としてお話しておきたいことがありますので」

「私に？」

「私はある決断をしてそれを伝えるに来ました。それが貴女と関係してきますので」
「セイバーの奴が何の用だよ？」

「まあまあナツさん」

ナツは剣咬の虎に良い印象を持っていないのか、喧嘩腰になってしまいがそれを何とか抑えて話を進めると、ユキノは自分の持つ3つの鍵のうちの金の鍵2つを差し出した。

「実はルーシイ様に私の持つ天秤宮と双鱼宮の扉の鍵をお渡ししたいと思つた次第です。1日目の時からお渡ししようとしておりました。もう私は出場する事は叶いませんので尚更ですね」

「もう出られない、つてことは誰か代わりがいるのかしら？それにしても、まるでギルドを辞めるみたいな言い方ね」

「仕事に出ていた方が戻られ、その上私の居場所は無くなりました。既に貴女は10の金の鍵を持っております。残る2つの鍵を揃えれば世界を変える扉が開くと古い言い伝えにあります」

この数年で星霊魔道士の数は減り続けており、その上星霊魔道士に関わる事件がこの大会の始まる少し前に起き、さらに減少の一途を辿っている。彼女は鍵の分散を避けるために自分の持つ鍵を渡したいと感じていると想いを伝える。そんな彼女の口にした世界を変える扉、その存在をカノンはかつて聞いたという。

『時空を超越する扉』のことかしらね」

「ご存知なのですか、カノン様？」

「生命神や慈恵神、冥府神が実物を見たことがあつてね。400年前と十数年前に一度ずつだったかしら、開いたらしいわ。私は口伝で聞いただけだし、公文書みたいな書物の記録にはほとんど残ってないから真偽の程は分からないけど」

時空を飛び越える、それはつまり歴史の改変や本来の時間の流れの理を外れること。あらゆる時間軸に手筈を整えれば向かえるとされるとされるため、そのような伝説が出来上がったのだろう。

「いずれにせよ、鍵を貴女にお渡ししたいと思います。星霊を愛し、愛される貴女こそ12の黄金の鍵がふさわしいかと」

「……それは出来ない。星霊魔法は絆と愛の魔法、そう簡単にオーナーは変わらない。貴女にも2つの鍵との間に信頼があるはずだよ？そう簡単にはね」

「……簡単な決意ではなかったのですが、そうおっしゃるのでしたら。いずれ貴女の所に自然とまた集まるでしょう、では」

「宿まで送つてくるわ」

「それと……今私はフリーの身分。次お会いするときは違う形になるでしょう」

外に出た2人の間には静かな風のみがしばらくの間流れる。ユキノは突然にフリーになつたとなれば当然行く宛がないだろう。カノンはそんな彼女に対して一つ手を差

し伸べてみる事にした、かつての自分自身を見ているようにも感じたからだ。

「ユキノ、ギルドに居場所が無くて放り出されたということは行く先が無いんでしょう？
貴女ほどの子が鍵を渡すなんてこと考えたんだもの」

「ええ」

「もし行く宛が無いなら私を頼りなさい。貴女を受け入れることくらいなら」

「ありがとうございます。でも何故そこまで私のことを？」

「私は、貴女のことを見捨てられなかっただけよ。心の奥底では不安になってるよう
思えたの」

「そうでしたか。いつかは貴女のご協力を仰ぐかもしれませんが、そのときは……」

「良いのよ、これくらいはね。困ったら来なさいな」

「おーい、ちよつと待ってくれー!」

これでお別れとなりかけた時にやって来たのはナツとハッピーだ。さっきまでの敵
対心に似た感情は感じられず、むしろ何か焦っているようにも見える。

「ナツ、どうしたのよ？」

「いやあ、お前悪い奴じやねえんだな。さっきのことで謝りたくてよ」

「謝る？ナツ様がですか？」

「さつき冷たくしてたでしょ？ナツね、剣咬の虎ってだけで悪者みたいに思っているか

らさ。これでも少しは大人になったんだよ？」

「だからこうして謝りに来てんだろが、ハッピー。いやー、ごめんー」

「軽っ!？」

ナツの謝っているのか謝っていないのか分かりにくい謝罪にハモリながら突っ込んでいると、ユキノの目に数粒の涙が見られる。

「わざわざその為に私を追って……申し訳ありません」

「おいおい、謝られても……ってなんで泣いてんだよ!？」

「オイラたち謝っただけだよ!？」

「どうしたのよユキノ?」

「いえ、こんな暖かい言葉をギルドにいた頃は……それで、つい」

彼女はギルドでは常に強くある事を求められ、感情を表に出すことがほとんど無かった。そしてギルドを辞めさせられる時にマスターによって厳しく場合によっては非道とも取れる言葉と態度をぶつけられたという。そんな言葉に密かに怒りを覚えたナツは殴り込みをかけに行くという事件が起こった。結局は仲裁にマスター・ジエンマの娘ミネルバに入られたものの、仲間の結束に関して伝えて戻ってきた。

|| || || ||

「何か気づいたことはあるかジエラール?」

「いや、全くだ。物ならフィルターをかけたか動かしなかったりしているのだろうし、人なら魔法を発していないのか、出場者でまだ出番がないのか、全くと言っていいほど感知できていない。シリルの方では王国内部でそれらしい動きをキャッチしたらいいが」
「そうか。むう……ここまで動きがないとなると何か起きる前の静けさに似ているな」
「確かに。情報や進展があり次第彼女と連携するつもりだが、一箇所に留まりすぎると怪しまれる。またな……」

「無茶だけはするなよ。また話せる時に話そう」

「(こうして普通に話せる時が来るとはな、エルザ)」

罪を背負い、光と闇の世界に住む者同士でこうしてゆっくり話せる機会を感慨深く思うジェラルドは宵闇に姿を消していった。そしてそんな彼と別れたエルザは帰路につく最中、フードを被った人魚の踵の女性の踵の女性に声をかけられる。

「遅くなっちゃったな。宴会はもう終わってそうだ……」

「やっと思つつけた！こんなところにいたんだね！」

「何奴！」

「えへへ、エルちゃん元気最強？これなら分かるよね？」

「も、もしかして……」

「久しぶりだねエルちゃん！私だよ、ミリアーナ！会いたかったよー！」

フードを取ったその姿を忘れることなど出来ようか、7年前に別れたかつての友人ミリアーナの元気な姿がそこにはあった。成長こそすれど、面影を残していたのだ。

「元気で何よりだ。今回の大会にも？」

「人魚の踵に今入っててそのメンバーとして参加しているよ。ウォーリーとシヨウは元気に旅を続けてるんだ、今でも連絡は取るよ」

「そうか、皆やりたい事を見つけているんだな」

「良かった、元気な姿を見て……グスツ……」

「もう、泣かないでよエルちゃん！」

「そういうお前こそ」

久しぶりの心の友との再会に2人して涙をこぼし、互いを抱きしめる。旅に出た旧友とこうして会えるとは思っていなかっただけに積もる想いが溢れ出してくる。シヨウとウォーリーはまだ旅を続けていることなどそれぞれの近況を話しているうちに話題になったのはやはり今日の試合で抜かすの刀で勝利を収めたカグラに向かう。

「しかし、お前のところのカグラだったか？ 剣を抜かずに勝ちを収めるとはな、見事な腕前なのだろう」

「カグラちゃんは凄いんだよ！うちのギルドのエースだもん！でもこの大会じゃ本気出さないかもね。あの刀、抜かすの太刀『怨刀・不俱戴天』って言うんだけど本気で切り

たい相手以外には刀身を見せないんだって」

「なんだか物騒な名前と理由だな」

「名前を聞くとね。その相手が憎くて憎くて堪らない、絶対に共存したくない相手……全てを奪った男、ジェラールを斬る為の刃なんだ」

「えっ?」

なんでもカグラは自分の家族を失い、その家族はあの楽園の塔の一件に巻き込まれたのだという。そして還らぬ人となったことをミリアーナに知らされ、それ以来、ジェラールを目の敵にしているのだとか。

「分かるよ、カグラちゃんの気持ち。私だって憎いもん、私たちを奴隷にしてあの塔を建てたんだし、挙げ句の果てにシモンを……カグラちゃんのいるギルドに入ったのもそれが理由なんだ」

「ミリアーナ……お前……」

心の奥底に抱えた恨みの炎は簡単には消えてくれない。自身の過ごした幼少期の記憶は、心の傷となり、今もなお蝕んでいることが見えた夜になったのだ。

|| || ||

「さあ遂に三日目、中間地点に差し掛かりました!この3日目の結果がこの後の展開にどう影響するのでしょうか!今日のゲストは評議会からラハールさんに来ていただい

「ていますー！」

「どうぞよろしく」

「久スぶりだね」

「お元気そうで何よりですヤジマさん。楽しそうですね」

「最近は大実スとるからね。この大会も楽しみの一つだよ」

「ラハールさんは強行検束部隊大隊長とのことですが？」

「ええ、大会中の不正は許しませんよ？」

この日は妖精の尻尾の姿を眺めようとラハールの同僚であり、7年前天狼島の動乱の現場にいたメストことドラランバルトも来ていた。7年前に島の崩壊からどうにか逃げだせた彼は後悔の念に苛まれる時間を過すごしてきただけに、元気そうな姿を見て一つ心の区切りをつけることが出来そうだった。

「今日の競技はその名も伏魔殿バンデモニウム！」

「ルール説明の前に皆に集まってもらうカボ、参加者は前へ」

「ここは私が参加する」

「頑張れよエルザー！」

「エルちゃんが参加するなら私が行くねカグラちゃん！」

「許可しよう」

「ここは私が行くよ、ユリアの代わりだ！」

「行つてこい、カナ」

8チームから出場者が選ばれるが、その中には懐かしい顔があった。楽園の塔の一件で知り合ったミリアーナだ。他の2人、ショウとウォーリーとは別れ、1人ギルドに入った。昨夜会ったエルザはジェラルドに關しての話に戸惑つており、挨拶されてもぎこちなく返してしまった。恨みつらみを七年間の間では消えておらず、思い出しただけで悲痛な感情を起こすが、まずは目の前の競技だと気合いを入れ直す。

「あ、あの子！」

「ミリアーナか！通りでどこかで」

「人魚の踵に入つてたのか」

「久しぶりに見かけたわね。元気そうで何よりだわ」

7年前に楽園の塔の一件で友人になったミリアーナの元気そうな姿を見て、懐古の念を抱く。8人の出揃つたところで、会場には大きく不気味な建物が出現する。魔の巢食う館、『伏魔殿』バンデモニウムだ。

「今日はこの魔獣が喰らう伏魔殿に挑戦してもらおうカボ」

「魔獣の喰らう？」

「そういう設定ですカボ、ただの。この建物の中には100体の魔法で出来た獣がいま

すカボ、その100体を倒し、一体一点として何体倒せるかで順位をつけますカボ。ああ、魔法で作った幻のようなものですから、建物から出てくる事はありませんし、会場の皆さんを襲うようなことはないのご安心を。それと、ダウンしたらそれまで獲得したポイントまでゲットし、そこでその人の挑戦は終わりになります」

「数取りゲームだね、簡単に言えば。じゃあ1人が50体以上倒した時点で一位が決まるんだね？」

「そうですね、そういうことですカボ。ただし、点数の差は無いものの魔獣にもランクがありますね、DランクからC、B、Aと続いて一番上にはSランクがあります。Sランクは聖十大魔導といえど倒せる保証はありませんカボ。ちなみに一番ランクが低く数の多いDランクはどんなものかというところ……」

映像に映し出されたのは一番数の多い魔物、Dランクの魔物だ。伏魔殿の内では一番弱いとされているが、それでも石の像をいとも容易く砕く姿に会場は絶句してしんと静まり返る。これやこれより強い魔物が蔓延っているこの魔宮を制する事が目的だ。

「ざっとこんな感じカボ。魔力が全員切れるか、順位が確定したり100体全部倒された時点で終了になりますので。では順番はこのくじにて。一人一本ずつどうぞ」

「……一番目か」

「良いじゃないか、一番多く順番が来るよ？ 私なんて八番手だよ」

2番手にはミリアーナ、続いて四つ首の仔犬のノバーリ、天馬のヒビキ、大鴉からはオーブラ、剣咬の黒雷使いのオルガ、ジユラ、そして最後にカナがくる。順番が早いエルザは一つため息をついて自分の目指す数を述べていく。

「ふむ、この勝負、くじ運で決まると思っていたがゲームですら無くなるな」

「どうでしょう？ 効率性や思考能力が重要なゲームですよ？ 確かに多く順番が来るのは1つ有利な条件ではありますが……ゲームを大きく左右する程とは思えませんカボ」

「それはどうだろうな。私の挑戦権は100体全部だ！」

「む、無茶ですよ！ 一人で陥落させるようには設定されてませんカボ！」

「構わん、私はやるしかない」

無謀にも思える挑戦に見えたが、その日、皆が記憶に刻みこみ、あるいは昔の記憶を思い出した。地に堕ちたはずの妖精のかつて最強と謳われた女魔道士の存在を。その紅蓮の髪が舞い、踊り、かつての隆盛を誇るかのように傷つきながらも戦場を駆ける。『妖精女王』これに有り、咲き誇る一輪の緋色の華のその雄姿は皆の心に響き、刻み込まれ、感嘆の涙を浮かべる者さえいた。真の力は我らにこそ示せると言わんばかりに魔の巣窟を踏破してみせた。

「な、なんとということでしょうか!?これが7年前最強の名を馳せていたかつてのギルドの本来の姿なのか！エルザ・スカーレット、この伏魔殿をたつた1人で完全制覇！文句

なしの大勝利ですー！」

「凄まじい活躍でしたね。思わず涙が……」

「こりや参ったね、心が突き動かされたよ」

「会場からは驚きと感動の聲が聞こえてきますね」

「もう、こんな雄姿は見れないと……本当に良かった」

緋色の華の紅蓮の意志は仲間の思いに応えて雪辱を果たす。見事と讃えられる強さは新たな伝説をこのクロツカスの地に刻み込んだ。妖精の健在ぶりをまた一つ見せたのだ。

「これで妖精の尻尾Aチームにさらに10点入ります！ええと、それと今回は伏魔殿が異例のスピードで攻略された為、些か簡素で地味ではありますが他のチームの順位の確定のためにゲームを用意しました。マトー君？」

「用意してるカボ、マジックポイント・フラインガー魔力測定器略してMPF。魔力をこのラクリマにぶつけて点数の高い方から二位としますカボ」

「これは元々訓練や魔力の質を調べるために考案されたものでしてね、我々検東部隊のルーンナイトでも導入してます」

この計測器に挑む残り7人の戦士たちは先程とは傾向も対策方法も変わった事に微塵も不安を見せず、それを眺める。

「順番は先ほどのクジを引き継ぎます。なので二番を引いた方からどうぞカボ」

「じゃあ私からだね！いっくよー、『ネ拘束チューブ』！」

「結果は365ポイント！これは、高いのかどうか比較しにくいですね」

「結構良い点数ですよ。他の項目を参照しながらですが、部隊長クラスに抜擢するくらいにはポイントが出てますね」

「成る程、ありがとうございます。そこそこの点数と言うわけですね」

1人目のミリアーナの叩き出した点数に比較対象がない事でどれくらい強いのか戸惑う観客もいたが、ラハールの的確な表現で補足していく。パワー押しというより比較的技術的な部分で補う彼女にとつては高得点とも言える。続く四つ首の仔犬ノバーリは124、青い天馬ヒビキが95を弾き出し、更にウエンディたちを襲った大鴉の尻尾オーブラが力を隠すためか4点しか出さなかった。それにより人魚の踵ミリアーナが暫定トップの点数になり、この時点で5位以上が確定する。

「ここまで4人が終えたところで人魚の踵ミリアーナが依然トップ！」

「ミャー、やったね！」

「喜んでられんのはここまでだ。俺の黒雷の前にその自信ごと打ち砕いてやる。『120mm黒雷砲』!!」

「さ、3825点……」

「私の十倍!? 何それー!？」

「やっぱりオルガくんのパワーは最強ですね!」

「(あの黒い雷、止めるのは俺だ。今から対戦が楽しみだ)」

ここで剣咬の虎の神殺し、オルガが黒雷の弾丸を両手から生成して打ち出した。ミリアーナの300点少々を遥かに上回る四桁を叩き出し、トップに躍り出た。強行検束部隊でもここまでの点数を取る人材は中々おらず、パワーはギルドの名に相応しい威厳を保つ。

「次は聖十のジユラ! この記録を超えるか注目されます」

「ジユラさん、いけるかな?」

「無論、心配ない。むしろ俺の心配は別の所にあるがな」

「全力でやっても構わんのだな?」

「もちろんカボ。遠慮なくやってください」

「では……『鳴動富嶽』!」

「なんと8000点越え! 流石は聖十大魔導、その名に恥じぬ得点をはじき出した!」

「えっ? はっ?」

「何ー!?! おっさんおかしいだろそれー!?!」

「俺の心配はその強さのあまり聖十大魔導の出場が制限されるか否かだ」

オルガの後に続いたジュラが更にその二倍以上の点数をつけた。この強さは聖十大魔導5位、イシユガル四天王と呼ばれる人外とも言われる聖十大魔導上位4人を除いた中では人類最強と謳われるだけあり、この時点でトップの座を手にした。

「な、なんとという強さじゃ。こりゃあ、ギルダーツと良い勝負じゃわい」

「ふふ、あそこに居るのはそのギルダーツの娘です。力量は十分なのは？」

「う、うむ」

「さあ、二者連続で四桁と高得点が出てやりづらいでしようが、妖精の尻尾のカナには頑張ってもらいましょう！」

「うい、ひつく……やつと出番かい？」

「ベロンベロンかよ。こりゃ一位は無理だな」

「よくて3桁後半から行って四桁で三位狙いだな。もし酔ってなくてもそれぐらいが限度だろ」

ミリアーナの点数はまだ越せるかもしれないが、上2人との点差が開きすぎている。誰が見ても絶望的、なるべく多い点を獲得しておきたいが、正直誰も期待が持てない。しかし、彼女が上着を脱いで腕を晒した瞬間、誰もが驚いた。

「ふう……さてと、ぶちかますか！」

「何あの紋章!？」

「初代、何か貸しましたか？」

「いえ、あれは妖精の輝きではありませんね。もしや……」

「（あれは私の力よ。勝つためならと、さつき貸したのよね。さあぶちかましてやんなさい、カナ！）」

右腕に刻まれた聖痕はカノンより譲られた大魔法の砲弾だ。この大会に勝つための秘策として、この3日目が始まる直前に渡していたのだ。それが今この場で解き放たれ、道を照らす。

「聖なる神の光たちよ、天照らす命の輝きと共に闇を穿て！」

「これぞ神の啓示、私の新たな力……貴女なら使いこなせるはずよ」

「永久なる灯火の唄！ 『蓬菜エターナル・ホーリーの光明』！」

聖なる光の穿つ先にあつたのは最高記録を大きく更新する結果だ。測定器では測りきれない点数によりカンストし、そのまま破壊。皆が呆気にとられる聖者の後光は、進撃を止める者をことごとく打ち砕くが如き強さを見せつけた。

「な、なんてことでしょうか！ 妖精の尻尾がこの競技パートをワンツーフィニッシュ！ このギルドは止まるところを知らないのでしょうかー！」

「止まらないよ、私たちは！ なんとって永遠の冒険を夢見る妖精の尻尾だからね！」

「自由気まま、だけどやる時はやる。それがこのギルドの強みだものね」

歓声に答えるように、声を高らかに自分たちは最後まで優勝を狙っていると暗に宣言したカナ。この競技パートで2チームとも高得点を叩き出した。

試合パートでは1試合目にはミリアーナと四つ首の仔犬セムスが戦い、魔法を封じる紐を巧みに使いこなしたミリアーナが勝利を収めた。彼女の腕は以前より上がり、先程のゲーム以上の強さを見せつけた。第2試合では記憶造形師のルーファスと共に六魔将軍討伐にあたった元ルーンナイトのイヴが初日以来の激突となった。雪魔法を巧みに操るイヴに、記憶から相性の良い炎の記憶を探り出し、撃破。ルーファスの勝利で第2試合が終わった。

「さて、3試合目は妖精の尻尾Bラクサス対大鴉の尻尾のアレクセイ!」

「レイブンだと?」

「ラクサスなら心配いらないよ」

「まあ負けやしねえだろ」

相手が誰であろうと最強候補に挙げられるラクサスなら負けはしないと仲間はさも当然のように信頼を寄せている。だがいざ開幕してみると、手も足も出ない。その異変の正体にいち早く気づいたのはカノンだ。相手が相手なので少し警戒して張った生体感知魔法が目の前の光景とは違う何かを示している。

「(……っ!これは、幻影?) クレス、ちよつと良いかしら?」

「いかがなさいました？」

「烏に不審な動きがあるわ。ヒスイ姫、アルカディオス大佐、少し兵を借りたいのだけどよろしいかしら？ 大会のためなのだけれど」

「大会の為に兵を？ それならば少しばかりではありますがお使いください、この大魔闘演武の円滑な進捗のためなら芽を摘んでおきたいので」

「なら借りるわね。クレス、指示を出すか試合が終わるまで闘技場の入り口で待機して」
「心得ました」

違和感の正体、それは眼に映る人数と魂の出す鼓動の数の違い、控え室にいるように見える4人の魂の鼓動の無さ、そして実際に感じる魂の在り処では実際には全く動きを見せない点だ。それはつまり目から受け取る情報が真実ではないということ。

「見た目上は2人しかいないのに、魂の鼓動を6つも感知できている。それに、観客席にいるマスター・イワンも控え室にいる4人も魂の鼓動がない。つまりこれは……幻影を見せながら闘技場で5対1にしているってことかしら。何が目的なのかしら？」

「ラクサスさん、一方的にやられてますね。どういふことなんでしょうか？」

「姫にも大佐の眼にも幻影が映されてる。大勢の人間やカメラも幻覚を写す……高度な幻影術なのだろうけど、私の能力は騙せないわよ。それに、決着がつきそうだわ」
クレス、準備して！」

『既に展開可能です!』

「相手は5人、30秒後に全員ひっ捕らえてちょうだい!」

『承知しました』

試合は幻影の解けた瞬間に終了を告げ、カノンの予測通り5人で幻影の裏から襲撃していた大鴉の尻尾は評議会や国の兵に連行されていた。

「こ、これは……どういうことでしょうか?先程までの展開が幻覚だったのか、一方的にやられていたラクサスが立っています、そして大鴉の尻尾のメンバーが全員……」

「ラクサスさん、ご無事ですか!?皆さん、大鴉の5人を捕らえてください!」

「お前は確かシリルのとこの……」

「巫女です。不可思議な現象を感じたと、私に動くように指示を出してまして」

「まあ勝てたから良いさ。(にしても試合中に言ってた『ルーメン・イストワール』って何のことだ?)」

「勝者ラクサス!なお5人での襲撃に、アレクセイがマスターと発覚しまして、大鴉の尻尾はこの先三年間、出場停止処分とします」

「当然だね。失格に値する事を何個もスていたからね」

ラクサスの文句なしの勝利だ。これで失格したことで1チーム減り、残り7チームで優勝争いを演じることになった。おそらくこの七年間の間にギルドの機密か何かを

狙ってこの試合が組まれた所で揺すりに動いたのだろう。試合がマスターの孫であり、自分の子供と組まれるという偶然を狙っての事だ。

「イワンめ……」

「……」

イワンの残した『ルーメン・イストワール』という言葉、それがギルドの闇だと伝えられたことがラクサスの心に少しばり残っていく。

最後の試合はウエンディと蛇姫の鱗シエリアの天空魔法を扱うもの同士の前、少女たちが激戦を繰り広げた。滅竜魔法と滅神魔法の奥義を繰り出す展開から最後は死力をかけた小さな拳と拳の大きな誇りをかけたぶつかり合いになり、30分に及ぶ戦いは引き分け。これでお互いのギルドに5点ずつ入り、友情を芽生えさせる握手という美しき幕引きとなった。

「風の滅神魔法、いつかぶつかった時は気をつけなくては。ま、やるだけやってみるだけね。私のような存在を殺すための魔法、悪用するような子じやないのが救いかしら」

「見事な試合になりましたー！これでおじさんの大会終了！」

「これこれ、まだ3日目じゃろう」

「ではまた明日」

これで残り7チームの順位が現時点で固まった。大鴉の尻尾失格に伴い剣咬の虎が

一位に自動的に浮上した。一位から最下位までは過密になっていて、どこもまだ逆転圏内だ。

その日の大会が終了してからカノンとユリアと共に夕焼けに染まる街並みを練り歩きたがら今日の試合に出ていたシェリアについて語り合っていた。

「ユリア、あのシェリアって子のこと知ってる?」

「この七年間でできた友人だよ。神殺しの魔法使いなんだけど、まだ完璧ってわけじゃないみたいだね。神殺しって言ってもクリティカルヒットになりやすい程度みたいだと本人から聞いててね。多分あの黒雷のオルガも神殺しだと思う」

「ふむ、神殺しがふたり、か。ねえユリア……貴女なら邪神の殺し方を考える時にどんな選択肢を取る?」

「私? ああ、あの例の墮天使たちが崇拜する悪魔のこと? 私なら姉さんやシェリアたちの力を活用するけど」

「なるほどね、やっぱりそうなるか。私の方でも調べてね。あの悪魔は同時に邪神でね、ナーガによつて数百年間にわたる封印を施されたの。その封印の解除が流れる七星の目的、そして闇で世を制することなの」

あのギルドが結成されたのは200年以上前のこと。ゼレフの力に魅入られた後、方々の封印の印を探しているうちに今の形になったのだ。その後、大量の魂や血が必要

になると考えた彼らは封印の緩むのを待ち、100年前に起きた大戦やこの数年の闇ギルドや違法なる存在の行った行為に便乗して、あちこちにある封印の解除や魂狩りを行ってきたのだと考えられる。

「残る封の数も僅か。おそらく近々に完全復活を目指すはずよ」

「備えなきやね。世界を混沌にしない為にも」

神殺し、そして邪神。堕天使たちの動きが少しずつ秘密裏に加速する中で2人はどういう答えを出すのだろうか。

第58の唄 険悪なる空気

「「かんぱーい！」」

「今日も気分が良いゼエ！」

「この調子で行けば優勝も目じゃねえぞ！」

「どうだい私の力はー！」

「あんなのチートだし、あれはシリルの力のお陰だろーが！」

3日目は負けなし、競技のワンツーフイニッシュにバトルパートはAチームの引き分けとBチームの勝利により合計で10点以上も稼ぐという素晴らしい戦果を挙げたのだ。当然ながらギルドの宴会は初日に比べて心晴れやかになるし、盛り上がりもする。特にエルザの美しい剣技とウエンデイの頑張りは皆が評価し、感嘆したのだ。

「エルザ凄かったね今日の活躍」

「なに、皆の声援のお陰だ」

「怪我はもう良いの？」

「ポーリユシカさんとウエンデイ、シリルのお陰でだいぶな。少し安静にしていればすぐに治るそうだ」

「すごい回復力ね」

「そんな3人の力でも治らないエルフマンって……」

「なっさけないわね。妹として恥ずかしいよ」

「あーあ、エルザさん頑張ってたのに私勝てなかったよ」

「何言ってるの、凄かったよ!」

「皆驚いていたぞ。それに今日の引き分けで勝ち点が入ったんだ、気にすることは無いではないか」

回復に特化した能力者3人で持つとしても回復しきれなかったエルフマンに対して呆れて言葉が出ないと言わんばかりだが、エルザの回復力が異様なだけである。そんな噂を感じ取ったのか、医務室ではエルフマンがくしゃみをしていたとか。ウエンディは勝てなかったことに少しばかり落ち込んでいたが、その活躍と頑張りに皆励まされており、次の日も頑張ろうという気持ちが大きくなった。

「ふふ、皆元気ねえ」

「よかったですね、活躍が見られて」

「ええ、でもアルカディオス大佐の計画の中身、それが確認しきれないのがなんとも不気味だわ」

「もしかしたらゼレフ同等の魔力とやらが関係しているのでは?あの後アルカディオス

大佐をつけていたのですが、どうやら大きな門のような物を作っていたようでして」

「大きな門、ゼレフの魔力……ふむ（もしやルーシイとユリアを狙ったのはこれの為なのかしら？ 大きい門で例の魔力を帯びたものなぞ、エクリプスしかないが……）あちらの動きを探るのは危険ね。クレス、お疲れ様。あとは待ちましよう、もしかしたらジェラールの方で何か打開策を探り当ててるかもしれない。（でも、何か嫌なものが一気に進む気配がするのよね）」

エクリプスの扉の作動に関して、何か動きがあるのでは無いかという神の勘、それが嫌な予感をひしひしと伝えてくる。

「おーい、シリルも飲もうぜ！」

「はいはい。ちよつとだけよ？」

「シリルと一緒にいるお前もどうだ？」

「えっ？ あ、私飲めないの？」

「ああ、悪い」

「良いんですよ」

「ま、今日はちよつとだけハプニングがあったけど順調に勝ち上がってるわ！ 明日もやってやろうじゃないの！」

「」「おおっー！！」「」

「(明日、そこが転換点かしら?)」

大会も半ばを過ぎてついに終盤戦、計画の目的も真意も読めないが、動くならば迎え撃つまで。闇の蠢く時間はその角まで忍び寄っている。

|| || ||

皆が大宴会を開いている頃、ラクサスとマカロフは肩を並べて外にいた。今日の対戦相手のイワンから聞かされたルーメン・イストワールについて、問いただしているのだ。それは何なのか、『ギルドの闇』と言っていた事が引つかかっていたのだ。

「ジジイ、ルーメン・イストワールってのはなんだ?」

「イワンから聞いたのか?」

「名前だけな。欲しがっていたみたいだよ、俺に在りかを聞いてきやがったんだ」

「むう……あのバカ息子め」

「確かギルドの闇の一つとか言ってるやがったな」

「闇ではありません。ルーメン・イストワール光の神話、それは我々のギルドの光なのです」

「初代、その話はいけませんぞ!」

「分かっています、これはマスターになった者のみ知ることの許される最高機密。無闇に話せるものではありませんが、決して貴方の仇となるものではない。納得してもらえますでしょうか、ラクサス」

「怪しいもんじゃねえなら構やしねえし嗅ぎ回らねえよ。いずれ話してもらえんなら構わねえしよ」

その正体は話せない、だがそれは同時にギルドの加護でもある。そう言われて、納得はしたし、追求したところで何も分からないなら仕方あるまい。そう考えたラクサスの追求が終わった。

「どこから漏洩したのじやろうか。ギルドで知っているのはワシと今のラクサスだけ、とても奴が知り得るものではないし漏洩の危険性も把握済み……」

「過去の離脱者と考えるとおそらくプレヒト、2代目でしようね」

「あり得ますな。悪魔の心臓のマスターともあろう者ならば情報を持ち得てますし、拡散する相手も分かっていますよ」

「まさか闇に堕ちようとは、私の浅はかな人選が招いた結果なのですな」

「んなこたあねえだろ。まさか敵側につくなんて想像できなかつたんだろう？それなら仕方ねえって」

「いいえ。これは私の責任、私が悪いのです。うえつ、えぐつ……」

「しよ、初代!?何しとるラクサス！早く初代をあやさんか！」

「無茶言うなつて！ハードル高すぎるだろそれは！まともにこんな状況を相手をした事ねえんだぞ！」

「泣いてなんか、泣いてなんかいません！うううっ……」

「初代——!!」

ギルドの最高機密の漏洩に繋がってしまった自分の人事に責任を痛感した初代を泣き止ませる事に、その場にいた2人は大いに苦勞した。結局プールに連れていく事であろうやつと泣き止んでくれたことはここだけの秘密だ。

「ユキノ・アグリア軍曹、ただいま推參致しました」

「ご苦勞。計画への理解と助力、感謝する」

「いえ、未来と過去の清算というのならば、私も微力ながら協力をば、と思ひまして」

劍咬の虎を離脱させられたユキノの辿り着いた先は王国のアルカディオス大佐の元だった。彼の作戦に賛同し、こつこつと軍曹としての地位を貰い、作戦遂行に助力する。運命の日、七月七日まであと四日だ。

|| || ||

大会4日目になり、今日と休養日を挟んだ5日目が残るだけだ。4日目の競技パートは『海戦』、闘技場に浮かぶ大きな水玉の中で戦うのだが、ルールは単純でこの水玉の外に出たら失格になる。四つ首の仔犬以外のギルドからは女性が出場することとなった。

「さあよいよ4日目、終盤に差し掛かって参りました！今日はどんな展開が待ってい

るのでしょうか、競技。ハートは『海戦』ナバルバトルです!」

「水中相撲かね?」

「そういうことになりますね。水中にいかにも長く留まれるかで順位が決まりますので、いくら敵を落としても直接点にはなりません。その分順位も上がるので、魔力温存を狙い長期戦に持ち込んで点を横取りするか、初めから動いて直接叩き点を上げに行くかを考えることも大事です」

ただし残り2人になった時点から五分間は特別ルールが発動する。この時間内に落とされた場合は例え何人落としていようが容赦なく最下位になる。つまり最後まで油断出来ないのだ。

「あのミネルバというの、強いのかしら? 今までいかなかったけど仕事に行っていた人ってあの人の?」

「らしいですよ。剣咬の虎最強だと言われてまして、ギルドを成長、発展させるきっかけを作ったとかなんとか」

「ふうん。実力派なのね?」

「おそらくエルザさんに肩を並べる程には」

「なるほどね(今日と5日目のどこかで衝突するなら、今のうちに彼女の魔法、そして攻略法を探らなくては。その大役を頼んだわよルーシィ、それにジユビア)」

彼女とはいずれぶつかる事になる。ならばここで攻略の鍵を見つけ出し、これ以降の戦いに備える必要がある。その大役を務めるのはルーシイとジュビアだ。

「水中ならやることは一つ！先手必勝、開け宝瓶宮の扉、アクエリアス！」

「うおらあ！水中は私の庭よお！」

「貴女にだけ良いところを取らせない、『水流台風』！」

「なっ、私と互角!?やるじゃないの」

「恋敵には負けられない」

水流のぶつかり合いは他の選手を巻き込む程の威力であり、水の戦いで力を発揮する両者の激突となる。その間にも試合は動き、四つ首の仔犬がいち早く脱落した。

「さあ試合は盛り上がっていきますー！」

「仔犬パビー以外は、だがね。さっきの水流の間にもう脱落スしたみたいだからねえ」

「女性陣ばかりで目の保養になりますね、ありがとうございます」

「これじゃあラチがあかないよルーシイ。一旦引かせてくれないかい」

「ど、どうしてよ！水中で一番頼りになんの貴女なのよ!？」

「私を召喚し続けると魔力消費が早いし2体同時召喚しにくいんだよ。それに、デートだ」

「ちよ、ちよつとお!？」

「隙あり！」

「うわわわっ！アリエス、バルゴ、出てきて！」

「モコモコですみませくん！」

「セクシーガードです、姫」

「ふう、助かったあ〜……もうちよつとで場外だよ」

水中は女性陣の入り乱れる混戦模様になり、特に男性から喜ばれる状況である。実況のチャパティだけが何故ウエンデイを出さなかったのかと不満たらたらだったが。そんな混戦の中で動いたのは水中戦に長けたジユビアだ。

「ここで一気に片付けます。第二魔法源セカンドオリジンによって身につけた奥義！『届け愛の翼グレイ様ラヴ』！」

「おいやめろー！！」

「うわあ！」

「きやー！」

「くうっ！」

「ジユビア選手、なんと3人同時撃破！これは大きく有利になりましたー！」

「（今、あのミネルバとかいう魔道士、何か空間を歪ませて防いでいたわね。ナツの話を聞く限りだと、突然現れたとも雷炎竜の撃鉄をノーダメージで防いだとも言ってた。そ

れが彼女の力の一端なのかしら?)」

「私に萌えてくれましたかグレイ様……ってドン引き!? って、え?」

自分の命名した魔法にドン引きされている間に不自然な程に突然、ジュビアは何か引つ張られる様にして場外へと弾き出され、残るはルーシイとミネルバということになった。残るメンバーからして、空間魔法か何かと思われるミネルバの力だ。

「(今度は弾き出した!? しかも一瞬で……どんな空間魔法なの、あれは?)」

「ふふ、こうでもせねば興が覚めよう」

「あーあ、お嬢も人が悪い」

「お嬢の魔法があれば一瞬で全員押し出せたものを」

「完全に楽しんでるね、この状況を」

「お嬢らしいな、あのやり口」

「さあいよいよ一対一! 特別ルール発動で五分以内に決着がつけば、その段階で最下位と一位が決まります!」

「ふふ、残ったのは妖精の尻尾か。面白い、妾の余興に付き合うが良い。耐えてみよ、妾の攻撃を」

「えっ? きゃあっ!」

「何だあの魔法は?! 水中で爆発を……」

水中での爆発や鉛の様な痛みを伴う攻撃など、さまざまに多彩に繰り出してくる。全くと言っていいほどに動いていないというのにこの攻撃だ。

「やられっぱなしじゃダメ、少しでも反撃しなきゃ……あれ?! 鍵が!」

「このことか?」

「嘘、いつの間に……うああっ!」

鍵を失ったルーシーをいたぶるその様はまさしく外道のそれであり、五分のタイムリミットが切れた途端にこの怒涛の攻めである。

「どう見てもあれはリンチだろ……」

「あいつ、徹底的に痛めつけるつもりらしいぞ」

「えげつねえ、どこまでも……」

「五分の時間制限が終わった途端これかよ」

「これで終わりじゃ、消えよ……」

「余興にしてはやり過ぎだ、馬鹿者。たかが一魔道士の自分が余興だと? 身を弁えよ」

「き、貴様は……」

「これ以上は神の名において、止めさせてもらおう。せいっ!」

「がはっ!」

「し、シリル……ありがとう……」

「試合は中止だ、ルーシイは私の干渉もあつたが、2位で構わんな?」

「え、ええ。構いませんカボ……衛生兵を呼んでおきます!」

カノンの咄嗟の機転により試合は中断、ルーシイはルール上2位となり、これでとりあえずの決着は着いたが、剣咬の虎と妖精の尻尾の間には不穏な空気が流れる。ルーシイを暴力の限り甚振つた者として敵視する妖精と、ミネルバの試合に割り込み一撃を加えた者として快く思っていない剣咬の虎。一触即発のピリピリとした空気が張り詰める。

「おいルーシイ大丈夫か!」

「ひでえ傷だ、シリルが止めなきやどうなつてたか……」

「試合を止めるなど……妾に喧嘩を売っておるのか?」

「やるならやるぜ?」

「……貴様らは喧嘩を売ってはいけない奴らに喧嘩を売つたのだ、これから震えて過ぐすといい。我々は仲間を不用意に傷つけた者には容赦せんぞ?」

睨み合いはエルザの言葉と人を射殺しそうな眼光により、場外乱闘は抑えられた。ルーシイはウエンディたちの応急処置を受けながら医務室へと連れて行き、そこでAチームBチーム両方が集まる。

「ルーシイはウエンディとシエリアの応急処置でどうにかなっているが……あれは最早

尋常ならざる攻撃だったな」

「剣咬の虎か……絶対許さねえぞ」

「気持ちには分かるがよ、ナツ。今はブチギレル時じゃねえ。仲間の受けた屈辱は試合で返そうぜ」

「その通りじゃ。ワシらの家族が痛めつけられておいて借りを返さず何が妖精の尻尾か。これが吉と出るか分からんが、大会本部から大鴉の尻尾が抜けた穴を埋めて偶数チームにするため、ふたチームを一つにせよと言われてな」

「点数はどうなるのです？」

「低い方、つまりAチームの点数を受け継ぐそうじゃ」

マスターから告げられたのはチームの統合というある意味絶好のチャンスだ。バラバラになって戦っていた戦力を一つにかき集め、確実なる勝利を挙げられる。

「点数は下がるが、やむを得ないか」

「考えようによっちゃあ最強のチームに組み替えられるんだろう？むしろチャンスじゃないかい」

「これからタッグ戦と明日の全員参加のバトルがある。優勝を目指して勝つつもりなら慎重にチームを組む事だね」

「俺が出る。ルーシイの仇を取る！」

「私も出るよ、仲間の受けた傷を返してやるつもりなのね」

「いえ、ユリアは明日のリザーブ枠で出てください。ここは私の必勝の策のために何卒」
「そう、ならば初代にお任せしましょう」

「さてと、もうそろそろ交代時間も終わるから出なさい。私も新チームの活躍、楽しみにしてるわ」

＝＝＝＝

「さあいよいよ4日目のタッグバトル戦が始まります！各チーム、価値ある一勝を得るため、出て参りました！」

「このチームなら負けやしないよ」

「だな。勝つ姿しか思い浮かばねえ、ガツンと行つてこい！」

「頑張ってください！」

「妖精の尻尾、チームを統合した事が吉と出るか凶と出るか！」

「本気のようなだね、最強のメンバーを揃えてきたみたいだ」

「ぶちかましてきなさい、貴方達は誇り高き妖精の尻尾の代表なのだから」

ナツ、エルザ、ガジル、グレイ、そしてラクサス。この5人が揃えば負けはない。まさしく妖精の尻尾最強軍団の名にふさわしい錚々たる顔ぶれだ。この演武、勝ちに行くにはこの5人だ、そんな声と声援を受けている5人は闘争心に溢れている。

「さあ、今日の試合は既に決まっています！四つ首の仔犬対青い天馬、人魚の踵対蛇姫の鱗、そして因縁の対決の剣咬の虎対妖精の尻尾！先ほどの競技から直ぐのこの試合ですねヤジマさん」

「あそこのギルドなら大丈夫だよ」

「今日の試合次第では明日の展開が大きく変わります！バトルパート、いざ開幕！」
険悪な両ギルドの闘争の鐘は今この時に鳴れり。

第59の唄 滅竜の戦

四日目のバトルパートは異例のタッグ戦となり、青い天馬は一夜とエクスタリア出身でこの七年間で青い天馬に入ったニチャ対四つ首の仔犬のエース、バツカスとロツカー。奥の手として隠されていたウサギの着ぐるみの中身がニチャであり、まさかの顔がダブル一夜状態に大半の観客から悲鳴が上がり、いつも強い精神力を持ち大抵の事では屈しないエルザを、いとも容易くノックアウトさせるハプニングがあったがパワーアップした一夜の一撃で青い天馬が勝利した。続く第2戦では人魚の踵からカグラとミリアーナの息のあったコンビ対蛇姫の鱗のユウカとグレイの兄弟子リオン。こちらはカグラの猛攻を造形魔法の手数でもってリオンが時間いっぱいまで守り切り、決着が着く前に時間切れで引き分けとなった。そしてついに観客の待ちに待った試合が始まる。妖精の尻尾対剣咬の虎の滅竜魔導士対決だ。

「お待たせしました、今日一番の注目！妖精の尻尾ナツとガジル対剣咬の虎ステイングとローグ！なんと、全員が滅竜魔導士という面白いカードになりました！」

「行くぞ火竜、ギルドをナメられたままにしてちゃあ名折れだぜ」

「ああ。この勝負、必ず勝つぞガジル」

「ワクワクするよナツさん、俺はずっとこの時を待ってたんだ！あんたと戦う、それが今回の大会での一番の楽しみなんだ！」

「(ガジル、お前は俺が倒す……)」

「ステイング、ローグ、最強のギルドたる者の力を遺憾なく発揮せよ。我らの名をこれ以上汚すなよ」

「思う存分やってやれ。ワシからはもう何も言うまい、この勝負、2人の勝利を信じる」

4頭のドラゴンが相見えた瞬間だ。会場は先程の海戦があつた為、異様な盛り上がりを見せている。炎、鉄、光に影の四属性のぶつかり合いは大会屈指の注目カードになる。

「それでは、試合開始！」

「行くぜえ」

「ああ」

勢いよく飛び出そうとする双竜だったが、先制したのは妖精の尻尾だ。普段はいがみ合っている2人だが、こういう時の連携力は抜群だ。次々に立ち替わり入れ替わり動き、双竜を押ししていく。

「白竜の咆哮！」

「うおっ、レーザーか」

「ハッハー！」

「おっと！」

「隙ありだ、影竜の斬撃！」

「残念だな、鉄竜剣！」

鉄竜剣で受け止めた斬撃をはじめ返し、そこをナツが合わせてスティングとローグをまとめて火竜の翼撃で吹き飛ばす。まさかの展開に観客も実況も驚くばかりだ。2日目の競技パートで見せた情けない姿と打って変わり、猛攻を仕掛ける。

「これは、なんと妖精の尻尾が押しています！ 剣咬の虎の双竜、予想外に苦戦しているぞー！」

「へへ、こうじゃなきゃ面白くねえよ。やっぱ強えなナツさん達は」

「ガジル……」

「おまえら、本当に竜を倒したのかよ？」

「倒したんじゃない、殺したんだ。俺たちの手でな」

「親じゃなかったのかよ？」

「あなたには関係ない話だ。見せてやるよ、その力をな。ホワイト・ドライブ！」

「シャドウ・ドライブ」

「あ？ なんだあのオーラは？」

「行くぜえ！」

「なっ?! 速っ……っ!」

「サフランダー火竜!」

「光と速さと影の執拗さからは逃げられぬ」

魔力増幅の力により、今度はステイングとローグがナツとガジルを押す番となる。スピードとパワーの双方が上昇し、先程とは逆の展開になる。これは彼らの必勝パターンであり、自信がある。光と影の竜が持つ絶大な力の一端だ。

「俺はあんたを超えるために力をつけてきた! それを示すは今!」

「な、身体が!」

「その白き聖痕は身体の自由を奪う。これで終わりだ!」

「へっ、それはどうかな?」

「ぐおっ?! なんで動け……っ! 聖痕が焼き切られてる!」

「影は姿を見せず、されども確実に獲物を屠る。これで終わりだ……っ!」

「確実になんだって? 俺たちは数々の修羅場をくぐり抜けてきたんだ。そんな妖精他の尻尾をナメんなよ!」

「(っ)はっ!」

身体に打ち込んだ聖痕によって勝利を確信したが、その聖痕を焼き切るというナツならではの戦法で見事にカウンターを決め込む。影に入り込み背中から執念深く攻めて

いたローグも、腕を掴まれ肘打ちを食らわされる。ただでは倒されない、それが妖精の尻尾の強さだ。

「へへっ、強えな！だからこそ倒し甲斐がある！滅竜奥義……『ホーリーノヴァ』！」

「これで終わりましたね！必勝技ですよ！」

「フローもそー思う」

「……まだまだダメね、あの程度の力の溜めじゃ。力が技に乗り切つてない」

「なっ!?片手で……うおっ！」

「ガジルっ！」

「いい加減にウザつてえ、寝てろ」

「ごはっ！」

「3ヶ月間の修行、それに第二魔法源セカンド・オリジンの解放が彼らの力の底上げになっている。そう簡単に倒せはしない」

「うむ、格が違いすぎる」

パワーアップして勝ちパターンを使っても倒れぬ相手に、徐々に押されていく。戦いの中でもナツとガジルは強くなり、学び、相手を超えてきた。その心構えが双竜との実力の溝を作り上げていたのだ。しかもパワーを上げてきたのは彼らも同じだから、頑丈さを持ち合わせる彼らは強い。それでもスティングにはレクターと交わした幼い頃の

約束がある。竜はおらずとも、ナツという竜の強さを持つ男を倒し、バカにされた彼を救うと。

「俺には、友との約束があるんだ。あんたらを倒して、竜を殺した証を皆に示してやるってな！だから負けらんねえ！」

「なっ!?!姿が……」

「これはナツが楽園の塔で見せた、滅竜魔法の使い手が竜に近づいた力の形……」

「『ドラゴンフォース』!?!」

ドラゴンフォース、それはナツが楽園の塔やニルヴァーナでのマスター・ゼロとの決戦で発動させた滅竜魔法の究極形態。ステイングはそれを他の魔力に頼らずに自力で発動できるのだ。

「ローグ、悪いけど、ここからは俺一人でやるよ。手を出すなよ」

「分かった。思う存分やってこい」

「終わったな、弱小ギルドよ」

「随分とナメた真似してくれんじやねえか」

「俺は2人を倒す、それだけの実力があるって思ってくれ。行くぞー！」

「ぐあつ、速えっ！」

竜に最も近づいた力は伊達ではなく、今度こそ一方的な試合展開になっていく。拳を

振るえども当たらず、脚を伸ばせども届かずに一人で二人を追い詰めていく。そして次の一撃が凄まじい威力を放つ。

「くらえ、『白竜のホーリーブレス』！」

「うああっ！」

「なんと、闘技場の床が抜けました！凄まじい威力です！3人とも下に行きましたが、試合は続行します！映像カメラは続きを写しに行きます」

「くそが、鉄竜剣！」

「火竜の鉄拳！」

「よつと、おらあ！」

「ここで形勢逆転、ステイングが押しています！」

「ナツ、踏ん張れ！」

「ガジルも頑張れ！まだ勝ち目はあるぞ！」

「白き刃で浄化せし！『ホーリーレイ』！」

「ぐああああっ！」

「うおおっ！」

「終わりだな……時代は移ろいゆく。この2人の時代が終わったというだけのこと」

「（見てるかレクター、お前との約束をここに果たしたぜ）」

「ナツ……」

「ガジル、お願い。立って……」

「これが第三世代の力かよ……」

倒れ臥す竜に時代の流れを感じながらも、なんとか立ってこれと願いながらも、どこかで差を感じて嘆く。この二人をもつてしても勝てないのかと。だが、カノンは二人がまだ戦えるかどうかで確信していた。まだ真の力を開放していないと。

「ナツ、ガジル、いつまで寝てる気？まだ立てるんでしょう？さもなきや……」

「ちよ、ちよつと待て！まだ終わってねえぞシリル！」

「判断が早すぎるぞ！」

「なっ!?何故立てる!?あんな攻撃を受けて」

「いやあ、確かにすげえよ。あちこち身体が痛えぜ！」

「だがお陰で攻撃の癖はこれで読めたぜ。タイミング、軸足の向き、身体の動かし方、色々とな」

「ああ、例えば攻撃を撃つ時の足は11時方向だ」

「いいや、10時だな。百歩譲って10時半！」

「絶対11時だ！23時でもいいぞ！」

「一周してんじゃねえ！どっちも同じだろうが！」

やはりソリが合わない。こういう肝心なところで喧嘩を始めてしまう。グレイは自分がいってもこんな感じのどうでもいい喧嘩をしていたのか、そう思っていたとか。次第にエスカレートする両者だが、堪忍袋の緒を切らしたのか、ナツがガジルをトロッコに無理矢理乗せてレバーを引いたのだ。

「あー、うるせえ！」

「な、何をする火竜サラマンダー！もしやこれは……つて、うおおつ！」

「ギヒツ。さつきは良くもナメた真似してくれたな。お返しで今度は俺が一人で相手してやるよ。燃えてくるだろ？」

「一人で十分勝てるってのか？ナメられたもんだな、さつきの力を見てなかったのか!？」

「もう見切ったって言っただろ？それに、ナメた真似したのはそっちが先だろうが」

「俺はお前に用はない。ガジルと戦わせろ！」

「だったら俺に勝つてからにしろよ」

先程の借りを返してやると言わんばかりの挑発は、ステイングとローグを怒らせるには十分効果がある。

「くそが、このドラゴンフォースより強い力なんてありやしない！竜と同じかそれ以上の、この力よりな！俺は、この力で白竜バイスロギアを殺したんだ！」

「そうか。でもよ、シリルならこう言うはずだ。殺さずとも、力を示す方法はある。俺は

笑われた仲間のためにこの力を使い、強さを示す！」

「ぐああっ！」

「影竜の咆哮！」

「火竜の咆哮！」

「うおあつ！」

まるで強い敵と戦えるのが至上の喜びだと言わんばかりに奮戦するナツ。拳を振るい、ブレスを吐き、全ての力でもって2人と相対して押していく。実力の差や強さなどまるで楽しむためのスパイスだと言わんばかりだ。

「ちっ、まだだ。こんな所で負ける訳には！」

「俺はまだ立てる。レクターの為にも！」

「へへっ、それでこそだ。来いよ！」

「こうなったら……ステイング、あれをやるぞ！」

「ああ！合わせろ！」

「あれは、合体魔法か!？」
ユニゾン・レイド

「……」

「俺は、あんたを超える！」

「俺はガジルを倒す夢を、叶える！」

闇と光の合わさる力、仲間を信じて全てを合わせ、打ち込む一撃。徐々に強まり合わせる光と影を見て、メイビスとカノンは想いを同じくしていた。力だけでは突破できない壁があるだろう、知識だけでは開かぬ扉もあるだろう。しかし、そこに心や想いの力、それ即ち親愛と勇氣、そして打ち込む努力の志があれば道は自ずと開かれるだろうと。それを育み大きくしていけば、自分は周りを救う力になり、周りもまた自分を助ける力になる。

合体魔法、双竜の為せる絆の力、聖影竜閃牙。だが、それを上回る想いの力がナツを突き動かしていく。滅竜奥義、紅蓮爆炎刃。それは信念の炎を体現した聖影を超えていく力。ギルドとは信念と揺るがぬ絆を育むべき場所、ナツが放った豪炎はギルドの姿勢を示していた。炎は光と影を飲み込み、全てを喰らい尽くす。

「レクター……強すぎるよ、ナツさん。今の俺じゃあ勝てねえ……」

「ナツ・ドラグニル、底が、知れない……」

「こ、これは!?なんと双竜、空から落ちて地に伏したー!この時点で妖精の尻尾の勝利が確定!なんと1人で2人を倒し首位に躍り出たー!」

「かっかっかー!見たか、俺の実力!」

双竜敗れたり。燃ゆる焰ほむらの前に倒れ、屈した。なんとここで妖精の尻尾が剣咬の虎を一点上回り総合首位に躍り出た。2日目にガジルが言っていた一点に泣く事になる。

「また、闘おうな！」

「(済まねえレクター。勝てなくてよ)」

「(これが、ナツの強さ。ガジルも同じ程度だというのなら、俺はなんて思い上がった考えを……)」

再戦を楽しみにしているナツの実力を体感し、双竜はそれぞれ、自分の実力の無さを実感したのだった。

|| || ||

「くそ、サラマンダー火竜め！よくも俺を……」

ガジルの行き着いた先は、トロツコの終着点。その時にはすでに試合は終わっており、出口を探すばかりだ。

「(ここはどこだ？闘技場の地下か？なんか不気味な感じだな……つ、まさかこれは、竜の屍骨?!)」

その行き着いた先にあつたもの、それは竜の終着点、骸を築き上げた墓場そのものだった。その頃、ユキノは王国の城の中にいた。アルカディオスにより引き抜かれ、臨時の軍曹として働いている。ギルドの敗北を聞いたのは夜になってからだ。

「そうですか、剣咬の虎は敗れましたか」

「元いたギルドとあつて少し残念でしょうけれども」

「いえ、結果は結果ですから。それにしてもアルカディオス様……あ、大佐とお呼びするべきでしょうか？」

「大丈夫ですよ、友人などはディオなどとお呼びですからね。お好きなように」

「そうですか。しかし、彼の夢が理解されないなど。残念なことです」

彼女は何か未来を掴もうと王国に手を貸していた。彼女の声は僅かながら憂いを帯びていた。そして時を同じくして、ジェラルドはある怪しい魔力を帯びる人物との接触到に成功していた。

「生まれ。俺も顔を見せる、お前の正体を明かして欲しい」

「……そうね」

「(女の声?) ……っ！まさか、そんなことが！」

|| || ||

「7月7日、その日が近づいているのね。竜王祭、かつて母様がおっしゃっていた竜と人と魔の狂宴。ナツ達滅竜魔道士が集まった今年、何事もなければいいが」

神の恐れる運命の日がすぐその角までやって来ている。果たして人類に明日はあるのだろうか。それは未来のみぞ知る。

第60の唄 エクリプス計画

「これで妖精の尻尾が首位だぜ!？」

「剣神の虎も2位降格か。3位も4位も上がってきてるし、逆転圏内だからまだチャンスあるぞ?」

「ぶぶ、今年ばかりはセイバーもダメかもなあ」

4日目を終えて観客達は、点数表の前で盛り上がっている。ナツの勝利によって首位を奪取した妖精の尻尾、それと入れ替わるように負けた剣咬の虎が二位に陥落した。これによって、観客同士で今年の優勝ギルド予想が行われている。妖精の尻尾を応援する声が増しに高まっており、剣咬の虎は厳しいのではという声もちらほら挙がっている。

「いや、まだ分からないだニ。一点差、しかも他のギルドの逆転の芽があるって話をしていたばかりだニ、セイバーも例外じゃないだニ」

「た、確かに。今年は上位が混戦気味だし、セイバーもまだ今日負けただけだしな」
「今回の大会は面白くなりそうだ」

|| || || ||

その頃の妖精の尻尾の宿舎に、トロツコで脱落させられたガジルが息絶え絶えで、疲れ切った表情で戻ってきた。

「やっとこさ戻ってこれたぜ」

「ガジルおかえり！無事だった？」

「どうにか戻れたが、大変な目に遭ったのは違いねえ。それよりか、サフランダー火竜と娘っ子は俺についてこい、見せたいものがある」

「「えっ?？」」

ドラゴンスレイヤーの二人に絡む話だとして、半ば強制的に連れて行つた。余程の話なのか、急ぐように去っていく。

「ふむ……ユリア、悪いけど様子を見に行つて欲しい。生憎手が離せなくてな」

「あいよく、任せて」

「私の探している物に行き着くかもしれない。魔法は極力使わないで」

「へ?？」

警戒心を露わにするカノンの様子が只事ではないと感じながら、ユリアは言われた通りに3人の後を追っていく。カノンはその様子を心配で見つめ、何かを憂うように遠くに視線をやった。

|| || ||

「彼女は、あの日と同じ人物なのか？」

戻ってきたジェラールが真剣に考え込む様子に、ウルティアとメルデイは何事かと怪訝な表情を浮かべる。

「ねえ、何があつたのジェラール？」

「戻ってきてからずっと考え事よ」

「シリルから得たエクリプスと思われる建造物の情報、それと先程会ったゼレフと似た魔力を帯びた1人の人間。3日目に取り逃がした人物と似ているが、少し違うような……これは一体どう言うことだ？」

大会の影で情報を集めていたジェラールは、この一連の情報に何が隠されているのか。それを必死に結びつけて暴き出そうとするが、一向にまとまらない。

「もう一度、全て整理しなければ」

「どういう事なのかな、ウル？」

「さあ、さっぱり」

＝
＝
＝

「おいガジル、俺とウエンデイに着いて来いってどう言うことだよ？」

「いいから黙って来い。すぐわかる」

「こんなところが地下にあつたんですね？」

「あの試合の最中に偶然見つけてな。まさかこんな事になつてるとは思わなかつたぜ」

「にしてもなんでルーシイとグレイ、おまけにユリアまでついてきてんだよ?」

「おまけだなんて酷いな、私は姉さんに頼まれたのよ。後の2人は知らないわ」

「私たちは完全に野次馬、かな?」

「馬つていうやつがあるか?」

3人の後ろにはカノンに頼まれて着いてきたユリア、興味本位でやってきたルーシイとグレイの姿があつた。彼らがやってきたのは、ガジルの乗つてたトロツコの終着点付近、闘技場の地下の先にある洞窟だ。所々に髑髏や骨が置いてあり、不気味な空間だ。

「着いたぜ、ここだ」

「なっ!?!」

「竜の骨!?!」

「ひえっ!」

「おお、すごい数と大きさだね。ねえ、この中に見知つた骨はある感じかな? 不謹慎かもしれないけど」

「大丈夫だ、それはねえからな。メタリカーナは鉄の竜、その鉄らしい匂いが骨から感じられねえ」

「ここつちもだ、イグニールの猛烈な火の匂いがねえ」

「グランディーネもここには居ないかな？」

そこにあつたのは竜と思われる巨大生物の骨の密集地帯で、見渡してみた限りでも何十個もある。これだけの数が風化している辺り、何十年、何百年かは経つていそうで、たかが14年で出来たものではなさそうだ。

「……そうだ！ミルキーウェイを使えば何か分かるかも！」

「何それ？新しい魔法？」

「前に修行してた魔法なんです。てつきり攻撃用だと思つてたんですけど……ちよつと離れてください、魔法陣を大きめに書きますので」

「何するんだ？」

「さあ？でも何か出来るんでしょ？」

新しい魔法が使えるのではないか、そう言つてウエンディは魔法陣を地面に書き始めた。ポーリユシカから譲り受けた魔法で、攻撃魔法ではなく、探知魔法であるため今まで成功していなかつたみたいだ。

「よし、これで準備万端。始めますよ……」

「うわ、あちこちが震えてる！」

「何が起きてるの？」

「……すごく、小さい魂が1つ見つかりました」

「っ！確かに小さすぎる、昇天間際ね。感知するのがやつとだよ」
「顕現させます！」

「っ、小さな魂を見つけ出し、それを目に見える形に起こす。空気が揺れ、大地が震え、髑髏がカタカタと動き出す。呼び出した魂が遂に現世に現れた。そこに居たのは巨大な竜の魂のビジョンだ。」

「グオオツ！」

「「うわあっ!!」」

「あーっはっはっ！人間の驚く顔はいつ見ても面白いなあ！」

「おお、でかい！竜なんて生まれて初めて見たよ！」

「んん？お主だけ違う反応だ、人間にしては珍しい。ワシは翡翠竜と呼ばれたジルコニスだ。問おう、貴様は何者ぞ、小娘」

「私は死の恐怖を司る冥府神ペルスの実子、今は冥府神代理クローバーの巫女ユリア・アマリスだよ。私は死の恐怖を見つめて体現する者よ」

「そうか、あのペルスとクローバーの。出会ったのは数百年も昔、懐かしい名前だ」

翡翠竜ジルコニスと名乗る竜は、少なくとも数百年前を生きたらしく、神々と面識があるらしい。懐かしげに天井を見上げ、そして辺りを見回し始めた。

「まあいい、しかし天^{グランデイネ}竜の術だなこれは。誰ぞ、この術を使ったのは？このちんまいの

か？美味そうだな」

「おい、ウエンデイに近づくなよ！」

「ナツ兄さん、それ魂だけだから浮世の物に触りようがないと思うよ。既に肉体も朽ち、ウエンデイの力によって浮世に成り立っているだけの、常世と浮世の狭間の存在なの」
「流石は死に身近なだけある、冗談もある意味通じぬか。しかしまさか冥府神ペルスの所の娘つ子や竜の子と会おうとは、長い年月よな」

「それはどうも」

「ここで何があったの？すごい竜骨の数だけど」

「人間に話す言葉はない」

「オイラは猫だよ？」

「私も純粋な人間かどうか怪しいわ。神と人のハーフ？」

「そうか。ならば話そう」

「うわ、すごいガバガバな論理だね。ま、いいか」

人間嫌いなジルコニスだったが、着いてきたハッピーやユリアが人間とは違うと知るや、まるでなんともないと言わんばかりに話し始め、そんなので良いのかとナツ達は訝しんだ。それは数百年前に起こったとされる伝承、竜と人と魔の狂宴『竜王祭』についてだった。

「竜はかつて世界の王者だった。人間なぞただの食料に過ぎぬほど、卑小な存在だったのだよ。だが、そのうち人間と共存を図ろうという愚かな考えを持ち合わせる者が出てきたのだ。しかも愚策も持ち合わせてな。竜を殺す魔法を人間どもに教えた馬鹿どもがいくつも出た」

「滅竜魔法の、原点……」

「そうだ。それによつて共存派は一気に攻勢に出て、優位に立った。我々反対派は途端に数を減らしていったが、ここで奴らに1つ、大きな誤算が生まれる」

「誤算？ 裏目に出たってこと？」

「うむ……共存派の人間が突如として反乱に近い行動を起こし、共存派反対派問わず竜を殺し、駆逐していったのだ」

「そんな……」

「味方も殺したのかよ」

「その中の一人は竜の血を浴び続けて、次第に皮膚が鱗に代わり、歯が牙になり、そして角と翼が生まれた。奴の力は強大、次第に竜と同じような身体に変わっていった。名を言うのも悍ましく、未だに戦慄と恐怖を覚えるな……その者の奴の名はアクノロギア」

「何!?!」

「あいつも元は人間なのか!?!」

7年前に天狼島を襲撃して、ナツ達を封印に持ち込んだ張本人、アクノロギアが元は人間であり、竜の血肉を喰らい続けた事で竜擬きになった事。滅竜魔法を習得しており、それでこの竜の墓場を築きあげた事。その影で行われた神と悪魔の戦争については、衝撃が走る。

「それからというもの、竜は共存派反対派問わず絶滅の一途を辿り、アクノロギアを残して全ての竜が何かしらの理由で姿を消してしまった。神もまたナーガを筆頭とし、時を同じくして大悪魔と戦い、多くが信仰を失ったり、死に追いやられたり、後継者を決められぬまま消えたりして、大半が消えた。今残るのは両手で数えられるほどだろう。それが竜王祭の実態、多くの命の散った過去あまり語られぬ大戦」

「大惨事じゃない。なんでそんな大きな歴史が語られてないんだろう?」

「最早殆どの者が語る事が出来ないが故、かな? 当時を知る人が限られてるから、いつの間にか伝説や御伽噺、架空の話の扱いになってしまったのかも。あるいは自然と口を閉じたかね」

カノンが以前戦った流れる七星の結成要因がこの戦争に絡んでおり、しかも天地を分かつ大戦争だったが、今はほとんどが知られていない。事実、ユリアもこの戦争についてはほとんど聞かされていなかった。

「これが、こちらの知る全て。ワシは、貴様らに……」

「消えた!？」

「成仏した、みたいね。魂が完全に消えたんじゃないかしら」

「これ以上は話を聞けなさそうですね。ユリアさんの言う通り、成仏しました」

話し終えると共に、もう力尽きたのか、役目を果たしたとばかりに消え去ってしまった。残されたのは、暫しの静寂と混乱であった。

「おい、滅竜魔法使いすぎると竜になんのか!？」

「それだけは嫌だぞ!」

「ひいっ」

「まさかアクノロギアが人間だとはねえ。滅竜魔法が効かないって聞いてたけど、それが理由なのかな?」

「それはあり得んな」

「誰!？」

横槍を入れるように割って入ったのは、甲冑に身を包む壮年の男性と、元剣咬の虎の星霊魔道士ユキノだ。

「やはり私の推測通りか。今ので全てが一致した。アクノロギアはゼレフ書の悪魔、その存在に近い」

「(デリオラのようなものか!?)」

「つまりはゼレフさえ撃てば良い」

「あんた誰よ？」

「フィオーレ王国軍クロツカス駐屯部隊桜花聖騎士団団長を務めている、大佐のアルカディオスだ」

「臨時軍曹のユキノです」

「あれ？なんでユキノがここに？」

「アルカディオス様の想いに共感したからです」

「彼らは過去の歴史を研究し、この事がある程度は把握していたのだ。10年近くに及ぶ研究の末、ようやくたどり着いたと語っていた。」

「お前たち、なんか用かよ？」

「まずは今日の試合、流石と申しておこう。あの盛り上がりで国王陛下も大層お喜びだ」

「んなこたあ聞いてねえんだよ。何の用だと聞いてんだ！」

「ちよつと、ナツ兄さん！」

「着いて来てくれ、特別にある物をお見せしよう」

「私からもお願いします。未来を大きく変える事ですから」

「着いて行こう、姉さんの探している物の正体が突き止められるかもしれないからさ」

「シ ril が？何だろう？」

「なんでも、とてつもない物らしいよ。ゼレフに関係するかもって」

不満たらたらなナツを筆頭に渋々と言った具合に、アルカディオス大佐の後を追う。連れてこられたのは城内にある一際大きな部屋だ。そこに鎮座せし大いなる門、それが研究成果を活かした国家最高機密の1つ『エクリプスの門』だ。

「ここだ。これこそ我が国家の秘策、『エクリプスの門』だ」

「でかつ!?なんだこれ!」

「これが、姉さんの言ってた……」

「時空を超える門、エクリプス」

「これを用いて不死身になる前の過去のゼレフを討つ。それにより、この世界から闇ギルドやゼレフを信奉する悪の団体、ゼレフ書の悪魔を根絶やしにした世界を作り、生まれ変わらせる。それが我々の目的だ」

「要は過去の分岐点から今を変えるつもりね。ゼレフのいる世界とない世界に」

「平たく言えば、そういうことだ」

世界を変え、誰もが幸せになる世界の構築を目指す。それがこの計画の最大の目的であり、一気に悪を根本から無くす。これが正義だとも言っている。

「この数年、大魔闘演武を使って密かにこの門に魔力を注ぎ続けていた」

「俺たちや他のギルドを利用してたって言うのか?」

「ある意味ではね。国王陛下はこの事をご存知ではない」

「騙し続けているわけね？それに、そんなこと成功するとは思えないけど。万が一彼を殺せても、それは違う世界線を辿る。この世界が変わる保証がない。この世界とエドラスのような関係になるかもよ？」

「他に手立てがない以上、今は止むを得んのだよ。豊命神や陛下に伝えていないのは、反対を受ける事が明らかだからね」

「……（何考えてんのよ、全く）」

例えユリアの言う通りであっても、平和な世の中が形成されるなら、小さな差異でしかなく、そうなる可能性は低いと断言した。だが、ここで一つ疑問が出る。何故そんな秘密の計画を敢えて外に漏らすような真似をするのだ。

「なんで態々俺らにそれを教えんだよ？俺たちがシリルとか王様とか、それこそ評議会に漏らすかもしれねえだろ？」

「此度の計画への協力を仰ぎたくてね。特に星霊魔道士のルーシイと冥府の巫女ユリアには。2日目には傭兵を雇って、手荒な真似をした事は詫びよう。先を急ぎ過ぎた」

「ウエンディ達を攫ったのは貴方の指示だったのね」

「手違いがあつたがね。この門は過去や未来へと飛べる、その性質には時間の流れの異なる神の領域や星霊界の力を部分的に利用している。過去に当時の冥府神や生命神が

助力していた理由がそれだと推定される」

カノンの言っていた事が、それである。かつて神々は何かを感じ、この門と同じ物で未来へと開いた事例を持ち出してきた。

「計画の発動は7月7日、太陽と月の交差する日蝕を狙う」

「私たちのドラゴンの消えた日……」

「ただの偶然か？」

「私はこの計画に賛同し、協力しています。十二の黄金の鍵があれば、過去を清算し、未来を明るく照らしますから」

「ユキノ、貴女……」

「ルーシイ殿、ユリア殿、どうか助力願えないか？」

「そこまでだ、アルカディオス大佐」

計画も大詰め段階で、王国兵が雪崩れ込むようにして遮った。その兵達を率いていたのは国防大臣のダートンだ。計画自体を無期限停止させる為、乗り込んできたのだ。

「ダートン大臣、これはどういうことか！」

「貴様こそどういふつもりだ？ 極秘作戦を部外者に漏らすなど」

「彼女たちは協力者だ、説明の義務がある！ 貴方はただ反対だけでしよう！」

「反対するに決まっておるわ、青二才が！ 歴史を変えるなど、あつてはならぬ！ 我々人類

の存在はおろか、カノン様や他の神々も殺しかねんのだぞ！影響が多すぎる！」

確かにその通りだ。過去を一つ変えれば、回り回って今を根本から覆しかねない。悪が消えるだけならまだ良いのだが、国は愚か大陸や世界全ての事象を善悪問わず消し去りかねないのだ。歴史への冒涇だと、ダートン大臣は口を大にして唱えた。

「アルカディオス大佐を国家反逆罪で捕縛せよ！ユキノ・アグリア及びルーシィ・ハート
フィリアも帮助の罪として捕らえよ！ユリア・アマリリスもだ！」

「ダートン、貴様！」

「エクリプスは開かせん」

「ちよつと、離して！」

「あんたら、覚えてなさいよ！」

「テメエら、仲間を離しやがれ！」

「待て！ここで魔法は！」

仲間に手出しはさせない、そう怒りを爆発させてナツが魔法を発動させるが、その瞬間、ナツの魔力をエクリプスが吸い込み始めた。そこそこ離れた闘技場の魔道士の魔力を、微々たる量とはいえ集めているのだ。すぐ近くで発動すればあつという間に吸いきってしまう。ダートンはルーシィ達を連行し、ナツ達を城から追い出された。

「これは私にとつても本意ではない。出来ればこのような、手荒な真似は避けたかった。

君たちに1つ道を示しておく。魔道士好きの陛下に、功績を示せばまだ、仲間を無傷で取り返せるやもしれん」

そう言い残し、城の中へと戻っていった。

第61の唄 最終戦、開幕

城から追い出されたナツ達は、王国の計画の事、城であった仲間の拿捕の事、洗いざらい全てを皆に伝えた。怒りや悲しみがギルドを包む中、カノンは重苦しい表情をしていた。自分のせいで、もっと早く動いていればこうはならなかったはずだ、そんな自責の念が湧いてくる。

「ルーシィとユリア、ユキノが王国軍に囚われた。エクリップス計画に対する証言のためかしらね」

「そうか。現場を見た他の者への口封じも兼ねておるといふことか。我々が何か不利になる事を話せば、立場を危うくすることも容易いと」

「責任は私にあるわ。まさか、こんな……」

「そう思い詰めるな。じゃが、仲間をこのまま捕まっただまにされて折れるほど、ワシらはヤワじゃねえぞ」

静かに、されど誰よりも強い意志が込み上げてくる。暫し思考を働かせて、次の一手を老いた脳を働かせて捻り出す。大会で優勝すれば仲間は合法的に戻ってくる。その言葉を念頭に置きながら、他の手立ても合わせて、思い付く最善の手を導き出そうとす

る。

「……これが吉と出るか凶と出るか。メンバー変更を伝える。シリル、お主をナツの代理として大会最終日に出てもらいたい！」

「私が？でも……」

「此度の件、責を感じておるならば名譽挽回の好機としてくれ」

「……名譽挽回のチャンス、ね。分かったわ、私程度の力が少しでも役に立つなら」

「うむ。よし、その裏で救出の為に打って出る。ナツとミラ、ウエンデイ、エクシード3人はそちらで動いてもらう」

「了解」

優しき国王なら、確かに仲間を返してもらえるかもしれない。だが確証が欲しい。仲間を無傷で手元に戻すには、2つの方法を同時進行で進めねばならない。違法、合法両手を合わせ、何としても仲間を連れ戻す。これが今回の作戦である。

「待って、素早い救出には城中の構造を把握した人間が必要なはずよ。クレス、お願い」「はいー！」

「作戦完了後なんかしらの形で信号弾を上げて。もし何かあれば脱出を最優先にしてね」

城の中で万が一敵に遭遇しても良い様に脱出経路を考えられる巫女を派遣、現実性を

少しでも担保しようという策だ。

「最終戦の出場者の方は決まりましたね？その5名は私の方へ……私が必勝へと皆さんを導きましょう」

「任せたわ初代。一番良い作戦を頼む」

「ではまず最初の動き方からです」

＝
＝
＝

「遂にこの日がやってまいりました！大会最終日の競技パート兼バトルパートにして決戦の時！その戦いの名も『大魔闘演舞』！」

「いや、楽しみだね。ここで妖精の尻尾が首位を維持できるか、他のギルドが追い落とすか」

「6位のチームから紹介していきましょう！『四つ首の番犬』改め『四つ首の仔犬』の登場です！最下位で点差もあり苦境に立たされた今、最後にどこまで点数を伸ばしてくるでしょうか！」

下から順番にギルドが呼ばれ、上に行くほど歓声が大きくなっていく。そしてやはり言うべきか、二位のこのギルドが呼ばれた瞬間には先程より大きな歓声が響く。剣咬の虎だ。

「さあ第2位は『剣咬の虎』！このまま優勝を逃してしまうのか？！」

「うむ、少し^スばかり雰囲気が変わったね。昨日とは何かが違うか」

「みんなカッコいいカボー」

「どこか重い空気が流れていますね」

「何かあったのかね？」

実はセイバーでは、ギルドマスターの力による支配に対して、ステイング以下複数名による反乱があったばかりだ。ステイングを暫定のマスターに据えての登場だ。その最中にステイングの相棒、レクターがミネルバによって人質となり、優勝が引き渡しの条件だと告げられた。雰囲気の変貌はそこに起因している。

「最後にご紹介するのは、かつての栄光を取り戻すべく戦うこのギルド！初日のブーイングが嘘の様な大歓声で迎えられます、『妖精の尻尾』！なんとこちらはメンバーを変更してきました！昨日あれほど大活躍したナツがおらず、代わりにカノン様が参戦です
！」

「ナツ君はどうしたのだろうね？」

「(昨日のエクリプスから回復しておらなんだか。無理もない、あれだけの魔力を一気に吸い取られては、魔力欠乏症に陥っているやもしれんしな)」

「良いのかステイング？」

「むしろ良かったさ、いたら優勝が遠のく」

観客の歓声が最高潮を迎え、空気が振動するほど轟く中、昨日の件以降、カノン己の実力不足と先見の明の無さを懺悔していた。自分のせいで、皆を巻き込んでしまったと。

「私事の責任問題に、皆を巻き込むように申し訳が立たない。我儘なのは分かっているけど、少しでも皆の力を貸して欲しい」

「言われなくても力は貸すぜ。仲間の命がかかっているからな」

「我々は何があろうと一蓮托生だ。それにお前には楽園の塔での借りがある。それを少しでも返せるなら、むしろ喜んで戦おう」

「どんな時でも家族仲間と一緒に戦うって決めてんだよ。お前が今までそうしてきた様に、な」

「強い奴相手に暴れられるんだ、俺はそれで充分だ。違うか？」

「ふふ……あなた達と一緒にいられて、本当に幸せだわ。その力強い言葉のおかげで、悩んでたのが馬鹿みたいに思える」

例えどんな事であろうと、仲間を信じて行こう。皆が一人を支え、一人が皆を信じる事がこのギルドの強みだ。改めて皆の魂の輝き、それを感じて少しでも力になろう。カノンはそれを実感し、前を向く。仲間の声援が、この背中を押ししてくれる。大丈夫だ、皆と一緒にどんな艱難辛苦も共に乗り越えられる。

「頑張れよシリル！ 出れねえナツの分までやってやれ！」

「期待してるぞー！ みんなー！」

「考えましたね。ナツの代わりに女神カノンの投入を行うとは」

「これも仲間を確実に取り戻すための作戦です。合法的手段はいくばくか有りますが、彼女らが無事に解放してくれる確証が無い以上やむを得ませぬ。それに、シリルの力が今こそ必要です。シリルよ、磨き上げた古来の神々と同じ力、昔より変わらぬ仲間を思うその心、存分に示してくれよ」

今なら何でもできそうだ、この声と皆の姿がある限り。前を向いて、神の名に恥じめ戦をしよう。信頼を力に変えて、優勝しよう。その決意によって神の眼に、今まで以上の力が宿る。

「最後のこの競技のルールを説明していきます。これは5人一組で戦い、リーダーを1人決めてもらいます。そのリーダーを倒せば5点が、それ以外のメンバーを倒せば1点ずつ合計点に入り、最終得点で一位を決めます」

「つまりそのギルドを集中狙いして全員倒せば9点入るわけだね？」

「そういうことです。理論上全員を一つのギルドが倒せば45点まで最大入りますので、どのギルドもまだ逆転の目はあります。ただ、誰がリーダーなのかは他のギルドには倒すまではわかりませんので、そこら辺は自ギルドの戦略と他ギルドと当たる際の運

が絡んできます」

全ギルド総当たり戦での最終決戦だ。つまりここで全てが決まる。エルザ、グレイ、ガジル、ラクサスとカノンには円陣を組み、気合いを入れ直す。旅に出ているギルダーツに託された夢、今この戦いに出場出来ないギルドの皆の悲願、裏で奔走するナツ達の希望、それを全て背負って戦場に立つ。この五人に全てを預ける。

「ここで優勝できるかどうかが決まる。ギルドの悲願を果たすため、力を合わせて立ち向かうぞ」

「裏方の火竜たちにもいいニュースを聞かせてえしな。ま、あいつらがしくじらなきや良い話だが」

「それでもギルダーツとの約束があるな。この国一番のギルドになるって約束がよ」

「これまでバカにされてきたギルドの名誉と仲間の為か。最高に燃えてくる展開だぜ」

「仲間の皆や観客の前で私たちの復活を見せつけよう。大丈夫、このメンバーなら負けないわ。私は皆を信じる」

「そうだな。目指すは完全勝利、そして総合優勝だ！誰一人欠かずに、最高の結果を！」

「「「おおっ！」」」

「さあ、最終種目『大魔闘演武』開幕！」

遂に最終日の目玉、バトルと戦略の全面勝負が幕を開く！それぞれの思惑を胸に各ギ

ルドが動きを見せていく。

「遂に始まりました！単独で動く者や2人組、3人組など様々な形で動いていきます！」

「個の強さや自分と仲間との連携の取りやすさを考えての役割分担だね」
「そのようですね」

連携をする者と、単独の強さを活かした戦略を取る中、目立つ者達が観客の度肝を抜いてくる。妖精の尻尾だ。開幕が宣言されたのに一步も動こうとしない。

「おっと、妖精の尻尾、全く動いていません！しかも全員が目を閉じています！」
「何をしとるんじや！仲間の命がかかっておるのじやぞ！」

「その間にも点数はどんどん動く！ラミアがパピーを潰しにかかる！」

「早くしなければ優勝は、仲間は!!」

「だからこそ、冷静にならねば。この四日間の中に敵の動き方は全て私が把握済み、今の所支障はありません。私の考えた策に抜かりはないです。心強い仲間を信じるべきでしょう」

「……初代、何をおっしゃる？」

まるでこの状況が掌で読み通りに動いている事が、嬉しいのかと言わんばかりに笑顔を見せ、一転して鋭い眼差しを戦場に送る。

「この戦、私の名をもって確実なる勝利をもたらす。これこそが我が戦、それは描く未来の為にあり！今がその時です、『妖精の星』作戦発動！」

「「「応っ！」」」

「長い沈黙を破って妖精の尻尾が遂に動いたー!!」

「妖精の星作戦、何のことだろう？」

「勝つための作戦なのは分かるけどねえ」

「ここでルーファスがほぼ確実に動いて来ます。魔法が見えたら2秒以内に回避、雷属性なのでラクサスだけ受け止めてください。動揺を誘います」

その予言通り、初日に見せた『聖ナル夜二』という複数を同時に倒す魔法を放ってきた。作戦通りに事が進む事に、妖精の尻尾の皆はポカンとしているばかりだ。まるで未来が見通せているかのような、その慧眼に驚かされる。

「この時点でルーファスは60%以上の確率で接触に動き、30%程の確率で待機します。しかしどちらを取ってもさして影響はありません」

「さつきから何言ってるんだ初代は？」

「さあな？俺にはさっぱりだ」

「それぞれ次の地点へ。エルザはまず北西のジエニーを撃破、移動」

「ふふ、初代のおっしやった通りだ。末恐ろしいお方だよ」

「げっ、エルザ!? いやあっ!」

「まずは一人!」

作戦は次々に的中する。個々人の動き方を的確に判断し、点数を思いのままにかすめて行く。

「ガジルはレンとイヴをブレスで撃破」

「悪いな兄ちゃんども!」

「うわあっ!」

「お前だけでも逃げろ、ヒビキ!」

「逃げたヒビキを女神が先回りして伏せ、動揺をつけて倒してください」

「僕の古文書アーカイブと計算能力を超える者がいると言うのかい!？」

「その通りよ。見事に策にハマったわね」

「ここ、ここまで予想通りなのか!」

「ゲームオーバーよ。せい!」

「それぞれ順次移動してください」

今まで見せてこなかった初代の新たな一面に、皆訳がわからないと言わんばかりだが、一躍首位に追いついた。もしかしたら、という想いが形になりそうだ。

「何と妖精の尻尾、ここに来てぐんぐんと点数を伸ばして首位と再び並んだ!! しかも無

駄のない動きだー！」

「すげえ、まだ勝ち目はあるぞ！」

「なんか良く分かんねえけど、作戦通りなのか!？」

「順調すぎるぜー！」

「お、思い出したぞ……初代の異名を！数々の戦場で振るつた作戦により、多くの勝利をもたらした。その名も『妖精軍師』メイビス！」

「まさかの一面を見たぜ」

「ただの癒し系じゃなかったのか……」

「これでも一応、うちを作った人だしね。そりや何かしら得意なのがあるよ」

「皆さんの次のポイントで強敵との接触や、移動に伴う動きがありそうです」

|| || ||

「始まったみたいですよ。今のうちに急ぎましょう」

「絶対あの2人を取り戻すぞ！」

「もうすぐ城の内部への入り口ね」

「何か作戦は？」

城内の牢屋を目指す裏方のナツ達は、なるべく気取られない様に潜入を試みていた。ここで同行していたクレスから提案がなされる。ミラジェーンに王国兵に化けてもら

い、ナツとウエンディを捕らえて牢屋に連れ込むフリをするというもの。これで建物内への侵入を試みる。そこから人気のない道を選びつつ牢屋に近づく作戦だ。

「皆さんが観客の目を誤魔化してくれている時間を使います。無駄な時間は、お互いにとって命取りだと思ってください」

「大胆な奴だよ、だからこそ気に入った。その作戦、乗った！」

「では、妖精の星作戦の裏で、『二正面』作戦開始です！」

|| || ||

時は少しばかり遡り、最終日手前の夕方に戻る。作戦を思いついた初代の元、動き方の確認に入る。

「俺たちはどう動けば良いんだ？」

「まず最初は状況分析のため、不動にて始めます」

「おいおい、負けるんじゃないやねえのかそれ？」

「心配はご無用です。動きの確認なので、合図を送り次第すぐに直後の行動をとれば、取り返せます」

これによって初動を掴む。勢いを見せる事で警戒感を持たせ、動きを鈍らせたり各個撃破を狙いやすい状態を生み出すのだ。

「この後は強敵とぶつかる事が予想されます。ガジルさんはローグと、エルザさんはミ

ネルバと、ラクサスさんはオルガと当たるでしょう。問題は剣咬の虎攻略の鍵、ルーファスと最強と名高い聖十のジユラ」

「ルーファスは俺にやらせてくれ」

ルーファス撃破を名乗り出たのは初日に苦い思いをしたグレイだ。それに対してメイビスは複雑な表情をする。

「一度敗れた相手ですよ？彼の使う魔法との相性はあまり……」

「だからこそだ。借りを返す以上に、名折れのままじゃいらんねえだけだ」

「それなら、ジユラを倒すのは私とラクサスで行くわ。ユリアの借りは必ず返す」

「初日にユリアさんが苦戦した相手ですが」

「二人で当たれば問題ねえだろ？シリルの実力は大体把握してる。行けるだろうぜ」

「では、それで行きましょう。時に想いは策を超えていく。貴方達の想いの力、示してください」

波乱に満ちた最終日、それを乗り越えるのは果たして想いか、それとも……。

|| || ||

「やっぱりここか。初代の言う通りだぜ」

「おや？君はどこかで。僕の記憶を蘇らせてくれるかな？」

「無理に思い出す必要はねえよ。その前に更に深く忘れらんねえ記憶に刻み込んでやる

からよ……」

予想通りにグレイとルーファスが衝突する。それと時を同じくしてラクサスとオルガが相見える。

「よう、お前の力、試していいかい？」

「出たな雷の滅神野郎。丁度よかつたぜ、俺もお前を倒してみたかつたんだよ。俺をガツカリさせんなよ？」

「それはこつちのセリフだ」

そしてカノン^{ボレアス}は神殺しのシエリアと順当に組み合わせが作られていく。シエリアの強襲を受け流し、戦いの火蓋が切つて落とされる。

「天神の北風！」

「甘いわ」

「ここで戦う以上は倒すよ！」

「いい気合いね」

先に動いたのはカノンだ。先を制し、後隙を与えぬ攻撃を加え、反撃に転ずる暇を作らない。魔力が並大抵ではないからこそできる戦術だ。レーザー砲と気の弾幕で相手の攻撃射程圏内に動かずして入らない方法を取る。

「先手必勝。『ディオ・アモーレ』プラス、気功『龍虎相打掌』！」

「ウエンディやユリアの攻めと威力の格が違うけど……」ここね！」

「ただ待機してた訳じゃないわ。予想通り」

「(罠の魔法陣!?)」

たとえ近づかれても、敵の襲撃ポイントが分かっているなら、事前に罠や仕掛けの施しようがある。今発動したものは、センサーに反応して下から攻撃する魔法陣だ。ダメージよりも思考の混乱や動揺が主な狙いで、取りうる選択肢や動きの幅を制限させようとする。

「……」

「まだまだ!」

「甘いわね、『鉄山靠・桜』!」

「ぐっ!」

「戦いはまだまだこれからよ」

直線上に動くシエリアを迎え撃ち、腕を掴んで背中を使ったクロスカウンターを決め、そのまま肘打ちからの掌底で壁際まで押し戻す。ブレスを吐けば、それに呼応してブレスを出し、体術戦に持ち込んでもこれを悉く返し、少しずつ焦りを募らせる。回復を図るタイミングを見失わせる事で、短期決戦に持ち込もうとする。ジユラ戦がまだ控えていることを考えると当然の判断だ。

「まだ、まだやれる！ 『天叢雲』！」

「ぐっ!? なかなかやるじゃない」

「私だって、一人の魔道士だから！」

だがシエリアとて譲れぬものがあるのは同じだ。例え勝てずとも、味方の勝利に繋がる様に、必死に闘うのみだ。その執念に似た意思は、予想を上回り、カノンにダメージを与えている。

「まだいけるかも！ 『天神の舞』！」

「(これ以上は面倒な事になるわ。この子の意思は侮れない) 『豊樹』！」

「きやつー！」

「これでどうだー！」

これ以上の長期化は避けねばならない。ウエンデイとの一戦で見せたガッツ、そして勢いを見ているからこそ、次の一撃でダウンさせるべく、行動に移った。シエリアに衝撃を与え、動きを止めにかかる。

「何これ、痺れて……」

「気功の流れを突いた。立ち直るのに時間がかかるはずよ」

「まだ、希望は……私だって……」

「強かったわ、貴女。だけど私も負けられない！」

私は今、一人で戦っているのでは無い。この命は数多の仲間や家族と繋がっているからこそ、その繋がりを失わぬ様に力を振り絞る。その純然たる想いが拳にのつて放たれる。

「豊命式『桜花夢双』！」

「きやああつ！」

エドラスのシリルが放った紅華を模倣した、血と気が織りなす砲撃が炸裂し、シエリアを破った。撃破による一点が入り、これで暫定的に単独首位に浮上した。

「悪いわね、私には退けない理由がある」

「うう……強すぎだよ。なんで、そんなに強くなれるの？」

「仲間と共に紡ぐ唄を、奏でる音色を、未来に繋ぎたい。だから私は強くなれる」

「そっか、だから……頑張ってるね」

「ええ」

|| || ||

「大会、始まったのかな？」

「だと思おうわ」

「……すみません、私のせいでこの様な」

「だからもう良いって。それよりどうするか考えなきゃね」

ルーシー達は鍵を取り上げられ、ユリアも魔法を封じる手錠を掛けられて脱獄できない様にされている。それでもルーシーは諦められず、どうすれば良いか頭を悩ませている。そんな時に、ユキノは消え入る様な声で、ポツリと話し始める。

「あの門、使うべきです」

「どうして?」

「……私には、大好きな姉がいたんです。ドシが多かった私を、いつも庇ってくれた優しい姉が」

彼女の姉の名前はソラノ。ユキノと同じく綺麗な白い髪を持ち、持ち前の明るさと優しきで星霊魔道士の素質があつたと言う。今はどこにいるか、検討もつかない。過去に何処かへ連れ去られてそれ以来、全く会えていないからだ。

「その姉を、子供狩りと称して無理やり連れて行った、ゼレフを信奉する組織がいたんです。もし過去を変えられるなら、姉は……」

「連れて行かれなかつたかも。でも、あの大臣も言つてたけど、過去を変えると影響が強すぎる。私は……」

彼女の過去には、同情できる。自分も親との不仲があつた、変えたい過去もある。でも、それでも前を向いていられるのは、ひとえに変えたくない物があるからなのかもしれない。

「私はここを出るよ。あの門を使うにしろ、使わないにしろ、ここに居ても仕方ない」
「でも、抜け出すにしても私とユキノは鍵取られてるし、ユリアは手錠かけられてるじゃない？」

「マスター達が手を打つてないとは思えない。誰かを送り込んでくれてるはず。それに私の力は魔法のみに非ざれば……つえい！」

彼女の生まれつき持ち合わせる神通力があれば、鍵がなくとも手錠ごと破壊してしまえば良い。なんて事ないと言わんばかりに手をブラブラさせ、ドアの柵に手をかける。

「神力で壊せばこんなものだよ。さ、後はこの柵だけだね」

「貴女もなかなか強引よね」

「妖精の尻尾の生き方はこうでなきゃ。生きてれば、成せることなんて幾らでも……よいしょー！」

この数年、苦しい事もあった。逃げ出したい事も無いとは言い切れない。常に迷い続けたこの7年だったが、決して希望を捨てなかった。だからこそ、仲間と再び冒険が出来た。だから、これから前を向く。ユリアの顔は、まだ希望を捨てていない。

「さ、脱出しよー！」

「そうだよ。うん、私も続くよ」

「……（生きてれば、いつかきつと。私も、まだ）」

第62の唄 戦の熱気と冷徹な影

「シリル、タイミングばっちりだぜ」

「久しいのう、シリル殿の力を目の当たりに出来るのは」

「間に合ったようね。にしても、7年前以上の凄い圧ね」

「参れ、全力でもってお相手申す」

「負けても恨まないでよ？ユリアの分の借り、返させてもらうわ」

「こちらとて、先程敗れたシエリアの借りがあるでな。だが、血の滾る戦が出来たら、それは我が本望！」

「つたく、心の底から楽しんでんな、ジュラさんよ」

シエリア撃破の前後でも、状況は刻一刻と変化していく。グレイのルーファス撃破、青い天馬の敗退、上位三チームが固まってひしめき合っている事、ラクサス対オルガ戦に乱入したジュラがオルガを一撃で粉砕した事、そしてエルザとカグラとミネルバの三竦みだ。目の前のジュラからすれば、首位の妖精の二人が目の前にいる。追い抜くには絶対のチャンスだ。

「ラクサス、まだいける？」

「とりあえずな。強敵との連戦で、しんどくなりそうだが」

「ならこの戦い、前衛と後衛を適宜入れ替えながらやろうかしら」

「妥当だな」

「これまでで一番心踊る戦いになりそうだ。のう、豊命神とマスターの……」

「おっと。この勝負で、そこから先は関係無しにやろうぜ？」

メインをラクサス、後衛をカノンが務める。聖十や神の称号、マスターの孫という肩書きの事など、この際どうでも良い。単純だ、お互いにあるのは『勝てばいい』という事だけだからだ。既に臨戦態勢、それでいて空気は会場の熱気が嘘のように澄み切っている。

「あのユリアを圧倒した相手、力を出し切っても五分五分くらいね」

「俺から動く。『雷竜の咆哮』！」

「ぬうん！」

ジュラ対ラクサスとカノンの名高き魔道士達の激戦が始まる。攻める妖精達に、岩をうねらせて凌ぐジュラ。頂点の争い、現実離れた強さを持つ者同士の拳が交わる。

「『岩鉄壁』！」

「ラクサス、私にこれを任せて先へ！『血縛鎖牢』！」

「あいよ。『雷竜方天戟』！」

「固定して足場にか。戦慣れしている、『岩鋼砦』！」

攻撃に打ち出して来た岩を鎖で繋ぎとめ、それを足場の上から方天戟を投げ込む連携プレーを見せる。それに対して岩鉄壁の数倍はある厚い壁で受け止め、逸らしていく。

「堅いな、あの岩の守り」

「ならこれでどう！んん、どりゃあ！」

「なっ!?!」

先程止めた物やあちこちにある岩をブロック状に切り出し、鎖で振り回して上から落としていく。使えるものは何でも使おう、そうでもしなければこの男には勝てない。視線が自然と動く物を追って上に向く、この人間の癖のような行動を利用し、瞬時に距離を詰める。

「しまった!?!」

「ラクサス、続いて！『血気双掌打』！」

「肩借りるぜ！」

「ええ。飛んで！」

「相方を踏み台にして飛ぶか！流石よな！」

「碎けろ、『雷竜の顎』！」

「ぐふっ!?!ふふふ、これくらい熱くなければなあ！」

|| || ||

大会が熱気を帯びる頃、ナツ達は無事に合流できた。牢屋から少し離れた城の一室で落ち合った両者は互いの無事と状況を確認する。

「ユリア!?!お前、どうやって!」

「魔法と神力で無理矢理よ。それよりルーシー姉さん達の鍵を取り戻さなきゃ」

「何処にあるのかしら?」

「作戦を考えると、あちらの手元からそう簡単に手放さないと思いますけど……」

「むしろ用済みで、何処かに捨ててるかも」

「ここで議論をしても仕方ない。動いて取り戻す他ない以上、手っ取り早く済ませるべきだ。」

「とりあえず、動くか」

「そうね、ルーシー達の救出がメインの目的だもの」

「そういえばナツ、大会はどうしたの?」

「シリルが代わりに出てる。お前らの救出に回ってくれてよ」

「私が派遣されたのもそれが理由です」

「優しいわね、シリル」

さてまず何処へ、と言った所で空中に映像が映し出され、一人の女性がこちらを見下

ろしている。その手にはスイッチがある。

『何かお探しのようだけれど、貴方達の運命はここに尽きる』

「なんだ？何処から……うおっ!？」

「落とし穴!？」

廊下に出た瞬間、床が割れて下に真つ逆さまに落ちていく。どうやらこちらの動きを把握していたらしく、完全に虚を突かれてしまう形になった。落ちた先を見渡してみれば、洞窟の中の様だ。

「痛たあ……何よ、いきなりい!」

『そのまま地下の迷宮で朽ちていくが良い』

「さっきの声だ!」

「あれって……」

「姫です、この国の」

『散れ、賊ども』

この国の姫、ヒスイは国王が大会の見学に行っているため、城の防衛のために残っていたのだ。映像は一方的に途切れ、弁明のしようが無くなった。だが、どこか疲れて顔色が悪いのを見逃さなかった。

「様子が何かおかしいですね」

「ええ、こんなお方ではないと聞いておりますが」

「恐らく何かを憂いているのかもしれないですね」

「そんな事より地下に落とされちまった事だ。抜け道を探さねえとよ」

「恐らくここはカノン様のおっしゃっていた、罪人最後の行き場『奈落宮』。王宮の近くの何処かにあると聞いてはいたのですが……」

ここに落とされた罪人達は、脱出に失敗し、命が尽きた者ばかりだ。周りの人骨などがそれを証明している。だが、どこかに光はあると信じて進む。

「脱出にしても鍵にしても、まずは地上に上がらねえとな」

「しかし、出口は何処なのかしら？ ねえクレス、何か分かる？」

「ユリアさん、申し訳ありません、残念ながらあまり。城内は王の間から牢屋まで、粗方把握しているのですが……流石にここは名前くらいしか知りません。でも、多分城内に入り口はあるはずですよ」

「城の方角に向かえばいいんだな？」

「オイラ達で辺りを見てくるよ」

「頼むぞ、ハッピー」

＝
＝
＝

「やっぱり強いわね」

「あんだだけ打ち込んでまだ倒れねえのか。化け物だな、おい」

「血が騒ぐほどの猛者とやりあえるのだ、倒れるなぞ勿体ない！」

ジュラと激闘を繰り広げるこの間にも、グレイがりオンを撃破したが、ミネルバの非道な戦略によりカグラとミリアーナのダウンによつて点差をつけられている。二人の与り知らぬ所で救出組も死刑執行人『餓狼騎士団』と一戦交えており、勝負は一刻を争う。

「人間辞めてるつて言われても、納得できるくらいの強さとしぶとさね」

「聖十とは得てしてそういう者達ばかり」

「でも、完全勝利の為ならやるしかねえ。シリル、耳を貸せ」

「……えっ？それって」

「そういう事だ」

これが唯一取れる作戦だと耳打ちする。相手が聖十大魔道、人類最強説が唱えられる強者となれば、これしか余地がない。しばし思案してみたが、やるしかなくなつた。

「たしかにこれしかないわね。頼んだわよ」

「そつちこそ、しくじるなよ？」

「それじゃあ……はあっ！」

「っ！」

まず動いたのはカノンだ。地面に魔法を当て、視界を奪う。怯んだジュラを的確に補足し、腰と脚を掴み、バランスを取りづらくした。

「捉えたわ。これで身動き取れないでしょ」

「くっ、体制が！」

「ラクサス、やつちやつて！」

「これで終いだ！滅竜奥義、『鳴御雷』！」
なるみかづち

「ぐおっ！」

受け身が取れない為、まともに食らわせられた。滅竜奥義の雷の咆哮、空に響いて地を穿つ。流石のジュラもこれには屈し、大金星を手に入れた。

「見事。仲間の為に身体を張り、互いの力を信じて進むか。参った」

「疲れた……二人とも傷、大丈夫？」

「まだ大丈夫だ。立つには少し時間が要るがな」

「心配ご無用」

「これで逆転、後は……」

時を同じくして第二魔法源セカンドオリジンを開放したエルザが、伝説の鎧天なかがみ一神の鎧でもって怒りの一撃をミネルバに喰らわせ、一気に十得点を計上した。これで残るはセイバーのステイキングのみ、二位と八点差となる。しかしステイキングが残る全員を倒せば逆転首位と、最

高の舞台が出来上がる。そんな中、ステイングが自分はこのだと言わんばかりにギルドのマークを信号弾として打ち上げる。

「何あれ、信号弾？」

「いや、剣咬のマークだ。呼んでやがるのか？」

「向かうしかないわね。肩貸すわよ？」

ボロボロになり、しかしまだ倒れるわけにはいかないと、脚を引きずり吐息をついて這つてでも進んでいく。ステイングの前に現れたのは、7年前に憧れた五人の魔道士達。

「こりやあ壯観だな。俺の憧れた魔道士ばかりだ」

「御託はいいんだよ。これで最後だ、ケリつけてやる」

「サシでも良いぜ？誰からやる？」

「そんな怪我じゃな。纏めて相手するよ」

「テメエ俺らをなめてんのか？あ？」

「とんでもない、敬意を払ってるからこそだ。纏めてあんたらを倒して、レクターに俺の強さを示すんだよ！」

仲間の為に、相棒の為に最強たる姿を示したい。最後まで前線に出なかつたのは、この五人を倒して自分の力を内外に示したいからだ。妖精の尻尾に憧れているからこそ、

彼らを越えれば最強と相棒に言えるのだ。

「どうやら本気のようなね、貴方」

「ならばかかってくるの良い。覚悟は受け取った、相手になろう」

「そうでなきやなあ。覚醒した俺の力、見せてやる」

ドラゴンフォースを出す、自分の最も大きな魔法で纏めて倒す為に。勝利を確信し、妖精達を見やった時に、啞然とした。傷だらけになりながらも、凜として立つその姿が、威圧感と強者の風格を漂わせていたからだ。

「何でこうも……全員ボロボロじゃねえか！押せば倒れちまいそうなのに、ここまでやってきたんだろ!?何でこんなに強い瞳を……でも、俺も退けねえ！レクターの為に、ここで勝たねえと！進め、勝てるんだ！少しでも、前に……勝つ為に！」

汗が吹き出る、緊張感から体が動かない。でもレクターの為に、何としても勝つ。それだけを支えに踏み出そうとした……だが、その膝は屈し、力なく崩れた。

「……今の俺じゃ勝てねえ。降参だ」

『これで決着！優勝は……妖精の尻尾！』

「ふう、終わったわね」

「ああ、無事にな」

これで妖精の尻尾が、完全優勝を成し遂げた。五人は兎角安堵し、仲間達は歓喜に沸

いて涙を零した。観衆は大いに盛り上がり、最終日は幕を閉じた。しかし、まだ城に行った仲間達から連絡は来ない。それが気掛かりだ。

「ナツ達は大丈夫かしら？ 信号弾は出てないわよね」

「連絡も来てねえそうさ。何があつたんだよ？」

「なあ、ナツさん、何で出てねえんだ？」

「ちよつと用事よ（皆、無事かしら？）」

|| || ||

「くそ、抜け道で襲撃か！」

「こんなことが……」

「やばいわね。もう少しつて時に！」

餓狼騎士団を倒した一行は、途中で未来から来たルーシイとユリアに出会い、この国の未来を告げられた。曰く一万の竜の襲撃で崩国の危機にある。仲間を大勢失い、精神と戦いの要であつたカノンも亡くなり、魔道士勢は苦戦を強いられている。その未来を救う為に来たと。彼女らの涙の願いもあり、地下通路からの脱出を図っていたが、その最中に王国兵との戦いに巻き込まれているのだ。

「魔力が抜けるまで持たないわ。こうなったら少しでも道連れにして……」

「待て、それだけは止めろ」

「でもこのままじゃ……」

王国兵と復活した餓狼騎士団達の執拗な物量戦に絶体絶命を強いられていたが、そんな時、謎の影が兵達を一人残らず闇に飲み込んでいく。

「なにあれ!?!」

「兵達を影がつ!」

「飲み込んでる!?!」

「誰がいるぞ、気をつけろ!」

「この影が伸びるのは絶望の深淵か、希望の光か……」

|| || ||

長らく思考の海に潜っていたジェラールは、ふとある可能性を見落としていたことに気づく。未来ルーシイやカノンから聞いた情報が自然と繋がっていく。

「っ!?!まさか!」

「ジェラール?」

「俺はなんて初歩的で単純な勘違いを!ルーシイとユリアが来たのは四日、正確には三日の24時。毎年感知していたゼレフに近い魔力がエクリップス、それを通ったルーシイ達にも残留していた。彼女達の話信じるなら、三日の夕方に見たのは違う人物。だもしたら奴の目的は何なんだ!?!」

そしてある結論に至ろうとしていた。その人物は、何が目的なのか。城の下に現れたその人物は……

「久しいな、ナツ・ドラグニル。俺は未来から来た『ローグ』だ」

第63の唄 過去と今と未来を、守る

「お前ローグ、なのか？ 雰囲気変わったな、おい」

「しかも未来からって……」

「私たち以外にも居たのね」

「何しに来たのよ」

「俺はエクリップスの扉、世界を変えうる扉を開きに来た。一万の竜を撃滅する為にな」

「エクリップスで？」

「ああそうだ。あれは時間移動以外にも、エクリップス・キャノンという砲台としての機能もある。それを使えば一万全てとはいかずとも、かなりの数の竜を殺せるのでな。あのような未来を迎らぬために来た」

「なんだ、早え話仲間ってことか？ 目的が一緒なんだしよ」

曰く彼の元いた7年後の世界は、未来ルーシイと未来ユリアの世界と似た、竜により魔道士のほぼ殺された荒廃しきった世界である。鍵となる神の消失やそもそも使用する為の魔力の不足で、エクリップスも碌に稼働できる状況ではなく、人類は一割にまで減って為す術なく竜に支配されている。そんな状況を打破すべく、7年前に当たるこの

世界で竜を抹殺しに来たのだ。過去を変えれば、あるいは自分の世界は救われるかもしれない。一縷の望みをかけて、過去の世界へ……来た。

「全ては未来を救う為だ。だから俺はここにいます」

「そのエクリプスつっつーのでやつつけんだろ？ドカーンとしてバーン！って感じで。簡単じゃねえか」

「本来なら確かにそのような単純な話で済むのだろうな。しかし扉の開放という重要な過去の分岐点を妨害した人間が二人いる。その影響は尾を引いて竜は一頭たりとも死なず、世界は破滅へと向かう。世界を変える計画を問題なく円滑に進める為、その頓挫の原因となった火種を潰す。それがもう一つの来訪理由だ」

「何も殺す必要はないでしょうに。説得は無理なの？それか誰かに止めてもらおうとか」

「無理だな。大きな分岐点において、言葉や些細な行動なぞ無益。大局は動かさず、結果として似た未来を辿る事だろう。その原因を完全に叩けば、ここで完全に行動を抑えることが出来れば……」

「誰なの？その、邪魔をしたのって？」

「それは……貴様らだ！ルーシイ・ハートファイリア、それとユリア・アマリス！」

未来ログの大いなる目的の為の手段、それがルーシイとユリアの排除、つまりは殺害。殺意のこもった凶刃が2人を貫こうとした刹那、未来の2人が身を挺し、代わりに

影の刃を受け止めた。飛び散る血飛沫に皆驚愕してしまふ。

「危なかった……」

「良かった、当たらなくて……」

「ルーシイとユリアがなぜ2人も!？」

「ちよつと、何を!？」

「貴方達!?! なんで!？」

「扉は、閉めてなんか……いない、わ」

「分かっている!?! でもなんで!?!」

命辛々逃れてきた過去の世界で、成すべき事があつたのではないか。折角の命を、何故投げ打つたのか。そんな苦痛の叫びに、笑みを浮かべながら答えていく。全ては過去を変える為だと。

「過去の、私たちが消えたら……どの道、未来の私達も……消える」

「仲間の命は、何があつても」

「貴方達は、未来を変えて。もつと……たくさん冒険する為に、も」

「……扉を閉めた自覚がなかったか」

「私達はそんな、皆の希望を砕くような真似はしない!」

「今はな。だが、どちらにせよ、これは決まった運命だ! お前の言葉に真実は無いのだから」

らな！」

「何が真実は俺らが決めることだ。俺の仲間を平然と殺すようなお前の言葉は、絶対信じねえ！」

未来から託された希望の火、それを受け継ぎ何がなんでも未来を守る。運命や絶望は己の手で変えてみせる。そんな執念にも似た力を持って、炎の拳でローグを殴り飛ばした。

「ルーシイ、ユリア！ここを離れてシリルの所に逃げ！あいつならどうにかする筈だ！」

「で、でも！」

「……姉さん、気持ちは分かる。でも、ナツ兄さんの言う通りよ。今は生きなきゃ！」

＝＝＝＝

「カノン様、姫がお呼びです！」

「優勝の余韻にぐらい浸らせて欲しいわね。でも、それどころじゃないのね？」

「申し訳ありませんが、姫よりお達しがあり門の解錠を行うとの事」

「はあ……本当に目的に一途というか、純粹すぎるというか。ユリア達のが気になるけど、向かおう」

日も暮れて月の見え始めた頃、カノンは偵察班の帰還の遅さが気になっていた。容易な事ではないことは予想していたが、大会が終わって何時間経つても一報すらない事に

違和感を覚えていた。一抹の不安を抱えながら広場に向かうと、そこにはエクリップスの扉が鎮座し、姫や大臣、捕まっていたはずの大佐がいた。

「優勝、おめでとうございます。カノン様」

「ありがと、ちよつとくらい空気読んで欲しかったけど……本当にこの扉を使うのね？」

「はい。私に未来を告げた方の予想通りでした。全てを信じようかと」

「確かに未来から来たなら、この結果を予想できてもおかしくないわね。事実も、語っているのでしょうか」

「事実である可能性が濃厚である以上私は、民を守るために私の剣を抜くのです。見過ごす訳にはいかないのです」

「然り、理解はしたわ……だけどまだ、納得が行かないわね。事実を語っていても、全てを語ってはいないんじゃないかしら？ 竜がどこから来るか、とかね。何かきな臭いものを感じるのよ」

情報があまりにも少ない、断定的に語るのが難しい状況だ。知り得る全てを話していないかもしれない、他の術はないのか、未知の領域だ。

「相手の言葉は必ずしも全て真実とは限らない。その人の事をできれば信じたいけど、一万のドラゴンの襲来なんて確証が少なすぎる気がするわ。大会の結果に国の命運を預けるのは危険よ。複数の判断材料が欲しい」

「ですが、未曾有の危機が迫っているのなら未然に防ぐべきです。仰りたいことも理解できますが、素早く進めて準備は万全にすべきでは？ 備えた結果が杞憂で済めば、それに越したことはありません」

「貴女の選択で世界は変わる……国の命運、世界の可能性、背負える？」

「これで何かあれば、それは全て私の責任になるのは重々承知の上です。それでも身命を賭して参る所存」

「……分かったわ。そこまでの覚悟があるなら、私も出来ることはする」

彼女にも彼女なりの矜持がある。確かに可能性がゼロでない限り、捨て置ける事案ではない。ならば少しでも被害を抑える為の準備をするしかない。

「ルーシイ、ユリア。そこにいるんでしょ？ 出て来ても大丈夫よ。クレス、貴女も」

「シリル、貴女がここにいてるってことは」

「大会はさつき終わって私たちが優勝した。皆のお陰でなんとかね」

「すごい！ さすがは姉さん達だよ」

「良かったです！」

「随分と時間がかかってたから心配したわよ」

「妖精の尻尾の方々ですね？ 此度のことは私の独断によりご迷惑をおかけし、申し訳ありませんでした。正式な謝罪は後日に」

ようやくと合流できたが、ナツにミラジェーン、ユキノの姿が無い。目的は達したが、何かトラブルが発生したのだろう。全員の顔が少しばかり暗く、疲労の色が見て取れる。

「カノン様、ルーシイさんおよびユリアさん奪還はご覧の通り成功しました……同時に残念な報告を申し上げねばなりません」

「そういえばナツとミラの姿がないわね。その報告に関係することなの？」

「はい。ミラジェーンさんは途中逸れたユキノさんを追って別れました。それと……」

クレス曰く姫に策を授けたであろう、もう一人の未来人ローグが現れ、彼によつて未来のルーシイとユリアが犠牲になった事。そのローグを足止めして狙われた今のルーシイ達の救出を優先するべく、ナツが単身立ち向かつている事。未来の2人に死際に未来を託された事。万が一の際にはカノンを頼る事。色々あった。

「そ、そんな事が……」

「申し訳ありません。私がついていながら、未来のお二人を守れませんでした。それに戦闘に巻き込む羽目になり……お詫び申し上げます」

「貴女は貴女の務めを果たした、頑張ってくれたわ」

「ありがたきお言葉」

「……ルーシイ、ユリア。その、大変だったわね」

「2人は言つてたよ、未来を守つて。私はその約束を守りたいの」

「これは私にも託された希望。私も護らなくてはな、新たな可能性を」

後悔、苦惱、悲しみなどが胸中を渦巻くが、今は前を見なければならぬ。竜の出現はルーシイ達の話からもほぼ間違いない。今日これから現れるだろう事は様々な未来線で起こりうると思えられる。ならばその特異点を変えねばならない。

「門の鍵、開いてるんだ？何で？」

「彼女達も今回の事はご存知なのです。竜が現れてからでは迎撃に間に合いません。いつ来てもいいように、今のうちに準備を進めているのです」

「万が一に備えてね。ルーシイ、ユリア、ローグの3人の話を統合すれば、竜は間違いない。正直人をいとも容易く殺めた人間の言葉は信じたくないけど……間違いない。何かしらの方法で襲来する。その迎撃の為らしいわ」

「一万の竜を、本当にこれで倒せるのですね？」

「確証はありません。全てを葬るのは難しいかと。撃ち漏らした時に備え、陛下も策を立ててくださっています」

その頃城下町では市民の避難が行われており、同時に国王自らが中央広場にて今回の事を演武参加ギルドに説明しているとところだった。皆は驚きでもって受け止め、話を聞き入っていた。

「皆さん大会の後で疲れと傷をゆっくり癒して大会の余韻に浸る時間も無く、急に呼びたてて心苦しいのだが……たつた今、姫より一万の竜の襲来の可能性を伝えられました」

「一万の竜の襲来ですか!？」

「左様。決戦兵器エクリプスなる物を用いるとのことですが、数十頭、あるいは数百頭を撃ち漏らす事も十分に考えられるのです」

アクノロギアと相対した天狼組からすれば、竜の強さ、恐ろしさが如何なるものかは予想がついているが、国家の存亡がかかっている。弱音など吐くつもりもなく、むしろ燃え上がってすらいる。

「私は、この国が好きだ。ここに暮らす民や魔道士の方々が大好きだ。私の愛するこの国を、そこで暮らす人々を救う為にお力添えしてください。どうかこの通り」

「当然だ。ここは俺たちの国だからな」

「魔物なんかには屈しねえ!」

「そうだそうだ!俺たちの自由、俺たちの手で守る!」

「魔法と共にあるこの国を、絶対に壊させはしねえ!」

魔道士は常に冒険とスリル、そして何よりも仲間を大切にしてきた。そんなこの国の魔道士達は己の力を大切なものを守る為、立ち上がり団結する。

「おお、ありがとう……ありがとう、皆の衆」

「私達の仲間が王国兵に捕らわれているのだが」

「先程姫や女神様と合流したとの事！」

「ならもうひと暴れだ！まだまだ行ける！」

「グレイ、足を引つ張るなよ？」

「お前こそな、リオン」

「戦じゃの」

「ドラゴンか。俺たちの出番だな」

「双竜の真の力、解放する時だ」

「そういえばお嬢は？」

「さあ？どっか行つちまったよ。マスターもな」

各々の覚悟と共に全てのギルドが一致団結していく。その中でも虎は、新しい牙を研いでいく。ミネルバとマスターが行方を晦まして居ないが、それ故か恐怖の時代は終わり、一歩ずつ変わり始めようとしている。

「集いし全てのギルドが一つになって、敵と戦う。昨日の敵は今日の友か」

「なんと素敵な香り。^{パルファム} 仲間の素晴らしき香り^{パルファム}は全て覚えたよ」

「ドラゴン対天馬、絵になるね」

「カグラちゃん、休んでなきや！シリルちゃんに治してもらったとはいえ、無理しちやダメだよ！」

「いいや、皆が戦っているのだ。私一人だけ休むわけには行かない」

「よっしゃ、俺たちが力を貸すぜ！ワイルド」

「「「ふおー！」「」」」

「うちらはセクシーフォーだよ！」

「ありがとう、ありがとう……カボ」

「「「えっ？」「」」

＝＝＝

「ユリア、クレス。ここに立つ我らが民を、無垢なる命を救う最後の砦。辛いだらうけど、背は向けられぬ」

「うん」

「お任せを」

「いよいよ扉が開く。これが世界を変える為の文字通りの最終兵器となる。ルーシイは未来を変えてほしいという願いに思いを馳せ、固唾を飲んで見守る。

「……」

「ルーシイ、体調悪いの？」

「え？あ、いや大丈夫。そうじゃないの」

「そう？激戦から戻ってきたばかりだし、魔力も消耗してるでしょ……芳しくないなら皆の所に行くのも有りよ」

「弱音は吐いていられない。もう一人の私の為にも見届けないと」

開門し、いつでも迎えうてる準備が整った。後は竜の到着を待つのみ。この成否が未来を変える分岐点だ、失敗は許されない。

「竜の情報は？」

「西方および東方に敵影無し！」

「南北共にオールグリーンです！観測所によれば、周囲数キロに不審な影無しとの事！」
「目撃情報がない？空の王者と謳われた竜とは言え、大軍の移動速度を考えたらこのままじゃ今日、間に合わないのでは？待て、私は何か前提から考え違いを？もしか、空からじゃないのか……っ！）」

ルーシイ達の報告からも具体的なタイミングやどこから来たのか、子細が伝わっていない。その余裕が無かったとなればそれまでだが、未来ルーシイ達は1週間ほどで、ローグは七年後の未来から来ていると言う。全く持つて調査が出来なかつたとは思えない。何か不都合な事を隠しているのではないか？そう勘繰ってしまふ。それに1万の竜が移動するなら、何かしらの噂や伝聞は聞こえてもおかしくない。なのにこの七年

間、アクノロギア以外では全く兆候が無かったと言つても過言ではない。

「シリル、何かおかしくない?」

「ええ。一万の巨体なら、何かしらの兆候や目撃情報はあはずなのに、存在の目撃談や形跡すらない。今日現れるのだとすれば、時間から考えて空から来るとは考えにくい。そもそもエクリプスを兵器として使えるなんて話は古文書等には記述は無かつたと思う。先代からもそんな話は聞いていない」

「もしかして」

「ええ。多分貴女の想像の通り……うあつ!?!」

突然地面を揺るがす振動に足をすくわれる。すわ何事かとその震源地に目をやれば、信じたくもない者がそこにはあつた。竜だ。

「あ、あれは……」

「竜が、扉から!」

「嫌な予感がすると思つたら、これだったのね!」

扉を開けることで、過去と繋いでそこから竜を出現させる。そんな方法なぞ考えてもいなかつたため、その場にいた者の大半が恐れ慄き、陣形が崩れて戦意が喪失している者までいる。だがこのままでは被害は増えてしまう、動かなければ未来と同じ死が訪れかねない。

「ルーシイ、ユリア、両脇のレバーを引っ張って！星霊と地獄の力で開いたなら、閉める鍵は貴女たちの力の筈！城兵は姫を守れ！」

「了解！あのレバーね！」

「私の、私の選択のミスが、未来を滅ぼすのですね……」

「ヒスイ姫、今は泣いている場合じゃないわよ！国を守るなら嘆くより先にやるべきことがある。しつかりなさい、このままでは未来はない！」

「そう、ですね。私にはやるべき事が……アルカディオス様、陛下に連絡を！」

「ははっ！一番隊、頼むぞ！」

「原因は何ですかカノン様！」

「月蝕よ。月蝕は魔力の流れに影響を及ぼす。扉の機能がそれで狂い、竜の全盛期と繋げてしまった。未来ログは月蝕と魔力の関係を利用したのよ」

次々に扉から竜が現れ、既に何頭かは飛んでいる。必死に鍵のレバーを引くが、びくともしない。魔力の消耗と竜の放つ圧によって閉まらなくなっているのだ。

「閉まらないっ！」

「竜の力が強すぎる……！」

「力が足りていないのか……」

「星霊の力なら私が！ルーシイ様、黄道十二星座の星霊の力を借ります！黄金の鍵を！」

「ユキノ！」

「カノン様はユリア様の援護を！」

「心得た」

「星霊たちよ、悪しき力を封じる為に手を貸して。『ゾディアック』！」

「連結封印『大血鎖牢』！」

黄道十二門を全て開く事で発動する邪を封じる為のカゾディアック、鎖を巻いて楔を打ち込む封印の連結魔法により扉は閉まり、このエクリプスは封を外さぬ限り二度と開かない。

「閉まった！」

「これでもう開くことは無いわ」

「まだ喜ぶのは早いかと！何頭出てきたか報告を！」

「七頭であります！」

「各ギルド一頭か」

「待つて、滅竜魔道士は6人だけのはずだよ！」

「心配はいらぬわ、数ならいる」

「やはり扉を閉めたか、ルーシィ・ハートフィリアにユリア・アマリス。だがこれも予想の範疇だ」

「未来のローグね。貴方、ナツはどうしたのよ？」

「奴の強さを超えてきたまで。ふふ、竜は七頭か……まずは満足だな。多すぎても困る」
「あいつ何をやる気？」

まるで予想の範疇、これが自分の求めた結果だと言わんばかりに冷徹な笑みを浮かべるローグは、高らかに野望を宣告する。新たな世界の創造だ。己が頂点に立つ為に、竜で世界の支配構造を変える。その上でさらに竜を支配下に置き、自分が生態系の頂点に立つ。

「ここで貴様らを葬るまで。これより神と人の統治は終焉を迎え、竜と魔の支配する世界へ回帰する。我は新たな竜王となる、貴様らはここで死ぬといい。竜ども、手始めに広場にいるギルドを皆殺しにしてこい」

「竜があいつのいう事を聞いたのか!？」

「これは秘法、操竜魔法。竜を支配下に置く精神操作魔法だ」

各ギルドの守る地点へと竜は飛んでいき、門前に残るは神と人と竜を従えし者。世界を混沌に陥れて、人をいとも容易く後悔もなく、悪ビレもせずに殺した男を睨みつけ、止めねばならないと吠える。

「無用な混沌を齎す者よ、どうやら力づくで説教しなくちゃいけない様ね!」

「貴様もまた、時代の遺物としてここで退場願う。約定通り働いてもらうぞゼフォン」

「あの御仁はあつしらにとつても障害、ここで消せるなら万々歳でございやさあ。もう一つの仕事は終わったんでね」

「あいつ、流れる七星の！いつの間に協力を……」

「こちらの世界に来なすつた時点で、纏う魔力を基に接触しやした。お互いの利害が一致した、それだけの事ですぜ」

流れる七星の四天王と呼ばれる墮天使の一人ゼフオン。この世界を混沌に包む為、ローグと手を組んで襲撃してきたのだ。

「ゼフオンと組んで奴らを殲滅しろ、ジルコニス」

「グハハハハ、美味そうな人間どもだ！」

「あいつ、竜の墓場にいたよね？」

「例の翡翠竜とやらね。ウエンディ、ユキノ、ルーシイ、竜は任せたわ。ゼフオンは私とユリアで引導を渡す」

竜の墓場に亡霊として現れたジルコニスと墮天使に闇に堕ちたローグ。ここで止めねば破滅どころではない。それぞれの道を示す為^にに構える。

「あつしはあの御仁の力を拝借し、世界の構造を変えやす」

「変えることは時には必要だけど、貴方達のやり方には同意しかねる。大悪魔^{ガルフオス}こそ、世界を停滞させる者」

「それが貴女にとっての道理なのでしょう。あつしは、あつしのやり方を通す。『流れる七星』霧霞きりがすみのゼフオン、参りやす」

「我が名にかけて、貴方を止める。希望は、潰えさせない」

第8章 悪魔との戦

第64話 流星、動く

「くくく、面白い御仁達で」

「厄介な。鏡で同じ魔法を打ち出すとは」

「己の姿それが霧霞のように儂き物なのか、己の内面を映し出すが故にその姿をある意味で眩ませる。それが我が二つ名の由来、霧霞の意味合い」

鏡によつてあらゆる魔法を反転させる、それによつて自信を打ち砕いてきた。だが、確固たる意志を持つ二人にはまるで効果が無い。

「私は私の道をゆく。覚悟はもう決めている」

「私はまだ確固たるものはないけど。それでもやることは分かっている」

「どうも私の魔法に眩まぬようで。その様な強き者を屈させてこそ、我らが悲願はなる。己が強さが仇となれ、『明鏡』！」

「これは、私達の分身!？」

相手を写し取り、自分同士をぶつけさせる。姿形はもちろんのこと、扱う魔法も一緒だ。

「私達と似てるが、少し違うわね」

「そりゃあ完全体というわけには参りませんぜ。鏡から出た物とはいえ、同一個体じゃあない。思考も戦い方も差異がありやすからね」

数分に及ぶ近接戦や魔法の乱打戦が繰り返り広げられ、一進一退の絶妙な攻防が続くが、偽のカノンの足を掴み、それを偽のユリアにぶつける。

「この程度で止められると……思うな！」

「合わせて、姉さん！ 『冥府神の一声』！」

「『生命神の一声』！」

「やられましたかい。とはいえ所詮は偽物、時間稼ぎと魔力が上手く削れただけ儲けもんですかね」

「貴方の思い通りになると思わないことね」

挟み込むように放たれたプレスにより、偽物を見る影もなく打ち砕かれた。それも読めていたのか、四方八方に鏡が描かれ、次の魔法が準備されている。まるで万華鏡のよう。

「ならば、次行きますかい。鏡面魔法『万華鏡光弾』！」

「ユリア！ 光弾は私が防ぐ！」

「分かってるわ、こっちで鏡を曇らせるのね！ 闇魔法『暗雲』！」

「見えずとも攻める。『大樹の剛拳』！」

「闇を透かし見て連撃を、『冥府神の剛拳』！」

次々に放たれる光弾を避けては守り、その隙に闇魔法で鏡を曇らせては破壊していく。時々魔法を当て、少しずつ前進していく。

「(どう喝破してくる、この状態で)」

「面白い、我が魔法を抑えるほどの闇。だが、範囲外に行けばこちらのもの！奥義・八咫鏡！」

「がっ!？」

「きゃあ!？」

「受けた傷を鏡の如く返す、それだけのこと」

「(この傷の深さ、相手も消耗しているはず) ユリア、攻めるしかないわよ」

「えっ!？」

「相手はこちらの動きに合わせてくる。ならば、隙を作らなければ反撃しにくくなる」

相手も徐々に消耗していることは傷を写して放つ魔法の威力から察せられる。つまり相手も長くはない。攻めるならここだと反撃を許さぬ程の攻勢を仕掛ける。

「豊命神として、ここで奴を止める。『豊命神の剛拳』！」

「跳ね返すまで。『反鏡』！」

「もう、やるしかないのね！至近距離からの……『デッドウェイブ』！」
「なっ!？」

「もう1発くらっていけ！『豊命神の剛拳』！」

「急に、勢いつきましたかい……」

「血縛鎖牢！これで魔法も放てまい！」

「『冥府神の大一声』！」

「ぐあああつー！」

魔法を仕掛ける猶予は与えない。拳を振るい、魔を放ち、じわりじわりと追い込んでいく。お互いの拳が決定打を与えられない中、突如として決着がついた。一瞬見えた未
来の映像が、目の前で現実になった。

「あれはまさか!」

「自決……」

「はははっ、強がりでしたが……これ以上戦っても負けそうな気がしましたんで……」

「貴方達の目的はどこまで」

「もう、鍵もほぼ解除したんでしょう」

「でしょうね。ただ大詰めなのは分かった。その鍵、数百年前に施した封の鍵でしょう
?」

「……ええ、そうでさあ」

未来を見て危険を感じたのか、目的を果たしていたからか、己の未来を悟ったのか自分の魔法で自決を図る。封印の鍵は解除し、まるで満足したかのように。

「貴方達の好きにはさせない」

「ご自由に。ただ、これ以上情報をあつしから漏らすつもりはありません」

「貴方……」

「これがせめてもの抗い」

それだけ言い残し、ここで力尽きた。門はナツによつて壊され、出現した竜や小型のドラゴンは光り輝きながら過去へと戻つてゆく。全てが終わり、運命の日を乗り越えた。

「エクリプスの門も壊れた、これで決着はついたか」

「なんか、これで良かったのかな」

「気持ちに分かる。ただ、これからは彼らのような存在が出ないような世の中にせればならない。私の目指す道は、誰もが平和に暮らせる世だ」

「うん……私、先にみんなのところに行ってるよ」

「ええ。良かったの？クローバー」

『久しいな、豊命神。直接会うのはユリアを救ってもらつて以来だろうか』

「もうそんなに経つかしら」

『7年じゃ……実はこれをユリアに、我が弟子に手渡してほしい』

「直接渡しても良いじゃない」

影より現れたのは冥府神代理でユリアの師であり、父親代わりのクローバーだ。周りの小型を倒して回っていた様で、何かを託しに頃合いを見計らい、現れた。

『それも有りなのだが、やはり貴殿から渡した方が良い。それにこれは分身体、もう少しで消える。そろそろ独り立ちを促したい』

「心得た。いつかまた、悪魔の件で」

『その時が来れば遠慮なく申せ、貴殿に力を貸そう』

伝えることを伝え、闇に紛れるようにして姿を消した。

|| || ||

時は過ぎてあれから数日。城のホールでは大魔闘演武の打ち上げパーティーと、国を守ったことのお礼として魔導士達が招かれていた。カノンもまた、最初は断つたのだが、姫やギルドの面々に参加を促され、参加していた。

「カノン様、パーティーにご参加いただけ嬉しいです」

「本当はそのつもりはなかったんだけど、仲間達に押し切られてしまって」

「それでもです。それに……先日のことをお詫び致したく」

「良いの、もうあの事は。あのときは貴女自分で選択した、それで良い」

あの時は彼女自身が思う選択をした。己の意志を決めた結果としてドラゴンの襲来を招いたが、彼女も視野の広げ方などで反省していた。

「お楽しみくださいいね、大魔闘演武の打ち上げを」

「ありがとう。貴女も楽しんでね」

「あ、姉さん！こっちこっち！」

「怪我は大丈夫？」

「平気よ。もう何日も経ってるし、ウエンデイ達のお陰でね」

「友達ですからね、助けるのは当然です」

ウエンデイ達と合流し、祭りの喧騒の中へと混じる。様々なギルドの垣根を越えてお互いに戦いを褒めあつたり、酒を酌み交わしたり、友情を深めたりと和気藹々とした雰囲気だ。カノンもまた、最終日に戦ったユリアの友シエリアと友になっていた。

「まさか正式にお城に入れるなんてねえ」

「王主催らしいわ。なんでも打ち上げと国を守った事への感謝なんだそうよ」

「太っ腹ですね」

「楽しまなきゃね」

「流石王族主催、豪勢だね」

「上等な物ばかりじゃない」

「カノン様はユリアと姉妹なんですか？」

「血の繋がりはないわよ。まあ、姉妹同然に過ごしたけどね」

「最終日、やつぱり強かったです」

「ありがとう。貴女もこれからどんどん強くなりそうね、期待してるわよ」

「私とウエンディの友達だからね、絶対強くなるって」

笑ったり呆れたりと会場が盛り上がる中、カノンは頼まれごとを果たすべくユリアと会場の隅へと移動する事にした。

「ユリア、せっかく楽しんでるところ悪いけど、クローバーからこれを預かってるわ」

「師匠から？」

「数日前にね」

「どれどれ……」

「なんて？」

「いずれ継承の儀を行うって」

「そう、貴女も決まったのね」

「私は実子だからね、神の。だからいずれはと思ってたけど」

特段急ぎではないとのことだが、近いうちに儀式を行い、正式な冥府の神を立てる。

いつまでも代理なままではいられないのだろう。

「あれ、これは」

「何か書いてあつたの？」

「姉さんに何かあれば協力しろって。何か知ってる？」

「クローバーめ、分かっていたわね。それはね、流れる七星についてだわ。多分だけど」

「もしかして彼らが」

「動く、間違いないだろうね。この七年間表立って動きがなかったのが不気味なぐらい、だからいずれ直ぐに動くだろうと思うわ」

「そんな、この前一人倒したばかりなのに」

「だからこそよ。人数が7人なら既に半数を失ってる、動かないとは思えない。何かあつたら貴女と協力して対処する。よろしくお願いするわね」

「うん、良いよ。私にできる事ならば」

「ありがとう」

話を終えて振り返ってみると、剣咬の虎に酔っぱらったカグラ、妖精の尻尾の面々や他のギルドがユキノを巡って一触即発になっていた。どうやら2日目の賭けがどうのでユキノをどのギルドが手にするかで揉めたそうなの。

「……うー！そこまでにしなさい！」

「カノン様……」

「彼女の道は彼女自身で決める。手を差し伸べるのは良いけど、無理強いする事じやないわ。各々事情はあるかもしれないけども」

「まあ、確かに」

「それもそうだな」

「これは貴女の決めることよ。貴女の本心に従いなさい」

「はい」

結局はカノンの一喝でその場は収まり、ユキノ自身が今後を判断することとなった。大佐が状況を収められず呆然としていたが。

「大佐、始めて」

「乱闘を収めていただき助かりました。さて、陛下よりお言葉を頂戴仕る」

「大魔闘演武における数々の戦い、ご苦勞であった。大いに楽しむことが出来、感謝する。また、国を総力を上げて守ってくれたこと、誠にかたじけない」

「何をおっしゃる、ワシらはこの国が好きであるが故に戦ったのです」

「俺たちは危機に負けずに戦うさ」

「ありがとう。貴殿らの言葉、身に染みて嬉しく思う」

こうして無事に大魔闘演武は幕を閉じた。

その頃ジェラールとメルデイは行方不明になったウルティアを探していた。時のアークのラストエイジスという魔法による影響だ。1分程時が戻り、それによって未来の映像を見せたのだ。カノンには大して影響を与えなかったが、多くの魔道士の危機を救ったのだ。何故かその魔法を使つてから行方が分からなくなった。そんな折に評議会のドランバルトからある情報を寄せられる。竜を倒すために仮釈放して、戦闘後牢に戻った元六魔將軍のコブラが流れる七星と冥府の門が動くと言つていたそうだ。

「まさかこんな事になるとはな」

「カノンにも伝えておこうよ」

「そうだな。危険はすぐそこまできてる」

闇は刻一刻と迫つていく。壊れた街を凶風が吹き荒れる。

|| || ||

大魔闘演武の打ち上げから数日たった。結局ウルティアは見つからない状態の中、ジェラール達から聞いた情報と共に、カノンはマグノリアに皆と共に戻つてきた。そこには、大魔闘演武優勝を聞きつけた街の住民や近隣の人々が大勢やつてきていた。大会を見ていて応援してくれていたのだ。

「凄い人ね」

「本当に優勝したんだね。なんか感動してきちゃった」

「カノン様、最終日かつこよかったです！」

「ユリアさん！ジユラ戦痺れました！」

「お、応援、ありがとう……なんか照れるわね」

「うん。こんなに褒められた事ないし」

大魔闘演武を見ていた人達からは歓声や拍手、応援でもって迎えられ、ここまで大勢の人から直接褒められた経験のない2人は戸惑うばかりだ。街の入り口からカルディア大聖堂まで伸びる長蛇の人が、口々に声援を飛ばす。つい数ヶ月前までは考えられなかった光景だ。

「皆もこれで元気が出るわね」

「ギルダーツとの約束、果たせたんだもんね」

「ええ。ウルティアの事やバラム同盟の他のギルドの事は気になるけど。私はしばらくしたらギルドを離れるわ」

「仕事があるもんね」

「とはいえ、家の方をそのままにしてくれてるみたいだし、数日はそこで出来るけど」

少し歩くと、そこには町長が待つており、優勝の景品としてプレゼントがあると言う。彼の指差す方にはかつてのギルドの建物が綺麗に新築されて待つていた。

「妖精の尻尾には優勝の証として街からプレゼントを」

「プレゼントだなんてそんな……」

「貴方達は我が街の誇りであります。よって、街の皆で協力し、ギルドを修繕して贈りたいと思います」

「まさかギルドを修繕してくれたなんて」

「元通りじゃねえか！ やったぜ！」

「ワシは、ワシは……この街が大好きじゃー！」

皆が笑顔で、優勝杯を囲みながら笑っている。街の人も、ギルドのメンバーも、本当に嬉しそうに笑っている。そんな街の活気から外れたところにはゼレフが一人座しており、そこにメイビスが降り立つ。

「ここに居たのですね。大魔闘演武を見学していたとは」

「声はほとんど聞こえず、姿は全く見えず。でもなんとなく分かるよ、そこに居るんだね
メイビス」

「死に場所を求めているのですか？」

「そうだね。僕の知っている良き人々はもういない、世の中を見て疲れたんだ。世界が僕を否定するのなら、僕がこの世界を否定しよう」

「いいえ、世界は肯定するでしょう」

「これは僕からの贈り物、少し時が経ってから贈られる」

「戦争を、起こすのですか？」

「もはや戦争とは言えまい、一方的な殲滅になるだろう」

「滅ぶのは貴方です、妖精の尻尾と神々が貴方を止めます」

「(戦いの時は近いよ、ナツ、カノン)」

2人の静かな開戦の火蓋が切られた。世界の命運を分ける大いなる火蓋が。

それから更に数日、温泉のできたギルドではカノンが報告書に目を通し、渋い顔をしている。

「これは……」

「どうした？眉間にシワを寄せて」

「評議会の方から連絡があったわ。流れる七星がいよいよ動きそうだって」

「なんと!？」

「平和に終わるわけがないと思ってたけど、こんな早く……」

大魔闘演武後に現れたベリアルを撃破してまだ十日あまり、流れる七星がここに来て動き始めた。この数百年間、大きく動くことはなかったが、いよいよ封印が解ける段階にきたのだろう。

「これは悠長に仕事をしている場合ではないのう」

「ギルド連盟には評議会経由で通達して貰ったわ。今回はギルド間抗争には目を瞑るって判断をしてもらったの」

「わかった。ギルド全員で迎え撃つとしよう」

「よろしく頼むわね（たった十日程度で攻めてくるとは）」

|| || ||

「各ギルドには墮天使の討伐に協力してもらい、感謝する」

「なに、貴殿とはかつて共に仕事をした仲。協力は惜しまぬ」

「国を守る戦いに再び参じれるとは、魂が震えるぜ」

「レディの頼みを断る様な真似はしません、メエーン」

翌日、急遽集められたギルドの面々総勢20名超。この前の大魔闘演武で戦ったギルドの大半が集まった。

「出現場所は2か所と考えられる。場所は輪廻廟、そしてここマグノリア。マグノリア防衛はここに集まったギルドで。輪廻廟には私含めて数人が行く」

「配分が偏ってるな」

「輪廻廟は大勢の入れない場所、それにこの街は広い。それ故に配分は偏るわ」
「なるほど」

「この街の人々は既に避難しているが、何が起こるか分からない。彼らを守るためにマ

グノリアに大半の人員を割くことになった。輪廻廟にはごく少数が行くことになる。

「エルザ、ユリア、ナツ、ルーシィ、グレイ、ハッピー、ウエンディとシャルルにガジルとリリーで輪廻廟に向かう」

「心得た」

「相手が相手だ、くれぐれも注意して」

|| || ||

「ここが、輪廻廟」

「神聖な場所だな」

「神々やその使いの修行の場、それが輪廻廟。一回に入れる人数がそう多くないから、人数もこの感じになってしまってるね」

「ここに何かあるの?」

かつてカノンとユリアが修行した輪廻廟。そこはいつもと変わらず鬱蒼とした森の中にある。古文書を引つ張り出し、様々調べてここに封印が施されていることが判明した。

「封印の施されている場所がここ、そして沢山の人が住むマグノリア。流れる七星の目的は鍵の解除と大量の血」

「血!?!」

「封印をしたのが先々代。血と気の神だから、解除の方法もそれに依ると考えられている」

「扉が封印ごと壊れてる。やはり居たのね」

「我が名はバラキエル、流れる七星の四天王が一人。マグノリアに向かったルシファアに遅れて戦うか」

「予想どおり、マグノリアにも行ってるのね。迎え撃つまで」

先客は既に大悪魔の封印を解除し、後はこちらの排除のみと冷酷に告げる。四天王というだけあり、放つ威圧感是他の比ではない。多数を相手にするのにまるで微動だにしない。

「封印を解除した、が。貴様らが邪魔をするならここで殺しても良いと、シエムハザルから言われている」

「(シエムハザル……最後の一人か)」

「ふざけたこと言いやがって。俺たちをそう容易く倒せると思うなよ」

「我らの主の手を煩わせるまでもない。かかってこい、人間ども。デッドウェイブ」

先手を打ち死霊の波動を放つ。同じ魔法で受け止めつつ、こちらも人数に物を言わせて隙を狙う。前後左右から攻め寄せる攻撃にまるで見向きもしない。

「よそ見してんじゃねえぞコラ！鉄竜剣！」

「火竜の鉄拳！」

「双土壁」

「なっ!？」

「モーションが!？」

「造形魔法の上位、造形呪法。種類が多く、モーションが少ないのが特徴。舞え」

「ぐあっ!」

「がはっ!」

「土と風を!？」

魔法とは違う力の体系、呪法。造形呪法は造形魔法に比べてモーションが少なく、多属性を操るバラキエルは相手の属性に合わせて動いてくる。火や土、風などが乱れ飛び、命を狙うように襲いかかってくる。

「我を容易く倒せないだろう」

「一気呵成に攻めるのみ! 気功砲!」

「こつちからもどんどん攻めるよ、デッドウェイブ!」

「負けてらんねえ、アイスメイク・フリーズランサー!」

「全て見える……金ゴールド・ウォール壁」

「金の造形!?! もしやこいつが!」

かつてカノンとクローバーが相手にした男と同じ金の造形だ。バラキエルが伝えたのか、そのスピードと範囲は広く、圧倒的だ。そこから息をつかせぬように、広範囲の雷撃が飛ぶ。

ライトニング
「雷刃縫糸」

「今度は雷かよ！」

「アイスメイク・ウォール！」

「ナイス！」

ブリザード・ナツクル
『氷 雪 拳』、踊れ」

防御壁を容易く碎き、荒ぶる吹雪が辺り一面に容赦なく飛んでいく。ナツのプレスやユリアの炎で対処して難を凌ぐが、じわりじわりと体力を奪っていく。

「これでもまだ折れぬか。伊達に演武を優勝をしていないようだ、ゼフォン達同胞を打ち砕くだけはある」

「折れたら終わりだからな。俺たち妖精の尻尾は何があっても折れはしない」

何事にも折れぬ強い意志、堅固な魂。それこそが妖精の尻尾の心意気。力で勝る相手とて、負けるつもりはない。剣を抜き、己の出せる全てをぶつけるまで。

「天輪・五芒星の剣！」

「天竜の咆哮！」

「サンドバスター！」

「水土壁……ぐっ」

「目え逸らすなつつつたろうが。オラア！」

「好機ぞ、続け！聖樹剣！」

「抜かったか……」

「まだまだあ！火竜の焔炎！」

「思ったよりやるな、けりをつけるか。『7つの属性よ、輝け。草原を駆け巡り、空を飛び渡れ。海超え砂超え、世界を呑め』」

「ナツ、ガジル、ウエンデイ、ユリア、ブレスの用意を！」

「了解！」

「グレイ、ルーシィ！二人も遠距離攻撃を撃って！」

「おうよ！」

「水雷火土金闇氷……『乱刃』！」

「オラア！」

「止まれえ！」

破壊のかぎりを尽くす暴力的なほどの呪法を前に、こちらも在らんかぎりを尽くして応戦する。滅竜魔道士のブレスに神々の轟く声、星霊の力などが呪法と正面よりぶつか

る。大いなる力がぶつかり合い、押し合い、弾ける。神々の祠は力に煽られ、所々にヒビが入り、何人かは弾けた力に怪我を負う。

「くそっ」

「なんつう威力だよ」

「まさかここまでとは。一度退いてやろう」

「待て！」

「……取り逃すとは」

「こちらの負傷者もいる。負傷者はウエンディに任せて、とりあえず封印の状況を見に行くべきではないか？」

「こちらには任せてください」

「それもそうね。エルザにもここに残ってもらおうわ。ユリア、ルーシイ、こつちよ」

「うん」

怪我を負わずに済んだ3人で奥の奥まで突き進む。封印のされている場所は中央の間から隠し階段を降りた先にある。

「うわっ、こんな場所があるなんて知らなかったわ」

「中央の柱の奥、そこに封印場所があると記されていた」

「私も知らない場所。来るたびに発見があるなあ」

「前にも言ったけど、ここは一部のものしか知らない場所。それに、建造年も建造者も謎だからね」

「私、来てよかったの?」

「本来ならダメなのかもしれないけど、緊急事態だから」

螺旋階段を下ること十数分、光の溢れる不思議な場所が現れた。ツタの絡まり、花の咲く楽園のような幻想的な場所だ。奥には石碑が立ち、一部が崩されており、封印が解けている。

「ハハハよ」

「なんか壊れてる」

「これが、さっき言ってた封印の鍵」

「やはりか。仮修繕はしておくけど、あまり意味をなさないでしょうね」

|| || || ||

「なあ、あいつどう倒すよ?」

「造形呪法なんざ初めて聞いたぞ」

「一度に四人以上の攻撃が必要な気もする。途中のガジルの攻撃から、当たったものね」

「同時造形の限度かもな。リオンですら3つの同時造形でもきついだろうしな」

「奴がどこに行ったか、マグノリアの防衛がどうなのか、対処法も含めて気になる点は

多々あるわね」

「一旦戻って体制を立て直すぞ」

やれることはやって、一度マグノリアの様子を見に戻ると大勢のけが人と、あたりの建物が所々破壊されている光景だ。どれほどの激戦だったかが伺える。

「マスター、こちらは敵を逃してしまったわ。こっちはどういう状況？」

「どうにか倒せたわい。じゃが呪法を使ってきて、怪我人も大勢いる。しばらく動けぬと見た方がよい」

「それにしてもすごい戦闘跡ね」

「召喚魔法じゃったわい。多量の兵を呼び出しておった」

残る墮天使は2人、取り逃した方が攻め寄せてくれば、立ち待ち飲み込まれてしまうだろう。そうなつては敗北だ。

「不味いわね、取り逃した方が攻め寄せてきたら」

「今日は攻めてこぬだろう。じゃが、明日来るかも知れぬ、動けるメンバーを一人でも多く集めねば」

「回復は私とウエンディ、シエリアで。ポーリユシカさんと呼ばれば呼んできて」

＝＝＝

「シエムハザル、ルシファーが滅したようだ」

「私達2人を残すのみとなろうとは。バラキエル、貴様にはもう一度出てもらおう。今度こそ、奴らを灰燼に帰せ」

「心得ている。しかしこの数百年間で大量の血と、封印の解除をもう成したのでは？」

「完全に復活するにはまだ時間がある。最後の封印に仮封印をされたせいでも時間が必要だ」

とある森の中には2人の墮天使、シエムハザルとバラキエルが顔を合わせている。己が主を復活させる最後の封印の解除などが果たされており、後は時間を合わせるだけとなったからだ。カノンの施した抵抗の封印により二日ほど時期がずれ込んだが、墮天使達にすれば誤差だ。

「あの後か、小賢しい。で、復活の目処と場所は」

「マグノリア上空に三日後」

「それまでに決着をつけてこよう」

「しくじったら容赦はせぬ」

「無論だ。我らの同胞の死は無駄にはせぬ」

ここまでに7人中5人が犠牲となり、後がない状況だ。悪魔が雪辱を果たして400年以上の悲願を制するか、人と神が再び勝利を刻んで平和を保つか。互いの意地をぶつける日は近い。

「貴様の造形呪法に私の冥府の力、合わされば敵も容易い」

「奴らは思った以上に粘る。気をつけることだな。では、またな」

「またがあれば良いな……ユリア、貴様を倒した暁には私が冥府神の継承者となろう。そして、流星は天地を呑むだろう」

不敵な笑みを浮かべ、空を見上げる。流星群が観測されるこの夜、遂に動き始める。

第65の唄 生命と悪魔と墮天と

「ここがマグノリア。まだ立ち直れてはいないか。この際だ、我が手で崩し去るか。金の……ぬっ！」

「好き勝手やらせる訳がなからう、バラキエル」

「まだ抗うか、カノンとやら」

「無論だ」

バラキエルの攻め寄せることが予想できていたため、回復を急ぎ、動ける人員を1人でも多く用意していた。その為、まだ負傷気味だが動ける人員は揃えられた。

「たった1日で闘える者を増やしたか」

「こちらには回復手段が数手あるのよ。ここで貴方を止めてみせる、総力でもって」

「ふむ、やってみせる。雷よ、轟け……雷刃縫糸！」

「(吸呪の札よ、飛べ！)」

「(かき消した？どうやって?)」

「力には智勇や道具で挑む。こういった感じに！」

「(雷の放出と突風ラクリマか!?)」

相手の攻撃を吸収し、放出する札の活用に己の力を組み合わせることで、攻める算段を増やすと共に相手の動きを鈍らせる。

「至近距離からの弾幕に耐えられるかしら！『弾血乱舞・神式』に『気功砲』！」
「っ！」

「……応えた様子はなし、かしら？」

「少し効いたぞ。我が造形呪法がなくなれば貫通していた」

「お世辞を」

「これでどうだ？『火扇・紅葉』」

「消火はお任せを」

「ナイス、ジュビア！」

「雷刃縫糸」

「ふん！」

「ありがとう、ラクサス」

「雷は多少受け流せるからな」

チームワークでは負けない。防ぐ属性によって前に立つメンバーを入れ替わり立ち替わり変える。炎にはジュビアの魔法で、雷にはラクサスのパワーを活用する。

「私達には人の和や知恵がある。一人で戦っているわけではない。それぞれが闘い、互

いを思い、全てを足して勝つ」

「くだらん。一人では非力と認めてるようなものではないか」

「私は神とて万能に非ず」

「我が主に勝てるはずがないな、その程度なら」

「あら、それはどうかしら？この街、この国、この大陸を守るため、貴方に勝つ！気功砲
！」

「水よ、守れ」

「火竜の……」

「見えていると申しておろうが」

「ぐっ！」

「これでどう！闇分身からの奮迅！」

「雷竜の顎あぎと！」

「白竜のホーリーレイ！」

ナツの攻勢に続きラクサスやユリア、剣咬の虎のステイングも加わり、一気呵成に攻め立てる。複数人の攻撃が隙を作り、攻撃が当たりやすくなることが分かった以上、攻め立て続ける。

「さまざまな方向から一度に攻めるか……」

「貴方はおそらく、一度に消費できる力に限度がある。オーバーヒートするのを避けながら戦ってる。この前は全力を使い、一時的に力が入らなかったんじゃないかしら？」

「よく気づいたな、たかが一回で」

「造形魔道士は大勢いる。同時に作り出せるモノに限度があると口々に言っていたわ」

「ふん……ならばリミッター解除だ。墮天使の墮天使たる所以、見よや！」

「これがもう一つの姿、墮天使の最終形態。7つの属性を、開放する」

「ならば私も全力で参る。『神依』改め『神威』！そこからの、『気紅双波』！」

「気と血のレーザーか。『雷炎龍虎撃』！」

最後の最後にとっておきの姿を見せ、自分の限界を超えて、反撃に打って出るバラキエル。それでも屈せず立ち向かう妖精達の連合軍。お互いがお互いの意地を見せ、お互いに向かつて攻めるまで。

「冥府神の大声！」

「氷土の堅壁、風雷の牙よ」

「きやつ！」

「火竜の咆哮！」

「ぬるい。水氷蛇牙」

「隙あり！気功砲！」

「黒羽一閃！」

「我が金と土の鎧が……」

「まだまだ行くぞ！オラア！」

「続け、勝てるぞ！」

「まとめて死に追いやってやろう。複数合体造形、乱刃！」

「大気功砲！」

防御を捨て、攻撃に移って攻め寄せる攻撃をいなしていく。

「相打ちか」

「（このままじゃまずいか？）」

「俺らに技の対処は任せろ。シリル、当てに行け」

「隙は全ギルドで力を合わせて造る」

「皆……任せたわ。いくよ、ユリア！」

「うん！」

そんな攻撃による防御の隙を突こうと、皆で攻め寄せてカノンとユリアの攻撃を当てようと皆が前線に出て攻撃に出る。

「いくぞグレイ！アイスメイク・タイガー！」

「任せろリオン！氷槍騎兵！」

フリースランサー

「炎蛇の牙よ」

「溶かされたか」

「火は任せてください、ウォーターサイクロン水流台風！」

「切り裂き、活路を開くは風。烈風扇」

「影竜の咆哮！」

だが、バラキエルとて負けてはいない。隙を突こうというならば手数を増やして攻撃を防ぐまで。この攻撃の連続こそが最大の防御と言わんばかりに打ち出していく。

「氷水波に雷炎拳、纏めて穿て」

「ブレスを纏めてぶつけるぞ！」

「おう！」

「任せろ」

「ちっ、滅竜魔道士は厄介だ。岩拳」

「崖錐！さあ、岩を足場に進まれよ！」

「助かるわ、ジュラ！ここまでの道は無駄にはせん。ユリア！ユニオンレイド合体魔法しかない！」

「任せて！」

「合わせろ、二人とも！」

「安心してください、敵の攻撃はしばらく私達で保つので！」

「いくら足掻こうと……っ！ (もう限度の時間か。案外保たぬモノだな、この力も)」

「合体魔法、『双神剣』！」

「(済まないシエムハザル。失敗だ)」

最後の最後にとっておきの一発を打ち出し、遂にはバラキエルも耐えかねる。全ては想いを込めている攻撃が相手を上回ったからだ。

「人の子が、思ったより強かったか。油断したつもりは無かったが……」

「貴方になくて私達にあつた物、それは互いの絆と合わせる力の強さ」

「次はこう上手くいくと思うなよ。シエムハザルは人智を超える、四天王最強の墮天使。彼女の冥府の力は……」

「冥府の……うん、でも私は負けない」

「知っているの？相手のことを」

「私の記憶には少なくともないよ。でも母さんに聞かされたんだ、弟子がかつて墮天使たつて。死の力は死をもたらず為にあると言つて、離れていったそうだよ」

「私たちとは意見が合わなさそうね。力は傷つける面もあるけど、何より守る為にある」

＝
＝
＝

「遂に私一人か。だが……これで良い。封印の解除時間も稼げた、血の量も充分。明日には封印場所とこの世界が繋がる……勝利は揺らぐまい」

遂にシエムハザル一人となった流れる七星のメンバー。だが彼女の計画は最早完成間近にまで迫っている。

「我が主よ、ついに来たぞ、この時が！」

＝＝＝

「大変だ！」

「どうした？」

「空に変な空間が！」

仲間の掛け声に釣られて皆が外に出て空を見上げるとそこには空飛ぶ城が浮かび上がっていた。これこそがシエムハザルの望んでいた光景だった。

「なんだアレは……」

「教えようか？アレは我が主の封印された空間。今、それが開いた。我が名はシエムハザル、流れる七星最後の者」

「貴方がシエムハザル……」

「遂に悲願がなる。完全に復活するまでの間、私が相手をしよう。それに、ユリアを消せば冥府の神の座は空白となる」

シエムハザルはユリアのかつての同門であったが、ユリアの誕生と共に彼女が後継者になり得ない事を感じ取り、裏切り者となっても何かの座を得ようとしていた。

「業火に焼かれよ、獄炎球！」

「火はまかせろ！オラア！」

「我が炎を喰うとな。面白い。では切り替えて攻めようか。毒螺旋拳！」

「吹き飛ばすまで！地獄ソウルフレアの業火！」

「流石に同門でかつての主人が娘なだけあつて威力は申し分ないな」

「そりやどうも！撃ち貫け、怒りの一閃！『神弓ダークネスライン』！」

その後も幾千にもわたる攻撃の波が喰る。毒には火を、火には水を、風には弓を持つて攻撃が続く。その中、遂に決着がなされる。

「ここが、死に場所……申し訳ない……」

「はぁー、疲れたわ」

「宿敵が残ってる、まだまだ先は長いわよ」

「シエムハザル、私と貴女は本来なら手を組めた。貴女が何を思つて墮天したか本心は分からないけど、私は貴女とは違う道を歩むよ」

遂に決着が着き、流れる七星も全滅となつたが、浮遊神殿であり、敵の本城がまだ残っている。

「変な浮遊神殿みたいなのは出来てるな」

『人の子よ、我は400年ぶりに帰還した。絶望に慄くか、絶望に抗うか。その底力を我

に「示せ」

「この声が……」

「ナーガの封印した者」

『これも余興のうち。我が神殿に向かつてくるが良い』

「階段？」

「立て直したらすぐに向かうぞ」

「地の利は相手に移る。本来なら引き摺り出すべきなのだろうが、悠長なことは言ってもらえん」

「俺たちは街の防衛や仲間の治療に専念するよ」

「済まないな。では攻め込むメンバーを決めよう」

「無論私は行くとして、他は？」

「私やいつものチームもそうでしょ？」

進むべきメンバーと残るメンバーが協議されている最中に、真上から声がかかる。皆が混乱している中、その者は姿を現した。

「お主たちだけではあの者には勝てまい」

「何者だ!?!」

「ワシはの……」

「久しぶりね、魔神レイン。人の姿とは珍しい」

「ま、魔神!？」

「自己紹介を途中で止めんでほしいのう。そうじや、ワシこそがこの世界に魔法を生み出した者。悪魔共に裁きを与えに来た」

大魔神レイン。数百年以上前からずっとこの世界と共に歩んできた者で、この世界に魔法や呪法、魔導士を作り上げるきっかけを作った存在で、普段は世界に与える影響を考え、姿を見せることは滅多にない。

「さて、始めようぞ。世紀を超えた宿命の対決へ」

第66の唄 決戦前の進行

「敵が多いわね！」

「ろくに進めんな」

「予想通りとはいえよくここまで。纏めて消失させようぞ！古代魔法『天涯海角』！」

ヴァアルナー

古代魔法により陸地であるにも関わらず大きな波を起こし、敵を須く押し流し、包み込む。敵が全て藻屑となり消え失せ、これで神殿の目の前まで道が出来上がった。

「ふむ、入り口までは空いたのじゃ」

「あっけなく……凄いわね」

「ワシにかかればこれくらいはの。ほっほっ」

「ちよつと待って、奥から出てくるよ！」

「これじゃあジリ貧だぞ！」

「やむを得まい、突貫する！」

ここで止まっただけでは雑魚兵相手に体力も魔力も消耗しきってしまう。ならば無理にでも突入し、神殿内に一刻も早く突入するしかない。その神殿内に入ったところで響き渡るようにガルフォスの声がある。

『ようこそ我が城へ。貴様らにここまで来た褒美に絶望的な苦しみを与えよう。まずは一つ！出でよ、我が眷属よ！』

「ふむ、呼ばれたか」

「何者？」

「我が名はムウ、覚えておく必要は無い」

ムウは数百年前になんでも切れる伝説の剣士として名を馳せた。まさかこの世にまだ残っており、大悪魔の下で働いているとは思ってもよらなかった。なんでも切れる剣士は自分も体^{ブレイド}を刃に変えられる。そんな魔道士を相手にせねばならない。

「我が魔刃の前に消えよ」

「この者は私が相手する。先に進め」

「エルザ……」

「私も加わるよ」

「どうかお先に」

「ルーシイにウエンディまで……分かった、任せるわよ」

剣を自由自在に操る男の相手にエルザとルーシイ、ウエンディの3人が名乗りを上げた。そんな彼女らに後を任せ、ムウを追い抜いて次の目的地に向かう。その際に何故か見逃している。敵ながら解せない行動だ。

「仲間を見逃すとは余裕有りを取れるな」

「奴らを倒すのは我である必要はない」

「まだあなたの仲間がいるって事ね」

「そういう事だ。烈空れつくう！」

「風の刃!?!」

「もう一発、はあっ！」

「くっ！」

魔刃の異名通り、あらゆる属性の刃を繰ることが出来る。まず飛び出したのは風属性の切れる刃、そしてその次に飛び出したのは炎の剣だ。

「炎刃えんじんよ」

「換装、炎帝の鎧！」

「むっ？打ち消したか」

「タウロス、お願い！」

「ふMO！」

「ぬおっ!?!」

タウロスのどしんとくる攻撃を真正面から受け、吹き飛ぶが、まるで応えてないかのよう立て直し、次の一刀を操る。それは砂の欠片であり砂の飛刀だ。

「砂刀、飛べ」

「タウロス、戻って！」

「天竜の咆哮！」

「ぬっ。やりおるか」

「我々には勝たねばならぬ理由がある」

「その意地、どこまで続くか楽しみだ。チェーンソーと炎刃の融合よ……螺旋帯炎刃！」

「くっ！」

「うわわっ！」

「まだまだ本領はこれからよな！」

それは二つの属性の融合刀。回転しながら燃やしてくる攻撃には流石の百戦錬磨な3人も驚き、慌てて離れる。そんな中、敵の攻撃を止めるには二つの属性を一つに減らすことから始まると考えついた。

「火には水か。換装！」

「水ね、ならばアクエリアスを！」

「援護します」

「楽しめそうだ。かかってこい！」

|| || ||

「まだ着かないのか！」

「先はまだ長い、落ち着かぬか」

「エルザ達が心配だな」

「あの2人ならそう簡単には負けないわよ」

神殿内にも敵兵が沸き、それを撃退しながら進む一行。そんな中突如として敵が消え、1人の男が立ち塞がる。不敵な笑みを浮かべ、余裕さえ見える。

「ふっふっふっ」

「また現れたか」

「わしはレッシ、様々な魔闘格闘技を繰る。かかってくるがよい」

「シリル、ユリア、先に行け」

「こいつは俺たちで止めておく」

「グレイ、ナツ、頼むわよ」

様々な魔法を格闘技に乗せて攻撃してくる相手にこちらは攻めの手段が様々ある造形師のグレイと近接戦闘を得意とするナツの2人が残り、止めておく。

「火竜の咆哮！」

「ブレスか。水龍脚！」

「打ち消してるのか!？」

「ぼーつとするな、アイスゲイザー氷欠泉！」

「紅炎拳！」

火には水を、氷には火を出して相殺しにかかる。射程が短いものの、威力は十分だ。それでもナツ達は負けじと立ち向かう。

「火竜の鉄拳！」

「フリースランサ氷槍騎兵！」

「黒雷拳！」

「嘘だろ……また打ち消したか」

「くそ、同時に攻めても消してくるか」

「我が格闘技はあらゆる属性を纏う」

「厄介だな」

「だけど突破口は必ずあるさ」

「はっはっはっ、かかってくるが良い」

例えどんな状況であろうと、最後まで諦めない。それこそが自分達妖精の尻尾の魔道士のあるべき姿だ、と誓いを胸に秘めながら。

|| || ||

「烈空！」

「くっ！」

「エルザ！」

「私のことはいいい！」

「我が刃の餌食となれ！炎刃！」

「そう簡単にはさせないですよ。天竜の鉤爪！」

「タウロス！」

「んMO！」

「助かった。換装！」

炎の刃を当てさせまいと連携して攻撃を当てて、エルザが立て直るまでの時間を稼ぎ、一気呵成に攻め立てる好機を作る。

「天輪・五芒星の剣！」

「アリエス！」

「モコモコですみませーん！」

「チェーンソーで切り刻むまで！」

「アリエス、タウロス、戻って！」

互いが全力でもって攻め、一刻も早く倒そうとやれる事は全て行おうとしている。そんな中ムウのチェーンソー攻撃が切り刻もうと迫る。

「切り刻まれろ！」

「天竜の咆哮！」

「あの刃を詰まらせれば使えなくなるかも。スコープオン！」

「ウィーアー！ サンドバスター！」

「ちっ、砂刀！」

「くっ！」

「ケリがつかぬとは、中々にやりおるか」

「それはどうだろうな。これで終わる、天^{なかがみ}一神の鎧！」

「これは、伝説に残る鎧か!？」

「天^{なかがみ・せいさい}一神・星彩！」

「ぬおおっ!？」

最後に決着をつけたのは魔力消費量が激しい大魔闘演武でミネルバを撃破した鎧だ。この天一神の鎧による強烈な一撃はムウを撃破し、道を開いた。

「流石エルザ！ かつこいいよ」

「ケリはついた、先を急ごう」

「皆さんのことが心配ですもんね」

|| || ||

「喰らえ、雷炎竜の撃鉄！」

「吹き飛ばせ、アイスメイク・槌ハンマー！」

「ぶち壊せ、雷電脚！」

一方のナツ達は格闘技に属性を付与するレツシの攻勢に手を焼いていた。同時に攻めてもありとあらゆる方法でこれを打ち砕き、避けていく。だがこれでも少しずつ疲れが出たり傷が出来たりしている。

「くそつ、手強いな」

「それはこちらの台詞というものよな」

「一度に一つの属性しか纏えないらしいな。そこが弱点だ」

「よく見ている。流石は、観察眼と想像力を求められる造形師だ。では、続けるとしようか。雷電の剛拳！」

「くあっ!?!」

「旋風脚！」

「がっ！」

「まだまだ行くぞ、破天の拳！」

「このヤロー、いい加減にしやがれ！雷炎竜の撃鉄！」

「ぬおう！」

「一気に攻めに出たレッシシに対して止めに入るナツ達。雷炎竜の力を引き出してそのまま、互角に渡り合うレッシシ。その後もまだ続く攻防は十数撃にも渡る。」

「手敵しい一撃だ、2属性同時の拳は」

「テメエらはなんで仕掛けてきたんだ！」

「澱み停滞した世界を一変させるため。それ以上でもそれ以下でもない」

「世界を変えるなら他にも方法あるだろ！」

「幾千もの年月を経ても何も変わらなかったのだ！神々が治めるこの世界は！」

「シリルは少しでも世の中を良くしようとしてる、あいつの為にもお前はここで止める

！雷炎竜の咆哮！」

「くああつ！」

「神々が世界を良き方向に変える為に頑張っていることを知っているだけに、レッシシらの主張は受け入れられなかった。」

「ワシを倒したところであのお方は倒せぬ」

「俺たちは俺たちで周りを少しづつ変えていく」

「決めるのはお前らじゃない。倒してみせるだけだ」

「言いやがる」

「それが俺たち妖精の尻尾だ」

|| || ||

「やつと着いた」

「とうとうご対面と来たのう」

「あれが……」

「くつくつくつ、神々と我が織りなす闘いの始まりか」

3 柱の神々が辿り着いた部屋には大悪魔ガルフォスが待ち受けていた。これが最後の決戦の始まりとなるか。

「改めて自己紹介といこうか。我が名はガルフォス、ナーガに封印されていた者。流れる七星は我が同志とゼレフを繋ぐ為に作られたギルド也」

「貴方は私が討ち取る。ナーガ様や母様チキの願いでもある。必ずやり遂げる」

「我が望みの一つ、それが神々の根絶だ。我が呪法や魔法の数々でもって、貴様らを滅し
てくれる」

「我々も勝つ為に進んできた。絶えるのは貴様の方じゃ」

「ふん、言ってくれる。なら始めようか、最後の決戦を！」

第67の唄 悪魔、散る

「ここで神々と後継者が揃い踏みと来た。運は我に有りか？」

「我々にこそ運は巡ってきている。3人揃ったら負けはしない」

「くくく、くはははっ！笑わせてくれる。いずれにせよ、貴様らはここまでだ」

大悪魔ガルフォス対神々の世界を賭けた戦いの火蓋が切つてとられた。まず動いたのはガルフォスの方だった。金で出来た拳が降り注ぐ。

「では行くぞ。ゴールドメイクナックル・剛拳！」

「やらせない、フレイム・バースト烈火の拳！」

「業火の息吹じゃ！」

「合わせるわよ、気功掌！」

「ぬうっ！」

まず一撃が入る。しかし全くと言って良いほどダメージが入らず、少し傷が出来る程度だ。

「……少しではあるが痛む。これこそが封印から抜け、現世に生きている実感というものか」

「貴方の行く末は死。生きてるのはせいぜい後数刻よ」

「戯言を。だが悪い気はしないな、この他愛の無い会話も。くだらぬ与太話も悪くないが、手を休める訳にはゆかぬ。雷豪波！」

「雷の大波ね。地獄ソウル・フレアの業火！」

「打ち消すまで。神デイト・アモレの愛！」

「我らの力を示そうぞ、業火の波撃！」

神々の攻撃と大悪魔の起こす雷の大波はぶつかりあい、互角の力の衝突が起こり、爆発が起こる。そんな中、ガルフォスは戦うことを楽しむかの様に笑い出す。

「くははっ、まだ序の口だが楽しめそうだ」

「楽しむ為に来たのではない」

「冗談抜きでそう思っているのだがな。まあ良い、続けようか。潰れよ、空エアロ・ハンマー槌！」

「防いでみせよう、エアロ・シヨック！」

「まだ始まったばかり、楽しもうではないか。水柱撃！」

「木の根よ、水を吸い取れ！」

水の柱がいくつも地面から出て、空気のハンマーが降り注ぐ中、木の根や空気の振動で打ち消していく。実力がまだ拮抗しており、一進一退の状況が続く。

「防戦一方にはさせない。爆烈拳！」

「抗うか。雷電拳！」

「くっ、この！」

「ぬうっ……やりおる」

「無茶しないのユリア！豊命神の大声！」

「ぬっ……」

「ご、ごめん」

「ふむ、ここまで抗うか。やはり面白い」

「何故戦いに愉悦を求める？」

「これこそが私の生き甲斐故な。強き者との闘争こそ生きる実感を与えてくれる」

「生きる実感を、とな。戯言を」

「なんとでも言え。これは私の性格だ」

「ふざけた事を」

「戦いこそが自分の生きる実感を与えてくれる。そう考えるガルフォスとは分かり合えない、相容れない。だからこそ衝突は回避できない。」

「ふん、どの道我らは相容れぬ。ゴールドメイク・斧^{アックス}！」

「溶かしてみせようぞ、酸剣！」

「この隙に攻撃を。気功掌！」

「見えておるわ！ゴールドメイク・壁^{ウォール}！」

「なら、これでどうかしら！地獄^{ソウル・フレア}の業火！」

「見える見える！くらうがよい、連爆撃！」

「きやあ！」

「姉さん……うわっ！」

「くははっ！まだまだ終わらぬぞ」

＝＝＝

「また出てきたぞ！」

「シリルたちは無事なのか!？」

「とにかくこの敵を減らしていくしかない！かかれー！」

「「おおっ！」」

その頃外では神殿から現れた幽鬼の兵が街を襲い始めていた。街を荒らされない為にも、残った魔導士^{シエイド}達が戦っている。

「こいつら、まさか幽兵^{シエイド}か？」

「ジヨゼの召喚してた奴らか」

「シリルたちが召喚士を倒せば、こいつらも消える！」

「俺たちは俺たちで少しでもこいつらを倒さねえとな」

かつて妖精の尻尾と戦った幽兵とは違う頑強な幽兵と衝突し、少しずつ数を減らしていく。

「雷竜の顎！」あぎと

「バリオン・フォーメーション！」

「絶影！」

「レブラホーン！」

「くそ、思ったより堅いなこいつら」

「泣き言は言ってられねえ。やるしかない」

「これだけの数、強靱さ。召喚士は余程の力があるようじやな」

「このままじゃ長くもたないぞ、マスター！」

「持ち堪えるにはなるべく魔力を温存せよ。いざとなったら妖精フェアリー・ロウの法律を発動させる」

妖精三大魔法の一つ、妖精フェアリー・ロウの法律を切り札に温存しつつ、少しでも押し込める様に力を温存しながら頑張つて戦っている。仲間の勝利を信じながら、街を守る。

「良いか、シリルたちが我々とともに闘つてる！ここを凌げば必ずシリルたちが召喚士を倒してくれる！耐えよ、勝機は必ずある！」

「「おおっ！」」

|| || ||

「我らは負けられぬ、爆炎の連鎖よ！」

「ぬうつ！流石は魔神、威力が桁違いだ」

「なかなか耐久あるわね、正直キツくなってきたわ」

「それはこちらの台詞というものよ。ここまで頑強とは予想外だ。これで終わらせる、銀槌！」

「（っ！足が、動かない！まずっ……）」

「やらせねえ、アイスメイク・盾！」
シールド

「グレイ！」

「間に合ったようで良かった」

「大丈夫か、シリル！」

「回復します」

「ナツ、みんな！」

押し込まれていたが、こうして仲間達が駆けつけてくれて協力してくれる。危うく倒されるところだったが、仲間が集まり、守ってくれる。

「ふむ、眷属達はやられたか。やりおるな」

「俺たちは、妖精の尻尾は負けねえ」

「これからは俺たちがお前の相手だ。アイスメイク・槌！」
ハンマー

「火竜の鉄拳！」

「ぬっ、中々の連携だ。雷刃剣！」

「雷帝の鎧、換装！」

「中和か、むう……」

仲間達の合流により、押し込み始めた。手数が増えたことにより、攻防が噛み合い始め、ガルフォスを少しずつ追い込み始める。

「フレイム・バースト烈火の拳！」

「サンド・リベリオン豊命神の大一声！」

「砂の反乱！」

「くあっ！ぬう、やりおるわ」

「ここでガルフォス、貴様を倒す！風雷の牙！」

「好き勝手申すか！火炎砲！」

何故ガルフォスが戦うのか、それを問うた。すると返ってきた答えは世界の変革を求めたものだった。世界の変革をすることによって、救われる存在を作るという。

「貴様ら神々がいると世界は停滞する！だからこそ、世界を変えるのだ！」

「ガルフォス、貴様の言い分は犠牲を伴いすぎる。変えるなら、少しずつ変えていけば良い！」

「戯言を！ここで貴様らを消し去ってくれるわ！」

「消えるのは貴様の方だ！」

「消えよ、大爆刃！」

「倒してみせる！神の愛！」
ディオ・アモレ

カノンの必殺技とガルフォスの爆撃が衝突し、拮抗する。互角の力が衝突するが、徐々に爆撃の力が上回って押し込まれ始める。

「く、押し込まれる……」

「くははっ、消えよ消えよ！」

「援護するぞ、シリル！アイスメイク・大砲！」
キャイン

「火竜の咆哮！」

「邪魔をするでない！」

仲間の協力により徐々に均衡まで戻り、更に押し込み始めた。仲間の力が自分の助けとなり、勝利につながる。

「地獄の業火！」
ソウルフレア

「スコープオン、お願い！」

「ウイーアー、サンドバスター！」

「天輪・五芒星の剣！」

「天竜の咆哮！」

「ぬうつ！」

「皆、ありがとう。いっけえ!!」

「ぬう、ぬうあーっ！」

カノンの必殺技が遂にはガルフォスを飲み込み、ガルフォスの体が崩れ始め、勝利を手に入れた。生命の神、三代にわたる悲願が達成され、世界に平和が訪れる。カノンやユリアは疲れて膝をついた。

「倒した……」

「やったわね、流石は姉さん」

「ちよつと待って、崩れそうよ！」

「安心せよ、ワシがワープさせる。転送魔法陣、開放！」

外に出てみると幽兵も消え去り、平和な状態に戻っていた。

「やったわねシリル。目標が達成できて良かったわ」

「ありがとう。皆のお陰でガルフォスを倒せたわ」

「これでワシの役目も果たせた。さらばじゃ」

「助かったわ。礼を言わせて」

「ワシはナーガを助けられなかった故な。礼を言われる筋合いはないのじゃ。ではな」

レインは世界の平和を見届け、贖罪を果たし、己の為すべき事を為したとして、己の在るべき場所に帰っていった。ここに平和はなった、カノンは己の成すべき事をここに誓う。

「これからは世界を少しずつ良き方向に変えていかねば、またガルフオスの様な存在がうまれてしまう。頑張るわ」

第9章 冥府の門編

第68の唄 太陽の村

「皆のお陰でどうか大悪魔を討ち果たす事が出来た。皆の協力のおかげよ、感謝する」

「なんのなんの。仲間に協力するのは当たり前じゃ」

「それでも、感謝の意を表したい。ありがとう」

ガルフォスや流れる七星撃破から数日が経ち、平穩が戻ってきた頃、ギルドではいつも通りのお祭り騒ぎとなっていた。皆の協力があったからこそ果たせた悲願、カノンはギルドの皆に感謝を伝えていた。これからは世界を平穩にするために尽力していくと誓う。

「これからどうするの、姉さん」

「そうねえ……しばらく残って、そのあと仕事場に戻るわ」

「しばらくね。いつか別れる日が来るのね」

「そうねえ。寂しいけど仕方ないわ」

「だよね、うん。仕方ないか」

「まだ暫くはいるから、ね」

「分かったよ。ま、よろしくね」

カノンはユリアの今後の事について思案していた。これからは冥府の神の座を譲り受ける事になる。それはそう遠くない未来のことであり、ギルドにも伝えておかねばならない。

「マスター、少し話を」

「ん？どうしたのじゃ？」

「ユリアに関する事で……」

「おお、なんじゃ？」

「しばらくしたら彼女もギルドを一時的に離れることになるかと」

「もしやお主と同じ様に？」

「ええ、神の座を譲り受けることになる」

「やむを得ないのう、こればかりは。わかった」

「ありがとう」

＝
＝
＝

「ふう、一仕事終わったね」

「盗賊退治も慣れたものね」

「あつ、あそこにいるのって……」

「エルザとウエンデイにシャルル？」

「お前達も仕事終わりか？」

「まあね。無事成功したよ」

一仕事終えて帰り道についていたカノン達は偶然にも同じく仕事帰りだったエルザ達に会った。仕事で得た報酬の菓子が多く、二人では食べきれない量だと言う。そこで普段一緒にチームを組むカノン達などと共に食べる事を考えついていた。そこでルーシイの家で分ける事になった。

「まだ帰ってないみたいですね」

「それならば中に入って待つとしようか」

「えっ?」

「いつものことよ、ウエンデイ。気持ちは分かるけど……」

それから一刻ほどが経ち、ようやく家主のルーシイの帰宅となり、事情を説明してお菓子を分ける。

「そうなんだ、仕事上手くいったんだね？」

「えっと、まあ……」

「無論だ」

「なんか反応に差があった様な……」

「そういえばナツ達は？」

「ギルドにも居なかったのか？」

「今日行つたけど、見かけてないわよ」

「バカな、仕事に出て三日も経つんだぞ」

「流石に心配ね」

「見にいってくる？ 討伐依頼だつて聞いているけど」

「そうだな。二人が苦戦するとは思えぬ」

「よし、行こうか」

ナツ達が簡単にこなせるほどのクエストに三日も要している事に違和感を覚え、討伐対象のモンスターの住む森へと駆けつけると、既にそのモンスターは息の根が止められて始末済みだった。

「これは……」

「でかいわね。これが討伐対象の」

「もう既に倒してあるみたいね。何があつたつていうの？」

「みんな、助けて」

「ハッピー！ 無事だったか！」

「何が起こつたの？」

「それが……」

痩せ細ったハッピーに連れられて少し歩くとそこではいつも見かける光景が広がっていた。

「いい加減にしやがれ、クソ炎！」

「それはこつちのセリフだ、この野郎！」

「なんだ、いつもの喧嘩なのね」

「これを三日も続けてるの？」

「ご飯食べたり寝たりはしてるよ」

「あら、かわいらしい喧嘩なこと」

「こらお前達、いい加減止めないか」

「うるせえー！」

「なあっ!？」

「……ほう。それがお前達の答えか」

「エルザー!？」

「なんでここにー!？」

殴られたエルザにこつぴどく叱られ、この日は無事に仕事を終えてギルドに戻ってきた。その翌日、ギルドでは不貞腐れた二人を囲い、二人を諫めたり仲直りを持ちかけた

りしていた。

「もう2度とこいつとは仕事行かねえ」

「こつちから願ひ下げだ、馬鹿野郎」

「二人とも仕事の時くらい仲良くやりなさいよ」

「そうだよ、ガキじやあるまいに」

「おい、ナツ、グレイ。また二人を指名の仕事じゃー！」

「またかよー！」

「そつか、大魔闘演武で人気が出て指名があつて、組んでたのね」

「今度こそ仲良く行つてこい！」

前回の依頼で仲の悪い二人がタッグを組んでいた理由、それは大魔闘演武で人気となり、魔道士を指名する依頼が増えたからだ。今回も同様に大魔闘演武を見た一人からの依頼だ。

「なんでまた組まなきやなんねえんだよ」

「それはこつちのセリフだ」

「ぬつ、これは！」

「なんだよ、じつちゃん」

「依頼主は聖十大魔道序列4位、イシユガルの四天王と呼ばれる方々の一人、ウォーロツ

ド・シーケンじゃ」

「聖十が依頼人!？」

「どうしてそんなすごい人が……」

「一体何が？」

＝＝＝

「いい天気ですね」

「風も気持ちいいし、いい日差しだもんね」

「仕事じゃなかったらピクニックにもってこいだよ」

「本当ね。あの二人が喧嘩さえしてなければ、だけど」

「てめえ、俺の肉食つただろお！」

「誰が食うか！」

ナツとグレイだけでは不安だろうといつもものメンバーが集い、今回の大魔道士からの依頼に向向いていた。早速喧嘩を始めた二人を止めながらも長閑な草原を歩く。

「そういうえばなんでシリル達も？」

「私はチームの一員だから、なんとなく。姉さんは？」

「今回の依頼人、ウォーロード殿には7年前に木の魔法を教えてもらったのよ。それで久しぶりに挨拶をと思つて」

「へえ。聖十大魔道といえは評議会の定めた大陸で最も優れた魔道士10人だっけ？」

「ああ。マスターやジユラもその一人だ」

「その中でも序列上位4人がイシユガルの四天王と呼ばれてるわ。イシユガルつてのはこの大陸の古い呼び名ね」

「そうなんですな」

そんなこんなで話し合っていると、目的の家にとどり着いた。聖十大魔道でイシユガルの四天王が一人、ウオーロッドの家だ。

「あ、見えてきました」

「あれがイシユガルの四天王、ウオーロッド・シーケンの家か」

「なんか緊張してきました……」

「失礼します。妖精の尻尾の魔道士です」

「ん？ おお来てくれたか」

「貴方がウオーロッド様ですな？」

「左様いかにも。私わしこそがウオーロッド・シーケンじゃ。冗談だけどね」

「えっ？」

「なんてな、冗談じゃ」

「このお茶目な一面を持つご老人こそが今回の依頼人であり、カノンに大樹の魔法を教

えた師範でもあるウォーロッドである。冗談が好きであり、気さくな雰囲気を持ち主だ。

「ウォーロッド殿、お変わりなさそうで何よりです」

「おお、シリル君か。そちらも元気そうで何よりだよ」

「お陰様で、目的も果たして元気にしております」

「そうかそうか、それは何よりじゃ。して、ナツ君とグレイ君はどちらかね？」

「こちらの二人です」

「おお、そうか。早速じゃが話に入ろうか」

外のベンチに誘われてお茶を交えながら仕事の話に入る。今回の依頼はとある場所が目的地になる。

「私は引退してから砂漠の緑化活動を続けていてな。慈善活動といえは聞こえはいいが趣味の一環でな」

「ウォーロッド殿も昔はギルドに？」

「そう、いいギルドじゃったよ。そんな訳で何年も彼方此方の砂漠を旅しているのだが、この前奇妙な村を見つけてのう」

文献によればそこは太陽の村と呼ばれており、永遠に燃える炎を信仰している村だという。その村が何故か分からないが凍りついた状態で見つかったのだ。人も植物も動

物も、永遠に燃える炎さえも凍りついていた。

「天災なのか人災なのか、村の全てが凍りついていた。何があつたのか分からんが、凍りついた村人達は生きておる。なんとしてもその村を救ってほしい。それが私の依頼じゃ」

「それなら話は早い。俺の魔法で溶かしてやる！」

「それなら俺はいらないだろ？」

「いや、あれはただの氷ではなさそうじゃ。君の力も必要になるだろう、グレイ君」

氷の力が使われており、氷の魔法に長けたグレイの知見や技量が必要になり、ナツの炎とグレイの氷によって今回の件は解決されるのではないかと言う。

「御言葉ですがウォーロッド様、貴方ほどの魔道士ならばご自分で解決できるのでは？」
「何か勘違いしている様だね。聖十といえども万能ではない、大陸の内外には私以上の魔道士など大勢いる。現に攻撃向きの魔法は多くを知らぬでな」

「しかし……」

「誰にでも得意不得意がある。それを補い支え合うのが仲間、ひいてはギルドというものではないかな？」

「おっしゃる通りです」

「この依頼、引き受けた」

「それで、太陽の村はどこらに？」

「ここから2、000キロ程南じゃ。ここは私の魔法で移動を手伝おう。それくらいしかしてやれんからな」

「助かります。よろしくお願いします」

呪文を唱えると足元から樹木が生え始め、気づけば大樹となつて妖精の尻尾のメンバーを運び、勢いよく動き始めた。まるで乗り物の様に動く大樹で、一気に村まで運ばれていく。

「すごい！木が生き物みたいに！」

「うおーっ！」

「まるで乗り物ですね」

「流石はウォーロッド殿。謙遜していたけど実力は桁違いね」

皆が大樹に乗って空をかける頃、ウォーロッドははるか昔に想いを馳せ、初代マスターのメイビスとの出会いの頃を思い起こしていた。

「流れておる、な。あれから百数年……メイビスよ、貴方の意思は引き継がれておりますぞ」

＝＝＝＝

「着いたか」

「うぷっ」

「酔ったの!？」

「ほら、治療するわ」

ほんの数刻で村まで辿り着き、酔ったナツの治療をしながら村の様子を見て回る。だが見て回っても村人の気配がない。

「おい、街の人つてどこだ？凍ってるって話だが……」

「見当たらないわね」

「ん？おい……これってまさか!」

「でかつ！巨人!？」

「犬も大きいです」

「まさかここまでとは……一体何が？」

「とにかく俺の定番だな。溶けるー!」

「がんばれナツー!」

「ぬおーっ!」

「フアイトゥー!」

「……溶けねえ。どうなってるんだ」

「ただの氷じゃねえな。どこかで感じた魔力の様な……」

ナツとグレイが早速溶かしにかかったが、まるでびくともせず、氷の溶ける気配がない。どうにか溶かす手段を探さねばならない中、上の方から声が聞こえる。

「ほう、先客か？」

「何者だ？」

「トレジャーハンターギルド」

「シルフ、ラヒリス
風精の迷宮」

「ドゥーン、ドゥーン」

「トレジャーハンターだど？」

宝探しを専門とし、得た宝を売買したりして収益を上げる者達、それがトレジャーハンターギルドである。今回はこの村に眠る宝を目当てにしてきた所に遭遇したのだ。

「悪いが、ここのお宝は俺たちが貰ってく。邪魔すんなよ？」

「んなもん興味ねえんだが」

「永遠の炎狙いじゃないだど？」

「じゃあ何故魔道士が超えるんだよ？」

「ここの氷を溶かして村人を助けるためよ」

「それを邪魔って言うんだろーが！」

永遠の炎を狙う彼らにとっては村人の目があると宝を狙えない。今凍りついている

状態の方が都合が良く、宝を狙いやすいからだ。そこで一刻を争うとばかりに駆け出した。

「こうしちゃいられねえ、魔道士の邪魔を受ける前にお宝いただくぞ！」

「おう！」

「お前らの狙ってる永遠の炎も凍りついてんだがな」

「トレジャーハンターをナメるなよ。この超秘宝・月の雫ムーン・ドリツプが有れば氷くらい楽勝だ」

「何ですって？ 月の雫ムーン・ドリツプって液体に出来たの？」

「つーか、あれが有れば村を元通りにできるじゃねえか！」

「それもそうか、追いかけるぞ！」

トレジャーハンターと魔道士の盛大なる追いかけっこが繰り広げる中、村に二人の人物が接近を試みていた。

「トレジャーハンターに魔道士か。めんどくせえが始末しなくちゃな」

「トレジャーハンターなどどうでも良い、問題は魔道士の方。妖精の尻尾は特にな」

「お？ 知ってるのか？」

「そなたこそ知らんとは無知な」

「表のことはさっぱりだね」

男は表の世界では有名なギルドを知らず裏で働き続けてきた。女はここで復讐を果

たすべく、野心を燃やしている。

「まあ良い、こんな早く復讐の機会を得るとは裏も悪くない」

「どうでも良いが仕事だ新入り」

「新入り？ 妾の事はお嬢と呼ぶが良い」

その魔道士はミネルバ、かつて剣咬の虎に在籍していた。今は裏で動いている。果たしてこの二人の目的とは……！

第69の唄 村を救う為に

「待てー、待ちやがれー！」

「その月のムーン・ドリップ雫が有れば村を救えるんだー！」

「バカ言うな！これ手に入れるのにどんだけ苦労したと思つてんだー！」

「超悪魔ばつかりの島に出向いて、少ししか手に入らなかったのに！」

「それに巨人達が復活したらドウーンと怖いだろー！」

永遠の炎や村を救える可能性があるなら月の雫ムーン・ドリップをも使う。村を救うためにはやり方を選んでいる場合ではない。そんな事情の見え隠れする鬼ごつこの最中、エルザとカノンの姿はそこにはなかった。

「あれ？エルザと姉さんは？」

「何か手がかりを探してみたいで、村に残ってます」

「巨人達を壊してなきや良いけど」

「そうでない事を信じたいわね。まあ、止めるでしょ」

|| || ||

「やはり気になるな。皆同じ方向を向いて武器を手をしている」

「凍りついてしまいう前に何かと戦っていたのかしら？」

「戦うか。何かを誰かから守っていたのかもしれない」

「守るもの……永遠の炎ね、多分」

村人達の大切なもの、すなわち永遠の炎を守っていたのなら、村人の向いているのは逆の方向にある可能性が高い。ならば話は早い、その方向に向かつて走っていく。そこで見つけたのは大きな山だ。

「大きいな。この山の上に永遠の炎があるのか」

「とにかく上がるしかなさそうね。急ぎましょうか」

「うむ」

しかし意気揚々と走って頂上に辿り着いたものの、そこには何も無く、結局無駄骨と なってしまった。この結果には二人とも落胆するばかりだ。

「何も無い、だと……」

「思い起こせば、永遠の炎も凍ってるって話じゃない」

「そうだったな。それに永遠の炎を溶かそうにも、小瓶に数滴程度しか入ってない
月の雫では全く足りないか」

「そういえばそうね。迂闊だったわ」

二人して溜息をつき、作戦の練り直しを行おうということになった。しかし少し目を

離している隙に状況は一変した。なんとエルザの体が子供の頃に戻ってしまったのだ。

「エルザ、何でそんなに小さく……」

「な、何だこれは！ 私が子供に……何故シリルは無事なんだ？」

「分からないわ。誰かの魔法かしら？」

「むう、これでは落ち着かないな。うわっ！」

「ねえ、大丈夫？」

「だ、大丈夫だ。しかし、この小さな体は馴染まないな。剣を呼び出すのにも、いつも以上に時間と労力が必要な様だ」

剣一本呼び出すのに数十秒かかり、魔力の消費量も半端なものではない。これでは戦闘もままならない。仕事である以上、何かトラブルがあったら対処するしかないが、このままではそれも難しい。そこに現れたのは、見覚えのある女性だった。

妖精女王も子供となればかたなしよテイターニアう」

「ミネルバ！ 何故ここに？」

「裏としての初任務、とでも申せば良いか」

「裏……闇ギルドに入っているとは」

「エルザ、ここは下がって。子供のままじゃまともに戦えない」

「しかし！」

「せめて戻るまでは。ミネルバに遅れは取らないつもりよ」

「なめられたものよ。これは大魔闘演武おまの時とは違う、殺し合いじゃ」

「殺し合いとは不穏な……エルザにかかった魔法、貴女じゃないわね？」

「相棒の退化之法じゃ、裏の力は面白い。何故貴様にかかつていないのかは謎じゃが」

裏の人間になり、本格的に頂点を目指す意思を明確にしてきたミネルバ。これもあくまでもその途中の段階であり、ここで終わるつもりはないと言う。そして手段を問わない、相手に弱化デバフをかけてでも倒すときた。

「何故闇ギルドに入った」

「妾は最強のギルドを目指す。その為なら手段や居場所は問わぬ」

「堕ちたわね、堕ちる所まで……そんな人には負けられん！」

「なんとも言え。貴様らに復讐することが妾の目的じゃ」

「この戦いが己の復讐心を満たすためだと言う。そんな心理を持ち合わせているミネルバには負けられない。先に仕掛けたのはカノンだ。」

「木法・木龍の術！」

「木でできた龍とは、造形にも長けておるか」

「食らいつけ！」

「この程度で怯むと思うてか！」

「爆破!？」

「空間を司る魔法だ！」

「なるほど」

空間に作用する魔法に対し近づいて攻撃し、巻き込まれることを躊躇うミネルバに付
け入る隙を生み出す。だが、タダではやられないのが元剣咬セイバートゥースの虎最強と謳われたミネル
バならではだ。一度突き放し、これでもかという魔法を放つ。

「ネエル・ウイルグ・ミオン、デルス・エルカンティアス……」

「この魔法、もしや、大魔闘演武の時の！」

「ヤグド・リゴオラ！」

「げほっ……タダではやられないか」

「硬いのう。フォーレン・スターズ流れる七星を下した手腕は伊達ではないか」

「闇に堕ちる理由は知らないけど、負けられないからね。木術・木刃の術！」

「木の剣か!？」

「ふふふ、これくらいは造作もない」

「言ってくれる。木法・木獅子の術！」

「ふんぬ！」

「隙あり、天輪・サークルソード!」

「元に戻った!? ドリアーテめ、やられたか!」

「隙あり!」

「くっ!」

エルザが元の大人の姿に戻り、2対1という有利な状況になる。つけいる隙はある、こうなったら勝てると思われられる。

「闇ギルドに移るとは、魔導士としての誇りを失うかミネルバ」

「説教とは、くだらない。ロ・ホウセトここで殺しても良いのだぞ」

「殺すなど、穏やかじゃないわね」

「神に人間の何がわかる」

「私も神である以前に一人の人間であり、魔道士だった。だから、分かることもあると思っただが……」

闇に落ちずとも最強の道は目指せる、何も闇ギルドに入る必要はない。今ならまだ光の方に戻れるのではないか、そんな淡い期待も込めて説得に移るが、受け付けないようだ。そんな中また退化ノ法が作動し、子供の姿に戻ってしまう。

「なっ!? また子供に?」

「ドリアーテめ、やられたわけではなさそうじゃ……つて何故妾まで! 暴走!」

「なんで私はなんともないのかしら？」

「もしや神の特性か？」

「分からない、分からないけど……今なら貴女を簡単に倒せそうね、ミネルバ？」

「な、何を！」

「……辞めておくれ。ただし！このまま引き下がればって言う条件付きだけど」

「くっ、ナメられたものよ。むっ!!」

「戻った!?何故こうも急に」

今度こそミネルバの相方を誰かがやっつけたのか、大人の姿になった。しかし何故こ
うも暴走したり、不安定なのはわからない。そんな中、氷がじわりじわりと溶け始め
ていく。

「むっ?これは……」

「ナツ達がやっつたみたいね」

「このままでは……ここは下がってやろう」

「ミネルバ！」

「いずれ決着をつけてやろう、妾と貴様らの最高の舞台でな」

「闇に染まるな、お前はそんなに弱くない筈だ！」

「闇には染まらぬ、妾が世界を闇に染める」

一旦決着はお預けとなり、ミネルバは姿を眩ませた。説得も受け取らないとなれば、力づくでも元に戻ってもらう他ない。

「エルザ、とりあえず皆のところに戻ろう。彼女のことはそれからよ」

「うむ。ミネルバ、お前は私が止める」

＝＝＝＝

「皆、無事ね？」

「どうにかなった。悪魔がいたとは思わなかったが……」

「イグニールの破壊しようとしてた悪魔ENDつても気になる」

「ミネルバの事もマスターに伝えなければ」

なにかと気になるフレーズが各自から上がる中、村人達は元に戻った。永遠の炎はアトラスフレイムという竜であり、彼の遺した力のおかげで戻ることが出来たらしい。

「わっはっはっ！小さき者に救われてしまったな」

「元に戻れて良かったわね」

「一体何があったのだ？」

「氷の滅悪魔道士の仕業らしいわ」

氷の滅悪魔道士がアトラスフレイムを、悪魔だと勘違いして倒しにきたらしい。犯人の勘違いで起こった事件だ。更にグレイから気になる言葉が出てきた。

「ドリアーテつー奴の話じや冥府の門が開いたとか言ってたな」

「冥府の門か。バラム同盟の最後の一角ね」

「犯人は冥府の門の人間みたいだ」

「警戒はしておかねばならないな」

「まあ、とりあえず仕事完了だ」

仕事もひと段落着いた。後は帰って報告と言ったところでこの村に戻ってきた元レイブンのフレアが姿を見せていない。

「あれ？フレアは？」

「フレア？あのレイブンの？」

「『元』がつくわ」

「フレアだど!?そこにおるのか！」

「……」

「ねえ、なんで隠れてるのフレア？」

「私、村を捨てて出て行った。だから……」

だから戻ってきてきても姿を見せられない。一度は村を捨てて出て行った故に申し訳ないという気持ちだが、全てを物語る。だが、村人達は決して怒っている訳ではない。

「外はどうだった？」

「た、楽しいことも辛い事もいっぱい……」

「それは何処にいても同じだ、生きている限りな。まあ、しかし何だ……これだけは言うておかんな。おかえり、我らが娘よ」

「た、ただいま」

|| || ||

「氷の滅悪魔法の使い手、絶対零度のシルバー様、本部への招集命令が出ております」
「墓参りくらいゆつくりさせろや、まったくよ」

「申し訳ありません。しかし、この命令は九鬼門全員に出ています。なにとぞ……」
「わかったわかった、そうびくつくな。俺が喰らうのは悪魔の魂だけだからよ」

第70の唄 冥府の門、開く

「わっはっはっ、良くやってくれた！君達に任せて正解だったよ！」

「ご期待に答えられて良かったです」

「まさか冥府タルタルの門タルタルが関わつてるとは思いませんでした」

「冥府タルタルの門タルタルが……そこは評議会が扱つてくれよう。とにかく仕事はひと段落じゃ、報酬はこれ。それと近くに秘湯があるんじや、寄つてきなさい」

「ありがとうございます」

ひとまず仕事は終わった。日が沈むのに合わせてやってきたのはウォーロッドが話していた秘湯だ。様々な効能があり、仕事の疲れを取るのに最適だ。カノンとユリアが入っていると、そこにやってきたのはナツとグレイだ。実は混浴である。

「あら、二人とも来たのね」

「偶には温泉つてのも悪くないからな」

「混浴みたいだな」

「ルーシイ達知つてるかしら？」

「知らねえんじやねえか？俺たちもさつき知つたからよ」

しばし団欒していると遅れてやってきたのはルーシイ達だ。秘湯の絶景に息を呑むばかりだ。

「わあ、すごい！」

「まさに秘湯ですね」

「見事なものだ」

「仕事終わりの温泉も良いものだね」

「あら、エルザ達も今到着？」

「シリルとユリアも来てたのか。む？」

「混浴なんだと」

「なるほど、そういうことか」

エルザはすっかり馴染んでいたが、ルーシイとウエンデイは恥ずかしがっていた。そこにやってきたウォーロッドによってようやく混浴である事実を知り、衝撃を受けていた。こんな団欒とした仲間の空気をウォーロッドは楽しんでいた。

「ほっほっほっ、仲間とは良いものよな」

「もしや……」

「そう、私もかつては妖精の尻尾フェアリーテイルに居て、メイビスと共にギルドを立ち上げた初期メンバーわっしといった所じゃ」

「なっ!？」

「私達の大先輩なの？」

「どおりでマスターが……」

「君達が私の家を訪れた時、心の底から若き妖精達に会えて嬉しかった」

初代マスター、メイビスの唱えた和の精神。血より濃い魂の繋がりが脈々と受け継がれている。仲間とは言葉だけではなく心、それが体現されている。苦しい時も悲しい時も仲間は近くにいる。

「初代の言葉ね。なんだか感慨深いわ」

「それじゃあ、じっちゃんより長生きなのか。ならゼレフ書の悪魔ENDも知ってるのか？」

「END終焉とな……済まぬが分からん。しかし昼間に冥府タルタロスの門と聞いて、思い出したことがある」

冥府の門は正体が一切分からない。ギルドの構成員数、所在地ともに不明。だがしかし時として、集会の目撃情報上がる事もある。その集会はまるで悪魔崇拜だと。更にはイシユガルの四天王の推察ではあるが、強力なゼレフ書の悪魔を所有しているのではないかと予想される。それこそがゼレフ書の悪魔ENDではないかと。

「くっそー、そう簡単には分からねえか。冥府タルタロスの門の奴ら、見つけたらとっ捕まえて情報

を吐かせるしかねえか、こんな感じにボコボコにしてよ！」

「な、ナツ！」

「おいおい、ナツ……エルザが」

「あ？」

「ほう……」

「……やべつ」

|| || ||

一方その頃ミネルバはギルドに戻ってきた。しかし人っ子一人居らず、床には布の様なものが散乱しており、机や椅子も倒れている。

「な、なんじゃこれは……皆、どうしたのじゃ！皆どこに消えて……この布の様な物は一体？」

「人じゃ」

「人!？」

「此方の魔は人を強化する。だが、強化に値せぬ者は皆、そのような姿になる」

「何者じゃ」

「此方はキョウカ、冥府の門タルタロス九鬼門が一人じゃ」

冥府の門の中でも実力者である九鬼門の一人が、ミネルバのギルドメンバーを布のよ

うな姿に変えた。その理由は、兵を集めるためだと言う。

「集めるべき兵を犠牲にするとはとんだ阿呆のようじゃな！」

「強化に適応できぬ兵は要らぬ。そなたはどうであろうな？」

「何を、やめ……！」

＝＝＝

「何、あのミネルバが闇ギルドに？」

「はい」

「闇ギルドで頂点を目指すとかどうとか」

「むう、何も闇に落ちずとも良いものを。ミネルバの父は？セイバートゥース 剣咬の虎の前マスターの」

「会わなかったわ。どこかに行方を眩ませるとしか……」

「ステイングにも、このことは伝えておきます」

ギルドでは普段通りの騒ぎの中、ミネルバのことやゼレフ書の悪魔ENDについて話し合われていた。ENDに関して詳しいことは記されていないが、ララバイやデリオラとは比較にならない悪魔らしい。

「ゼレフ書の悪魔の中でも格別ってことね」

「そもそもゼレフ書の悪魔とはなんだ？」

「知るかよ」

「ゼレフが生み出した悪魔のことよ。その召喚法を書物にまとめたものがゼレフ書の悪魔よ」

「その中の一つがENDって訳か」

「なんだか不気味な感じだね。ナツのお父さんが倒せなかったって……」

END、それは竜達に繋がるかもしれない話だ。一つでも多く情報が欲しいところだが、詳細は不明である。そんな折に駆け込んできたのは、魔法界を揺るがすニュースだった。

「大変だー！ビッグニュース！」

「なになに、何事なの？」

「それが、評議会が！」

「落ち着いて。評議会がどうしたの？」

「爆撃されて崩壊したんだ！」

「そんな!？」

「ほら、新聞に書いてあるんだ！」

新聞によれば死傷者は100人以上、犯人は生き残った人によれば冥府タルタロスの門だと言う。襲撃理由はまだ不明、9人の評議員全員が死亡とある。魔法界史上、類を見ない大規模な事件となった。

「酷い話ね。なんでまたこんなことを」

「思い当たる理由がありすぎて、見当がつかないわ」

「どうする？一回訪ねてみる？」

「待つてくれ、シリル」

「フリード、どうしたの!？」

フリード達が満身創痍な状態で帰ってきた。息も絶え絶えで、苦しそうな表情を浮かべている。ポリーリュシカも呼ばれ、治療にあたった。話によれば冥府タルタルロスの門の襲撃を受け、ラクサスら5人が魔障粒子にかかったと言う。それは魔道士にとっては命取りな魔力欠乏症や魔障病の原因でもある。

「ポリーリュシカ、シリル！ラクサス達は無事なんじゃろうな、おお!？」

「最善は尽くしたわ、でも……」

「ギリギリの状態だよ。魔障粒子自体少量でも危険なものだ」

「私達で出来るだけの治療はしたわ。でも、ラクサスが特に酷い状態で、生きてるのが不思議なくらい」

「こんな事、許せないわ」

「じつちゃん、戦争だ!」

「皆同じ気持ちよ。でも相手の行方が分からないわ」

「本部の場所は評議会ですら把握してないんだよ？」

「奴らの次の狙いはおそらく元評議員ね。ヤジマさんを狙ってきたから」

「それなら評議員を引退した者を警護すれば情報が引き出せるかも」

しかし元評議員の住所は闇ギルドの襲撃や恨みを晴らす目的の攻撃を避けたりするため、原則非公開だ。手詰まりかと思われたが、ロキが数名の住所を知っていると聞き合っている女性の何人かが元評議員の家族だからだ。

「よし、ロキの情報から4名の現住所が判明したわ。ここからはチームに分かれて警護に行こう」

「口はかたいと思うが、少しでも情報を引き出すように。他の評議員の住所や狙われる理由などじゃ」

「もしラクサス達を襲った者を見つけたら慎重に血液を取ってきな。ワクチンや血清が作れるかもしれない」

「ラクサス、仲間を守ろうとした貴方の行動に敬意を表するわ。後は任せて」
「私たちは貴方達の仇を取ってくるよ」

評議員の無事と情報を確認する為に複数のグループに分かれた内、ルーシイ、ナツ、ウエンデイ、ユリアは孫のミケリアと共に暮らすミケロの家を訪ねて事情を説明していた。今では元評議員が冥府タルガロスの門に狙われていること。目的は不明で、大変危険な状況で

あること。そのためこれから警護にあたることなどだ。

「そうは言うが、それではまるで私が囷ではないか」

「囷じゃないわよ。どのみち狙われてるんだから」

「何か狙われる理由に思い当たる節は？」

「多すぎて分からんよ。闇ギルドの報復から取引に利用するまで様々考えられる。いや、待てよ。もしやフェイスでは……」

「っ、全員伏せろ！」

ナツが叫び、全員その場に伏せた瞬間家の上部が吹き飛び、爆破された。突然の事態に驚きしかない。爆風はナツの腹の中に収まり、怪我人は出ずに事なきを得た。そこに現れたのは1人の男だ。

「おろ？ 思ってたより人が大勢おるわ。全員吹き飛んだと思うたんやがな」

「貴方何者？」

「冥府の門の一人じゃないかしら」

「なんや、もう割れとんのかいな。何者や」

「妖精の尻尾だ。始めるか、冥府狩りをよ」

第71の唄 攻めよ妖精たちよ

「なんや、魔道士かいな。邪魔すな」

「テメエらの好きにはさせねえ」

「邪魔したところで俺の爆破呪法の前では無駄やのになあ」

「爆破の呪法ってことは、もしかしてこいつが評議會を襲ったの?」

評議會を襲い、現評議員全員を亡き者にした男。それこそが今日の前にいる冥府タルタルの門九鬼門の1人、ジャツカルだ。そんな男が皆の目の前で、逃げようとしたミケロらを牽制するかの様に関係の無い街を気まぐれで爆破してみせた。建物が次々と爆破されて、住民は慌てふためくばかりだ。

「なんで関係のない町を!」

「テメエ、何しやがる!」

「突っ込んでくるか。爆!」

「爆風が直撃!?!」

「大丈夫、ナツに熱系の力は効かないよ」

爆風をものともせず、それを喰らい尽くし、火の弾丸と化したナツは隙を与えず猛攻

を加える。何か喋りかけたジャツカルを全く意に介さず、ひたすらに鉄拳をぶつけていく。遂には目的を聞く前に気絶させてしまった。

「やりすぎよナツ」

「気絶されちゃ、情報が取れないよ。それに何か言いかけてたじゃない」

「やっちまった、本拠地とか目的とか吐かせなきやな」

「（此奴らの狙いはフェイス、評議会の白き遺産ではないか？ そうだとしたら大変なことになるぞ……）」

白き遺産フェイス。その存在を知っている者は評議員でもごく少数であり、冥府タルタロスの狙いそのフェイスであるなら評議員の誰かから情報が出回った事になる。だがその出所は不明である。しかも、もしフェイスを使われたら魔法界に大きな影響を及ぼしかねない。

「こうしてはおれん。わ、ワシは他の評議員が無事かどうか確認してくる！ ミケリア、着いてきなさい！」

「なあ、本当に何も知らねえのか？」

「知らんわ！」

「怪しいわね」

「ほんまに何も知らんのかいな？ 何か『良いこと』教えてくれたら、殺さんかもしれんの

やが」

「何も知らん！本当に何も！」

「あ、そ。じゃあ始末せないかな」

「何をしておる、起きたではないか！倒さんかバカもの！」

「つたく、仕方ねえな」

ミケロの怒りに呆れながら再び立ち上がったジャツカルを倒しにかかる。そんなナツにジャツカルが質問してきた。

「なあ、そこのお前に聞きたいことがあんねん。さつき俺に何回触れた？」

「あ？何のことだ？」

「俺の呪法は触れたものを爆弾に変えられるんや。もういつペン聞くで、何回俺に触れたんや？」

「っ！何だこれ……離れろ！」

「ちよっ、ナツ！」

「良いから離れろ！」

離れた瞬間、ナツを中心に爆発が起こり、ナツは意識を失って倒れた。ミケロはこの惨状を目の当たりにして恐怖に怯えてしまった。ついには恐怖のあまり皆を放って逃げ出してしまふ始末だ。

「逃がすかいな！」

「行かせないわ、スコープオン！」

「ウィーアー、サンドバスター！」

「へっ！」

「今のうちに、天竜の咆哮！」

「甘い！」

「爆風で魔法をかき消すなんて……」

「近づけないってのに」

「魔道士ごときが呪法に勝とうなんざ無理な話や。爆螺旋！」

「きゃあ！」

「ルーシイ、ウエンデイ！くっ、ここは私が！」

爆裂呪法の前に為す術なくやられた味方に代わってここで留め置かなければならぬ。ユリアの孤独な戦いが始まる。例えなんと言われようとここで退く訳にはいかな
いのだ。

「さっきの2人みたく倒れとけや」

「そうはいかないわよ。毒炎弾！」

「何度やっても無駄や、爆！」

「くっ……単発がダメなら連続攻撃で！ 双炎剣、くらってけ！」

「ぬおっ！」

「まだまだあ！」

「けっ、鬱陶しい！ 爆！」

「炎の壁で、防ぐ！」

爆破には似た属性である炎でもって相殺し、ダメージを少しずつ与えていく。攻めては毒や火など様々な属性の力でもって攻めるが、応えた様子もない。

「爆！」

「はあっ！」

「やるやないか。せやけど無駄や！ 爆螺旋！」

「うわあ！」

「やっ倒れたわ。ほな、さいなら」

「ユリア、立てる？」

「なんとか……あいつ、追っかけなきや！」

「ナツの回復はウエンディがやってくれてるわ」

ユリアも善戦したものの、一歩及ばずここでノックダウンとなった。それを見届けたジャツカルは逃げたミケロを追っていく。街の方で逃げたミケロを見つけたのだ。

「ひいい！」

「見つけたで、じいさん。目的の為にもお前を逃がすわけにはいかんのだや」

「や、やめろ！ワシはただ、孫と静かに暮らしたいだけなんじゃ！」

「その孫を置いて逃げといて、そらないで」

「開け……」

「おっと、もう来たんかい。せやけど、そこには地雷呪法を仕掛けてあんねん」

「じ、地雷!？」

「せや、動けばドカンや」

「私を忘れちゃ困る、ソウル・フレア地獄の業火！」

「んなっ!？」

戦うのは1人じゃない、2人で協力している。奥義とも言える一撃を放ったが、少し応えた程度で傷を少々つけた程度で済まされてしまう。

「痛え……やるやないか」

「耐えたか」

「次動いたらあの地雷がドカンや。仲間を犠牲にしても俺を倒すか？それとも仲間を守って俺を見逃すか？さあどうする、フェアリーテイル妖精の尻尾う！」

「誰が逃すかあ！」

「ごはっ!？」

「ナツ!」

「やった、地雷が解除できた!」

回復されたナツが突撃して吹き飛ばす。また触れた事で爆発すると忠告されたが、対処法は掴んだともものともしない。炎や爆風に耐性のあるナツだからこそ出来る対処法でもって耐え切る。

「爆風に耐えたやと!？」

「なっ、言っただろ?」

「んなアホな……なんちゆう奴や。何者やお前」

「妖精の尻尾のナツだ!」

怯え始めたジャツカルにとって爆発へのコツを掴んだナツは恐怖でしかない。爆風をものともせず、殴りつける。遂にはナツへの余りの恐怖と痛みから来る狂気に当てられ、ジャツカルは本性をあらわした。狼とも取れる姿に変貌したのだ。

「人間が悪魔に勝てると思うとるんやったら大間違いや、コラア!」

「悪魔、もしや全員が悪魔なの!?! まずい、援護に入るよナツ!」

「滅べ人間ども! 邪魔だてするなや!」

「俺たちは仲間のために戦う! ラクサスの力を使う、手エ貸してくれユリア!」

「うん、任せて！燃える闘志を体現せし、業火滅却！」

「雷炎竜の撃鉄！」

地獄の業火と雷炎竜の奥義でもって吹き飛ばし、勝利の鬨をあげる。ナツは爆風に耐えられるとはいえ、ダメージは大きく、ここでダウンしてしまう。

「なんとか勝てたわね」

「ここで情報を引き出そう」

「くは、くはは……ほんま参ったわ。ここまでポロポロにされるのは初めてやで」

「な、何を！」

「まさか自爆?!」

「もう手遅れやで。街ごと巻き込んでやる（済まねえ、キョウカ。俺もここまでや）」

「……そうはさせない。木術・大樹の法！」

「なっ!?ち、ちくしよう！」

大樹の力で遙か上空に押し上げられ、街の爆破は阻止された。カノンの援護は街を救い、ナツたちも守った。嫌な予感がして、急いで来たところだった。

「ありがとうシリル」

「礼は良いわ。他の評議員の安否を含めて連絡しなくちゃいけない」

「そうね」

『ルーシイ、そっちの様子はどうじゃ！他の評議員は全員やられておったわ！』

「マスター、ミケロ老師は無事よ」

敵の目的は評議員全員の命だ。その理由としてミケロ老師が話したのは評議会の白き遺産、フェイスの発動にあるという。その正体は魔道パルス爆弾であり、発動すれば大陸中の魔力を消滅させる兵器だという。3人の元評議員と生体リンクを繋ぎ封印しており、元議長のみがその3人を知っているという。だから評議員の命を狙ってきたのだ。

「元議長の命が危ないな」

『誰か向かっておるのか！』

「エルザとミラジエーンが向かっている。私もすぐに向かうわ」

連絡を終えて急ぎ残りの元議長の家に向かうと、そこには空の家と荒らされた部屋だけが残っていた。先発隊として向かったエルザとミラジエーン、そして元議長の姿が見当たらない。

「あれ、いないわ」

「どこかに行っちゃったのかな？」

「微かに匂いが残ってるがな。睡眠薬の匂いもある」

「睡眠薬を使う状況、もしかや元議長は敵なのか？」

「それならフェイスの情報タルタロスが冥府の門タルタロスに知られたのも納得できるよ」

「私はこのことをギルドに知らせる。ナツたちはどうする？」

「後を追う、それだけだ」

「分かった。気をつけてね」

|| || ||

「……というわけなのよ」

「元議長が裏切っていたとは」

「本拠地も割れてない以上攻め込む手段がないわ」

「み、見つけたよ。敵の本拠地」

「ハッピー！ナツはどうしたの？」

「そ、それが敵に……」

帰還して状況を説明しているとナツと共に殴り込みをかけていたハッピーが戻ってきた。曰く空中都市が敵の本拠地である事。ナツやエルザ、ミラジェーンが囚われている事が伝えられた。

「動く空中都市に囚われてるねえ……通りで評議会にも本拠地が見つからない訳ね」

「エルザもミラも捕まったのか」

「ナツまで……」

「方向は分かる？」

「あつちから来てそつちに動いてたよ！」

「よし、計算して場所を特定するよ！」

「お願い！仲間の命がかかっているわ！」

いざ本拠地に殴り込みをかけようと意気揚々としていたところに、エルフマンが憔悴しきつている状態で帰ってきた。

「エルフマン！リサーナは、評議員はどうなったの？」

「リサーナは捕まっちゃった、評議員も命を落としちゃった」

「なんでだい。獣ビーストになれるあんたがそう易々と敵を逃がすとは思えないね」

「おいカナ！」

「……少し休ませてくれ」

「(様子が少し変ね。仲間にするのも嫌だけど警戒するしかないか)」

|| || || ||

「あんた、シリルが様子が変だった」

「何よその魔水晶ラクリマ？」

「来るな、来るなあ！邪魔をするな！」

「この鼓動、まさか爆弾!？」

「まずい、時間が……」

爆弾の発破しそうな状況下で、カナはとある魔導士から教わったというカード魔法でもって皆を封印し、ハッピー達に運んで貰う事でギルドが爆発されたものの、直撃からは逃れられた。

「まさか全員をカードに封印するなんて」

「ハッピー達に運んで貰えば敵ギルドまで一気さね」

「よし、着いたよ！」

「全員カードから解凍！妖精の尻尾、出陣の時間だ！」

「エルフマン、正気に戻った？操られてたみたいね」

「俺は、ギルドを……なんて事を」

「ミラ達を助けるんだ、まずは立ちな」

「さ、行くよ！冥府タルタロスの門との全面戦争だ！」

第72の唄 悪魔たちと魔を交える

「くそ、敵が多い！」

「こつちには負傷者もいるってのに！」

「突破口さえあれば入れるんだがな！」

「ミラ達の命もかかってる！押し切るしかねえぞ！」

「こうなったら突破口を作るしかないわね。私の力があれば……」

「待て、地面が！」

敵の本拠地に入り込んだのは良いものの、侵入路が見つからず、戦闘のできないラクサス達を背負いながら敵の対処に迫られていた。そんな最中に突如として地面が盛り上がり、突き抜ける様にキョウウカを攻撃しながらエルザが出てきた。

「エルザ、無事だったのか！」

「なんだこれは、重力が……」

「詳しいことは分からないけど、この面の重力が本来とは逆になってるの」

「とにかく突破口が出来た！突入せよ！」

「ナツとりサーナは無事だ。後はミラを！」

「わかった。必ず姉ちゃんは助け出す！」

エルザの作った突破口を元に次々と中へと突入していく。フェイスの封印が解かれ、その解除法を探ってくるようにすること、それとラクサス達を助ける為の敵の血液を忘れないようにと伝え、キョウカの相手をエルザとカノンが務める。

「私はエルザの援護に回る。ミラ達の事は任せたわ、ユリア」

「分かった。気をつけてね、姉さん」

「すまないなシリル、お前を巻き込んでしまったて」

「1人より2人で相手した方が良いからね。気にしないで、私の意思だから」

「豊命神カノンと妖精女王テイターニアが相手か。くくく、実に面白い。此方の血が沸るのは久方ぶりぞ」

「相手が誰であろうと容赦しないわ。血縛鎖牢！」

「ふんっ！」

「弾かれた……気功掌！」

「つえあー！」

手を鞭の様に振り回し、血の鎖を弾き、気功の攻撃も霧散させて見せる。更に剣の様に柱を切り裂き、ブロックにして投げ飛ばしてくる。それを弾いたり打ち消したり、切り裂きながら突き進んでいく。

「其方らとの戦、楽しめそうだ」

「こつちは楽しむつもりは一切無いのよ。気功掌！」

「黒羽月閃！」

「せいっ！」

剣戟に砲弾、鞭に斬撃と様々なものが飛び交う。だが、互いに大きなダメージを与えられない。しかもキョウウカはまるでこの戦いを楽しむかの様に戦っている。

「まだまだこれからぞ」

「厄介な奴だな」

「もつと連携して攻めるしかないわね」

「私が前に出る。シリルは援護を頼む」

「ええ、任せて」

「飛翔・音速の爪！」

「速かろうとも捉えられぬ訳ではない！」

「エルザ、避けて！砲術・神ディオ・アモレの愛！」

「ぬおっ！」

「危ないではないか、巻き込まれるところだったぞ」

「悪かったわ」

「流石女神を名乗るだけある。なかなかの威力だ」

「頑丈ね、貴女も」

全力で放った砲撃もダメージがあつたものの、耐え抜いてみせた。流石は冥府タルタロスの門の九鬼門であり、実力は一流と言える。だが妖精フェアリーテイルの尻尾としても負けられない、退けない理由があるのだ。

「面白い、実に面白い。此方を楽しませてくれる」

「その強気、いつまで持つかしら」

「行くぞ、天輪・五芒星の剣！」

「見切った！」

「気功掌！」

「はっ！」

攻防が続き、一進一退の硬直状態が全くとけない。互いに小さな傷が増えていく中、キョウカが何かを察したのか、撤退を開始した。それを逃すまいと追いかける。

「（魔力が消えてない。まさかフェイスの発動が失敗したのか？）ここは任せたぞ」

「言われなくとも」

「お前は!?!」

「ミネルバ！」

「ネオ・ミネルバじや。悪魔として転生した力を見せようぞ」

|| || ||

「この程度の雑魚なら楽勝よ！冥府神の大声！」

「ぐえあ！」

「ぎゃあ！」

「ミラ達はどこにいるの？」

「銀髪の女なら、あつちの部屋に……」

「ふむ、ありがとう。寝てなさい」

冥府タルタルの門奥深くまで辿り着いたユリアは敵を薙ぎ倒しながら突き進んでいた。そんな状況で敵から情報を受けつつ進むと、ようやくミラとリサーナに遭遇できた。

「ミラ、リサーナ、無事で良かった！」

「ユリア！」

「どうやってここが？」

「倒した敵に聞いてね」

「そうなんだ……エルフ兄ちゃん、捕まってるかも」

「大丈夫、さつきまで一緒だったから」

「その通りですわ」

「誰?!」

再会を喜ぶ3人のもとに現れたのは九鬼門の一人で、エルフマンにギルドの爆破を命じたセイラだ。エルフマンに命令の呪法を使い、ギルドの爆破に成功したものの、誰一人巻き込めなかった事を嘆いている。

「あの男のせいでキョウウカ様の前で恥をかきましたわ。この怨み、姉の死でもって償おうか」

「貴女が私の弟を……へえ?」

「あの爆破、そういうことだったのね。仲間に出した以上容赦しないわよ」

「その人、色んなものを操ってくるから気をつけて!」

「本まで操るなんて……冥府神の大声!」

「道が出来たわ、はああ!」

「ぐっ!?!これでどうです!」

「うわっ!」

「はあ!」

本や落ちているブロックなど様々なものを操り、飛ばしてくる。しかもこの部屋は研究室である為、彼女が武器として使える無機物が多く存在しており、有利だ。だが、2人での協力プレイでどうにか凌いでいる。

「我らはゼレフ卿の元に還る為に戦っているのです。邪魔はさせませんわ」

「こつちも仲間の為に戦ってるの。負けられないわ」

「ゼレフの盲信者ね……死の恐怖を刻み込まん」

「術式!?! いつの間にな!」

「動きながらよ。天照二十八式!」

ハデスも用いた天照術式を発動し、大規模な爆破を伴う攻撃を放った。だが、煙が晴れるとそこには傷だらけになりながらも立っているセイラの姿がそこにあつた。

「無事なんて……頑丈だよ」

「まさか、私の命令^{マックロ}が効かない相手が2人もいようとは」

「命令^{マックロ}?」

「多分エルフマンを操ってた呪法じゃないかな?」

「この呪法の支配下に一度でも置いた者は、いつでも遠隔操作できますわ」

「まさか!?!」

「今すぐ弟を自害させられますの……ん?」

能力の使い方について伝え聞いたところで、誰かにやられたのか九鬼門の1人エゼルがカプセルに傷だらけの状態で現れた。少女にやられたと言っていて、妖精^{フェアリーテイル}の尻尾の中ではおそらくウエンデイの事だと思われる。しかし気になる言葉が出てきた、復活だ。

「復活？」

「そう、ここは我々冥府タルタロスの門の再生地点『ヘルズ・コア』ですわ。例えやられても、ここ
で再生する。私たちは不死のギルドなのです」

「じゃあまずはここを破壊したほうがいいわね」

「まさか、そんなことできる訳……」

出来ないと思われるたカプセルの破壊だが、ミラにはそれが出来るという。実のところ、このカプセルは悪魔の力で成り立っている。つまり、接テイクオーバー収して破壊を命ずればこ
こを壊せる。それを成してみせたのだ。復活途中にあったエゼルらは木っ端微塵に
散ってしまった。

「こうなったら最後の手段を……命令する、私の制御リミッターを解除せよ！」

「変身した！」

「おおっ！」

「くっ、接収ができない!? きゃああ！」

「ミラ! この！」

「しえあ！」

「パワーが格段に上がってる! なんとか抑えて……地獄ソウル・フレアの業火！」

悪魔と化したセイラを抑え込むのもやっとで、分身を使って抑え込み、秘技をぶつけ

てみたものの、まるで効いてないかの様にケロツとしている。

「くっ、大したダメージになつてない」

「この状態の私に勝とうなぞ無謀ですわ。はあっ！」

「きやあ！」

「うわっ！」

「接 テイクオーバー 収さえ出来れば！」

「無駄ですわ」

「それはどうかしら？ ふんぬっ！」

「な、何を！」

「私の力で貴女の接 テイクオーバー 収を受け付けない體質を『殺す』わ」

「ぐっ、身体が熱い！」

「ありがとうユリア。お陰で能力を少し接 テイクオーバー 収出来たわ。命ずる、『エルフマン、家族を

守って！』

「うおおっ！」

「ガハッ！」

「姉ちゃん達は俺が守る」

敵の命令する能力と、一度支配下に置いたらいつでも命令できる効果を応用し、

接テイクオーバー 収してエルフマンを呼び寄せて奇襲作戦に出て、見事セイラを倒してみせた。

「なんとか倒せたわね。最後の方なんて分身してやっと抑えられたよ」

「私も魔力がほぼゼロよ」

「危なかった……」

「とりあえず皆と合流しよう」

「そうね」

＝＝＝

「せい！」

「はあっ！」

「流石は妾の見込んだ者たちじゃ、我が力を存分に使えようぞ」

「私達、貴女と遊んでる場合じゃないのよ」

ネオ・ミネルバと激しく争うエルザとカノンは連携しながら攻めるが、領域テリトリによる瞬間移動や入れ替わりによって攻めあぐねていた。その時、ウォーレンの念話が聞こえてくる。

『皆、聞こえるか！』

「（聞こえてる、何かあったのか）」

『ミラとりサーナ、エルフマンは無事だ。ユリアもここにいる』

「(良かったわ、無事だったのね)」

『ウエンディとシャルルがフェイスを止めたわ。敵の計画もここまでよ!』

「(流石だな)」

更にハッピーから告げられた言葉に二代目マスターのハデスが光を解き放つようにとあった。これはマスターしか知らない極秘魔法が関わっている。そんな中、急にウオーレンが苦しみ出した。

「ウオーレン、どうした!」

「雑音が急に!」

『魔道士ギルドの妖精の尻尾、フェアリーテイルだったかな?』

「念話ジャック!? 誰!」

『冥王マルド・ギールだ。だが覚える必要はない、貴様らに明日はないのだからね。アレグリア発動』

なんと拠点が生物となり、体内にいる様々な者を取り込むのだ。取り込まれる喜びはアレグリア敵味方問わずあらゆる者に対して発動される。

「な、なんだこの壁は!」

「エルザ! くっ、吸い込まれる!」

「妾の獲物に何をするか!」

「これ、離れない！どうなってるの!？」

妖精の尻尾はこれで壊滅したかに思われてたが、何と一人だけこれを逃れた。幸運か
凶運か、その一人とはルーシイだった。

「あいたたたつ。あれ？ナツ、どこ？」

第73の唄 フェイス発動、そして……

「何これ、どうなったの？皆どこに……きゃ！何の音よこれ！」

敵の術、アレグリアに一人取り残されたルーシイは途方に暮れていた。奇怪な叫び声の中でどう行動すれば良いのか考えあぐねていた。そんな中マルド・ギールの念話が響く。

『皆の者、敵はアレグリアで殲滅し、フェイス計画も順調に進んでいる。だが、アレグリアから逃れた者が1人いる。その人間を倒した者は欠番となった九鬼門に昇格、九鬼門が撃破した場合は褒美を与えよう』

「（フェイスはウエンデイ達が止めたはず。どういう事？）」

「いたぞー！」

「あいつを倒せば九鬼門に昇格だ！」

「落ち着いて状況を把握してる場合じゃなさそうね。ていやっ！」

状況を理解できる間もなく、大勢の敵を前に一人奮戦しなければならぬ。サジタリウスの弓や、手持ちの鞭を使って、どこからともなく流れてきた水流の上で迎撃していく。しかし敵の数が多く、サジタリウスを一度引っ込め、移動に専念する。

「ふあつふあつふあつ。あいつを倒せば私が九鬼門昇格」

「昇格や褒美などどうでも良い、任務を遂行するまでだ」

「まずっ！バルゴ、ロキ！」

「任せてよ」

水中を移動してきたトラフザーと、回転しながら登場してきたラミーの相手をロキとバルゴに任せるが、二人の魔力消費量は多く、ルーシイの魔力は限界を迎えつつある。そこに現れたのはナツ達によつて倒されて爆破した筈のジャツカルである。

「見つけたでえー！」

「（あいつ、確か爆発したはず……そっか、復活できたのか。こっちは2人以上の召喚はできない）あたしがやらなきゃ！」

「オレの呪法、忘れた訳やないやろなあ？」

「うわっ！」

「あの火の玉や女神に復讐しようにもいねえんじややり様がないわ！せめてテメエの命で恨みを晴らしたる！」

ナツやカノンの居ない今、ジャツカルが鬱憤を晴らすにはルーシイを集中的に爆破する以外方法がない。だがルーシイもここで折れるわけにはいかない、何故なら仲間達の命がかかっているからだ。

「このままじゃ皆がー! あああ!」

「姫、いけません!」

「三体目の召喚をする気がい!」

「開け宝瓶宮の扉、アクエリアス!」

「無茶しやがって」

「おっと、おどれらはここまでやで。爆!」

「ぐつ、たつた一撃で……」

「済まない、ルーシィ……」

「後は任せろ。おらあ!」

やられた星霊の代わりに全力の水流で攻撃する。ジャツカルはこれで動きは封じられたが、トラフザーは水流を物ともせず接近してくる。水中を主戦場としていてるだけあって、急接近する。だが攻撃の寸前で接近を阻止した者がいる。カノンだ。能力を作らせ、生物であるこの島のアレグリアの状態から通り抜けてきたのだ。

「アクエリアス、ルーシィ。ここはどうか抑え込むから、打開策をその間に閃いておいてよ」

「方法がない訳じゃない。だが、それにはこいつの協力が必要さ」

「え、あたし?」

「そう。私の力とカノンの力があっても抑え込むのに必死だ。そこで出来る手としてあるのが、星霊王の召喚だ」

「そんな、星霊王の鍵なんて持ってないわよ！」

それもそのはずだ。星霊王には特定の鍵という物質は無い上に、金の鍵を一つ犠牲にして行う代替召喚しか手はないからだ。この状況下、星霊王の力を借りなければ切り抜けれないが、星霊を大事に思うルーシイにとっては星霊との別れを伴うこの選択は、過酷な選択だ。

「くっ、1人倒せたけど流石に複数人相手にするのはきついわね」

「急ごうか。ルーシイ、代替召喚には金の鍵の破壊を伴う。そこでだ、私の鍵を壊せ」

「嫌よ、そんなの！なんでまた！」

「こいつにはもう一つ条件があつてね、召喚者との相性が必要なのさ。他の鍵じゃ不足でね」

「嫌よ。貴女とは長い間一緒だったのに！」

「駄々こねるな！早くしないとカノンがやられちゃう！」

「私はまだ持つ。判断が難しいのは分かる。だから少しでも時間を稼ぐよ！気功掌！」

2人を同時に相手をしている合間にも作戦を遂行するか否かで迷いが生じている。しかしここで星霊王を召喚しなければ仲間の命も守れない。

「うう……」

「ルーシイ！危ない！」

「えっ？きや！」

「ぐっ……危なかった」

「シリル、なんで……」

「仲間だから守るのは、当然でしょうよ」

「ごめん……開け！」

「（そうさ、それでいい）」

「星霊王の扉！」

「（これでお別れだな。母のレイラと違ってお淑やかさも気品もなかった小娘で、大嫌いだったのに……なぜか別れが辛いな。ありがとうルーシイ）」

アクエリアスの金の鍵が破壊され、水が退いていく。すると大きな衝撃と共に島が切り裂かれ、砕け散っていく。その一撃は星霊王の剣によるものだ。

「鍵が壊れてる。星霊王、召喚したの？」

「うう、うわあー！」

「こうなったら何か起こる前に爆破したるわ！」

「水のボール!? もしやこれは……」

『それはアクエリアスの魔力を付与せし物。立て、古き友よ』
「……はいっ！」

別れの辛さから来る涙は後でも流せる。今は仲間の為に戦う必要がある。秘術であるウラノ・メトリアを発動すれば一人は倒せるだろう。その為にはカノンが時間を稼ぐ必要がある。

「シリル、ありがとう。少しだけ時間を頂戴ね」

「体力的に倒すのは厳しいけど時間稼ぎなら任せて、木術・木竜顎！」

「なんやこれ、噛みついてくるやと！爆！」

「木術・連木槍！」

「爆、爆、爆！鬱陶しいわ！」

「出来た、行くよ！全天八十八星、光る！ウラノ・メトリア！」

「ぐあああっ！」

星々の煌めきと共にジャツカルを討ち果たした。しかし今の一撃でルーシイの魔力は使い果たされ、倒れ込んでしまった。

「よし、倒せた……」

「ルーシイ、大丈夫!？」

「まさかジャツカルがやられようとは。禍根はここで断たねばならぬ！」

「させないわよ、気功掌！」

「ぬっ、まだ抗うか。ならばまずは、貴様からだ！」

「させるか！」

「皆！」

凶刃が迫るが、ガジルにグレイ、ジュビアにナツが復活して駆けつけてきた。皆が無事だったのは星霊王の魔法によるものだ。即ち、ルーシイの影響で助かったのだ。ここはナツ達に任せ、カノンはエルザの元に戻ることとした。

＝＝＝

「妾は、妾は最強でなければ！」

「いい加減、目を覚まさぬか！」

「ぐはっ！」

「大魔闘演武での振る舞い、納得はできませんが理解はできる。全てはセイバーの為ではなかったのか！お前を殴る拳が泣いている、こんな戦いに意味はあるのかと」

「……分かっておる、分かっておるわ。これも全て妾の弱さ故じや。もうこの体では生きていけない、いっそのこと殺してくれまいか」

「だめだ。お前を待っている者がいる事を忘れるな」

エルザと戦っていたミネルバは己の弱さを悟ったのか、ミネルバは自分を殺すように

と伝えたが、剣咬の虎にもまだ自分を必要としていてと感じていたエルザはそれをしなかった。そこに現れたのは星霊王による石化から復活したマルド・ギールだ。

「やれやれ、これだから人間は」

「何者……（いや、この声は確かマルド・ギールか？）」

「目の前のゴミは片付けなければな」

「な、なんて迫力だ」

「まずは一人」

強力な呪法を持つマルド・ギールの力がミネルバを襲い、助からないかと思われた。しかし彼女を助け出した存在がいる。ステイングとローグだ。

「遅くなっちゃまったな。迎えに来たぜ、お嬢」

「あなたの家は剣咬ギルドの虎だセイバートゥース」

「ほう……」

「ステイング、ローグ、何故ここに？」

「手紙をくれたのはエルザさんじゃねえか」

「何のことか理解するのに時間を要したが」

「ま、いいさ。お嬢、ギルドに帰ろうな」

「帰る？ フェイスで魔法が消え去る目前だ、好きにするがいい」

「エルザさん、行つてくれ。フェイスを止めるんだ」

「こいつは我々で食い止める」

「相手は強敵だ、気をつけてくれ」

「なあと、ナツさんほどじゃねえさ」

双竜の連携を前に手に持つENDの書を下ろさずに、互角に戦うマルド・ギール。一進一退の中、大樹がお互いの間に割つて入つてきた。カノンの操る木術の法だ。エルザを追つてやつてきたが、入れ違いになつてしまったのだ。

「あれ？ここにエルザがいない？」

「カノンさん？」

「ステイングにローグじゃない。エルザの行方、知らない？」

「さつきお嬢とあつちに行つたさ。急いだら間に合うんじゃないか？」

「そう、ありがとう。でも、あいつが通してくれなさそうね」

「カノン？なるほど、あの女神か」

「ここは協力してあたりましょ」

「そうだな」

ここは共同で対処する事こそ肝要と判断、合同であたる事にした。レーザーに強化した鉄拳、斬撃が飛び交い、休む間も無い連携で攻め立てるが、一向に応える様子もない。

「気に入らん。滅竜と神々の系譜の魔を使うとは」

「こつちだつて気に入らねえんだよ、仲間を傷つけやがつて」

「これ以上好き勝手させないつもりよ」

「かかつてこい。このマルド・ギールが相手をしよう」

例え相手が格上であろうとも止まる事なく攻め立てる。拳に魔道に神術と、使える手
段は問わずに一気呵成に攻撃を繰り出す。この男を倒さねば勝利など有りはしないの
だから。

「やあ！」

「おらあ！」

「無駄だ」

「木術・連木槍！」

「足搔くか。荊！」

「止められた!?!くつ！」

「ふむ、なかなか面白い。キョウカが人と遊ぶのも理解できる」

「ふぎけないで。私たちは真剣なのよ」

「そう吠えるな、豊命神よ」

「吠えさせて貰うわよ、大切なものの為に！生命神の大声！」

「消えよ」

「消えんのはお前の方だ、オラア！」

攻め立てる3人に対して余裕すら見せるマルド・ギール。ほぼ片手で攻撃を凌ぐ様は流石九鬼門の中でリーダー格を務めるだけはある。攻防が入れ替わる中、突如として咆哮が響き渡る。

「何だこの音？」

「叫び声？」

「これは、まさか……アクノロギアか」

「アクノロギアですって!？」

「ぐっ、なんだ……」

「鼓動が……」

「一体何が起きているのだ、このマルド・ギールにも読めぬ」

旋回するだけで凄まじい衝撃を生み出すアクノロギアをどうにかしなければいけない。その事を優先したのか、マルド・ギールは一度撤退を余儀なくされた。ステイングとローグは突然動悸にうなされ膝をついてしまう。

「……逃げられた。ねえ、貴方達大丈夫？」

「あ、ああ。どうにか」

「先に行つてくれ、すぐ治まる」

「分かつたわ」

＝＝＝

「ここは？」

「カノンか！」

「ミネルバ！」

「エルザが一人で戦つておる。しかも傷が酷くてな、痛覚も数倍に跳ね上がつておる」

「なら、すぐにでも加勢するわ。木術・木甲拳！」

「ぬっ！」

辿り着いた部屋ではエルザがキョウカに苦戦を強いられており、息も絶え絶えだ。残つた魔力も残りわずかだが、加勢して倒していくしかない。

「ほう、また会つたな女神よ」

「もう逃さないわよ（フェイスが発動するまで後10分くらいか）」

「此方は時間を追うごとに強くなる。負けるとは思えぬな」

「相当な強気ね。神依！」

互いにパワーアップをして拳を振るう。最大限の力で当たつたのはカノンの拳だ。執念によつて当てた拳は途轍もないパワーを秘めていて、キョウカは吹き飛ばされてい

く。

「おおらあ！」

「ぐっ、なんて力ぞ」

「気功掌！」

「このっ、つえあ！」

「まだまだ行くわよ！生命神の剛拳！」

「ぬう、我が力を上回るとは」

全てはフェイスを止める為。フェイスとリンクしているキョウカを倒せば発動しなくなる。ならば、何があろうとも時間切れを起こす前に倒すだけだ。

「さて、もう時間もない。トドメを刺させて貰おうかしら」

「ぬう、ぬああ！」

「カノン、時間が！」

「分かっている。穿て、ディオ・アモーレ神の愛！」

「おおっ！」

「避けられた！」

最後の足掻きか、力を振り絞って攻めてくるが、カノンはこんな状況でも冷静に受け切り、最後の砲撃神ディオ・アモーレの愛を放ち見事沈めてみせた。だが、時間切れとなってしまう、

フェイス発動が起こってしまふ。

「くそ、後もう少し早ければ！」

『諦めるな、人間達よ』

「この声は、何？」

『我が名はイグニール、炎竜王なり。今フェイスを破壊する為、空を解放されし竜が駆け
ておる』

「竜が、フェイスを。凄い」

発動したフェイスが次々と破壊され、司令室に出ていたマークが消えていく。復活したドラゴン達によって計画が終焉を迎えつつある。奇跡が起きたのか現れた竜達の計画か、全てが解決していく。果たして未来はどうなるのだろうか。

第74の唄 終戦

「竜が空を駆けてフェイスが次々と……すごい」

「まるで奇跡だ」

「なんで竜達が急に？」

「さあ、何故だろうな」

「でも、これでフェイスが全部壊れたわ」

「私たちも向かいましょうか」

すべてのフェイスが竜たちの行動によって破壊され、冥府タルタロスの門の計画は頓挫した。E
NDの復活や魔力の欠乏は止められ、魔法界の平穏は無事守られた。竜たちの様子が気
になり、駆けていくとナツの父親である竜のイグニールがアキノロギアの左腕と引き換
えに受けた致命傷がもとで、瀕死となっていた。

「ナツ！」

「シリル！頼む、イグニールを！」

「この傷……」

「待て、女神よ。もう良い」

「しかし！」

「分かっているだろう？もうこの傷では無理だと」

「……ごめんなさい。せめて痛みが和らぐようにするわ」

イグニールの傷は深く、もはや治らないところに来ている。せめて痛みが引くようにすることしかできないことに引け目を感じている。徐々に生命力が下がってゆき、息を引き取った。その近くでは竜と滅竜魔道士が久しぶりの対面を果たした。

「ウエンディ、フェイスの破壊、よく頑張ったわね」

「グランディーネ……」

「相変わらず目つきが悪いのう、ガジル」

「久々に会って吐く台詞がそれかよ、メタリカーナ」

「俺とローグは確かに殺す所を見たんだぞ」

「人間の記憶を改竄する事は簡単だ」

「それに死んでいるのはあながち間違っていない」

竜達はアクノロギアに敗れ魂を抜かれているのだ。滅竜魔道士の竜化を防ぐ為、アクノロギアを倒す為、そして延命の為に体内に居たのだ。一度体内を出てしまえば二度と戻れない。それ故にこの機会を待っていたのだ。アクノロギアはイグニールの力をもつても倒せなかったが、せめて彼の名誉のために、これからその名譽を傷つける事のないように生きてほしい。それが竜達の望みの一つだ。

「さて、そろそろお別れね」

「竜達よ、貴方達の希望の子は神たる私が見守ろう。実り多き生を紡ぎ、そして竜化を防ぐために」

「ありがとう、生命神チキの愛した子よ」

「グランディーネ……もうお別れなの？」

「見送ろうぜ、胸張ってな」

「……はい」

争い、憎しみあつた時代は過去のもの、今は手を取り合うこともできた。竜の時代に代わり、これからは人の時代である。人間と竜と神の盟約、大憲章マフナカルタに則したがって、姿を消しても人間達を見守り続けると誓う。これからは亡き竜たちに代わって神であるカノン

が責任をもつて見守つていくと誓う。

「さらばだ、人間達と神よ」

「グランディーネ、バイバイ」

「ええ。愛しているわ、ウエンディ」

「目つきが悪いのう」

「最後の台詞がそれかよ、ったく」

竜たちは姿を消し、昇天した。そして戦いが収束してから一週間、皆は破壊されたギルドに集結していた。今回は修復を行わず、このままにすると伝えられた。そんな中、マスターに呼び出されたカノンは秘密裏にとあることを告げられる。隣の大陸のアルバレス帝国が侵攻してくる可能性があること、そのためにギルドを解散させるということだ。そしてマスター自身が大陸を渡り、交渉に行くとも告げられた。

「何故また？皆が黙つて見過ごすとは思えないわ」

「全てはガキどもを守るためじゃ。分かつて欲しいとは言わぬ」

「……止めはしないわ。でも無茶はしないで欲しいわね」

「そうじゃな。これも皆のためじゃ」

「これで暫くはお別れね。無事を祈っているわ」

「お主も無事で在らんことを願うばかりじゃ」

「また会える日を楽しみにしてるわね」

「うむ」

|| || ||

「冥府タルタロスの門との闘いから半年か……」

「マカロフさんを始め、多くのメンバーが散り散りになってしまったわね、ユリアアテナ」

「そうね、カノン」

ユリアはこの半年の間に冥府神の座を襲名、アテナと名乗っている。他のメンバーもそれぞれ別のギルドに入ったり、自分の仕事を立ち上げたりと各々自分の信じた道を突き進んでいる。今となっては各々の道を行っているため、行方をつかめているものは限られている。

「マカロフさんの行方は分かっているの？」

「隣の大陸に渡ったと聞いたわ。あっちの大陸に渡るのは危険だから、会いに行けないのよ」

「なんでまた……もしや何か問題でも？」

「過去にもそのアルバレス帝国が攻め込んで来るっていう情報があったらしいわ。それを阻止するために交渉に向かっていると告げられたわ。これは貴女だけに今は伝えておくわ」

他のメンバーには秘密にするようにと伝えられている以上、打ち明けたのはアテナのみである。この事は時期が来るまでは伏せようとなった。さて、せっかく神々が顔を合わせたので、大憲章マグナ・カルタに従い竜の子供らに会いに行こうとなった。

「さて、竜の子達に会いに行きましようか」

「約束してたもんね。私も行くわ」

「まずはステイングとローグね」

訪れたのは剣咬セイバー・トゥースの虎である。ミネルバも無事復帰し、ステイングがマスターを務めて

おり、和気藹々といった雰囲気である。そのステイングとローグに会いに来たのだ。

「あれ、カノンさんにアテナさんじゃねえか」

「私達に何か御用でしょうか？」

「竜達との約束、果たしに来たの。ステイングとローグが元気にやっってるかってね」

「それなら心配ない」

フェアリーテイル
妖精の尻尾に流れていた仕事^{フェアリーテイル}が回ってきており、ギルドは順調になっている。その一方でマスターの責というのはなかなか大変であり、皆を纏め上げたり、始末書に追われりして責任も重大だ。だが、皆と一緒に過ごせることは何よりも楽しいものだ。

「そういえば、他の3人の滅竜魔道士の行方、掴んでるかしら？」

「ナツさんは分からねえな」

「ガジルは評議院の部隊長をしていると聞いたが」

「あのガジルが？カノン、次はそこよ」

「そうね。2人とも、無理はしないでね」

「ありがとよ。ナツさんに会ったら探してたこと、伝えとこうか？」

「大丈夫、そのうち見つかるだろうから」

次に訪れたのは新設された評議院である。聖十大魔道の下でイシユガル大陸の安定とアルバレス大陸との調整に迫られている。まずは評議員のジユラとウオーロッドに挨拶がてら状況を尋ねる。

「久々ね、ジユラ。評議員になったこと、おめでどう。ウオーロッド殿も久しぶりです。息災で何よりです」

「おお、カノン殿にアテナ殿か」

「何か用でもあるのかのう？」

「ガジルがここで働いているって聞いて来たんだけど……」

「ガジル殿は今仕事中でのう。場所はここのはず」

「ありがとう。すぐ向かおう」

二人がやってきたのは森の深い場所である。闇ギルドの摘発を行っており、その為にまずは潜入捜査を行っている。レビイはその潜入のために今は隊から離れている。

「ガジル、リリー」

「なんだよ、誰かと思えば」

「久しいな、2人とも」

「評議院はどうなの？ 楽しめてる？」

「楽しいわけではないが、給料は悪くない。食い扶持としては困らない」

「メタリカーナ達に頼まれたとおり、貴方やナツ、ウエンデイ、ステイングにローグの様子を見守りに来たのよ」

「お前や木のじーさんのおかげで生活には困ってはいねえさ。しかし、余計なおせっかいてやってやっじゃねえか？」

「あらそう？ これも仲間だったよしみってやつだと思おうわ」

「けっ」

「まあまあガジル」

ガジルも現状では元気そうである。仕事には馴染めており、うまくやっていけているようだ。天職ではないかと冗談半分に言えているあたり、楽しめているようだ。仕事柄、ギルドに所属しているメンバーには詳しいので、ウエンデイの行方を尋ねる。

「評議員として働いてるってことはギルドで働いてるメンバーも多少は把握してるってことでいいかしら？」

「ああ、まあな」

「ナツは旅に出ていて居ないから、ウエンデイがどこに所属しているか知ってるかしら？」

「ラミアスケイル蛇姫の鱗だ」

「即答なんて流石ね。じゃ、任務頑張ってるね」

「またいつか会いましょう。案外すぐな気もするけど」

「ウエンデイやシャルルによろしく伝えておいてくれ」

「ええ、確かに伝えておくわ」

最後に訪ねたのはラミアスケイル蛇姫の鱗だ。ウエンデイとシャルルの様子を見守りに来た。彼女たちが元気で過ごせているかが一番の懸念事項だっただけに、心配をよそにうまく溶け込めていたのには安堵した。一番変わったのはシャルルだ。人間になれる魔法を習得しており、その姿で出迎えてくれた。

「どう、新しいギルドは？」

「シエリアたちと一緒にですから、楽しくやれていますよ」

「それは良かったわね。貴女とシエリアは仲が良いものね」

「お二人がここを紹介してくださったからです」

「あらあら、そう言ってくれたら嬉しいわね」

「元氣そうね。半年前のことで落ち込んでないか心配だったわ」

「どうにかなっています。新しい仲間に出会えたのが大きかったと実感してます」

「それにしてもナツはどこに行ったのかしら？」

「どうなのでしょう？旅に出たままなのですか？」

「ええ。未だ行方は掴めぬままよ」

さて、マグナ、カルタ大憲章に従って滅竜魔導士の様子を見てきたが、後はナツだけとなった。大丈夫だと、そう信じるしかない状況に心配もつきない。ルーシイ曰く一年で戻るらしいが、果たして再会できるのか。半年後にまた会い、その時点でナツに再会出来ることを祈るしかない。

|| || || ||

「久しぶりね、カノン」

「ええ、本当に。元気そうで何よりね」

「そういえば貴女への手紙が来てるよ」

「これは……ルーシイからね」

「あれ？貴女のところにも来てたんだ？」

「もしや貴女のところにも？」

「うん。ギルドを復活させるんだって」

「へえ、やるじゃない」

この一年で居場所を把握できたメンバーに対して、集結を求める手紙を送っていたのだ。カノンとアテナの所にも来ており、これから共に行動したい旨が記されていた。アテナが神の座についたと聞き、どんな反応をするのか楽しみにしながら、出立をする。ナツが帰ってくるとしていた時期だが、何故このタイミングなのだろうかと疑問に感じながら歩いて行く。数日後、マグノリアに着き、ルーシイと一年ぶりの再会を果たした。

「ルーシイ」

「シリル！ユリア！」

「今は冥府神アテナよ」

「それってつまり……」

「神の座に就いたの」

「そうなんだ！すごいじゃない！」

久しぶりの再会に積もる話もあるが、ここに来た目的はギルドの再興を目指すことである。今回は再会を喜ぶだけというわけにはいかない。しかし、近くから感じる気配には出会うために探し出していった気配がある。ナツとハッピーだ。

「何でここに？」

「仕事中に偶然会ってね」

「一年後に戻って約束してたからな。そうだ、旅の途中でギルドに会ったぞ」

「ギルドーツ、元気なのね。良かったわ」

「2人ともどうしてここに来たんだ？」

「ルーシイから手紙をもらったのよ」

「お？2人もかい？」

「カナ！」

「私も手紙をもらってやって来たのさ。ずっとギルドで育ったからね、正直無くなるなんて実感湧かないんだ」

「でも、皆来てくれてるかな？」

「何弱気になってるんだい。ほら、行くよ」

カナに連れられてやってきた広場には何人ものメンバーがそこに居た。ルーシイからの手紙を受け取り、それまでの生活を変えてでも駆けつけてくれたのだ。

「お、来たな」

「待ってたぜ！」

「評議会辞めてきちやった」

「み、皆……」

「ほら、皆来てくれたでしょ？」

「おかえりなさい、ルーシイ」

「た、ただいま……」

「よし、ギルドはなくなつたが旗はまだあるな。」

フエアリーテイル
妖精の尻尾の復活だ！

第10章 アルバレス編

第75の唄 アルバレス侵攻

「さてと、まずはギルドの修復をしなくちゃね」

「仕事つてこれえ？」

「文句言うなって。これも仕事のうちだ」

「せっかくギルドを立て直すんだから、建物も修復しなけりや成り立たないわよ」

まず取り組むべきはギルドの修復と諸々の書類の提出だ。正式なギルドとして認めてもらわなければ闇ギルド扱いを受けてしまうので、大事な仕事なのだ。そこで重要になってくるのがマスターを誰にするかである。書類を担当しているレビイもこれで頭を悩ませている。

「うーん、どうしよう」

「どうしたの、レビイ」

「ああ、ユリア。実はね、マスターを誰にしようかなって」

「それなら適任が居る気がするけどなあ」

「そうだよねえ、やつぱりそう思う？」

「まあ、本人がどう思うかだけど……」

「あらあら、喧嘩が始まってしまったわね」

「ちよつと、まだ仕事申だよ？」

「止めるべきかしら」

「辞めんか」

「……止まったね」

「やつぱりエルザの一喝は効くわね」

「うん、マスターはエルザに任せるかな」

「ちよつと待て、私がマスターだと？」

「お前以外に適任はいないだろう。マカロフを救い出すにはな」

「お前は確か……」

「ドランバルト、いやメストね。評議会にいたはずだけど」

「それには訳があつてだな」

冥府の門との戦いののち、妖精の尻尾の一員であることが判明したメストは、ギルド

の秘密をマスターとなったエルザに見せたいものがあつて来た。本来ならマカロフから知らされることなのだが、今回は彼が案内する。他のメンバーには見せられないのだ。向かったのは地下で、そこにはギルドの秘密が隠されている。本来はマスターになった人物しか入れないが、込み入った事情があつてメストも知っているのだ。

「この扉の先だ」

「これは……初代？」

「地下に何かあるかと思えば」

「シリル!」

「生命の力を感じたと思えば……」

「本当は入っちゃマズいんだが」

「らしいわね。でも、ここに来たのは私だけじゃないわ」

「は？」

「ちよつと、バラさないでよ!」

「お前らなあ……」

様子が気になってカノンの他にもナツやグレイ、ルーシイ達も来ていたのだ。地下に

ある、亡くなったはずの初代の体が魔水晶に収められている。このことが引つ掛かっているのだ。この体がなぜここにあるのか、生きているのか死んでいるのか、謎は深まるばかりだ。

「初代は亡くなったはず。でも、ここにある体からはうつすらと生命力を感じるわ。何故かしら」

「俺も詳しいことは分からんのでな。今から俺の記憶を見せる、その中に答えを見出せればと思っっている」

「何この映像」

「メストの魔法？」

「これって……」

「10年前、天狼組からすれば3年前の出来事か。俺は評議院への潜入を任されて、とある任務に就いていた」

それは西の大陸に関する情報を評議院から流して欲しいとの事だ。何故そのような任務に就く事になったのか、知ったのはついこの前の事である。潜入の際に記憶をいじっていた為、天狼島で会った頃は妖精の尻尾に潜入している事になっていた。

「この潜入任務の真相を知ったのは一年前の事だ。今までの情報と先代の独自調査によつて、ギルドを解散させる事になったのだ」

「確か、大国アルバレスだったかしら？そこが侵攻してくるとかどうとか」

「そうだ。西の大国アルバレス帝国が侵攻してくるのではないか、その様な情報が掴めてな」

実を言えば10年前に侵攻を目論んでいたが、評議院がエーテリオンをチラつかせた為に侵攻は中止となったが、その後評議院は潰れてエーテリオンもフェイスも無い以上再び侵攻を開始しかねない状況だった。敵はイシユガルにあるギルド数を上回る730ものギルドを武力で纏め上げた大帝国だ。そこでマカロフが打った手として交渉に乗り出すのだ。

「交渉しに行くのは本人から聞いたわ。でも止めた所で聞いてくれそうにも無かった」

「まあな。今交渉に行っているが、返答も連絡も無い」

「まさか!?!」

「幽閉されてるか、交渉を続けているか、あるいは……」

「それ以上はよせ」

マカロフの身に何かあったのではないか、一年間も連絡がないことを鑑みると不安になる。心配になるが、六代目の言伝通り、ウォーロッドを始めとした、聖十大魔道による評議院を設立した。ウォーロッドは事情を知っているが、アルバレスが脅威であるという共通認識以外はそれ以外の方は知らないだろう。

「ジイさんの時間稼ぎはもう十分だろ？もう帰ってきてもいいじゃねえかー！」

「今回の件が六代目に伝わってないのか、あるいは帰ってこれない事情があるのか」

「私は私の方で動く。マカロフさんの事は貴方達に任せるわ」

「ああ、そうするか」

こうなったら二つの方面から救出に向かうことにする。まずはエルザ達が海路を通じてアルバレス帝国に潜入し、マカロフと接触を図る。もう一つのチームを作り、別路から救出に向かうこととする。そのチームを作るために工事現場に戻り、ガジルに声をかける。

「ガジル、聞こえてたでしょ？ 私たちも動くわよ」

「言われずともやるつもりだ。抜け駆けは許さねえ、俺たちは雷野郎の元に向かう。大魔闘演武のBチーム再結成だ」

「雷？」

「あんた、ラクサスの居場所を知ってるのかい!？」

「まあな」

ガジルを筆頭に大魔闘演武で組んだチームBのメンバーとカノン、リサーナ、エルフマンがラクサスを迎えに行くこととなった。向かった先はとあるギルドの近くだ。本来にラクサスや雷神衆がいるとの情報が当たっているのか半信半疑だが、信じて向かうしかない。更にチームを二手に分けたのはなぜか疑問に思うメンバーもいる中、潜入するにしても勝算や作戦成功率も低いから、別行動する方が良いという事になった。

「そういえばレビイは？」

「私はここよ。もお、置いていくななんてひどいよ!」

「あれ？小せえから荷物に入ってるかと思っただぜ」

「もお、バカバカ!」

「イチヤイチヤしてる……」

「そんなイチヤイチヤしたいなら、お姉さんが相手しようか？」

「じゅ、ジュービアにその気は……」

何はともあれ、まずはラクサスと雷神衆を迎えに行く。そこからクリステイナを借りて隣の大陸に向かう。マカロフの救出は容易ではないが、少しでも成功率を上げるには、こうするしかないのだ。それならアテナも呼べば良かったとカノンは考えたが、少数の方が都合が良い。少数精鋭で向かうのだ。

「この近くだ」

「ここは、温泉？」

「青い天馬の温泉だ」

「青い天馬？もしかしてそれって……」

「ま、そういう事だ」

ラクサスや雷神衆は青い天馬ブルーベガサスに今現在所属しており、そこで研鑽を積んでいるのだ。彼らに会う前に温泉に入って疲れをとっておき、合流してすぐに出発できるように準備

をしておくのだ。

「はあく、いい湯だねえ」

「温泉もたまには入るものね」

「ジユビアも入ろうよ？」

「は、恥ずかしいです」

「女ばかりなんだから、恥ずかしいって言うのもねえ？」

「グレイの前だと大胆なのに」

「あ、グレイ！」

「ジユビア、タオルが取れちゃいました！」

「その癖、どうにかした方が良いわよ？」

「騙しましたねレヴィイさん。天罰が当たりますよ？」

「えへへ」

温泉につかりながら旅路の疲労を取っておく。良くこんな場所を知っていたものだ
と驚きを感じている女性陣であつたが、ガジルは温泉が好きであり、各地の温泉を訪ね
て回るほどののだ。一夜を含めた男性陣側はかなりムサイ絵面となっているが、なぜこ

ここに一夜がいるのか疑問が生じている。ここは青い天馬の温泉だからだと伝えられると驚きが起こる。ギルドが近くにあるのだ。雷神衆がギルドで元気にやっております、おもてなしを行なっているという。

「それってつまり……」

「そういう事みたい。ラクサスと雷神衆は青い天馬ブルーベガサスに所属しているってことなのよ」

「おい、バラすなよ！折角伏せてたつてのによ！」

「まあいいじゃない」

「つたく。一夜がここに居たからバレたようなもんじゃねえか」

「おっと、これは反省。メエーン」

「棒オトコお！テメエ、なんの嫌がらせだコラ！」

「メエーン！」

「んがっ！アスタリスク！」

男湯では騒ぎが起こり、ガジルが壁を突き破つたのだ。その際にレビイと衝突してしまふ事故が起こった。この事故によってせつかくの温泉が台無しになつてしまい、ゆつくりと休むことができなかつた。そんなことがあつた翌日、皆で青い天馬ブルーベガサスに向かい、ラ

クサスたちを迎えに行くこととなった。

「おい、ラクサスを連れて帰りに来たぞ！」

「雷神衆もな！」

「ちよつと君たち……」

「悪いわね、こんな形で。クリステイナーの力も必要なの。貸してくれないかしら？ 仕事の依頼つて事で、対価は支払うわ」

「対価はいらぬよ。しかし、何故こうなったのだね？」

「それは行きながら話すわ。目的地は隣の大陸のアルバレス帝国よ」

「シリル、久しぶりだな」

「久しぶりねラクサス。雷神衆の3人も元気そうで何よりだわ」

「青い天馬もなかなか居心地は良かったが……やはり妖精フェアリーの尻尾には敵わんな」

「乗り物酔いするんだが、大丈夫か？」

「滅竜魔道士用に改良されてるらしいから大丈夫よ、きつと」

ブルーベガサス
青い天馬の保有するクリステイナーに乗り込み、アルバレス帝国に向けて出発した。アルバレス帝国には何があるのか、その疑問に答えると、マカロフである。今あちらの国

で交渉しているはずでナツ達が救出の為に潜入していると伝える。要はナツ達を含めて救出しに行くという事だ。話してみると、マカロフ達が敵の攻撃を受けそうになっていたので、救出するために行動を起こした。

「ラクサスか！」

「老けたな、ジジイ」

「皆、無事ね！」

「救出に来たぞ」

「メスト、居るんだろ？瞬間移動だよ！」

「了解！」

「逃すかよ！」

「逃げる？帰るだけさ、夕飯に遅れちまう」

ラクサスの盛大な雷の攻撃により、アジールは手出しできず、マカロフを引き連れて帰還することに成功する。その後、ギルドにたどり着き、マカロフにギルドマスターの座を譲り渡した。これで三回目のマスター就任である。マスターもギルドもメンバーもある程度は元通りになり、ギルドの復活となった。これで万事解決であり、ラク

サスたちもギルドへの帰還を喜んでいた。そんな折にマスターから話がなされた。

「皆、突然ギルドを解散させ、帰るべき家を奪ってしまった事、重ねて詫びたい。申し訳なかつた」

「良いじゃねえの」

「そうだ、ギルドは復活したんだしよ」

「皆の言う通り、こうして集まれたのよ。気にしないで頂戴」

「ワシの交渉は無意味だった。巨大なアルバレス帝国が攻め寄せてくる」

「それがどうした！アルバレス帝国がどんな敵であろうと、俺達は負けはしねえ！」

「そうだよね。私達は家族としてこれまでも強大な敵と戦って勝ってきたもん」

「そうじゃな。返り討ちにしてくれよう！戦争じゃあ！」

これまでも仲間や家族に手を出してきた連中を返り討ちにしてきたのだ、今更この考えが変わることはない。どれほど巨大な敵であろうとも、家族に手を出してきたのなら、容赦はしない。これがギルド創設以来最大級の戦いになろうとも、負ける気はしないのだ。

「燃えてきたー！」

「勝ちましょう！」

「言われずともな」

「神々がついている。負けるはずが無いわ、ねえカノン」

「やつてやりましょう、アテナ。我々の同胞の為にも」

「その前に話しておかねばならぬ事がある。我がギルドの秘密、ルーメン・イストワール改め妖精の心臓フェアリーハートについてじゃ」

「それについては私から話しましょう、八代目」

「初代？（あれは幽体か、はたまた実体なのか？）」

「まさか、ギルドの地下の事が関係してると言うの？」

「そういう事です」

「よろしいのですかな？」

「構いません。これは話しておかなければならない事ですから。これは呪われた少年と呪われた少女の物語です」

「呪い……不穏ね」

百年ほど前、メイビスとゼレフは出会い、様々な交流をしてきた。そんな折にメイビ

スはゼレフと同じくアंकセラムの呪いを発症してしまい、人の命を奪う呪いを受けてしまった。数か月後、再びゼレフと会ったときに恋に落ち、互いに呪いを解除しようと誓ったものの、不老不死であるはずのメイビスの命は奪われてしまった。

「アंकセラムの呪いがまだ実在してるなんて。私の母とアテナの母が数十年前に討伐したはずなのに」

「その呪いはまだ潰えていない、そういう訳です。そしてプレヒトの天才的な知識量と才能、私の不老不死がもたらした説明のつかない魔法、それが永久魔法妖精の心臓」

その名の通り永久に尽きる事のない魔力、一生使える永遠の魔法源である。評議院の兵器であるエーテリオンさえも無限に発射できるのだ。実際、冥府タルタロスの門戦の際もこの魔法を使い、フェイスを全て破壊しようとした程だ。だが、無限故に一度使えば制御不能となった際には後戻りできないのだ。

「なんて事、まさかそんな魔法が存在していたなんて」

「この魔法は絶対に世に放つてはいけけない。ただ、この魔法は私の罪によって生み出されたもの……まさか皆さんを巻き込んでしまうだなんて」

「おいおい、何を言ってるやがる。人を愛した事が何の罪になるってんだ？ そんなんじゃない
逮捕は出来ねえな」

「ガジルの言う通りよ、初代。貴女が気負う事は無いの。私達はあいつらを止めるだけ、
良いわね？」

「初代が居なければ私達は出会わなかったんですから」

「私達は初代と共に戦うまでです」

「良いギルドになりましたな、初代」

ギルドとしての結束は固く、揺るぎないものである。だが、気になる点がある。アル
バレスの兵は倒せてもゼレフはどうするのか？ 不死身なうえにあらゆる魔法を操る実
力者だ。皆が表情を曇らせている中、ナツには秘策があるという。右手に込められた何
かを発動させるものの様だ。万が一の際にはカノンとアテナに生命と死の力を使って
対処してもらうこととなった。

「さて、マスター・マカロフ。これから戦う者たちについて、把握してる範囲で良いから
教えてくれないかしら？」

「そうじゃな。ワシの把握できている範囲では6人、名前のみの者を含めれば9人おる」

トウエルブ

アルバレスの1・2と呼ばれる強大なる魔導士たちが揃っている。彼らの中で知っているのは六人。砂の魔法を操るアジール、国崩しのブランディッシュ。冬將軍インベルなど、脅威となるメンバーが次々に挙げられる。そんな彼らは総攻撃を仕掛けてくるだろう。今までの敵とは桁外れの人員と強さを誇る。だが、勇気と絆をもって戦い抜くのみだ。カノンとアテナも今回の戦いに力を貸し、不老不死のゼレフを討つために戦う。

「済まぬのう、シリル、ユリア。ギルドを辞めたお主達にも迷惑をかけてしまって」

「我々は仲間の為に戦う皆の気合いに応えるまでよ」

「気にする事はないのよ。受けた恩義を返す時は今しかないし」

「恩義、か。義理堅いな」

「ギルドが無ければ成長出来なかったもの」

「生きていく術を学べたしね」

ギルドには恩がある。その借りを返すためなら安い御用だ。ギルドのメンバーもそれぞれ決意を固めており、戦に向けて準備を進めている。子供たちの不安を背負うのは

老兵の務め、ギルドマスターの仕事である。しかし、突然大きな魔力が近づいてきた。

「まさか、この感じ！」

「ウォーレン！」

「ま、マジか！何で気づかなかったんだ！敵は上空から攻め寄せてきやがった！」

「全員戦闘準備！空駆ける大型巡洋艦約50隻です！」

「このままでは不味い！よし、私とアテナも行く！」

向かった先で待ち受けていたのは多くの空飛ぶ巡洋艦であり、その先頭に立つのは砂使いのアジールである。船に乗れない滅竜魔道士達のためにも一機でも多く墜落させるのだ。そこで活躍するのがビスカの発射する魔導収束砲ジユピターだ。拡散されたものの、かなりの数を撃ち落とせた。

「降りてきたな」

「数は多そうだね」

「ここを押し切られたら街が狙われるわ。私達で食い止めるのよ」

「よっしゃ！やってやる！」

「まとめて片付けるわ。船も狙って……神の愛！」
ディオ・アモーレ

「よし、また何隻か落ちたぞ」

「結構な数を巻き込めたな」

「流石です、シリルさん」

神々と三人の滅竜魔道士達による共闘で数を物ともせず、一気呵成に攻め立てる。地獄ソウルフレアの業火に炎竜王の崩拳、神の息吹や竜の咆哮が響き渡る。フリードが術式を展開できるときも限られているはずであり、急いで全員を倒さねばならない。そこにアジール部隊のバクルが攻め寄せてきたので、アテナが対処することとなった。

「冥府神の大声！」

「ぬおつ、とお！」

「く、あまり効かないか。冥府神の剛拳！」

「がはっ……」

「パワーで押し負けるなんて！」

「それでも耐えるなんて頑丈ね」

「ばっはっは！この程度では、アルバレスどころかアジール隊に勝つ事さえも無理だ

ろうな！」

「それはどうかな？ふん！」

「ばはっ！」

「はいやつ！」

「ぐえっ！」

「一気にケリをつける！煉獄^{アビスブレイク}砕破！」

「うがあ！」

「結構片付いたな」

「すごい魔法使えるんだな」

「冥府の神だもんね、これくらいはさ」

冥府の神の一撃と、豊命神や劉達の猛攻に耐えかねて徐々に敵も数を減らしていき、総崩れとなり始めている。バクルも怒りがたまり、躊躇なく攻めてきたが、ナツの一撃を受けて空高く吹っ飛んでいった。

「よし、片付いたな」

「聞こえるかしら、フリード！西の敵は全滅したわ！」

「……よし、ギルドに戻るか」

「そうね。報告も兼ねて行かなきゃ」

西の敵を全て片付け、フリードの術式を解除できる状態となった。そこで、いったんギルドへ戻って状況確認を行うこととなった。だが、そうしようとした直後、空を何か走り抜けようとしていた。それは遙か彼方から飛んでくるレーザーである。ギルドを壊滅させるために放たれた光線だが、一夜がクリスティーナを盾にしたことで壊滅は免れた。

「クリスティーナを盾にしてギルドを守りやがった!」

「これは妖精フェアリーテイルの尻尾だけの戦いではない!我々イシユガル全体の戦いだ!」

第76の唄 未来を変えるための闘い

「とりあえず第一陣は崩したわね」

「こんな形で他のギルドの方々を巻き込んでしまっうなんて。我がギルドの戦いだと言うのに」

「遅かれ早かれこうなつてただろうさ。綺麗事ばかりじゃやられちまう。力を借りる時は借りる、それで良いじゃねえか」

「ラクサスの言う通り、ここは力を借りるべきだよ。他のギルドの力がどの道必要になるんだ。それに、雷神衆と一夜がやられてるしね」

「俺はフリード達をやった野郎を許さねえ。仲間に手を出したんだからな」

「ラクサス、アテナ……」

他のギルドとともに総力戦で挑むこととなつた今回の戦い。一つのギルドだけで片付けようとするのは無理があるため、大陸の有力なギルドの力を借りることにした。北セイバートウイスに剣咬の虎、青い天馬が向かい、南は人魚の踵マイメイドヒールや蛇姫の鱗ラミアスケイルなどがハルジオン港解放に向かった。東は脅威故に、イシユガルの四天王の三人とジユラに向かつてもらった。

「私達もいずれかへ向かうべきでは？他のギルドの力を借りる以上、我々も打つて出るべきかと」

「そうですね。北はミラジエーン、エルフマン、リサーナにガジル、レビイ、リリー、そしてアテナ」

「やってやるか」

「神の力、存分に披露してあげる」

「南へはナツ、グレイ、ジュビア、ウエンデイとシャルル、ラクサス、そしてカノン」

「そつちにはフリード達をやった奴がいるんだろうな」

「おそらくはね」

早速移動の準備を始めたが、ここである事に気づく。ナツがいないのだ。マップに記されたマーカーが正しければ、ゼレフのところに向かう一個のマーカーがあり、それがナツではないかと思込まれている。一人でゼレフの所に突っ込みに行ったのか分らないが、ゼレフの事はナツに任せようという事になった。エルザが代わりに来ることとなり、出発してから大きな変化がおこることなく近くまでそれぞれ動けた。南に向かったエルザ達はハルジオンの近くまで来ている。

「明日にはハルジオンに着く。今日はここでゆっくりしていこう」

「激戦が予想されるわ。何があっても解放せねば」

「そういえばラクサスは？」

「さつき飯を食いにいくとか言っていてどこかに行ったわ」

「熊でも食べてそうな」

「美味しいのか？」

「エルザさん、ヨダレが……」

「私が探してくるわ。グレイも来てくれるかしら？」

「分かった、行こう」

ラクサスは食事をしているわけではなく、近くの倒木に座り、心臓の動悸に苦しめられていた。去年冥府タルタロスの門と戦った際に吸い込んだ魔障粒子の影響である。カノンとグレイが心配して様子を伺いに来たが、何でもないと強がって見せる。ほかのメンバーに伝えたら余計な心配をかけることになる。それだけは避けなければならない。

「言ってくれば治療したのに」

「これを治すのは出来ねえだろうさ。それに問題はない、偶に発作が出るだけだ」
「痛み止めくらいは処方出来たわよ」

「良いんだ。この痛みも背負っていかなきゃならねえ」

「無理をするのは良くないわ」

「戦いが終わるまでは死んだってギルドを守ってみせる。それが俺なりの覚悟だ」

「シリル、どう説得しても動かねえだろ。ラクサスの思うままにさせてやろうぜ」

「そう……友の命はなによりも重い。苦しい時は呼んで頂戴」

「シリル、ありがとうよ」

「良いのよ、友でしよ」

「ははは、そうだな」

「皆が心配してる、戻ろうぜ」

ラクサスは発作が収まったため、ここはひとまず好きなようにさせることとなった。その頃北に向かっていたアテナ達も近くまで到着しており、接近する前に一休み取ろうという状態になった。アテナは眠ることができず、風にあたろうと少し散歩したら、ガジルも起きており、少し話をする。

「誰かと思えばガジルじゃん？寝ないの？」

「お前も寝てねえじゃねえか」

「なんでだろう、この戦いが私のギルドと共にする最後の戦いになる気がしてね。寝てる場合じゃない、全てを見聞きして、風や星々の声にまで耳を傾けなきゃって、そう思ってたんだよね」

「おいおい、感傷に浸ったり風や星の声を聴くのは戦いが終わってからにすれば良いじゃねえか」

「……そうかもね。私はね、神になった以上は人の生き死にを長きにわたり見つめなきゃならない」

「……」

「この戦争で以って大きな戦、無益な殺生を止めなきゃって、平和な世の中を作っていかなくやって思ってたね」

「それがお前の役目なら、シリルと共にやってきや良い」

「あはは、そうだね。私の側にはカノンや皆がいるもんね。一人で抱え込もうとしてたかも」

自分には仲間や友がいる、彼らに頼るときがあっても良いではないか。彼らとともに

前に進む。そんな神がいたって不思議ではないし、実際に人と共生する神も実在している。そんな折にレビイが様子を見にやってきた。

「あれ？二人ともここに居たんだ」

「レビイも来たんだね」

「なんだか寝れなくて」

「なんだ、お前もか」

「何を話してたの？」

「神の仕事について、ちよつとね。レビイはどうしたの？なんか寝れない理由でも？」

「なんだか不安になっちゃって。敵は強大だから、このままギルドに戻れるのかなあ、なんて」

「らしくないよ。元気なのが貴女らしさだよ」

「え？」

「私もさつきまでちよつと弱気になってたけど、元気にやっていかなきゃ！私達は前向きに生きていくべきながじやないかな？」

「で、でも……うわっ！」

弱気になっていたレビィに喝を入れる様にガジルが鉄の棒で囲んでみせた。弱音を吐いた弱音罪で捕まえた以上、絶対にギルドの牢に入れてみせる。だから絶対に連れて帰ってみせるといふ強気な姿勢だが、これが効いたのか少し元気が出た。

「さ、皆の元に戻ろう。明日は闘うしね」

「そうだね。私にも出来ることを……」

＝ ＝ ＝

「ヒーラーは何があっても先に倒さなきやね」

「ちよつと……」

「てやあ！」

「ウエンデイ！」

「お待ちせシエリア！」

「前線を押し上げるぞ、リオン！」

「一気に行きましよう！」

「グレイ、ジュビア！何故お前達がここに居るんだ！」

「他のギルドの厄介事に首を突っ込むとは、感謝する！」

「エルザ！」

翌日、早速ハルジオン港を解放する為に戦っていた人魚の踵マーメイドヒールや蛇姫の鱗ラミアスケイルと共に前線を押し上げる為に、妖精の尻尾が参戦する。他のギルドにとっては無縁とも取れる戦いに首を突っ込んでまで戦う姿勢に感謝の言葉を述べる。

「アヒヤヒヤヒヤ、大勢来たな」

「フリード達をやったのはお前か？」

「あ？誰それ？」

「俺の仲間だ」

「そして私の友よ！せいやつ！」

「ぬおう！くつ、二人も来やがった」

機械仕掛けの体を持つ機械族のワールを相手にカノンとラクサスが挑む。錬金術を得意分野とするワールには大樹の壁や雷による攻撃を仕掛ける。弾丸数で仕掛けるワールに対してこちらは手数で仕掛け、二人による連携で攻撃をする。突然の落雷に周

困では驚く者もいたが、ラクサスの雷はマグノリアでは良く見る天気だ。晴れ、時々ラクサス。所により氷結、さらに気功の嵐と血の雨も降る。

「へえ、やるじゃねえか。どれどれ、弱点はつと……分析！」
アナライズ

「ラクサス、大丈夫？」

「今のところは。だが、いつ発作が出るか分からねえのがよ……」
「お前、内臓が！よく立っていられるな」

ラクサスの内臓は魔障粒子によって痛んでおり、生きているのが不思議なくらいだ。気合でどうにかなっているようなものであり、立っているのがやつとであるはずだ。カノンの回復魔法でぎりぎりを維持しているが、いつ倒れてもおかしくないのだ。そんな弱り切った体を攻撃すべく攻め立ててくる。

「すげえな、どうやって生きてんだよ」

「どうやって生きているのか？そんなもんでも良いな」

「援護するわラクサス。神器アウラの弓！」

「んご!?アヒヤヒヤ、やるねえ。ほおら、ミサイクルならどうだ！」

「おおっ！」

「はいや！」

「レールガン装備！発射！」

「まずっ！」

「もらったあ！」

「この属性なら任せろ！」

「た、助かったわ」

「雷が効かないだと？俺と同じか。こうなったら変身するしかねえな」

「変身？」

ワールは分析が完了し、魔障粒子に侵されているラクサスはギルドきつての実力者だろうと推測し、それにカノンもなかなかのやり手だと考えた。完全殲滅まで130秒といったところと予測している。アサルト状態に変形し、片付けにかかる。しかし、ここでラクサスが発作を起こし、倒れる直前の状態になってしまう。その隙を見逃さず、追撃を図る。カノンが肩を抱え、どうにか難を逃れる。

「すまねえ、シリル……」

「確かあいつは魔法陣、つまり魔障粒子をキャンセルできるはず……」ラクサス、あいつの相手を私が務めるから、術式の準備をお願いできる？ 出来たら雷を信号弾替わりに打ち上げて」

「何を考えてるか分からねえが、任せてくれよ。この状態じゃそれくらいしか出来ねえからな……」

「任せたわよ。貴方の相手は私がやるわ、気功式・シャイニングレーザー！」

「おっと、一人で俺に勝とうと？ 個別撃破すれば時間短縮も可能か」

「私にそう簡単に勝てるとは思わない事ね」

「このアサルトモード、殺すのに特化した状態だ。お前の力がどんな物であれ、かなう訳がない」

アサルトワールの放つ錬成弾や対物レーザーを躲しながら、ミサイルを発射したそばから撃ち落としていく。ラクサスが魔法陣を組み立てるまで時間を稼ぎつつ、攻撃して力を削っていく。

「分身からの……島津流・双龍正波拳！」

「くあつ！」

「気功掌!」

「おっと……くそ、時間オーバーか。急ぐとするか」

「(落雷……用意は出来たみたいね)」

「逃すか!」

「逃げる?それは違うわね」

「術式!」

「はあ、はあ、どうにか呼び込めたか」

「まずは弱ったお前を殺そうかと思つたが、術式を解除してからだ!」

術式の中に入り込んだため、それを解除するべく魔障粒子キャンセラーを発動する。しかし、そこそがカノンとラクサスの目的である。魔障粒子が消えたことで体内に蓄積されていたものも同時に消え失せたことで体調が良くなったのだ。敵ながら命の恩人となったワールを倒すのは忍びないが、フリード達を傷つけた以上、許すつもりはない。

「アヒヤヒヤヒヤ、雷は効かない、効きませんか!」

「おおっ!」

「なんだ、赤い雷!？」

「ただの雷じゃないわよ。これは血の属性を纏った特別な雷、神域にさえ轟く雷鳴」

「らいこう雷汞・あかみかづち赤御雷!」

「血の赤で染め上げた特殊な雷……流石ね」

＝
＝
＝

「着いたよ。ここがセイバーとペガサスの闘ってる場所のはず」

「結局道中で会えなかったな」

「無事だと良いけど」

「敵も近いし、向かってきてるね」

「全員戦闘準備だ」

「待つて、この感じ……まさか!」

「セイバーとペガサスが全滅!？」

「どうするの?」

「今から救出に向かおう。私とガジル、エルフマンで道を作るよ。他のメンバーで降ろしてあげて」

「そうね、やるしかないわ」

「まずは私が仕掛けるよ！月光の煌めきの刃は、敵を殲滅せし牙。月煌刃！」

セイバートゥース ブルベガサス
剣咬の虎、青い天馬が全滅し、磔にされている。それを助けるために戦闘しながら次々と降ろしていく。傷が酷く、意識ももうろうとしていた。アテナとガジルが道を切り開き、全員を救い出した。

「くそ、仲間を傷つけちゃった。こんな目に遭わせちゃった」

「お前達の悔しさは俺が背負ってやる」

「ちくしょう……すまねえ」

「仲間は助け出した。ここは俺達がどうにかしよう」

「何これ？」

「雪が溶けて！」

「周りが花で！」

「向こうには化け物が3人も……」

「こつちには7人いるな」

「えっ、私も？」

「ここに来たからには覚悟してたんでしょ？ 行こうよ」

数の上では不利だが、一騎当千ともとれる妖精の尻尾フエアリーテイルのメンバーは怯みはしない。女神と竜、魔導士の共演で次々と倒していき、道を切り開く。そんな中、ステイングは仲間を傷つけてしまった自分のふがいなさを後悔していた。自分のせいで仲間たちは痛い目に遭ってしまったのだ。

「くそ、俺が情けないばかりに……」

「ステイング、いつまでそうしてるつもりだ？」

「だけどよ……つてえ！」

「ど、どうしたユキノ？」

「こういう時こそ、先頭に立つて皆を鼓舞してください。マスターというのは、そういうものではないでしょうか？」

「……そっか、そうだよな。済まねえ、痛かっただろ」

「い、いえ……私ったら」

「よっしゃ、動ける奴はついてこい！ 五日ぶりの飯の時間だあ！」

落ち込んでいたステイングだったがユキノの一喝によって目を覚まし、剣咬セイバートゥースの虎は復活を果たした。アテナと共に前に進み、息を吹き返す。何度倒れようとも、仲間と一緒
に前へ進めば良い。妖精フェアリーテイルの尻尾から学んだことである。しかし、水を差す様に敵襲に遭う。死神ブラッドマンが現れ、仲間が血を吐いて倒れる。

「ヤベエぞ、死神だ！」

「また磔にされるぞ！」

「死神？皆退いて！そいつは私が相手をするから……ガジル！」

「つたく、死神とはな。磔にされる気分はどうだ？俺は最悪の過去を思い出すぜ」

「ガジル、そいつは周りの皆の症状を見る限り魔障粒子で出来てる。私も加わるよ」
「勝手にしろ」

ブラッドマンはあらゆる者を苦しめる体質であるため、魔障粒子に耐性を持つアテナと肺や皮膚が鉄で出来ているガジルが対処に当たる。冥府への案内人を自負しているブラッドマンに対して冥府の女神であるアテナは頼んだ覚えはないとし、倒すことで冥府へ仲間や無垢なる人々を送らずに済むようにしたい。

「我は死神、貴様らを冥府に送ってやろう」

「そう簡単に死にはしないわ。炎爆砲！」

「死に場所を探すのには疲れたんだよ、鉄竜槍！」

「我に物理的な攻撃は無効ぞ。生憎として我が体には効かぬ。我は死神、黄泉の国への

案内人」

「ぐあつ！」

「広範囲攻撃!? 全員逃すわ。よつと！」

「くそ、骨が絡みついて！」

「(ここからじゃ遅れちゃう!) 冥府神の大声！」

「てめっ！」

広範囲攻撃を仕掛けたブラッドマンに対して仲間を救出しつつ、ガジルの救出が遅れかけたので、離れた所からブレスを放ち、その勢いをもって攻撃の範囲内から押し出した。そこに心配になったレヴィイがやってきた。魔障粒子の主な入り口である肺からの流入を防ぐためにマスクをしており、対処もしている。

「三つの印を踏んだ時、生者の世界へは戻れぬぞ」

「こいつ、大した魔力じゃねえな」

「違う、こいつは呪法の使い手みたいね」

「よくぞ気付いた。しかし遅い。爆螺旋！」

「相殺せしめよう、地獄の業火！」

「天下五剣・鬼丸！」

「なんつー切れ味だ……」

「耐えてみせるか。ならばこれはどうか？ 天地晦冥！」

「まさか、冥府の門の呪法タルタロスが使えるのか！」

「でも2度も同じ技は喰らわれないよ。固体文字ソリッドスク립ト・ホール！」

「呪法には神の法で！ シャドーハンマー！」

「氷魔の激昂！」

神の法と呪法のぶつかりあいは互角であり、衝突したそばから打ち消しあい、暴風となつて辺りに吹き荒ぶ。そこで、ブラッドマンの奥義であるオーバースケルターという呪法で黄泉へとアテナ達を送ろうとする。ガジルとレヴィイが巻き込まれて運ばれていくが、アテナだけは耐性があるので、骸の海を渡って救出し、範囲外まで運んでいく。

「なんと、死の渦を無傷ですり抜けるか！」

「大丈夫、二人とも！」

「なんとかな」

「ゲホッ、ゴホッ！」

「おいレビイ！マスクが取れてるぞ！」

「あはは、マスクしてても魔障粒子って皮膚から入ってくるんだよね。効果ないんだ」

「無茶しちゃって。下がってて、後は私がやるわ。冥府神の剛拳！」

「実体を捉えられぬ拳など」

「冥府の輪廻剣！」

「何っ！何故我が実体を！」

「魔障粒子に近い属性を混ぜたのよ！冥府神ならではなの！」

自身を守る耐魔障粒子を攻撃に活かし、魔障粒子で出来た体を捉えていく。拳に魔法、神の法とありとあらゆる手段を使って攻めていく。

「冥府神の魔爪！」

「天下五剣・鬼丸！」

「うあっ！」

「ぬおっ、ましても我が体を！」

「くっ、痛むなあ……雷鳴剣！」

「そう何度も喰らわぬわ！」

「冥府神の大声！」

「氷魔の激昂！」

「喰らえや、鉄竜剣！」

「なぬっ！」

「当たった!?ま、まさかガジル、貴方！」

そう、ガジルは魔障粒子で出来た体を捉えるために、空気中の魔障粒子を吸収して取り込んでやった。約束したのだ、レビイを必ずギルドに戻すと。その約束を果たすためならどんな危険な事でもやってのけるのだ。死ぬ可能性さえあるのに、覚悟ができてい。そんな覚悟を決めた拳により、ブラッドマンを倒すに至った。

「ガジル……」

「無茶しちゃって」

「なんとか倒したぜ。さあ、他の敵に……」

「させぬ！こうなったら道連れじゃあ！」

「がっ！」

「ガジル！」

「ダメだ！来るんじゃねえ！」

近づけば冥府への門に引き込まれてしまう。仲間の犠牲は出したくないし、レビイを何より大事に思っているガジルは、彼女を巻き込みたくないので。彼女に対して感謝や自分の感情を吐露し、最後の別れを告げるように言葉をかける。そして、彼女を引き留めているリリーとアテナに彼女のことを託し、渦に引き込まれる。

「う、うう、ガジル……」

「ごめん、私がついていながら……」

「こうする他無かったのか、自問してしまうな……」

「ん？ねえ、何か聞こえない？」

「なんだ？念話か？」

『ギルドは……の方向よ！』

突然の念話が響き渡り、ギルドが今どちらにあるのか告げる声が聞こえる。メイビスがギルドで捕まっており、彼女を救い出すように伝えている。ギルドの母たる存在のメイビスのピンチを告げており、すぐさま集まるように、とのことだ。

『おいおい、もつと愛らしく喋れないのか？それでも初代の友達かよ』

「これは、ガジルの声!？」

「何で!？」

「こうなったら信用できそうだね。よし、ギルドに向かおう!」

第77の唄 進め、ギルドを守るために

「早く合流しなくては」

「機械野郎に二代目の霊やら何やらを倒したばかりだつてのに。疲れちまつたぜ」

「文句言わないの、ラクサス」

「なあに、ちよつとした愚痴だ。仲間の為なら命を張る、それが今の俺に出来る唯一のこ
とだ」

謎の念話が来てからというもの、カノンとラクサスはギルドがあるとされる方向を目指して走り続けていた。プレヒト達の亡霊と対峙し、勝つたものの体力や魔力の消耗がそれなりにあり、疲れが見える。だが、弱音を吐いている場合ではない。初代を助けるためなら体を張って進むしかない。前線では既に何名か戦っており、そこによく合流できた。

「おつ、そろそろよー！」

「よし、押し込んでやるー！」

「やってやるわ、レーザー砲よ！神の愛！」
ディオ・アモーレ

「雷竜の咆哮！」

「シリル！ラクサス！来たんだね！」

「ギルドまで一気に進むぞ」

「敵の数を恐れないで、私達がついてるからね。神の愛より威力と範囲では劣るけど、

この技は魔力消費量が少ないし、聖属性を付加できるのよね……行くわよ、気功式・シャ
 イニングレーザー！」

魔力消耗を考慮しつつ、敵をなるだけ削っていく。ここで負ければギルドや大陸の明日はない、だから何が何でも勝たなければならない。徐々に味方も増え始め、前線を押上げていく。そこへやってきたのはアテナだ。

「よーし、追いついた！」

「アテナも来たわね。勝ちが近づいたわ」

「死の恐怖、参る！冥府神秘技・魔力吸奪！そして、吸収した魔力で……デッドウェイブ

！」

「魔力を一斉に奪い取るとは、恐ろしい魔法だな」

「後でレヴィとリリーも来るよ！」

女神二柱と滅竜魔導士四人、様々な魔導士達が結集し、徐々に前線が押しあがっている。敵にも怯え始める者も出始めている。そんな中で前方で氷の竜が出て、そこから八竜のゴッドセレナが現れる。イシユガルの四天王の頂点に君臨していたが、アルバレス帝国に寝返り、アクノロギアに殺された経緯がある。

「八竜のゴッドセレナ、ここに再臨。お前達をここから先へは通さねえ」

「こいつ、一度死んでるわね」

「魔力の質が変わっているような……」

「ほう？よく気付いたな。だが、死せるとも使える力は変わらねえ」

火に水、風の滅竜魔法の力を一人で放ち、混ざりあうことで凄まじい威力を誇る。このままでは全滅しかねない、そんな予感がしたなか、突如として魔法が割れ、かき消された。何があったのか理解が追いつかないが、その答えがわかった。ギルダーツのクラッシュだ。

「よお」

「ギルダーツ！」

「おお、帰ってきたか」

「何処ほっついてたんだよクソ親父」

ゴツドセレナの魔法を正面から崩し去り、今も正面からぶつかっていく。すると、周りに凄まじい衝撃波を起こす。大きな魔力同士をぶつけた結果、この様な大きな衝撃波が生まれるのだ。100年クエストにいける実力は伊達ではなく、これで一気に進めうだ。一人の魔力のおかげで皆に気合が入る。

「ロメオくん大丈夫？」

「大丈夫じゃねえよウエンディ姉。こんな数の敵と戦うと思うと足が震えちゃうんだよ」

「皆もきつと同じだよ。だから一緒にがんばろっ！」

「くそ、自分が情けないよ」

ロメオの様に戦場に慣れていない者もあり、まだ足が震えてしまっている。そんな状

況でローグとミネルバが参戦してくれているし、エルフマンやリサーナ、ミラも無事であり、セイバートゥース剣咬の虎も復活した様だ。味方をしてくれるのが有難い。

「また割れた！」

「残念だったな。お前の本領を發揮できた時に勝負したかったよ。破邪顕正・一天！」

「よおし、道ができたよ！」

「進めえ！ギルドは目の前だあ！」

「「おおっ！」」

「……よし！行くぞお！」

「よく決断したわ、ロメオ。その意気よ」

「へへっ」

ロメオも気合が入り、足の震えが止まり、皆に続いて前線を進む。その前線ではカノンとアテナ、エルザが実力を出して獅子奮迅の活躍を見せている。少しでも前に進むためにも、全力を示して皆を鼓舞していかなければならない。

「気功掌！」

「せい、おおっ！はあっ！」

「ソウルフレア地獄の業火！」

「強いですね、お三方は。何という勇ましきでしょうか」

「戦場に咲く剣達ですね、はい」

「感心してる場合じゃ無いゾ。私達も行くゾ」

「ふんぬっ！」

「地面を割って攻撃するなんて、凄いなあ」

「ギルダーツの強さが滲み出てるね」

「私達も負けられないわよ。気功掌！」

進むにつれて敵の数も増えてきており、魔力消耗も増えてくる、それでも進まなければ、初代が危ういのだ。カノンは広範囲を攻める様にし、遠距離攻撃も近距離攻撃も対応しながら前へと進み、鼓舞していく。しかし、仲間も連戦続きで疲労がたまり始めている。

「ちよつとドロイ、大丈夫？」

「もう、立てねえよ。俺は、ここまで……なんだ」

「諦めるな、神々と竜がついている！ここは下がれ！」

「ガジル！」

「無茶しちやつて。ほら、リリーとレヴィも来たよ！」

「えらく頑張っているな、仲間の為に戦うとは」

仲間が疲労と魔力切れでダウンする中、復活したガジルが駆けつけてくれた。そこについてきていたのは先ほどの念話で話しかけてきた少女だ。名前はゼーラ、初代の友である。人と接するのに慣れておらず、少し緊張しているが、彼女がいなければ皆が集まることはなかっただろう。

「貴女、死人なのね？」

「そうなの。今はメイビスが作り出した幻なのよ。あ、私はとつくに死んでるから、あんまりしんみりしないでね？メイビスの事、よろしくね」

「消えた……」

「可愛かったのに……」

「初代には聞きたいことが増えたわね」

一進一退の状況が続く中、突如として空に巨大な目の玉が現れる。敵の魔法であり、逃げたメイビスを逃がさない為に捜索する為の魔法だ。だが、メイビスも逃げるつもりはない。巨大な幻影を作り出し、皆を鼓舞する。

『私の目からは逃れられないわよ、メイビス』

「こいつは敵の……」

「不気味だな」

『私は逃げも隠れもしません、貴女達のいる場所は必ず取り戻してみせます。私の声を聞く全ての同志よ、共に戦え！ 汝らの剣を妖精軍師が預かる！』

「初代……」

「幻を使って一気にやる気を引き出すとは」

「何だ今度は？」

「不味いな。これは付加術の一種で、付加した者を狂乱させ、強化する魔法のはず！」

「がはっ！」

「急に強く！」

「ぐえあ！」

付加術の一種により敵は狂戦士バーサーカーと化し、強くなった状態で皆に襲い掛かるようになった。一撃一撃が重く鋭い状態になり、手も足も出ない状態となってきた。そこでマカロフは命を賭してとある魔法を発動しようとしていた。妖精の法律フェアリーロウ、妖精三大魔法であり審判魔法である。

「あの構えは、妖精フェアリーの法律！」

「勝ったな！」

「ダメです！この人数相手に妖精フェアリーの法律だけは！倒す敵の量が多いほど命を削る魔法なんです！」

「初代！」

「そんな事は承知の上じゃ。止めんでください、ワシの花道」

「私の策があれば！」

「黙つとれい！それくらいは分かつとる！それでも、苦しむ皆を救うには我が命、安いくらいじゃ。今ガキどもが苦しんでいる。老兵が出来る事はこれくらいしかない。皆、仲間良くな」

自らの命を賭して仲間のために、自分の子供達のために妖精フェアリーの法律を発動する。敵の

8割はこれで削られ、皆を守り切った。だがしかし、マカロフは命が尽き果て、仲間を守る代わりに命を落とした。

「マスター……」

「ありがとう、貴方のおかげでここまで来れた気がするわ。後は任せて」

「(マスター、貴方の子で幸せでした)」

「エルザ、カノン……」

「初代、前を向いていこうぜ。じじいの為にもな。それに、あんたの策が無けりや勝てねえんだ」

|| || ||

「何をしているんだ、お前達は！」

「ナツ、グレイ、貴方達の敵は目の前の男かしら？違うでしょ！」

「お前達が何故こうなったか分からんが、こんな殺し合いに近い戦いをしている場合ではない！思い出せ、私達を育んだ時間を！」

「良い？よく聞きなさい」

エルザとカノンが駆けつけて見かけたのは何故か全力で殺し合いをしていたナツとグレイだ。その二人を止め、マカロフの言葉を伝える。涙を流しながら、彼が仲間同士仲良く過ごし、互いを信頼するようにという信念を伝える。仲間同士でどんな理由があれ、殺し合いをする理由はないはずだ。

「私は、お前達を愛している。心の底からな」

「エルザ……」

「多少の喧嘩は良いけど、殺し合いに近いのはダメよ」

「シリル……」

「グレイ様！ ジュビアは無事です！」

「な、何故……」

「ウエンディの治療のおかげね」

「あんまり心配かけないでよ、ナツ」

「ルーシィ、無事だったんだな」

二人の殺し合いの原因、それは仲間を失ったと勘違いを起こし、その原因たる者であ

る者への怒りをぶつけてしまったことなどである。グレイはENDに対して怒りを持ち、その正体たるナツを止めようとしていた。ナツはゼレフを倒そうと怒りに身を任せてグレイと衝突したのだ。だが、お互いに殺されてしまったと思っていた仲間のルーシイとジュビアは無事であり、安心したため倒れてしまった。そんなナツたちを背負ってポーリユシカの元へと連れていくことになった。

「ナツをポーリユシカさんの所に連れていこう」

「グレイとジュビアもね」

「その件、貴方達に任せても良い？ 私はまだ戦わなければ」

「そうだね」

「っ！全員伏せろ！」

「うわ、何!？」

突然の爆発に皆驚いてしまう。敵の強襲に遭い、なんとか飛び出してダメージを避けることしかできない。そこに現れたのはアイリーン、緋色の絶望と呼ばれるアルバレス帝国最強の女性魔導士と謳われる人だ。何故ここに現れたのかは分からないが、エルザを知っている口ぶりだ。

「久しいな、エルザ」

「……えらい魔力ね。厄介だわ」

「ねえ、知り合い？」

「知らん。だが、只者ではないな」

「ここは私とエルザで……」

「私も戦います、シリルさん」

「覚悟ありね、ウエンディ。付加魔法^{エンチャント}で援護をお願いね」

三対一と人数の上では優勢だが、最強と言われるだけあって見事に躲し切っている。猛攻をものともせず、余裕さえ見て取れる。だが、時折隙が見え、攻撃が当たることもある。

「おおっ！」

「ふふ、この程度かしら？」

「島津流・双龍正波拳！」

「おっと、危ないわね」

「せいやつ！」

「くっ！」

「チャンス！気功式・シャイニングレーザー！」

「ちっ！」

「はあっ！」

「足で剣を？ふん」

「がはっ！」

「はっ」

「爆破!?エルザ！」

「私は無事だ！」

隙はあったとはいえ、押し切れず、逆にダメージを喰らうこともある。だが、勝たねば味方が危うくなることは間違いない。だからここで止めて倒さなければならぬ。手数と威力の両立を図り、ウエンディの力で魔法の威力を上げてもらう。

「天輪・繚乱の剣！」

「生命神の大声！」

「うわつと……やりましたか!」

「いや、駄目だろうな」

「この程度でやられる相手ではなさそうよ、魔力の感じからして……」

「無差別の剣による攻撃と、気功や血の属性を纏ったブレス……よくやりました、花丸」
「剣を全て避けてみせるとは」

「ふざけた奴だ」

「付加術をかけた上に二人がかりで攻めてこの程度とは、話にならない」

アイリーンの正体、それはエルザの母親だった。だが、エルザにとって親はマカロフただ一人。たとえ血縁関係があろうとも、敵対するなら倒すまでだ。カノンもウエンデイもそのつもりで戦っている。だが、ここで恐ろしいことが発覚する。アイリーンは四百年以上生きた付加術のエキスパートであり、滅竜魔法を生み出した張本人なのだ。だが、その魔法の代償は大きく、竜化してしまい、ゼレフに会うまで竜のままとなってしまうたし、治った後でも味覚や嗅覚に異常をきたしたこともあった。そこで、身ごもっていた子供に付加術を行使して純粋な人間の体を手に入れようとした。

「だが実子への付加術は不可能だった。だから小さな村に捨てたのよ」

「それが、ローズマリー村だったとはな」

「村の名前など、とうの昔に忘れたわ」

「お前の様な女の元で育たず、捨ててくれた事に感謝する。そのおかげで本当の家族に出会えたんだ」

「エルザ……こうなったら勝つしかないわね。喰らえ、波動バースト！」

「昔話でもすれば親子の情でも湧くと思つたが、まるで感情が動かぬ。その魔法、喰らうとでも？」

「天竜の翼撃！」

「ぐあつ！」

「紅黒の双刃！」

「気功式・シャイニングレーザー！」

「なんだと！わ、私に傷を!？」

ここまで攻め込まれたことは久方ぶりなのか、ダメージを受けたことに驚きを隠せない。更に、ウエンデイが竜化しないことに触れた際に、ドラゴンたちのおかげで防げたことを知り、怒りをあらわにした。

「不公平よ！何故貴女達は竜化しないのよ！こんな体、もう要らないっていうのに！」
「私が楽にしてやる！」

「木術・大木槌！」

「くっ、神というだけあつて付加術に詳しいな！付加相殺をしてくるとは……だが！」
「な、何だ！」

こうなったら奥の手として、人間の体に乗っ取る付加術を発動して、ウエンデイの体
に乗り移ってみせた。ウエンデイの体は、付加術を操る天竜の力があるためか、相性が
良いという。仲間の体を返してもらうため、攻撃を仕掛けるが、仲間の体を傷つけるの
かためられないかと問いかげられる。だが、敵が乗っ取っている以上、追い出すために
やることはやると決めている、ためらいはない。

「鳳翼扇！」

「なんて娘だ！仲間の体に遠慮なく攻め寄せるとは！」

「すぐに剥がしてやるわ。せいやつ！」

「やせん！服に付加^{エンチャント}、爆破！」

「ダメージ、大した事ない？」

「まさか？」

「同じ付加魔法、私にも出来たみたいですね」

「ウエンデイなの？」

「そうです。体に乗っ取ったのは貴女だけでは無いのです」

乗っ取られたはずのウエンデイは、逆にアイリーンの体に憑いてみせ、カノンの体に防御の付加術を行ってみせた。魔力の上ではウエンデイのほうが上であり、分離付加エンチャントをかければ本来の体に戻れるのではないか。そう考えた結果、ウエンデイに分離付加エンチャントを仕掛ける時間を作る。徐々に押し始めるが、分離を防ぐためにウエンデイの本来の体に傷を作ってみせるが、ためらいを生む効果はなく、完全に戻ってみせた。

「後は、お任せします」

「ウエンデイの治療をするわ」

「ああ、決着は私が着ける」

「小娘どもが！」

「ドラゴンになった!?!」

「ああっ！」

「ぐっ、がはっ！」

「エルザ！」

竜と化してエルザに一撃を加えた所、骨が折れた感触がする。たった一撃でここまで響くのは流石、竜の力というべきか。ここで天体に力を付加して地上めがけて落としてみせる。神の星座崩し、ジエラルの魔法の完全上位互換であるこの魔法を食らえば死ぬどころか跡形もなく消え去り、周りの者達まで巻き込みかねない。だが、崩そうにも体が動かない以上、どうしようもない。

「エルザさん！」

「くそ、動け！動けえ！」

「待った。ここは私がやるわ」

「シリル！」

「我が魔力と神通力、その全てをぶつける！神の愛・極限砲撃！」

「隕石を崩せる訳が無い、例え神の一撃といえども」

「おおおっ！」

「シリル……」

「はああっ!」

「我が秘技が、崩された!」

「ま、魔力も神通力も、もう……」

「後は私に任せろ、覚悟お!」

「ただの剣で竜の鱗は斬れんぞ!」

「滅竜属性を剣に付与……」

「おおっ!」

「な、なんだとお!」

片手で動き、決死の攻撃で滅竜属性をまとった剣で竜の鱗さえ切り裂いてみせ、元の人間の体に戻してみせた。だが、これで痛みから体が動かなくなり、手放した剣をアイリーンに取られてしまう。

「これで、終わりよエルザ」

「くっ……」

「もう、お終いにするわ。これで……」

「自害!」

「情けないわ、帝国最強の女魔道士が自分の子さえも殺せないとは。情でも湧いてしまったのかしら」

「……」

アイリーンは自害し、命を絶った。家族としての情か、これ以上戦つても勝てないという諦めからか、負けを認めて命を絶った。そんな折に、ウエンデイは急にマスターの匂いが消えたことを不思議に感じていた。そこでエルザとカノンに問うてみるが、返答はできなかった。それで全てを察したのか、涙を流した。すると突然光が走り、三人を包み込んだ。気付けば、先程のところから移動していた。

「しかし、先程の光は何だったのだ？」

「分からないわ」

「エルザさん、歩けますか？」

「お前の魔力のお陰だ、ウエンデイ」

「お互い無茶したわね」

「っ、この魔力は！」

「何かが近づいてくるだ?!」

急に巨大な魔力の接近を感じ、足を止めると、そこに現れたのは一人の男である。エルザとウエンディはかつてこの魔力を感じたことがあるが、どこで感じたものなのか、思い出そうと必死だ。

「ははは、我は飽きたぞ。この世界にな」

「こいつ、何処かで……」

「只者じゃないわね。邪悪な何かを感じる」

「うぬであつたか、人々に滅竜魔法を授けたのは」

「(こいつ、何を?)」

「ならば、うぬは我の母の様な者。即ち我の罪い!」

「なんて事を」

「えぐい……」

死体となったアイリーンの体を踏み、跡形もなく壊そうとしていた。このような惨い行為は例え敵であつた者であれ、許されることではない。エルザが止めに入るが、アイリーンと同じ匂いを感じ取った。

「うぬは、この女と同じ匂いがするなあ」

「匂い？」

「貴様、何者だ！」

「エルザさん、この魔力！」

「アクノロギア？」

「あの暗黒の翼と名高いアクノロギアですって!？」

黙示録の登場する暗黒の翼であり、かつて天狼島を吹き飛ばそうとした竜であり、人の姿を取ることもできる。アイリーンと同じ匂いをエルザから感じ取り、殺そうとしたが、とある男によって防がれた。ジェラルドである。ブルーベガサス青い天馬のクリスティーナに乗るように指示を出し、時間を稼ぐために攻撃を仕掛ける。

「もうすぐ着く。ここは俺が時間を稼ごう、六連星!」ブレアデス

「ほう、天体魔法か」

「九雷星……そして、七つの星に裁かれよ!七星剣!」キュウライシン
グランシャリオ

「くはは、この程度か!」

「魔法を喰った!？」

「我は最後の竜にして、全ての魔を喰らいし終焉の竜！魔竜アクノロギア也！」

「くそ、魔力切れって時に……」

「ここは私が！」

「待て、ウエンデイ！」

「っ！天馬か！」

「皆の衆、乗りたまえ！ここはあいつを誘導して、とある地点に移動する！」

「振り切れるのか？」

「我がギルドの誇り、クリステイナーナ天馬飛空艇を侮るなかれ。ここは任せたまえ」

到着した天馬飛空艇クリステイナーナに乗り込み、この地点から脱出を図る。竜と化したアクノロギアも後を追ひ、全員を殺そうと凄まじい勢いで迫ってくる。とある地点を
目指して全力で空を駆ける。

「先程、ある場所まで誘導するって言っていたけど……」

「うむ、そうすれば我々にも勝機があるかもしれん。ですよね？」

「本当か！」

「ええ、そうよ」

「ん？ 貴女は……」

第78の唄 全ての終わり

「とりあえず説明は向かいながら！」

「そうね」

「貴女は一体？」

「なぜか懐かしい感じもするし、親近感も湧くけど」

目の前の女性からは普段から感じている雰囲気を感じるが、どこで感じたものなのか謎が付きまとう。ウエンデイにこの船は滅竜魔道士ドラゴンスレイヤーが乗っても平気であるという事を伝えているあたり、ウエンデイや滅竜魔法について詳しく知っているといるという事だ。彼女の名前はアンナ、ルーシイの先祖であり、ウエンデイ達滅竜魔道士の先生を務めていた過去から来た人物である。エクリプスの門をくぐってきており、ナーガやチキとも知り合いである。すべてはアクノロギアを倒すための秘策である。

「過去の世界ではアクノロギアに対抗する手段が無かった」

「そこで未来に来て魔力の満ちた世界に来たのね？それについては竜達から聞いたわ」

「でも、エクリップスを通り抜ける際の衝撃で皆がバラバラになってしまったの。全員の場所を探すのに5年かかった」

「でも、接触しなかった」

「この時代での暮らしを見ていたら、その必要性はまだないと感じたの。そして、皆を探す中で、とある物を見つけたの」

「……時の狭間」

「っ！知っているの!?!」

カノンは先代、生命神チキより知らされていた。アンナ達が時空を超えていった際に産み出された、無の空間だと。歴史が歪みを修正しようとする時に、産まれたのが時の狭間だ。それに触れると、あらゆる物が消滅するというものであり、そこへアキノロギアを誘導しようということである。

「上手くいくだろうか」

「やるしかないわ」

「まもなくよ!」

「300、200、100……そこだ!」

「よしー！」

「……失敗か」

「何故!? 通り抜けているわ！」

なぜか時の狭間を通り抜けて無事である。位置や高さに誤差はないはずだ。よく目を凝らしてみると、閉じているのが分かった。誰かが意図的に閉じたのか、何かの事故なのか分からないが、クリステイーナの後方に食らいついてきた。

「くそ、後部翼端板が大破！」

「速度が維持できない！」

「予備の魔道ブースターを点火するわ！」

「時間を稼いで！時の狭間をこじ開けるわ！」

「ここは私が。魔力と神通力を回復する薬を使ったもの」

「しかし……」

「今の奴を止められるのは魔力だけではなく、神通力を使える私のみ」

「……任せられるか？」

「やるしかないわよ」

魔法が効かない相手にダメージを与えて時の狭間に押し込めるのは神通力を使えるカノンのみである。彼女が船より飛んで気をそらすしかない、だから一人で戦いを挑むこととなった。

「来なさい、アクノロギア！気功式・シャイニングレーザー！」

「吸収出来ぬとは……ゴアッ！」

「（特大のブレスね？）神樹の壁からの、デイト・アモール神の愛！」

「ガァー！」

「っ！海と神樹の壁が割れるとは……！」

特大のブレスは守りのために作っていた木の壁をいとも容易く壊してみせ、背後にあった海をも割ってみせたのだ。この恐ろしいブレスに対応するのは容易ではない。一刻も早く時の狭間を開き、押し込むしかないのです、アンナに開くように迫る。だが、依然として開かないので、少しでも時間を稼いで開くまで耐え忍んでみせる。そしてしばらく戦闘を続けること数分、ようやく開いたのだ。

「開いた！」

「でも、奴に気づかれたよ！」

「神としての出来る事、それは守るべき者達の為に命を張る事。押し込んでやるわ」

「待て、何をする気だ！」

「全ての神通力よ、魔竜を滅する牙となれ！神の愛・極限砲撃！」
ディオ・アマモレ エステレレーモ

「があっ！吸収できぬ！」

「消え去れ！古の竜よ！」

「だが、甘いな！竜王を侮ってもらっては困る！」

砲撃をすり抜け、時の狭間に押し込む直前で抜け出したのだ。カノンに殺そうとするほどの怒りでもって攻め寄せてくる。エルザが援護しようとするが、魔法に効果がない上に余計にパワーアップしかねないので、カノンが引き寄せる事にこだわりを見せる。

「木術・大木人！」

「ごあつ！」

「木人の拳を避けたか。これでどうだ、双気功掌！」

「効かぬわ！」

「くそ、魔力だけじゃ無い。神通力すらものともしないとは。魔を喰らう竜、その名は伊達ではないわね」

耐久性がある竜の体に、神の力も大きなダメージにはならない。魔竜の力を身に纏い、突撃してくるアクノロギアを躲しつつ、少しでも押し込もうと足掻いてみせる。そこに突っ込んできたのは墜落したはずのクリステイナである。カノンをここで失うわけにはいかないと、一夜とアンナが代わりにアクノロギアを時の狭間に押し込もうとする。そして目論見通り不意打ちに近い形で押し、クリステイナ諸共消えていった。

「くそ、守りたい相手を守れなかったよ」

「一夜さんも、アンナさんも、アクノロギアも消えた……」

「ねえ、私達……勝ったのよね？」

「おそらくは」

「ごめんなさい、私が力不足なせいで……」

「責めちゃダメよ。アンナさんと一夜さんの望みの為にも」

一夜もアンナも守れず、自身を責めてしまうが、これは彼ら自身の決めた道である。

彼らの意志を重んじるべきではないかと、涙ながらに語っていた。そんな時、突如として空にひびが出来、腕が出てきた。アクノロギアである。時の狭間を受けても生きており、魔力を吸収して復活したのだ。魔力に満ちた状態から繰り出された一撃は凄まじく、爆撃はあらゆる場所に被害を出している。

「皆、無事か！」

「ウエンデイとカノンが！」

「うあ、うああ！」

「くそ、吸収される！」

「完全なる滅竜の為、消えてもらおう」

ウエンデイやカノンが謎の力に吸い込まれ、その場から消え去った。そして気づけばカノンはとある空間にいた。そこにはナツとアテナもおり、薄暗い空間に取り残されていた。辺りを見回してみると、他の滅竜魔道士達がとらわれていた。そこに現れたのは人間体のアクノロギアだ。完全なる滅竜が目的であるらしい。仲間達を返してもらうために戦を仕掛けるが、突如としてナツの体を水晶が覆いはじめる。

「何だこれは！」

「ナツ！」

「人柱となり、世界の安定のために消え失せよ」

「痛むけど、耐えてよ。気功掌！」

「ほう、破壊したか？」

「何、力が上昇した？」

「私の力です、シリルさん」

「ウエンデイ！」

どんな力が働いたのかわからないが、ウエンデイ達は無事であり、滅竜魔道士と神々が一堂に会する。だが、アクノロギアには魔法は効かないので、ナツ達は援護に回り、カノンとアテナがメインで攻めることにした。

「火竜の咆哮！」

「鉄竜剣！」

「効かぬ効かぬ！」

「チエストー！」

「ぬおっ!」

「隙あり、鳳翼扇!」

「くっ!」

「アテナ、続いて!」

「任せて。フレイム・バースト烈火の拳!」

「くあっ!」

魔法が効かない上に一見効いているような神通力も効きづらいと来たものだ。ナツ達からしてみれば理不尽にも程がある。魔力などが効かず、圧倒的なパワーで押し切る強さこそが竜王と呼ばれる所以だ。だが、魔力を帯びない物理攻撃は一定の効果があるのではないかと推察できる。そこを攻めたいが果たしてどうなるか、やってみなければ分からない。その頃外では復活したマカロフ達が対処法を探っていた。

「結論から言おう。滅竜魔道士達の居ない今、竜を倒す手段は無い」

「奴には魔法が効かぬ。物理的な方法で倒さねばならない」

「聖なる剣とか有れば楽なんだがな」

「しかもただの剣ではダメだ。滅竜の力を付与した剣でなければ」

「くそ、手詰まりか！」

ウエンディやカノンが居ない今、付加術を心得ている者が居ない。こうなってしまうては、もはや手詰まりではないか。絶望的な状況の中、ルーシイは手はないか頭をフルに使う。そんな中、前に使ったとある魔法が効くのではないかと思に至る。それを使つて弱点である乗り物の上に乗せてしまえば勝てるのではないか。その魔法とはフェアリースライア妖精の球、天狼島でアクノロギアが破れなかつた唯一の魔法である。閉じ込めている間にナツ達がアクノロギアを倒せば万事解決である。そんな状況下で、ナツ達は懸命にアクノロギアの相手をしていた。

「今外では我が肉体が全てを破壊し尽くそうとしている」

「何故そんな事を」

「破壊、それ自体が我が目的」

「お前に壊される程、世界は弱くねえぞ！」

「させないわよ。ディオ・アモレ神の愛！」

「魔竜の咆哮！」

神と魔竜の力は拮抗しており、お互いの一撃は相殺される。そこに続くようにアテナやコブラ、ラクサスが倒しにかかる。だが、これも大したダメージにはならず、反撃を受けることとなってしまった。しかも一回のパンチが重く鋭く、内臓に響く一撃だ。

「がはっ！（くそ、内臓が！）」

「コブラ！」

「今治すわ」

「まだくたばる訳にはいかねえんだよ。俺にだって仲間はある。あいつらを守る為ならなんだってやってやるぜ！」

「その意気よ。私達がついてる！」

「冥府神の爆砲！」

「流星に神通力は防げぬか」

魔法を放ち、付け入る隙を与えない。たとえ効かずとも、外で仲間達が頑張ってくれているはずだと信じ、奮闘するほかない。魔法が吸収され、神通力を受け止め、跳ね返してくるあたりは強者らしさを持ち合わせている。だが、希望はまだある、最後の戦いを仕掛ける。一方の外では、アクノロギアを港に誘導しており、弱点である乗り物の船

に乗せようとしていた。そこでアクノロギアを船酔いさせ、弱体化させる準備を行っていた。

「来たぞ、アクノロギアだ！」

「ルーシイ達はまだ妖精フェアリースフェアの球の発動方法を探っているはずだ！」

「時間を稼ぐわ！」

「お前らで準備してくれ！」

「でもどうやって？」

「手を繋ぐのよ。これは絆の魔法だからね」

多くの魔力を合わせて封じようとしたが、弱点を本能で潰そうとしたのか、船をブレスなどですべて破壊しつくしてきた。このままでは作戦は壊滅したかに見えたが、グレイとリオンの造形魔法で船を造り出して、それに乗せようという作戦に出た。

「皆、大丈夫？」

「ルーシイ！」

「俺達は大型の術式を作る」

「後は任せたよ、ルーちゃん」

「……ねえハッピー、このハルジオン港は私とナツ達の出会いの場所だよね」

「あい。壊されてたまるもんか」

この港はかつてナツ達とルーシイの出会いの場である。ここからルーシイ達の冒険が始まったといっても過言ではない。だから、このハルジオン港を守り切ってみせる。そしてその熱気はナツ達にも通じたのか、最後の攻防が始まるうとしていた。

「ここで滅竜する。神々も消し去る。それが我が目的」

「くくく、滅竜するだど？」

「それじゃあ貴方自身も消し去らなきゃね。ナツ！皆の魔力と神通力を貴方に！」

「任せたよ、ナツ！」

「おう！後は任せておけ！」

七人の滅竜魔導士と二柱の神の力をナツに集約して付加してみせる。これが九炎神竜の力であり、最後の希望だ。例えどんな力が産まれようともアクノロギアには勝てぬと吠えるが、全員の意志の乗った攻撃は力強い。更に力を全てぶつけるために、カノン

とアテナの攻撃で隙を作る。

「我が神通力、更に解放せし！気功の奥義、滅・波動拳！」

「何だと！まだ力を！」

「ソウルフレア地獄の業火！」

「がはっ！」

外では船の造形が終了し、後は乗せるだけの状況となっていた。エルザとミラがアクノロギアを導き、船に乗せる為の地点に到達した段階でエルザの全ての剣を使つて押し込む。船の位置をジュビアの水で調整し、無事に乗せてみせた。全魔力を解放し、フェアリースフィア妖精の球を発動してみた。だが、魔力が足りず、破られそうになる。

「魔力が……足りない」

「こうなったら大陸中から集めましょ」

「メルデイ！」

「大陸中の魔道士を繋いでいたの。ここに魔力を集めるわ」

「すごい、力が溢れてくる」

「何だこれは、動けぬ！」

「今度こそ！」

「大陸中の魔道士の力、受けてみよ！」

「妖精の球、発動！」

魔竜でさえ打ち破れなかった妖精フェアリースフィアの球を、大陸中の魔力を集めて発動した。これで完全に閉じ込め、体の自由を奪っていく。この効果は時の狭間で戦っていたアクノロギアにも影響を及ぼし、体が動かなくなる。この隙を見逃すはずもなく、ナツの燃え盛る炎が華麗に当たった。

「か、体が動かぬ！」

「よし、ナツ！最後は任せたわよ！滅・波動拳！」

「これで終わりだあ！」

「（我は、全てを破壊し、全てを手に！）」

「全ては手に入らないわよ」

「欲張るなよ。俺は、仲間がいればそれで良い」

「そうか。うぬ等こそ王に相応しい」

「王にはなりたくねえな」

アキノロギアは消え去り、古の竜王と黒魔道士はこの世からいなくなり、これで安寧が訪れる事になる。7人の滅竜魔道士と二柱の神の力が纏まった事で、厳しい戦いが終焉を迎えた。

「これで終わりね。流石はナツ」

「お前達のお陰だ。特にシリルの付加術があったからだ」

「平和が訪れる為には力を惜しまないわ。それに、皆の魔力あつてこそ倒せたのよ」

「そうだな……な、なんだ!」

「引き込まれます!」

「カノン、これは!」

空間を維持していた主を失ったからか、外に引き出されるように押し出されてしまった。全員無事に仲間の元へと帰ってこれたのだ。これで世界に平穏が訪れた、その事をまずは喜ぶべきではないかと感じた。

「戻ってこれたか」

「良かった、無事だったのね！」

「皆、心配かけたわね」

「ただいま」

「おかえり！」

「さ、ギルドに戻ろう」

＝
＝
＝

「ルーシィ、おめでとう。出版した本で受賞するなんてね」

「友の晴れ舞台、嬉しい限りだよ。またこうして皆と会えるなんて思ってもみなかったもん」

「ありがとう、シリルにユリア。皆との冒険の日々が今回の本に繋がったんだ」

あの戦いから一年、平和を取り戻した中でルーシィの書籍が新人作家の賞を手にしたのだ。そこで、盛大にパーティが催され、ナツ達も友人として参加しているのだ。二柱も久々に仲間達の様子を見る事も兼ねて参加している。仲間達も様々な変化があり、そ

の中でもレビイとガジルが子供を授かるかも知れないことが大きな変化だ。

「いやあ、びつくりだよ」

「おう、シリル」

「あら、ラクサスじゃない」

「一緒に飲もうぜ」

「良いわよ」

「二人共仲が良いのね」

「付き合ってる訳じゃないみたいだけどね」

ラクサスはあれから体調も安定しており、無事に仲間達と過ごしている。そんな時に様々な女性達と付き合っているのではないかと噂される事も多い。カノンにミラ、カナ、リサーナなどなど噂は多く上がっているが、実際には付き合っていないのだ。

「あれから体の方は大丈夫なの？」

「魔障粒子の影響は無くなったんだ。今は大丈夫だ」

「なら良いけど。無茶はしないでよ？」

「分かったよ、これからは気をつける」

「二人共飲んでるかい？」

「カナ、貴女も一緒にどう？」

「良いねえ。それじゃ、お邪魔させて貰うとするかねえ」

「カナ、今は何を？」

「ギルドで親父と仕事してる感じかねえ」

「ギルダーツと？」

「そうさ。一人にしたくないからって言っただけで一緒に来ることがあつてさ」

「親父と仲が良いのか。俺なんて最悪の仲だからな」

「私なんて父親の顔すら覚えてないのよね」

「そ、そうか」

「そう言われると、恵まれてるのかねえ」

皆、元気に各々が過ごしている。仕事に勤しむ者、酒を仲間と楽しむもの、旅に出る者など自由に過ごしている。カノンとアテナは神々の仕事をこなしながら、忙しく過ごしていた。アクノロギアもゼレフも居なくなつて平和になつたとはいえ、まだやるべき事は沢山ある。話が盛り上がるなか、カナがある人物を見つけた。

「あれ？あれは、初代？」

「何だと？」

「でも確かに……ほら」

「本当だ」

「隣にいるのは……ゼレフ!？」

見た限り本人には見えない。だが、話を聞いてみると勘違いだと気付く。ハンカチを落とした所から会話が広がり、ミオという女性とアリオスという男性が仲良く話しているだけだった。ゼレフとメイビスの魂を上手く転生させ、めぐり合わせることに成功したのだ。これもアテナが上手く働きかけた事で成立した。彼女の専売特許である魂の死後の行先の選別を行った。

「アテナ、すっかり仕事は果たしたみたいね。上手く転生したみたいだわ」

「でしょ？こういう事は私の専売特許みたいなもんだしね」

「今生では幸せになって欲しいものね、初代とゼレフの転生者よ。さてと、私とアテナは帰るわ」

「そうなんだね」

「これ、私とアテナの住まう場所よ。いつでも来て頂戴」

「私達は同じギルドで育った仲間だもんね」

「ありがとう、時が来れば訪ねるわね」

会場を後にした二柱はそれぞれの仕事をこなすために日常に戻ろうとしていた。人類は自分達の力がなくても成長していくのだ。

「アテナ、人は成長しているわね」

「私達とは時の流れ方が違う。だから短期間で成長しているように感じるのかも」

「そうね。願わくば、争いのない平和な世界で生きて欲しいわね」

|| || || ||

「あれから数年か」

ルーシイの受賞式の日から数年、互いの所を行ったり来たりして交流を深めている。

仕事の都合で中々会えない時期もあったが、仲良く過ごさせている。平和は続いていて、ナツ達も100年クエストに挑戦したりして楽しく過ごさせている。

「アテナ様がお見えです、カノン様」

「心得た」

アテナも神の仕事に慣れてきており、頼もしく成長した。これからは二柱でお互いを支え合いながら仕事に励んでいく。その為に互いの場所を訪ねて進捗を確認しながら業務にあたっている。神と人と魔の共生を目指して今日も仕事に邁進する。

「さ、始めましょうか。栄光ある未来の為に！」